

台原遺跡

大分県宇佐市四日市所在遺跡の調査

大分県文化財調査報告

第 33 輯

1975

大分県教育委員会

古原遺跡

大分県宇佐市四日市所在遺跡の調査

序 文

台ノ原遺跡の所在する大分県宇佐地方は、全国八幡神宮の総社宇佐神宮を擁し、周辺の平野や丘陵には数多くの史跡や遺跡が所在しています。

なかでも市の中心部を北流する駅館川の流域には、弥生時代から奈良時代におよぶ遺跡が川をとりかこむように分布しています。台ノ原遺跡は、この中にあってもっとも古い集落遺跡のひとつであり、遺跡のある丘陵の端からは流域の史跡や遺跡のほとんどを望見することができます。

宇佐神宮とその勢力の奈良時代以後の活躍が、正史の記録や龐大な古代中世の関係文書によって明らかなのに反し、奈良以前の歴史は文献もほとんどなく、多くの謎につつまれているといわれます。駅館川をとりかこむ遺跡群は、一見してこの地方における在地の勢力の発展のプロセスを物語るように分布しているので、これらの遺跡の科学的な解明は“宇佐,, に関心をもつひとびとにとって、もっとも待望されることでしょう。

台ノ原遺跡の調査は、それ自体県下の弥生時代の集落の調査としては国東町の安国寺遺跡以来の本格的調査であり、考古学的に多くの成果を得たものでしたが、同時にこうした古代宇佐文化の繁栄のいわばその“前史,, の解明のためのひとつの新資料たりうるものと思っています。遺跡の保護という立場でふりかえれば、昭和45年当時の文化財保護体制の弱さもあって、遺跡の一部の保存にとどまったことは遺憾にたえません。このうへは本書が研究者各位はもちろん“宇佐,, の歴史に関心をもつ多くの人々に十分活用されることを祈念しつつ刊とする次第です。

なお最後になりましたが、調査の段階から報告書作成にいたるあいだ終始助言と指導をたまわりました県文化財専門委員賀川光夫・小田富士雄両氏はじめ、関係者各位に深く謝意を表します。

昭和 50 年 3 月

大分県教育委員会教育長

山 本 峯 生

目 次

| | |
|-------------|----|
| 第1章 序 説 | 1 |
| I 発掘調査の経過 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | 7 |
| 第2章 遺跡の調査 | 10 |
| I A地区の調査 | 10 |
| (1) 第I調査区 | 13 |
| (2) 第II調査区 | 14 |
| (3) 第III調査区 | 25 |
| II B地区の調査 | 34 |
| (1) 第1号竪穴 | 38 |
| (2) 第2号竪穴 | 39 |
| (3) 第6号竪穴 | 40 |
| (4) 第11号竪穴 | 42 |
| (5) 第13号竪穴 | 42 |
| (6) 第14号竪穴 | 44 |
| (7) 第17号竪穴 | 44 |
| (8) 第19号竪穴 | 46 |
| (9) 第20号竪穴 | 48 |
| (10) 第21号竪穴 | 50 |

| | |
|-------------------|-----|
| (11) 第 22 号 豎 穴 | 51 |
| (12) 第 24 号 豎 穴 | 54 |
| (13) 第 25 号 豎 穴 | 56 |
| (14) 第 26 号 豎 穴 | 58 |
| (15) 第 30 号 豎 穴 | 59 |
| (16) 第 35 号 豎 穴 | 60 |
| Ⅲ C 地区の調査 | 70 |
| (1) 第 1 調査区 | 71 |
| (2) 第 2 調査区 | 73 |
| (3) 第 3 調査区 | 77 |
| (4) 第 4 調査区 | 91 |
| Ⅳ D 地区の調査 | 96 |
| Ⅴ E 地区の調査 | 105 |
| Ⅵ 出土炭化米について | 108 |
| 第3章 考 察 | 110 |
| Ⅰ 台ノ原遺跡出土弥生式土器の編年 | 110 |
| Ⅱ 集落としての台ノ原遺跡について | 117 |
| (1) 弥 生 時 代 | 117 |
| (2) 古 墳 時 代 | 121 |

図 版 目 次

| | | |
|----------|-----------|----------------------|
| 図 版 第 一 | A 地 区 (一) | 第 I 調査区 |
| 図 版 第 二 | A 地 区 (二) | 第 II 調査区 |
| 図 版 第 三 | A 地 区 (三) | 第 II 調査区および第 III 調査区 |
| 図 版 第 四 | A 地 区 (四) | 遺物 |
| 図 版 第 五 | A 地 区 (五) | 遺物 |
| 図 版 第 六 | B 地 区 (一) | 遠景 |
| 図 版 第 七 | B 地 区 (二) | 1～3号竪穴付近全景および1号竪穴 |
| 図 版 第 八 | B 地 区 (三) | 第2号土壙および第3号竪穴 |
| 図 版 第 九 | B 地 区 (四) | 第一調査区全景および部分 |
| 図 版 第 一〇 | B 地 区 (五) | 全景および26号竪穴(炭化米出土竪穴) |
| 図 版 第 一一 | B 地 区 (六) | 20号竪穴および24号竪穴 |
| 図 版 第 一二 | B 地 区 (七) | 30号竪穴および35号竪穴 |
| 図 版 第 一三 | B 地 区 (八) | 遺物 |
| 図 版 第 一四 | B 地 区 (九) | 遺物 |
| 図 版 第 一五 | B 地 区 (十) | 遺物 |
| 図 版 第 一六 | C 地 区 (一) | 第二調査区 |
| 図 版 第 一七 | C 地 区 (二) | 第三調査区 |
| 図 版 第 一八 | C 地 区 (三) | 第三調査区 |
| 図 版 第 一九 | C 地 区 (四) | 第三調査区 |
| 図 版 第 二〇 | C 地 区 (五) | 第三調査区 |
| 図 版 第 二一 | C 地 区 (六) | 第三調査区 |
| 図 版 第 二二 | C 地 区 (七) | 第三、四調査区 |
| 図 版 第 二三 | C 地 区 (八) | 遺物 |
| 図 版 第 二四 | D 地 区 (一) | 第1号住居跡および2号住居跡 |
| 図 版 第 二五 | D 地 区 (二) | 第Vトレンチおよび第VIトレンチ |
| 図 版 第 二六 | D 地 区 (三) | 遺物 |
| 図 版 第 二七 | D 地 区 (四) | 遺物 |
| 図 版 第 二八 | E 地 区 | 全景および住居跡 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|---------------------|-------|
| 第1図 | 宇佐平野遺跡分布図 | 3・4 |
| 第2図 | 台ノ原遺跡周辺地形図および調査区 | 5・6 |
| 第3図 | A地区平面図 | 11・12 |
| 第4図 | A地区第1号住居跡実測図 | 13 |
| 第5図 | A地区第2号竪穴実測図 | 15 |
| 第6図 | A地区第3・4号住居跡実測図 | 15 |
| 第7図 | A地区第2・3号住居跡出土遺物実測図 | 16 |
| 第8図 | A地区第Ⅱ調査区出土土器実測図 | 19・20 |
| 第9図 | A地区第1号甕棺出土状態実測図 | 21 |
| 第10図 | A地区第1号甕棺実測図 | 22 |
| 第11図 | A地区第Ⅰ・Ⅱ調査区出土須恵器実測図 | 23 |
| 第12図 | A地区第2号土壙実測図 | 26 |
| 第13図 | A地区第4号土壙実測図 | 27 |
| 第14図 | A地区第4号土壙出土土器実測図 | 27 |
| 第15図 | A地区第Ⅲ調査区出土土器実測図 (1) | 28 |
| 第16図 | A地区第Ⅲ調査区出土土器実測図 (2) | 29・30 |
| 第17図 | A地区出土石器実測図 | 31 |
| 第18図 | A地区出土遺物実測図 | 32 |
| 第19図 | B地区遺構配置図 | 35・36 |
| 第20図 | B地区第一調査区平面図 | 37 |
| 第21図 | B地区第二調査区平面図 | 37 |
| 第22図 | B地区第1号竪穴実測図 | 38 |
| 第23図 | B地区第1号竪穴出土土器実測図 | 39 |
| 第24図 | B地区第2号土壙実測図 | 39 |
| 第25図 | B地区第6号竪穴実測図 | 40 |
| 第26図 | B地区第6号竪穴出土土器実測図 | 41 |
| 第27図 | B地区第11号竪穴実測図 | 42 |
| 第28図 | B地区第11号竪穴出土土器実測図 | 42 |
| 第29図 | B地区第13号竪穴実測図 | 43 |
| 第30図 | B地区第13号竪穴出土土器実測図 | 43 |

| | | |
|------|---------------------|-------|
| 第31图 | B地区第14号竖穴实测图 | 44 |
| 第32图 | B地区第17号竖穴实测图 | 45 |
| 第33图 | B地区第17号竖穴出土土器实测图 | 46 |
| 第34图 | B地区第19号竖穴实测图 | 47 |
| 第35图 | B地区第19号竖穴出土土器实测图 | 47 |
| 第36图 | B地区第20号竖穴出土土器实测图 | 48 |
| 第37图 | B地区第21号竖穴实测图 | 50 |
| 第38图 | B地区第21号竖穴出土土器实测图 | 51 |
| 第39图 | B地区第22号竖穴实测图 | 52 |
| 第40图 | B地区第22号竖穴出土土器实测图 | 53 |
| 第41图 | B地区第24号竖穴实测图 | 54 |
| 第42图 | B地区第24号竖穴出土土器实测图 | 55 |
| 第43图 | B地区第25号竖穴实测图 | 56 |
| 第44图 | B地区第25号竖穴出土土器实测图 | 57 |
| 第45图 | B地区第26号竖穴实测图 | 58 |
| 第46图 | B地区第26号竖穴出土土器实测图 | 58 |
| 第47图 | B地区第30号竖穴实测图 | 59 |
| 第48图 | B地区第30号竖穴出土土器实测图 | 60 |
| 第49图 | B地区第35号竖穴实测图 | 60 |
| 第50图 | B地区第35号竖穴出土土器实测图 | 61・62 |
| 第51图 | B地区出土石器实测图 (1) | 64 |
| 第52图 | B地区出土石器实测图 (2) | 65 |
| 第53图 | C地区調査区位置图 | 70 |
| 第54图 | C地区第1調査区遺構实测图 | 71 |
| 第55图 | C地区第1調査区出土土器实测图 | 72 |
| 第56图 | C地区第1調査区出土磨製石器实测图 | 73 |
| 第57图 | C地区第2調査区遺構实测图 | 74 |
| 第58图 | C地区第2調査区方形竖穴实测图 | 75 |
| 第59图 | C地区第2調査区方形竖穴出土土器实测图 | 75 |
| 第60图 | C地区第3調査区遺構配置图 | 78 |

| | | |
|------|-------------------------|---------|
| 第61図 | C地区第3調査区1号石棺実測図 | 79 |
| 第62図 | C地区第3調査区2号石棺実測図 | 80 |
| 第63図 | C地区第3調査区1号壺棺出土状態実測図 | 80 |
| 第64図 | C地区第3調査区2号壺棺出土状態実測図 | 81 |
| 第65図 | C地区第3調査区壺棺実測図 | 82 |
| 第66図 | C地区第3調査区土器蓋土壙および6号土壙実測図 | 83 |
| 第67図 | C地区第3調査区土器蓋実測図 | 83 |
| 第68図 | C地区第3調査区土壙実測図(その1) | 85 |
| 第69図 | C地区第3調査区土壙実測図(その2) | 86 |
| 第70図 | C地区第3調査区墓壙内出土石器実測図 | 88 |
| 第71図 | C地区第3調査区1号竪穴実測図 | 90 |
| 第72図 | C地区第3調査区出土土器実測図 | 90 |
| 第73図 | C地区第4調査区実測図 | 91 |
| 第74図 | C地区第4調査区住居跡出土須恵器実測図 | 92 |
| 第75図 | C地区第4調査区方形竪穴出土土壙実測図 | 93 |
| 第76図 | C地区第4調査区出土土器実測図 | 94 |
| 第77図 | D地区調査区位置図 | 96 |
| 第78図 | D地区調査区遺構実測図 | 97 |
| 第79図 | D地区第Ⅷトレンチ石蓋土壙 | 98 |
| 第80図 | D地区第2号住居跡出土遺物 | 99 |
| 第81図 | D地区出土土器実測図 | 101・102 |
| 第82図 | D地区出土石器実測図 | 103 |
| 第83図 | E地区平面図 | 105 |
| 第84図 | E地区住居跡付近実測図 | 106 |
| 第85図 | E地区出土土器実測図 | 107 |
| 第86図 | E地区出土石器実測図 | 108 |
| 第87図 | B地区出土炭化米 | 108 |
| 別付図 | 台ノ原遺跡出土土器編年図 | |

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和45年度より昭和47年度にわたり実施した大分県宇佐市所在の台ノ原遺跡の発掘調査報告である。
1. 当遺跡にかかる一連の調査の内、市道拡張工事にかかる部分は、宇佐市教育委員会が実施した。この調査結果については市教育委員会よりその概要を提供いただき、第Ⅱ章ⅣD地区の調査として収録できた。詳報は別途市教育委員会により刊行されるはずである。
1. 本書の執筆は調査担当者および調査員が分担したが、B地区石器の項、C地区遺物の項について県文化課藤田和夫・橋爪啓史の分担協力を得た。各章節の分担は次のとおりである。
第1章（序説—後藤宗俊）、第2章（A地区—坂本嘉弘 牧尾義則、B地区—後藤宗俊 真野和夫、C地区—清水宗昭、D地区—小倉正五、E地区—真野和夫）
なお第3章考察は編集にあたった後藤、清水、真野で見解を集約し後藤がまとめた。
1. 遺跡の実測図作成は調査員および調査補助員があたり、その製図および遺物の実測・製図は執筆を担当した調査員で行った。その他遺物の実測・製図について藤田和夫 橋爪啓史両氏の全面的な協力をえた。
1. 図版写真のうち遺跡関係は各調査員、遺物については真野がおこなった。
1. 調査にあたっては県文化財専門委員賀川光夫、小田富士雄両氏の指導・助言を得た。また報告書の執筆にあたっては両氏の指導・助言を得た。出土炭化物の同定については九州大学農学部育種教室片山平教授をわずらわせた。記して謝意を表する。
1. 表紙題字は大分県教育委員会教育長山本峯生の揮毫である。
1. 本書の編集は後藤宗俊 清水宗昭 真野和夫があたった。

第1章 序 説

I 発掘調査の経過

台ノ原遺跡は宇佐市四日市に所在し、弥生式土器を主体として須恵器等を散布する遺跡として知られていた。当遺跡の緊急発掘調査は昭和45年より昭和47年にかけて6次にわたって実施されたものであるが、それぞれ調査の目的・動機に異同があるので、以下その経緯を略記しておきたい。

昭和45年、遺跡の所在する宇佐市四日市台ノ原台地に、大分県立四日市高校の新築移転が決定し用地造成が行われることとなったため、大分県教育委員会において事前の発掘調査が実施された。これが**第1次調査(A地区)**である。調査は県文化財専門委員 賀川光夫氏を団長として昭和45年11月10日より21日にわたって実施された。この調査は当遺跡における遺構、包含層の保存状況を確認することを目的としたもので、遺跡のほぼ中心地に16m×80mの調査区を設定して実施された。この結果弥生時代の住居跡1、古墳時代の方形住居跡2のほか、土壌・甕棺等を出土し、当遺跡が弥生時代から古墳時代に及ぶ集落跡である事が判明した。この結果を得て県教育委員会社会教育課では遺跡の取扱いについて検討し関係者との協議が行われたが、当時の文化財保護行政の体制の弱さもあって根本的な保存、調査の措置をとることができないまま、昭和45年12月現地の造成工事が着工された。

校地造成工事は遺跡の中心部をふくみほぼ4haにわたって行われたので遺跡の大半は失われた。しかしながら遺跡の周辺部にはなお未造成の部分があり、また造成された地域でも遺構の遺存する地点がみられた。さらに校舎建設に伴う取付道路工事計画予定地でも遺跡の所在が予想されていた。

こうした状況の中で昭和46年度にいたり県教育委員会に文化室が発足した。文化室では再三現地を踏査するとともに、賀川光夫氏はじめ文化財関係者の助言・要望をうけてあらためて周辺地区の調査を実施することとなった。

まず昭和46年10月遺跡東南部の予備的調査が実施され、9基の袋状竪穴を発掘したほかこの地区に30基をこえる袋状竪穴群の遺存を確認した。これが**第2次調査**であり、この地点を第1次調査の調査地区に対比して遺跡の**B地区**とした。この地区の本調査は後日第5次調査として実施された。

つづいて遺跡东北部に予定された学校取付道路予定地の事前調査を実施した。この地点は工事着工以前に遺跡所在地はほぼ完掘することができたが、とくに2基の箱式石棺を中心とする土壌墓群を検出し、いわば当遺跡の墓域を確認しえたのは予期しない成果であった。調査は昭和46年12月1日より14日にわたって実施された。これが**第3次調査**である。この地区を**C地区**とした。

さらにこの間において、校地として造成された地域の北側を通り西方の宇佐市立四日市中学校方面へぬける市道の拡幅工事が宇佐市によって計画されていたため、この拡幅にかかる部分については宇佐市教育委員会が主体となり、県文化室の協力のもとに緊急調査**第4次調査**を実施した。この地区はさきのA地区に北接しこれとほぼ同条件を有する地区であるが調査の経緯に鑑み**D地区**とよぶことに

した。この地区では台地面の削平がすでに古くからなされており、多数の柱穴群をみたが完好な住居跡等に乏しかった。それでも住居跡2のほか東西に走る溝を検出した。

この間校舎の建設工事は予定どおり着工されたが、さきにみたB地点の袋状竪穴群については現状のまま運動場造成工事を凍結し、昭和47年度にいたり再調査した。この調査とあわせて、遺跡西南部の造成済みの地点に若干のピット群の遺存がみられる地点をも調査することとし昭和47年5月調査に着手した。これが第5次・第6次調査である。B地点の第5次調査では第2次調査につづいて未掘の袋状竪穴の調査がすすめられ最終的にB地区において40余基の竪穴群を確認、うち36基を完掘した。

またこの調査の中で校地東南部の未造成地区になお相当数の袋状竪穴等が遺存していることが確認されたため、これの保存について関係者と協議をすすめた結果、将来校内の園地として整備する計画のもとに現状保存することが決定された。

第6次のE地点の調査では長方形プランの小住居跡1のほか円形土壇等が検出された。

調査の経緯は大略以上のとおりであるが第1次調査後遺跡の中心部が大削平され失われているため調査全体としては中心部の内容を探究できず、その後の調査がむしろ周辺部のみで行われる結果となった。また2次、および5次のB地点の調査では、すでに造成工事により0.5m～1mの削平がなされたあと実施されているため袋状竪穴以外はほとんど残存せず、ために住居跡等との関連は探索できなかった。この地区が袋状竪穴のみの群集地として本来選地されたものであるか、住居跡等と共存したかは従ってこの調査では不明としなければならない。この点は今後未造成の保存地区の調査によって解明されるであろう。

なお第1次調査のあと着工された造成工事中石棺の他黒曜石チップの集積などが発見されている。これらについては正確な記録資料がないので今回の報告ではふれなかった。

調 査 団 の 構 成

第1次調査 期間 昭和45年10月10日～10月21日

調査指導者 大分県文化財専門委員・別府大学教授賀川光夫

調査員 入江英親（県文化財専門委員）橘昌信（別府大学講師）岩尾松美（山香町文化財調査員）後藤正二（県教育庁社会教育課）

調査補助員 二宮忠司 弥栄久志 栗原孝幸 中村幸四郎 山野洋一 牧野吉秀 山手誠治 牧尾義則 坂本嘉弘（以上別府大学学生）

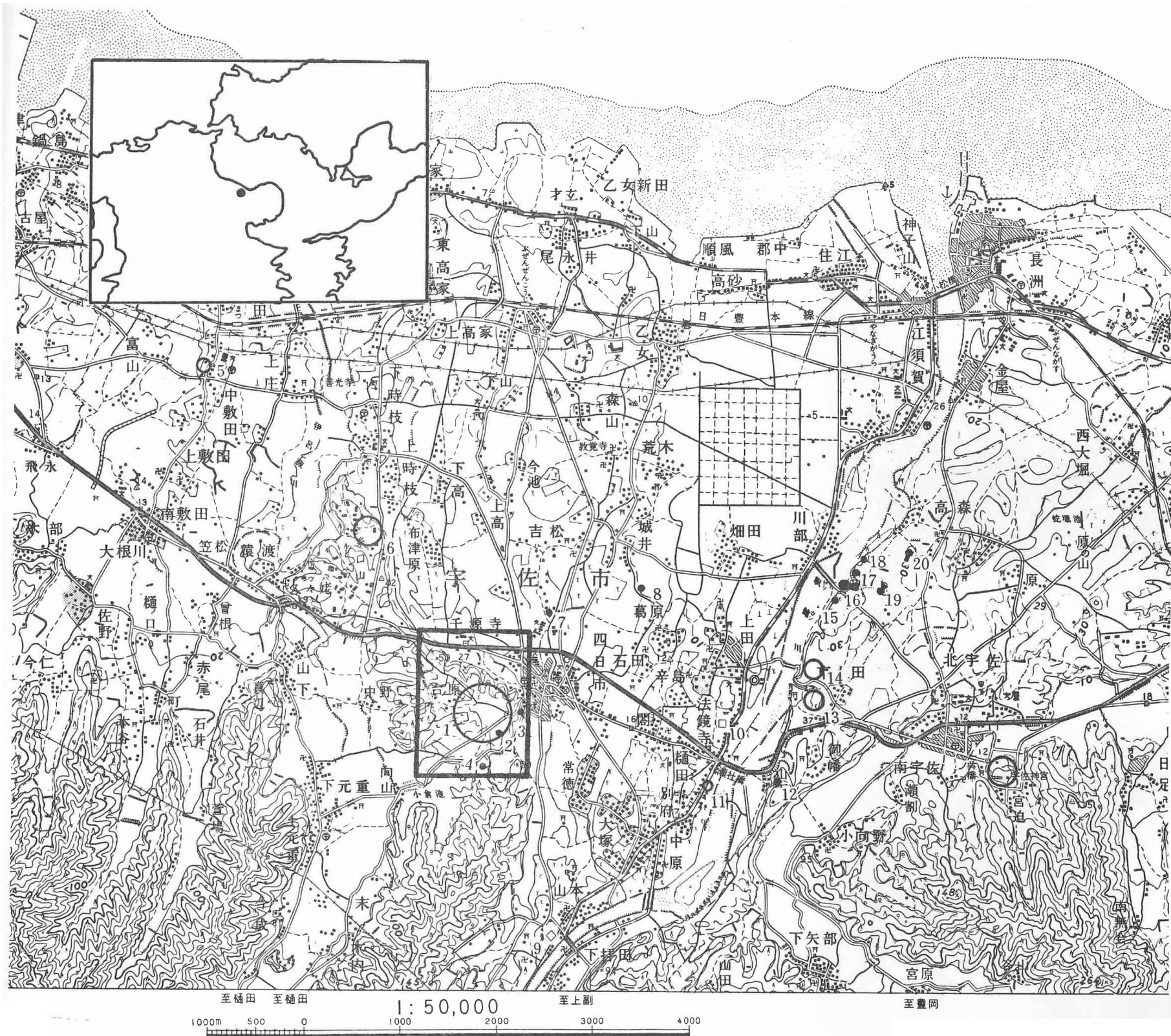
第2・3次調査 期間 昭和46年10月18日～10月26日（2次）12月1日～12月14日（3次）

調査員 後藤宗俊 清水宗昭（県教育庁文化室）長野雅臣 小倉正五（宇佐市教育委員会）岩尾松美

第4次調査 期間 昭和47年1月7日～1月23日

調査員 後藤宗俊 清水宗昭 長野雅臣 小倉正五

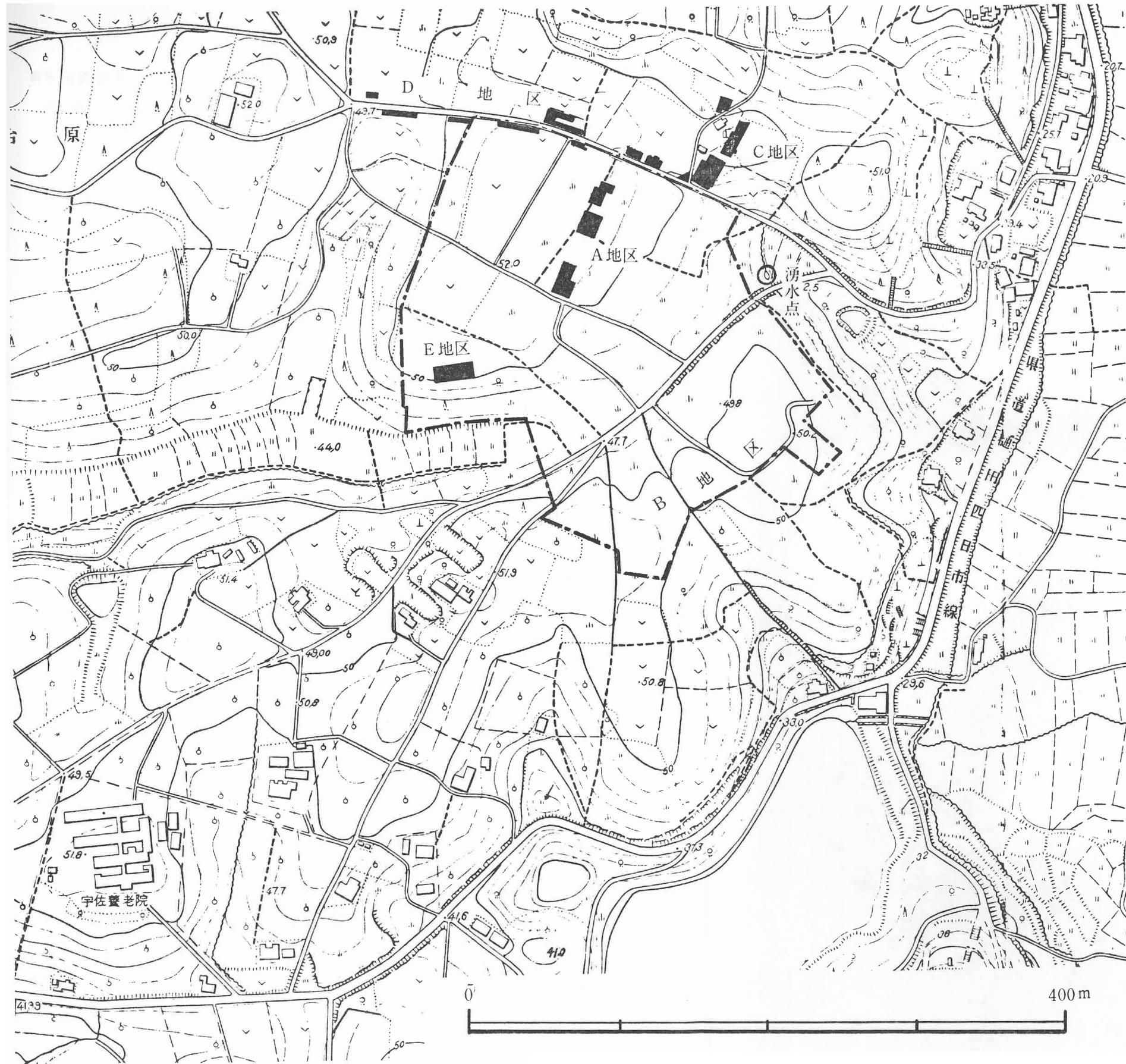
調査補助員 栗原孝幸 新原正典（別府大学学生）



第1図 宇佐平野遺跡分布図

(国土地理院5万分の1「宇佐」分載)

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 台ノ原遺跡 | 2. 池ノ奥古墳 | 3. 四日市横穴 | 4. 宮山古墳 |
| 5. 京徳遺跡 | 6. 糸口山遺跡 | 7. 扇塚古墳 | 8. 葛原古墳 |
| 9. 虚空蔵寺跡 | 10. 法鏡寺跡 | 11. 別府遺跡 | 12. 古稻荷古墳 |
| 13. 高居遺跡 | 14. 東上田遺跡 | 15. 免ヶ平古墳 | 16. 春日山古墳 |
| 17. 車坂古墳 | 18. 角房古墳 | 19. 鶴見古墳 | 20. 赤塚古墳 |



第2図 台ノ原遺跡周辺地形図および調査区

第5・6次調査 期間 昭和47年5月22日～6月6日（5次）6月13日～6月21日（6次）

調査員 後藤宗俊 清水宗昭 真野和夫（県教育庁文化課）小倉正五

Ⅱ 遺跡の立地と環境

遺跡の立地

台ノ原遺跡の所在する宇佐平野は、北九州市門司区から国東半島北西部にかけてひろがる豊前平野の一角を占める沖積平野である。その背後には耶馬溪溶岩流によって形成された山系がちなり、これに発する大小の河川が瀬戸内海の周防灘に注ぎ広大な沖積地を形成している。このうち最大の河川は平野の中央を流れる駅館川である。現在の駅館川は宇佐市拝田地区を扇頂部として現在の国道10号線をまたぐ法鏡寺地区付近までに広い扇状地を形成し、これより下流に広大なデルタを形成している。流域の右岸は宇佐台地と呼ばれる隆起三角州状の洪積台地がひろがり宇佐平野の地形を2分している。また西側は四日市台地と称される洪積台地があり宇佐台地に対峙している。この四日市台地から糸口地区につらなる台地は駅館川のつくる沖積地の西側をさえぎるとともに、そのさらに西側を北流する伊呂波川の東側を画している。

台ノ原遺跡はこの四日市台地の一角を占め東に四日市の市街、さらに宇佐平野越しに宇佐台地を遠望する。遺跡は宇佐平野と比高40mをもって接しており駅館川をとりまく台地の中では最も上位の台地上に位置する。この台地を形づくっているのは、古い扇状地あるいは氾濫原の堆積物であり、その礫層の風化した赤色土がいわゆる地山を形成している。この台地はこれより下位の台地をふくめると少くとも方1.5キロを下らぬ面積を占め、その間に開析されてできた相当数の小支丘と谷をもっている。台ノ原遺跡という呼称は莫然とこの小支丘群をふくむ全体のまとまりを範囲とするように理解されやすいが、発掘調査の行われた大字四日市宇台ノ原・加賀山の周辺に限定しておく必要がある^①。それはさきにもみた小支丘の2～3カ所をふくむ遺跡ということになる。

遺跡の史的環境

台ノ原遺跡から遠望される駅館川流域の沖積地とその周辺の台地には数多くの先史・古代遺跡が所在している。もっとも旧石器時代ないし縄文時代の顕著な例はみられず殆んど^②の遺跡が弥生時代以降のものである。

流域の数多い遺跡群の中で少くとも一定の規模の集落の存在を証す最も古い例は駅館川東岸の宇佐台地に所在する東上田遺跡であろう。この遺跡は昭和43年工場建設のため大半が失われたが、弥生時代前期末の土器多数を出土し一帯には環濠的施設をもった住居跡群が確認された^③という。この遺跡で出土、あるいは採集された土器では肩部に木葉状文など多彩な貝殻文をもち、北九州、関門地方で高槻式と呼称されている壺形土器が注目される。台ノ原遺跡にわずかに先行し、ともに中期に及んだ遺跡でありながら土器にみる性格はやや異質のものであり、両者の対比は注目される問題をふくんでいた。また環濠的施設と住居跡の関係についても多くの可能性を秘めた遺跡であった。その破壊がおし

まれる。

なおこの東上田遺跡の上流 300m の地点に高居遺跡がある。昭和47年4月の発掘調査により弥生中期ないし後期中葉に及ぶ集落跡であることが判明している。^④

また弥生時代後期を代表するものに別府遺跡がある。駅館川が国道10号線と交錯する法鏡寺地区にあり、駅館川をつくる扇状地の扇端部近くの高燥な地点にある。昭和47年の発掘調査により弥生時代後期終末を画する安国寺式土器をふくむ住居跡等が検出された。この別府遺跡から下流の沖積地には点々と弥生式土器片の散布地がみられ、また工事等による土器の出土例も多いが顕著な集落跡あるいは墓跡群等の確証はない。前述した別府遺跡も当初予想されたほどの大規模な遺跡でなく、これが扇状地形に立地しているものであることからして、駅館川流域における自然堤防上の集落跡の探究はむしろ今後の課題であろう。また周防灘に面する海岸部のいわゆる砂丘後背地等は点々とみられるがここにも遺跡の発見例はない。

昭和47年8月に大分県教育委員会が実施した別府遺跡はじめ駅館中流域の調査の中で注目されたものに古稻荷古墳^⑥がある。この古墳は駅館川東岸、高居遺跡のさらに上流1kmの地点にある。同年10月に本格的な発掘調査が行われ弥生時代終末期の高塚古墳であることが確認された。これが駅館川流域は勿論、宇佐平野全体における最初の本格的な首長権の成立を示すものであることはいままでもない。これにつづいて4世紀代に入ると同じく駅館川東岸、さきみた東上田遺跡より北(下流)1.5kmの地点に赤塚古墳^⑦が造営される。舶載の三角縁神獸鏡5面を出土し全長50mをはかる前方後円墳である。

その後この川部・高森地区には相ついで前方後円墳・円墳が造られている。即ち免ヶ平古墳、春日山古墳(福勝寺古墳)、角房古墳、車坂古墳、鶴見古墳等^⑧がそれである。4世紀中葉を下らぬとされる赤塚古墳から6世紀中頃に位置づけられる鶴見古墳にいたるまで、数基の前方後円墳が並ぶこの地域が日本書紀神武即位前紀にみられる菟狭都彦、菟狭都媛^⑨、あるいは旧事記国造本紀にみられる宇佐国造など当地を支配した最大の在地首長層の墓域であったことは疑問の余地はあるまい。

流域にはこの他葛原古墳^⑪、扇塚古墳^⑫などの顕著な古墳が四日市地区の沖積地に点在し、川部・高森地区のそれとの対比が注目される。

台ノ原遺跡の所在する四日市台地もかつては後期古墳の群集地であったといわれているが、殆んど失われており、池ノ奥古墳、宮川古墳など数基を残すにすぎない。むしろここでは台地東崖面に所在する四日市横穴群が装飾古墳をふくむものとして注目されよう。^⑬

以上の如く台ノ原から一望される駅館川周辺の沖積地や台地には相当数の先史遺跡がみられるが、この宇佐地方が日本の歴史に大きな地歩をしめるに至るのは、周知のように全国八幡神宮の総社である宇佐神宮の勢威の確立する8世紀である。この8世紀の宇佐神宮の瞠目すべき活動は続日本紀等正史に散見するところでありここに言及しないが、この宇佐神宮の隆盛と不可分な関係の中で創建された白鳳時代の2つの寺院跡が、駅館川の左岸に所在することは特記を要しよう。即ちひとつは法鏡寺跡であり、今ひとつは虚空蔵寺跡である。両者ともすでに学術調査がなされ、法隆寺系の伽藍配置を

もち、また遺物も法隆寺系古瓦を多数出土している。また前者には百済系軒丸瓦、後者には新羅系軒平瓦と奈良南法華寺のそれと同範とされる埴仏の出土も注目されている^⑮。

8世紀以降、日本の古代史に大きな地歩をしめるに至る宇佐神宮の勢力の成立過程はすでに多くの論及があり著しい成果をみているが、とくに大化以前の宇佐地方についての研究は、文献上の史料をほとんど有しないこともあって必ずしも科学的実証的位相ですすめられているとはいいがたい。

この点で台ノ原遺跡はじめ宇佐地方の先史、原史時代の遺跡の考古学的研究は古代宇佐文化隆盛のその前史の解明というこの地域個有の課題をも背負っているといえる。 (後藤宗俊)

- ① 台ノ原遺跡につづく四日市中学校地に弥生式土器の出土、散布がみられ、四日市台地につらなる糸口地区では石棺、甕棺の他多数の弥生式土器散布をみる地区がある。
- ② 台ノ原遺跡の東南500mに所在する小倉池には旧石器ナイフ形石器等が採集されている。また駅館川上流にあたる宇佐市山本の虚空蔵寺跡の塔跡基壇下より夜白式土器のセットが出土している。これらが遺跡として確認される可能性はある。
- ③ 賀川光夫「大分県の考古学」(昭和46年)
- ④ 大分県教育委員会編「宇佐風土記の丘調査報告」第Ⅱ部(昭和48年)
- ⑤ 昭和47年8月大分県教育委員会によって調査が行われ現在整理中である。
- ⑥ 小田富士雄 真野和夫 小倉正五「豊前宇佐地方における古式古墳の調査」考古学雑誌60-2(昭和49年)
- ⑦ 梅原末治「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」考古学雑誌14-3(大正12年)なお墳丘実測図は前掲④書参照。
- ⑧ 前掲⑥論文参照。
- ⑨ 日本書紀神武即位前紀および古事記中巻参照。
- ⑩ <宇佐国造 高魂尊孫宇佐都彦命定賜国造>とある。
- ⑪ ⑫ ⑬ 大分県教育委員会編「駅館川大規模圃場整備事業区域内埋蔵文化財分布一覧」(昭和45年)
なお古墳の概要については宇佐市史刊行会編「宇佐市史(上)」(昭和50年)参照。
- ⑭ 続日本紀天平20年8月条、天平勝宝元年11月条、同12月条、同天平勝宝2年2月条、同天平勝宝6年11月条、天平神護2年条、他神護景雲3年道鏡皇位事件関係記事等参照。
- ⑮ 小田富士雄他「虚空蔵寺跡、法鏡寺跡」大分県文化財調査報告第26輯(昭和48年)
- ⑯ 中野幡能「八幡信仰史の研究」他参照。

第2章 遺跡の調査

調査区の区分

調査区は前述したように県立四日市高校敷地内と附属の道路予定地に限るものである。造成前の旧地形は、宇佐養老院に通ずる道路部を鞍部として対峙する丘陵に二分される。遺跡は狭義には北西部の平坦な広い丘陵を台ノ原遺跡、南東部の丘陵を加賀山遺跡と呼称していたものである。調査区は遺跡全体に計画的に配分したものでなく、調査順序と地域のまとまりによってA～E地区とした。

A地区 第1次調査区にあたり、北西部台地のほぼ中央部、遺跡の中でも最も高位（標高52m）の広範な平坦部に設定した。周囲の支谷より最も距離を保つ位置にあり、やや東南に傾斜をはじめめる地形からみて、遺跡の中でも最も生活空間に適したところと推定される。

B地区 浅い鞍部をはさんでA地区に対峙する地区であり、第2・5次調査区にあたる。台地の東南端に近く加賀山遺跡の主要部とみられる。調査は敷地造成後に行われたもので、特別の調査区の設定は行わなかった。調査の対象は、表土の削平が深いため遺構の検出が容易であった敷地南東縁辺に沿う、幅約30m・長さ約150mの部位に限った。A地区に近い鞍部側はすでに埋土されていたために調査は実施しなかった。

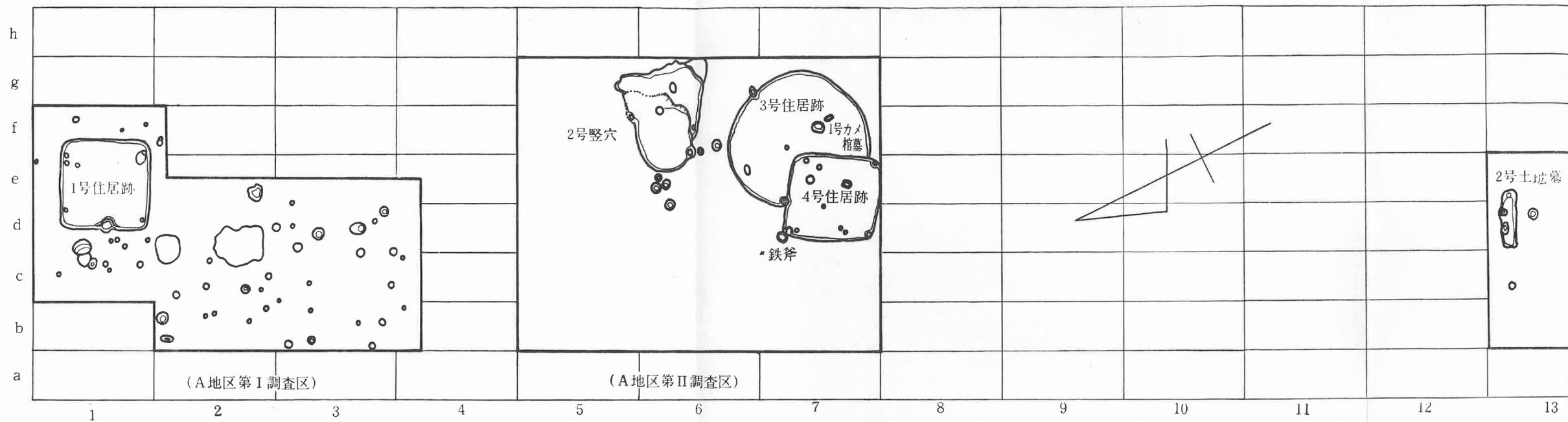
C地区 第3次調査区にあたり、A地区の西側50m、台地北東隅部に位置する。四日市高校通学道路取付部にあたり、調査地点は遺跡の可能性のある平坦部幅約20m、長さ約60mの可掘部に4ヶ所設定した。

D地区 第4次調査区にあたり、台地の北縁を東西に横断する市道の拡幅部である。調査区はA地区・C地区に接する部位で狭義の台ノ原遺跡の北側平坦部に位置するが、調査を拡幅部に限定したために、幅2～3m、長さ約200mにおよぶトレンチ状をなす。

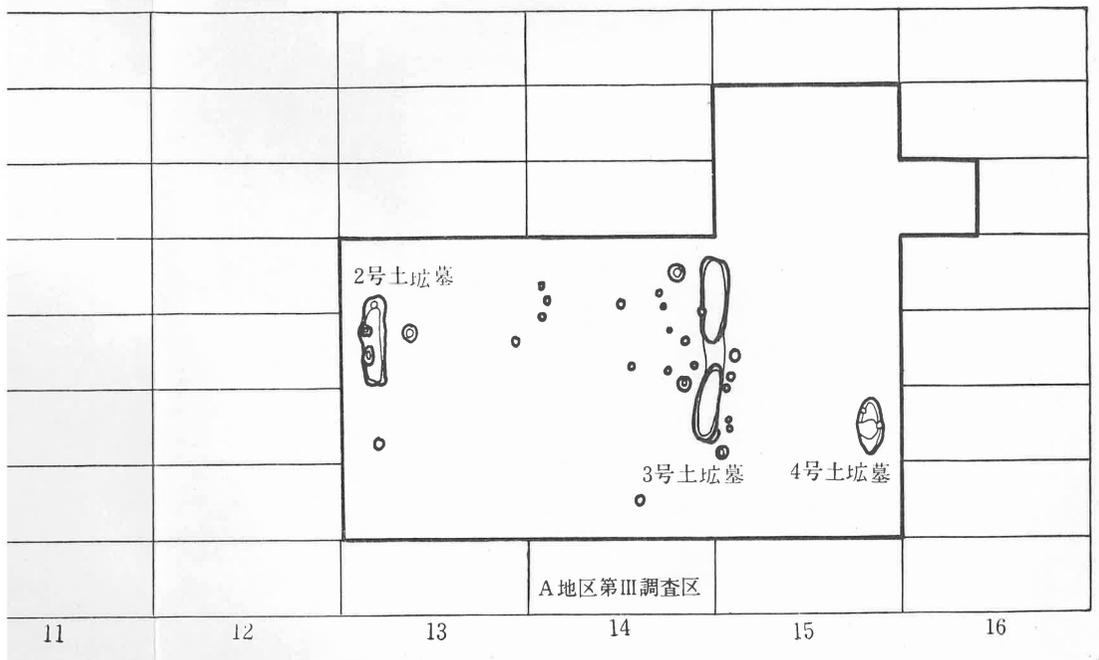
E地区 第6次調査区にあたり、A地区の南西部に位置する。台地の東西部に深く入り込む浅い谷に南面し、調査区の南側は一部台地端の急傾斜部を含む。

I A地区の調査

A地区の調査は昭和45年11月10日より同月21日にかけて実施された。調査にあたりトレンチ設定を次のように行なう。主軸をほぼ東西南北に合わせた東西16m、南北80mを調査対象地とし、東西2m、南北5mの方眼をつくる。その方眼を東からa、b、c…、北から1、2、3…と命名。その合点をグリット名として遺物の取り上げ等を行なう。調査は始め遺物、遺構等の密度確認のため、cトレンチ2m×80mを1つとびのグリット(c-1、c-3…)で発掘を行ない、有望なグリットを中心と



第 3 图 A 地 区 平 面 图

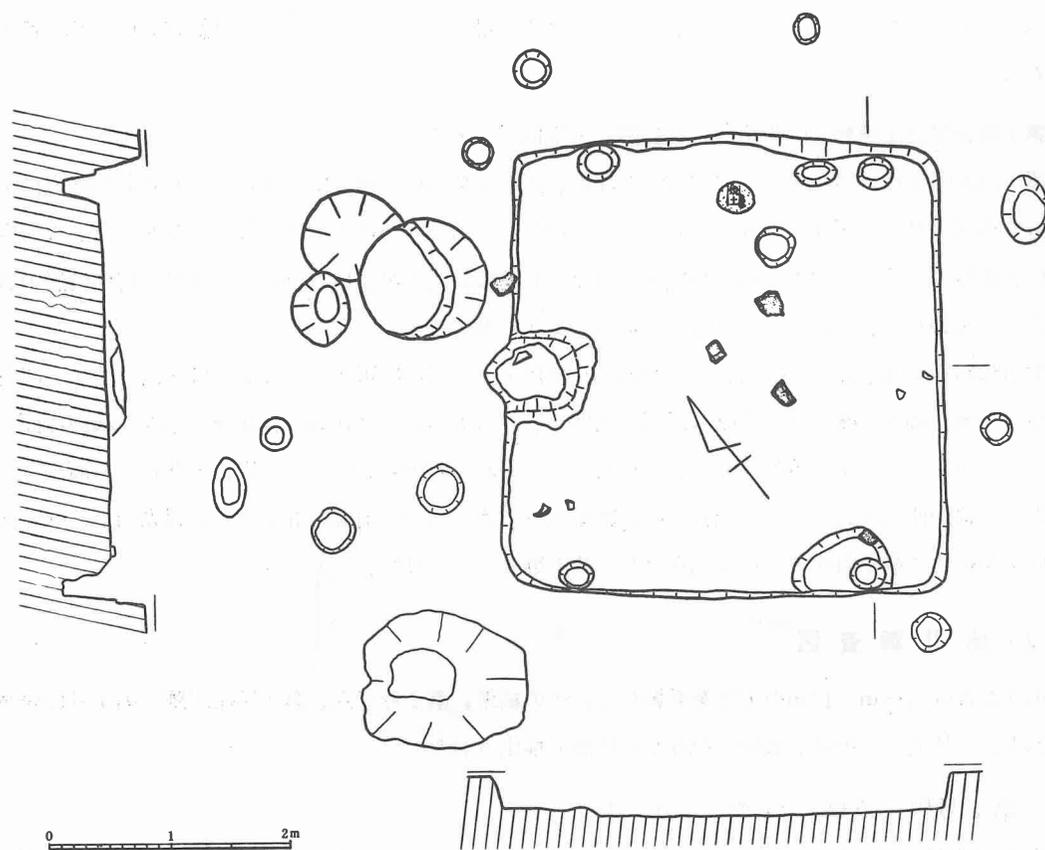


して拡張した。その結果A地区は大きく3つの調査区となった。c-1、2、3にかかる面積120㎡を第Ⅰ調査区、4m南のc-5、6、7にかかる面積180㎡を第Ⅱ調査区、さらに44m南のc-13、14、15にかかる面積144㎡を第Ⅲ調査区として遺物をまとめた。ただし、遺物、遺構中心に拡張を行なったため、発掘区の形態は不規則なものとなった。

(1) 第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区では(第3図)のように最終的には7m×11m、5m×8mまで拡張を行ない、住居跡1軒およびピット群が検出された。

第1号住居跡(図版第一、第4図)第1号住居跡は、竈をもつ一辺長360cm×370cmの規模の古墳時代後期の方形竪穴住居跡である。赤褐色の地山を掘り込んで構築しており、ほぼ垂直に近く立ち上った高さ約30cmの壁が遺存していた。この住居にともなう柱穴としては四隅近く壁に接する位置に4コが存在する。いずれも床面よりの深さ30cm前後を測る。竈は竪穴北壁中央部に厚さ10cmほどの粘土



第4図 A地区第1号住居跡実測図

でつくり70cm×70cmの大きさである。壁部分に予想される煙出し部の構造は確認することができなかった。住居跡内で検出された遺物は少なく、いずれも住居使用時の状態を物語るようなまとまった出

土ではない。坏3点、礫を利用した石器4点が出土している。

出土遺物（図版第五、第9図1～3）

1は口径12.8cm、器高約4.7cmの須恵器の坏蓋である。体部は肩部から口縁部にかけてなめらかに傾斜し、口縁端は丸味をおびている。灰褐色を呈する。2の坏身は口径10.7cm、器高4cmを測り、1とセットになる。蓋受け立ちあがりは短く内傾度が著しい。体部は口縁部にかけてゆるやかに屈曲し、底部はヘラによる削り痕がみられる。暗褐色を呈する。3は口径10.4cmを測り、2よりさらに短い立ちあがりを有する。灰色を呈する。

石器は礫器（第17図8）および石皿が出土している。8は両面の状態から石皿の欠損品に刃部形成加工を施したもので、両刃先端部に使用痕、摩滅痕が残る。安山岩製。石皿は3点出土している。長さ20cm、幅13cm、厚さ8cmの約1/2の残存部で片面使用のもの。長さ18cm、幅12cm、厚さ7cmを測る約3/4の残存部の両面使用の片面が焼けているもの。長さ18cm、幅15cm、厚さ5.5cmの比較的小形で、断面がU字形のくぼみをもつものである。いずれも安山岩製。

以上第1住居跡について述べたが、住居跡内の須恵器の示す年代からして6世紀末の住居跡と考えられる。

第I調査区出土遺物（図版第四、第17図5・第18図6・8）

第1調査区では上述の方形竪穴住居跡のほか、大小多数の柱穴が検出されたが、これらの柱穴群によって構成される高床建築物等については残念ながら一切明らかにすることはできなかった。なお竪穴住居跡およびその周辺の遺構を発掘する過程でも多数の遺物が発見され、それらは一応包含層の遺物として処理した。このうち主要なものについて次に解説する。

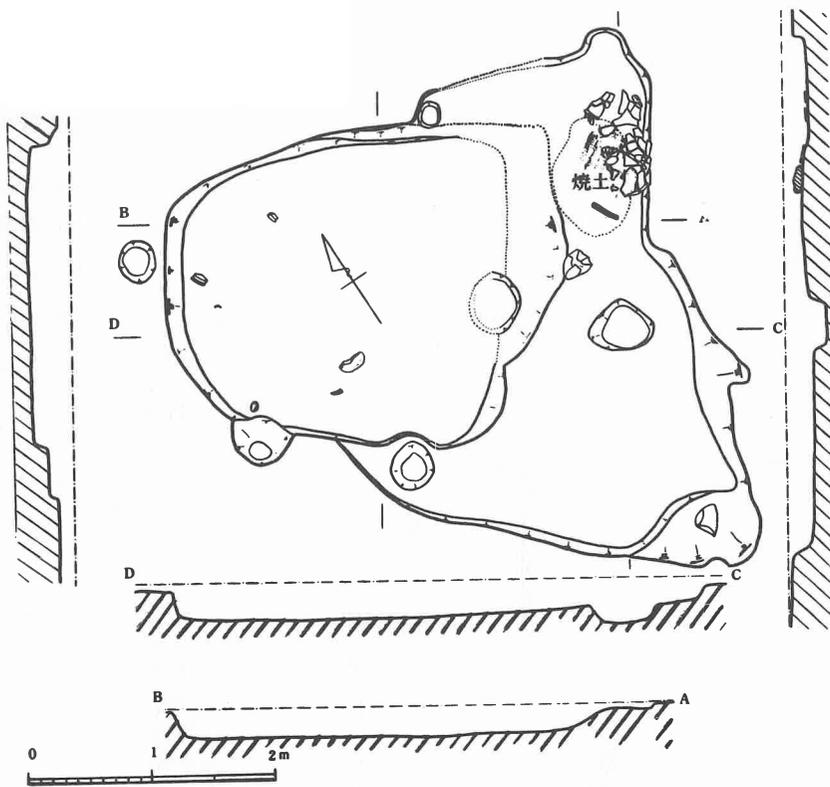
尖頭状石器6は姫島産黒曜石製で、石鎌の凸基無茎式の円基に属する。片面に自然面を残す。凹石は長さ9cm、幅8.5cm、厚さ5cmの両面に凹部を有するもの、長さ10cm、幅10cm、厚さ5cmの片面のみに凹部を有し、一部が焼けたもの2点が出土、いずれも安山岩製。5は頁岩質の砥石で断面長方形をなし、両面使用されている。土錘10は、断面円形の棒状品で、両端に孔を穿ち、両先端部に孔とは方向を異にする溝を有する。黄褐色を呈し、胎土焼成ともに良好。

（2）第II調査区

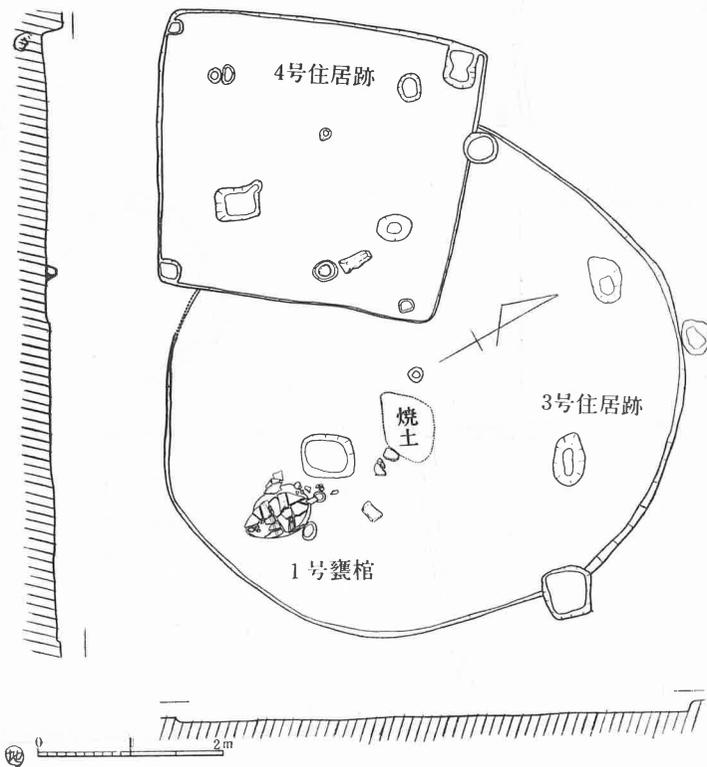
第II調査区は15m×12mの広さを発掘した。その結果、第2号竪穴、第3号住居跡、第4号住居跡等弥生、古墳時代の遺構、遺物が混在した状態で検出された。

（1）第2号竪穴遺構（図版第二、第5図）

第2号竪穴はほぼ3m×2.5mの規模の楕円形状をなす。長軸を東西方向にもつ。発掘中、円形プランの住居跡かと考えられたが、遺構の南半分が別の竪穴状遺構と切り合い、また後世の攪乱をうけている。この竪穴にともなうとみられる柱穴は10cm～20cmの深さがあり、楕円形竪穴のほぼ四隅にあって、うわ屋的な構造が想定される。遺存する壁はほぼ垂直で約20cmの高さがある。床面は平坦であ



第5图 A地区第2号竖穴实测图

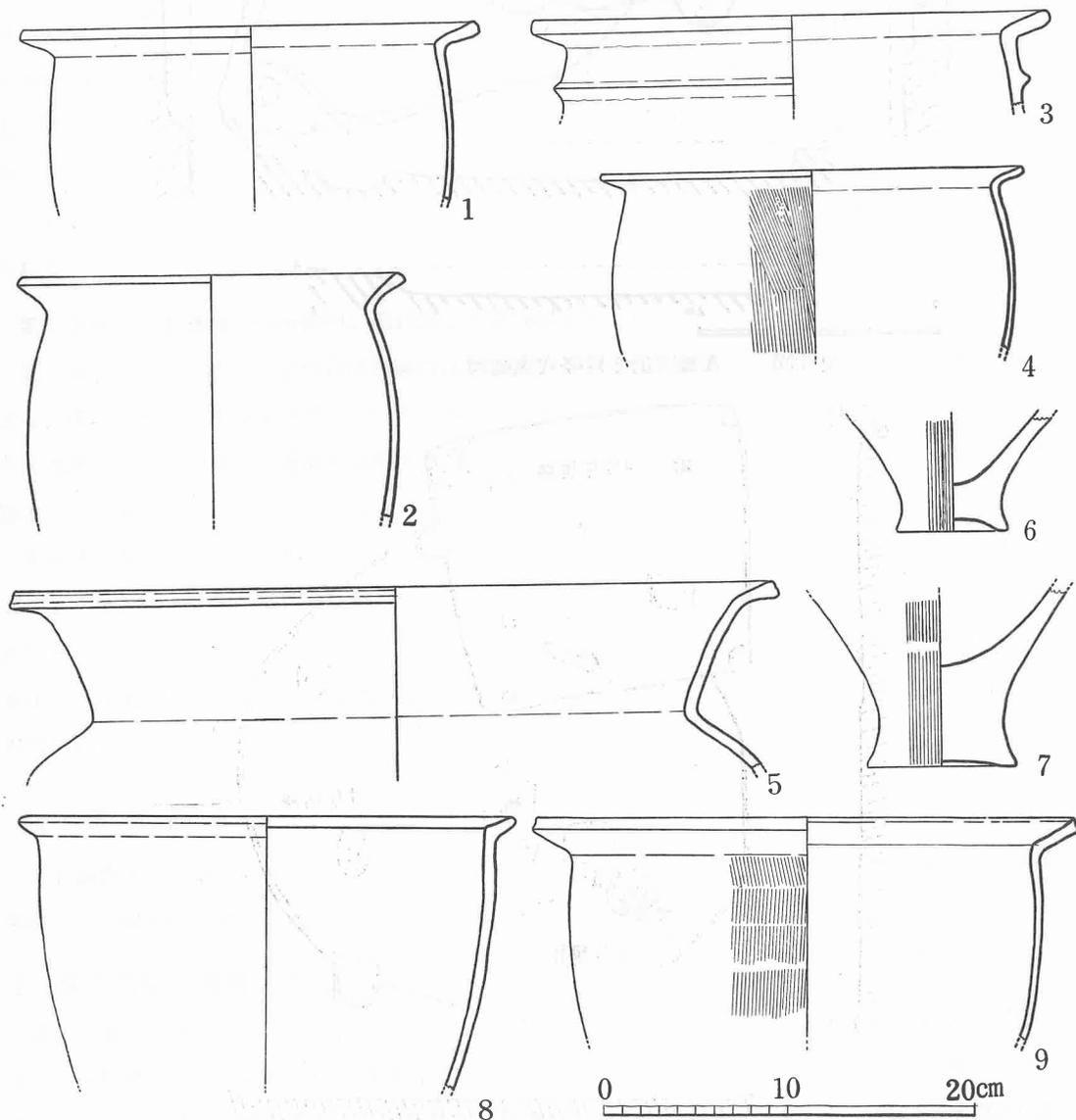


第6图 A地区3·4号住居迹实测图

る。第2号竪穴の東南方向に不定形の掘り込みの竪穴が付属する。東北隅には焼土の堆積がみられ、その周辺には焼けた礫、およびまとまった状態の弥生式土器が検出された。

出土遺物（図版第四、第7図8・9）

第2号竪穴内からは2点の甕形土器、1点の石皿の出土をみた。8は外面は赤褐色、内面は暗褐色を呈し、口縁部は短く、ナデにより整形されている。口縁部は内側に稜をつくって外反する。器面調整は不明である。9は淡黄色を呈し、胎土には砂粒を混入する。口縁部は外反し、先端はいわゆる跳ね上り口縁を成す。胴部は若干の張りをみせ、器面は短い単位での刷毛目調整が認められる。以上第2号竪穴出土の土器は中期前半に位置すると考える。石皿は長さ24cm、幅11cm、厚さ7cmの $\frac{1}{2}$ の残存



第7図 A地区第2・3号住居跡出土遺物実測図

部がU字形に凹み摩滅し、片面が欠けたもので安山岩製である。

(2) 第3号住居跡(図版第二、第6図)

第3号住居跡は径5.5mの円形の竪穴住居跡である。この住居跡は一部でつぎに述べる4号住居跡と切り合っている。住居跡内の状態は、中央部に径、深さともに40cm前後の4コの柱穴が認められ、柱穴に囲まれた部分の南寄りに焼土が存在する。遺物はこの焼土中心に多数検出された。また住居跡内には時期を異にする甕棺が埋置されている。なおA地区における確実な弥生時代の住居跡はこの一軒のみである。

出土遺物(図版第四、第7図1～7・第17図4、6、9・第18図12)

第3号住居跡内より出土した土器(第17図1～7)は全て炉跡付近に集中している。5は唯一の壺形土器である。口径は40cmを測り、黄褐色を呈する。口縁部は、くびれた頸部よりゆるやかに外反し、口縁部でさらに急に外反する。1は暗褐色を呈し、口縁部は外反する。2は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を混入する。口縁部は他の3点に比較すると、その屈曲はゆるやかであるが、胴部は張る。この土器も2と同様、器面調整は不明である。3は黄褐色を呈し、口縁部下に一条の三角突帯をもつ甕形土器である。口縁部はナデによりL字状口縁を呈する。底部は6、7の2点の出土をみた。赤褐色を呈し、上げ底を成す甕形土器の底部と思われる、刷毛目による器面調整がみられる。

以上の他石器5点(第17図4、6、9)土製品1点(第18図2)の出土がある。石皿9は長さ20cm幅15cm、厚さ6cmの約1/2の残存部で片面が使用されている。このほかに長さ24cm、幅20cm、厚さ7cmで断面がU字形に凹むものと、長さ24cm、幅18cm、厚さ5cmで打撃による小さな凹凸をもち摩滅した状態の2点が出土した。いずれも安山岩製。砥石6は、砂岩製で長さ15cm、幅8cm、厚さ8cmの不定形砥石で片面のみ摩滅したものである。凹石4は、長さ9.5cm、幅9.2cm、厚さ6cmの安山岩の円礫の両面に凹部を有するもの。土錘12は円形断面の紡錘形をなすもので、両先端から孔を穿ち貫通させる。黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

(3) 第4号住居跡(図版第二、第6図)

弥生時代の住居跡である3号住居跡と切り合った状態で方形の4号住居跡が検出された。この4号住居跡は1号住居跡に比較すれば3.4m×3mといくぶん小型であり、竈も持っていないが形態的にはあまり差は認められない。主軸の方位は東北方向。竪穴内の状態は1号住居跡同様、四隅に柱穴があるが、先に述べたように、竈は存在せず、またこれに変わるような施設、焼土も認められない。1号住居跡とは性格を異にするものかもしれない。遺物は竪穴内部ではまとまった状態で発見されず、むしろ周辺部において多数の須恵器をはじめ、鉄斧などの遺物が出土した。4号住居跡の時期は一応これらの須恵器の年代と考えている。

第II調査区出土遺物(第8図・第9図5～26・第17図10、11・第18図1～3、5、7、9、11)

弥生式土器(第8図)弥生式土器は、壺形土器、甕形土器を主体とする。

壺形土器（1、12、17）は各破片とも部位が異なる。1は黄褐色を呈する。焼成、胎土ともに良好である。口縁部の破片のみであるが、口縁端は甕形土器にみられるような跳ね上り口縁気味になっている。12は口縁部が欠損している頸部から胴部にかけての破片である。器面はへら磨きで調整され、全面にわたり、丹塗りされている。17はわずかに上げ底になる底部である。器面はへら調整により仕上げられている。灰褐色を呈し、胎土には砂粒を混入する。

甕形土器（2～8、10、11、13、15、16）は口縁部の形態により大きく4つに分離される。

I類（2、3、10）は口縁部を肥厚気味に外反させ、平坦部もしくはそれに近いものを形成する甕形土器を示す。2は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する粗悪な甕形土器である。口縁部は、肥厚させることにより形成され、その先端は刻み目を有する。胴部は若干張り気味である。器面全体は刷毛により調整されている。3は黄褐色を呈し、口縁部はL字状になるように形成され、口縁部には刻み目がみられる。器面は短い単位により刷毛目調整がみられる。10は黒褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。口縁部はへら調整により形成される。胴部は張り気味であり、全面にわたり刷毛による器面調整がみられる。

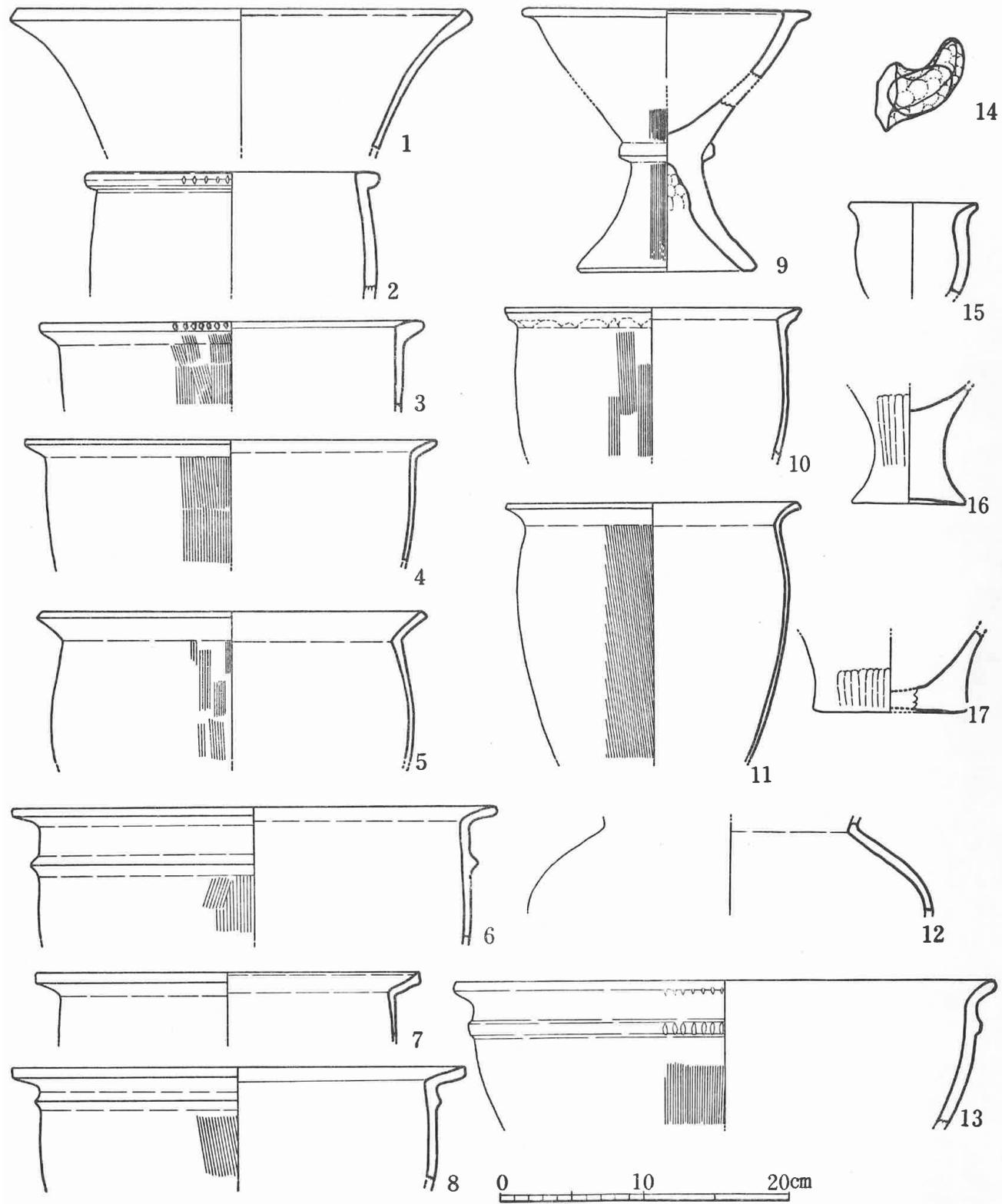
II類（4、6、11、13）は、胴部からほぼ同じ厚さの器壁を保ちながら外反するものを示す。4は暗褐色を呈し、口縁部はナデ、胴部は刷毛により器面調整されている。胴部はあまり張らない。6は淡黄色を呈し器面は口縁部はナデ、突帯以下は刷毛により調整されている。11は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する焼成良好な土器である。胴部の張りは強く、頸部を形成させる。13は茶褐色を呈し、胎土には11と同様砂粒を混入する。突帯は断面が台形状をなし、口縁部下端とともに刻み目がみられる。器面は口縁部はナデ、口縁部内側は研磨気味のナデ、胴部は刷毛により調整されている。口縁部の傾きから鉢状の甕形土器と考える。

III類（5、7、8）はII類と同様、口縁部は外反するが先端で跳ね上り状となるか、それに近い形態を呈するものを示す。5は黄褐色を呈し、胴部は張り、口縁部は端下で稜を成す。7の口縁部は先端で跳ね上り状に形成され、胴部と口縁部の屈折部には稜が生じる。赤褐色を呈する。8は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を混入する。口縁部は先端で跳ね上り状になる。器面調整は口縁部はナデ、突帯より下部は刷毛によりなされている。16は甕形土器の底部であるが、わずかに上げ底となり、くびれ部をもつ。器面はへら調整がなされている。

脚付鉢形土器(9)はほぼその全形がうかがわれる。口縁部は鋤先状口縁になり、脚部と鉢部の接合部には、断面三角形の貼り付け突帯が施されている。鉢部、脚部ともに内側はナデにより器面調整され、脚部の奥には指圧痕が残る。外面は全面刷毛により器面調整されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を混入する。

小型壺形土器(15)は手づくね製で、しかも口径は8.5cmと小さい。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を混入する。

以上、述べたように、第II調査区出土の弥生式土器は全体として弥生時代中期前半と考えられるが

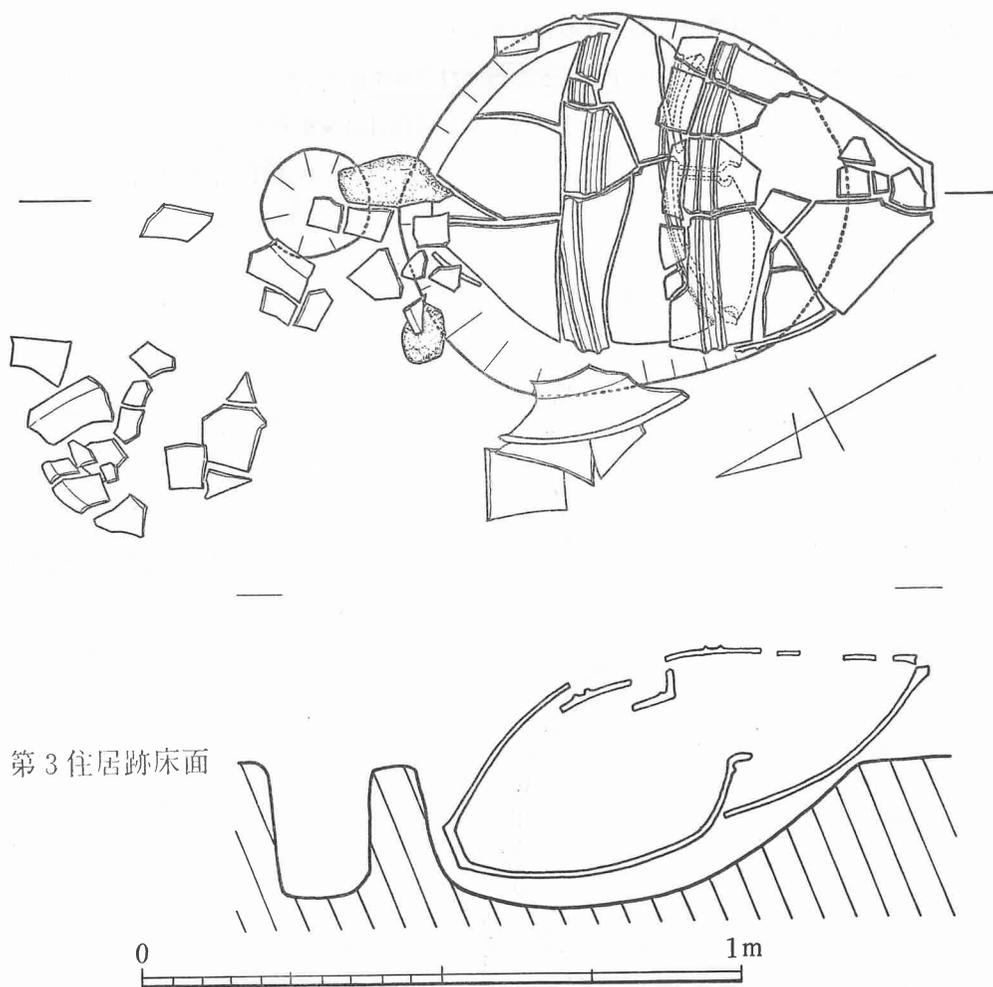


第8图 A地区第Ⅱ调查区出土土器实测图

一部2、3、13等は古式のものと考えられる。

(4) 第1号甕棺 (図版第三・五、第9・10図)

第1号甕棺は第3号住居跡の竪穴内南寄りから甕棺の上部半分が住居跡床面より上に出るという状態で検出された。主軸をほぼ南北にとり、約20°の角度で埋置されている。埋葬時の長さが85cmと短く、小児用の甕棺と考えられる。またこの甕棺の主軸上の北より、柱穴状のピットが検出されたが、甕棺との関係は不明である。なおA調査区より検出された甕棺はこの1基のみである。



第9図 A地区第1号甕棺出土状態実測図

上甕は、胴部上位を打ち欠きによりカットし、下甕に被せるようにしている。器形は、下甕とほぼ同じ形態を呈すると考えられ、胴部中位に二条の断面三角形の帯がめぐらされている。器面はナデにより調整され焼成良好な黄褐色を呈する土器である。

下甕は口径22cm、器高41.5cmを測る。口縁部は胴部との屈折部に稜を成して外反し、その先端は極端に跳ね上り状となる。また頸部状に締った口縁部と胴部との接合部に一条、強く張り出した胴部の最大径を測る部位に二条の断面三角形の突帯がめぐらされている。上甕と同様、器面はナデにより調整され黄褐色を呈する。胎土・焼成ともに良好な土器である。

須恵器（図版第五、第11図5～22）

須恵器は第4号住居周辺で発見されたもので坏、高坏を中心に提瓶、壺が出土している。

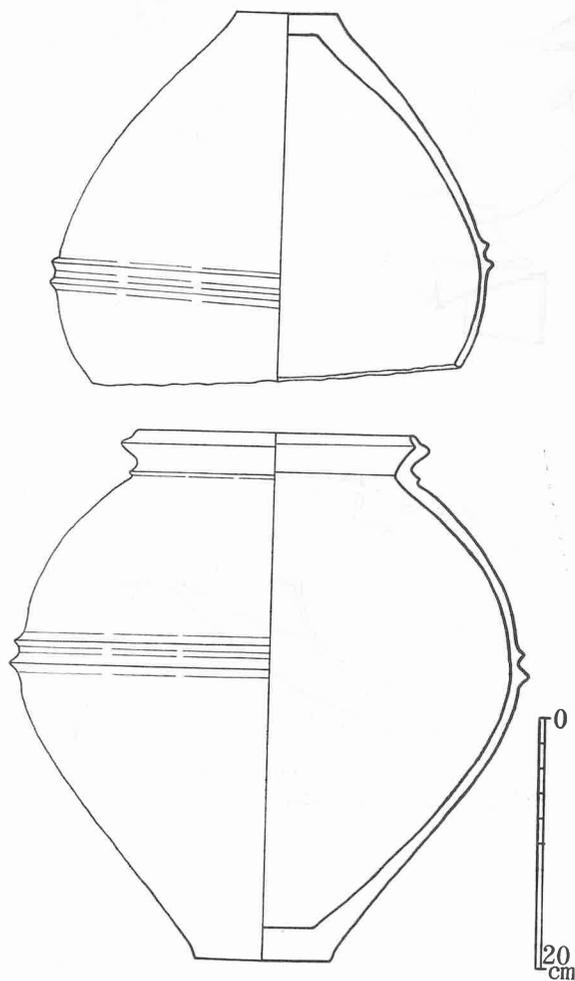
坏（5～14）は大きく2種に分類される。

I類（5～7、13、14）は坏身に蓋受けの立ちあがりのつく形態のものをいう。このため坏蓋は天井部から口縁部にかけて急角度で傾斜する。5は口径11.8cmを測り、焼成・胎土ともに良好である。

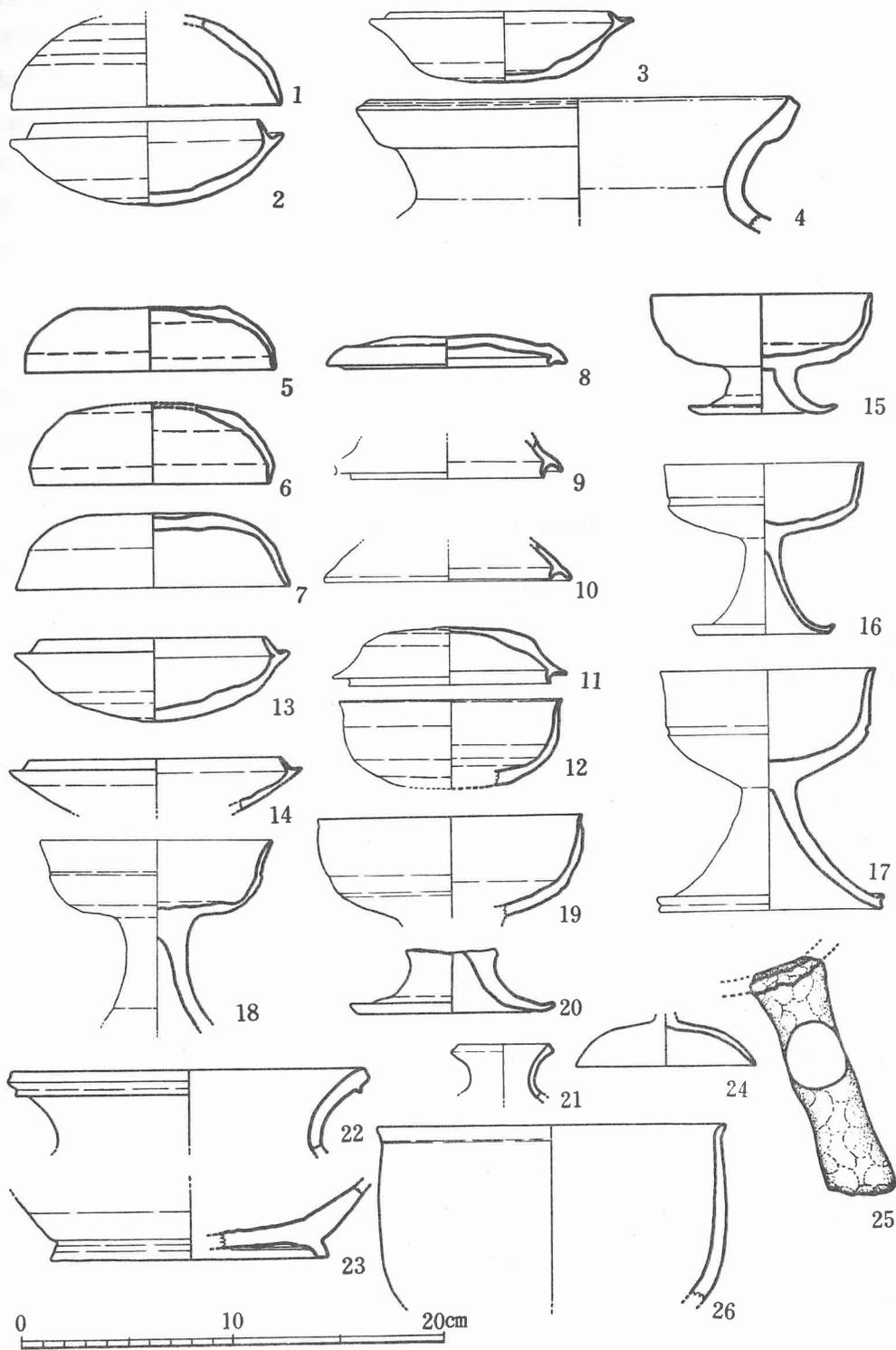
天井部はヘラ削りにより水平にカットされている。6は口径11.1cmを測る。天井部はヘラ削り痕が見

られるほか、故意に打ち欠きを行ない天井部に孔を穿った痕跡がみられる。

口縁部は先端でとがるように整形されている。明灰色を呈する7は口径12.9cm、器高3.3cmを測る。天井部は中央でくぼみ、体部はゆるやかに傾斜し、口縁端で丸くなる。13、14は坏身である。13は口径10.5cm、器高4cmを測る。口縁部の立ちあがりはほぼ同じ厚さで延び、先端で丸くなる。灰白色を呈する。14は口径11.9cm、立ちあがりは細く内傾して立つ。体部は口縁部から底部にかけて直線的にのびる。暗灰色を呈する。



第10図 A地区第1号甕棺実測図



第11図 第Ⅰ・Ⅱ調査区出土須恵器実測図(1—4は第Ⅰ調査区、23—25は土師器、26は瓦器)

Ⅱ類(8~12)は、蓋の方に身受けのかえりが付く形態のものをいう。蓋8は口径9.8cm、器高1.5cmを測りもっとも扁平な形態である。天井部はへらにより荒い削りがみられ、身受けのかえりは太く短い。赤褐色を呈する。蓋9は口縁部のみ的小破片である。口径9.1cmを測る。身受けのかえりは外反ぎみに立ち、先端はとがる。灰色を呈する。蓋10は口径9.8cmの口縁部の破片である。身受けのかえりは短く先端でとがる。灰白色を呈する。蓋11は口径9.6cm、器高2.8cmを測る。体部にはへら削り痕が認められる。身受けのかえりは細く、外反気味に立つ。身12は口縁部がやや彎曲しながら直立気味に立ち、口縁先端部をうすく仕上げてわずかに反転させる。口径は10.5cmを測り、体部はへら削り痕が認められる。灰黒色を呈する。高坏(15~21)は、坏と同様に2種に分類が可能である。

I類(15、20)は短い脚部をもち、坏部との接合部からカーブを描き、先端で跳ね上り丸味をおびるものをさす。15は口径13cm、脚端部径7cm、器高5.6cmを測る。坏口縁部は尖がり気味に直口する。坏部と脚部との接合部付近はへら削りの跡がみられる。暗灰色を呈する。20は脚部のみ破片であるが、脚端径は9.7cmを測る。器形は15と同類と考える。坏部との接合面には、接合強化のための同心円状の凹凸が見られる。暗灰色を呈する。

Ⅱ類(6~19)はI類に比較すると脚部は長く、坏部の体部に凹線を有する。16は口径9.4cm、脚端径6.7cm、器高8cmを測る。口縁部は直口ぎみに立ち、先端でとがる。脚部は先端で跳ね上る。灰褐色を呈する。17は口径10.3cm、脚端径10.6cm、器高21.4cmを測る。坏部、脚部ともに16と形態的差異はみられないが17は脚端部に凸線を有する。18は脚端部を欠いた資料であるが、残存部上により口径10.9cmを測る。口縁部は他に比較し外傾し、灰色を呈する。19は坏部のみ破片であるが口径12.5cmを測る。口縁端は細くなり、やや外反しゆるやかなカーブで底部に達する。灰黒色を呈する。

提瓶2は口縁部のみで全体の器形を知り得ないが、口径4cmを測る小形品である。口唇外側をやや肥厚させて頂部をとがらす。灰色を呈する。

壺22は21と同様口縁部のみ破片である。口径は16.8cmを測る。口縁部は細い粘土により突帯状に肥厚させる。頸部はカキ目がみられ、暗灰色を呈する。

以上、第Ⅱ調査区出土の須恵器は、多種にわたるが6世紀末から7世紀前半までの時期が考えられる。

土師器、及び瓦器(第8図14、第9図23~26)

土師器及び瓦器は甗、坏蓋、台付壺、土鼎、鉢が上述した弥生式土器、須恵器とともに出土した。

甗(第8図14)は把手のみの出土である。断面が横に長く、2.8cmの楕円形を呈する。指圧により整形され、焼成・胎土ともに良好な赤褐色を呈するものである。

坏蓋24は口径8.5cmを測る。器壁は薄く一定して、天井部から口縁部にかけてなめらかに屈折し、先端で丸味をおびる。器面は入念に研磨気味のナデにより調整されている。また天井部にはつまみが

施されていた痕跡がうかがわれる。胎土・焼成ともに良好な黄褐色を呈する整った土器である。

台付壺23は底部径13cmを測る底部の破片である。器面全体にわたりロクロの使用痕が残り器面内側には叩き目がある。台部は高台状になり、外に張り出すように付けられ、先端は水平にカットされている。赤褐色を呈する。

土鼎25は棒状の脚と思われるもの1点のみの出土である。他の器種の可能性もあるが土鼎の脚部とみるのが最も妥当であろう。残存部は長さ11.5cm、径約2.8cmを測る。全体は指圧により整えられ、黄褐色を呈する。

鉢26は1点のみの須恵質の瓦器である。口径16.5cmを測る。口縁部は直口し、先端でわずかに肥厚し外反する。このため低い段が生じている。器面は口縁部は横ナデ、胴部は全面にわたり細かいカキ目により調整されている。灰白色を呈する。

石器、及び土製品（図版第四、第17図10・11・第18図1～3・5・7～8・11）

石器は上述の土器類とともに第4号住居跡周辺より出土した。

石鏃（1～3）はいずれも姫島産黒曜石製で、1、3は凹基無茎式の三角鏃、2は凹基無茎式の片足鏃である。

搔器（5、7、8）も石鏃と同様姫島産黒曜石製である。5、7は欠損品であるが、形態的には石鏃の凸基無茎式に属する。8は片面に主要剝離面を残すものである。

礫器（第17図10、11）は硬質砂岩の肩平な円礫を素材とし、10は径6cm、厚さ1cmで一部が打ち欠かされている。11は径7cm、厚さ2cmで一部の打ち欠きと、反対側面の自然の凹部に摩耗痕がある。なお11は火を受けた痕跡がある。

土錘11は断面が円形の棒状を呈し、両端に孔を穿っている。半欠損品で黄褐色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。

鉄製品（図版第四、第18図9）

鉄製品として1点のみ、鉄斧9が須恵器等と混在した状態で出土した。長さ10cm、刃部幅4.5cm、袋部内径2.2cmを測り、中央部でややくびれる完形品である。

以上土師器、瓦器、石器、鉄斧について述べたが時期は弥生時代から歴史時代までの長期にわたる。しかし、石器類は弥生時代、甗・坏蓋・鉄斧・土錘は古墳時代、台付壺・土鼎・鉢は歴史時代のものと考えられる。

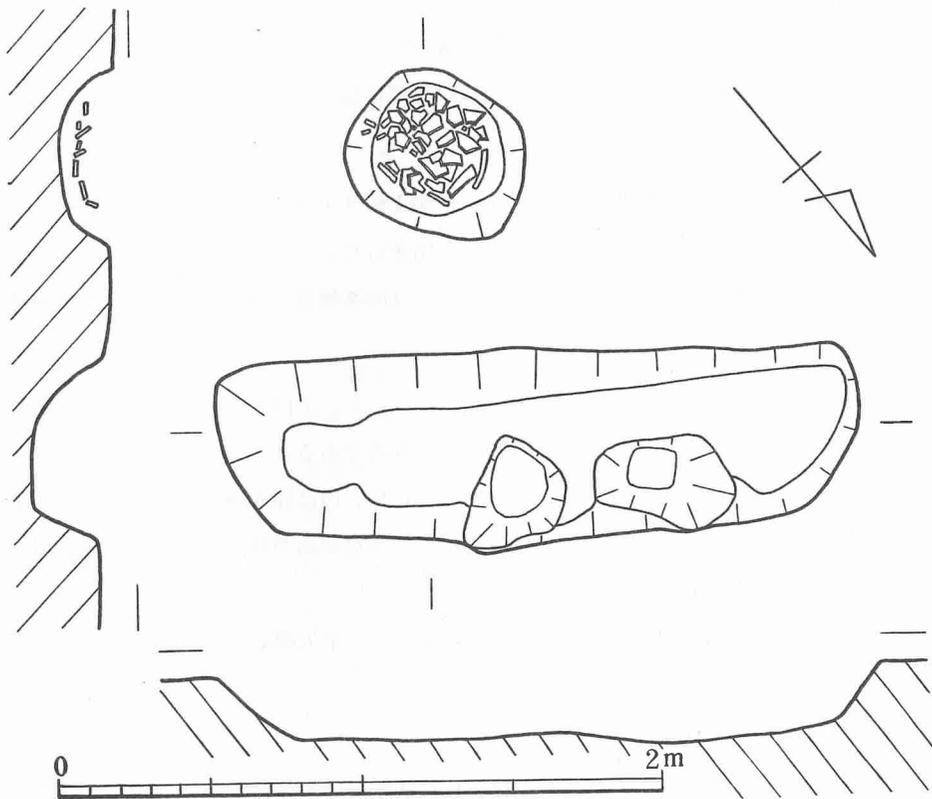
（3）第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は第3図のように144㎡にわたり調査された。この地区は、弥生時代中期の遺構、遺物のみに限られ、他の地区が古墳時代のもとの重複した状態で検出されたのと対照的である。発見された遺構は、多数のピットと土壇状遺構であるが上面が後世かなり削平されているため、遺構は浅い。3号土壇状の遺構がほぼ東西方向につらなるように存在し、遺物出土の状態からみて溝状遺構となる

可能性も残している。もし溝状遺構になるとすれば二つの浅い溝が約4mの間隔で平行にはしることになる。

(1) 第2号土壙(第12図)

第2号土壙は長さ210cm、幅60cmを測り、主軸の方向をほぼ東西にとる。径20cmの二つのピットと複合する。掘込みは斜めに行ない、底で平坦部をもつ。土壙内よりの出土遺物は、弥生時代中期と考えられる土器片が出土している。



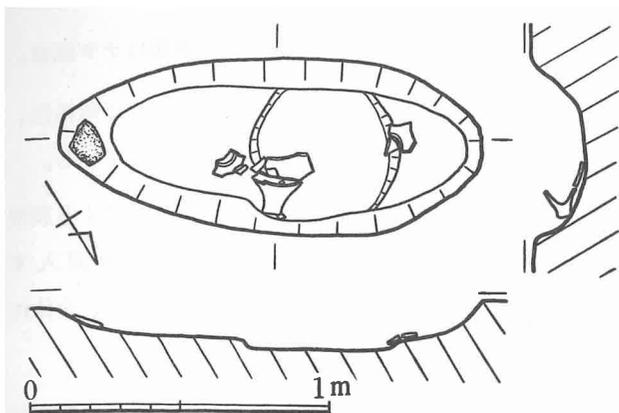
第12図 A地区第2号土壙実測図

(2) 第3号土壙

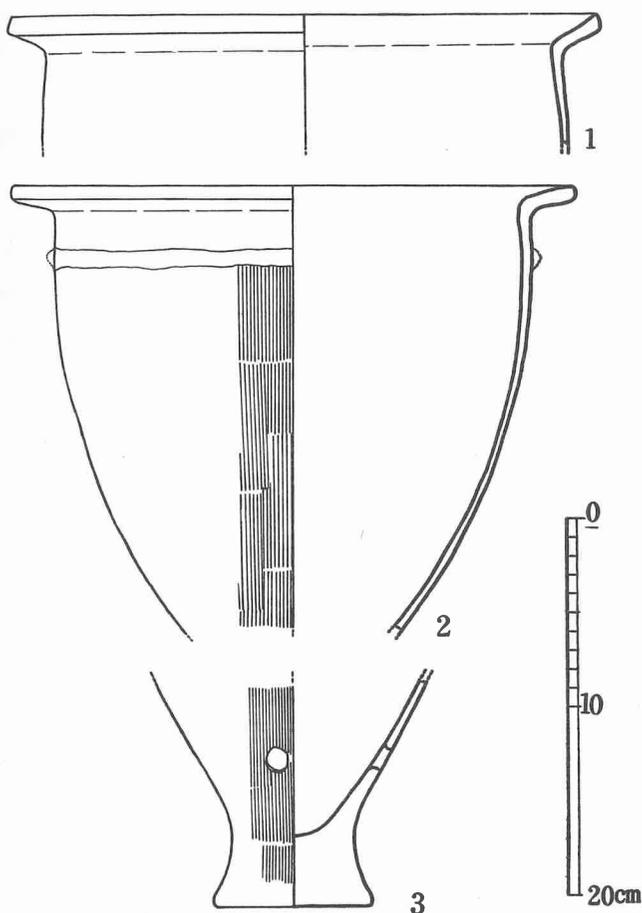
第3号土壙は幅50cm、長さ200cmの溝状の土壙が2つ連って検出されたものである。このため長さ5.5mまでは確認されたが全体的に浅く、これに付随した遺物はない。この3号土壙は最も溝としての可能性の強いものである。

(3) 第4号土壙(図版第三、第13図)

第4号土壙は長径1.42cm、短径59cm、遺構検出面からの深さ20cmの楕円形を呈し、底で径50cm、深さ5cmのくぼみを持つ。土壙は浅く、後世かなり上面を削平されているため先に述べたように、この遺構が構築された当時は溝として存在した可能性もある。



第13図 A地区第4号土壌実測図



第14図 A地区第4号土壌出土土器実測図

I類(第16図1、2)は口縁部から頸部にかけて直線的に延びる土器である。1は口縁部だけの破片である。胎土に砂粒を混入し、灰褐色を呈する。口縁部は先端で跳ね上がり状になり、外側で凹線が生じる。器面は内側がナデ外側が刷毛により調整されている。2は1と同じ状態の破片である。黄褐

出土遺物(第14図)

第4号土壌出土の遺物は、全て甕形土器である。1は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。口縁部は外に屈曲し、先端でいくぶん跳ね上がり気味になる。2は赤褐色を呈し、器面は刷毛により調整されている。口縁部は短く屈曲し、口縁端の整形はナデにより丸味をもたせている。また口縁下には全て剥落しているが、貼り付け突帯の痕跡がある。3は甕形土器の底部である。2と同様、器面は刷毛により調整されている。暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。また、底部上方に径1cmの焼成後の穿孔がある。以上これらの遺物は弥生時代中期前半の時期のものと考えられる。

第Ⅲ調査区出土遺物

(図版第四・五、第15・16図、第17図2・3・7、第18図4)

土器(第15、16図)は壺形土器、甕形土器の2種が主体をしめる。

壺形土器(第15図1～3、第16図1～5)は大きく3形態に分類される。

色を呈し、胎土・焼成ともに良好な土器である。口縁部は外側で稜が生じている。器面はナデ調整。

Ⅱ類（第15図2、3第16図3～5、）は鋤形口縁を成す壺形土器である。（第16図3）は暗褐色、（第16図4）は黄褐色を呈し、両者とも胎土は良好である。口縁部はナデにより整形されている。

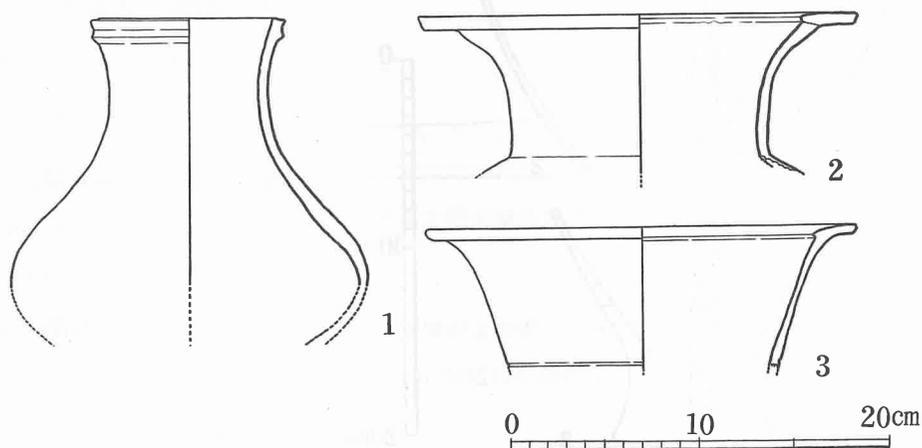
（第16図5）は赤褐色を呈する比較的小型の壺形土器である。器面は前者と同様、横ナデにより調整されている。（第15図2）は未発達な鋤形口縁である。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。土器の内面は研磨により調整されている。（第15図3）は胎土・焼成ともに良好であり、全体にわたり、研磨され丹塗されている。また頸部直上には沈線がある。

Ⅲ類（第15図1）は淡褐色をした長頸壺形土器である。口縁部下には断面三角形の貼り付け突帯があり頸部はゆるやかにくびれ、胴部は強く張る。器面は口縁部から頸部にかけてナデ、胴部は研磨により調整されている。

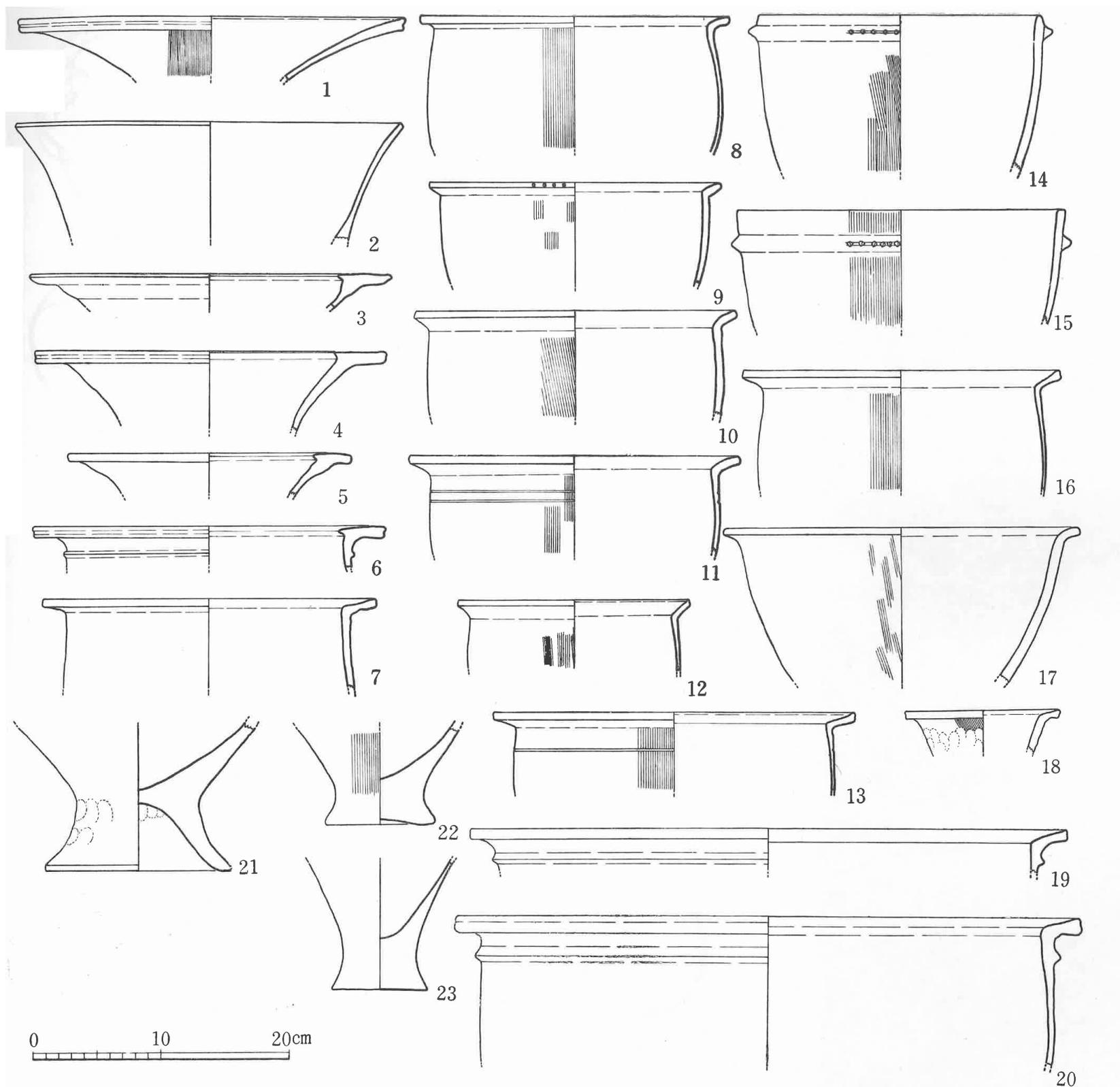
甕形土器（第16図6～20・22・23）は口縁部の形態により4種に分類される。

I類（6）はL字状になる発達した口縁部をもつ。口縁下には突帯がめぐらされ中期中葉の特徴的な土器である。器面は口縁部はナデにより調整されている。暗褐色を呈する。

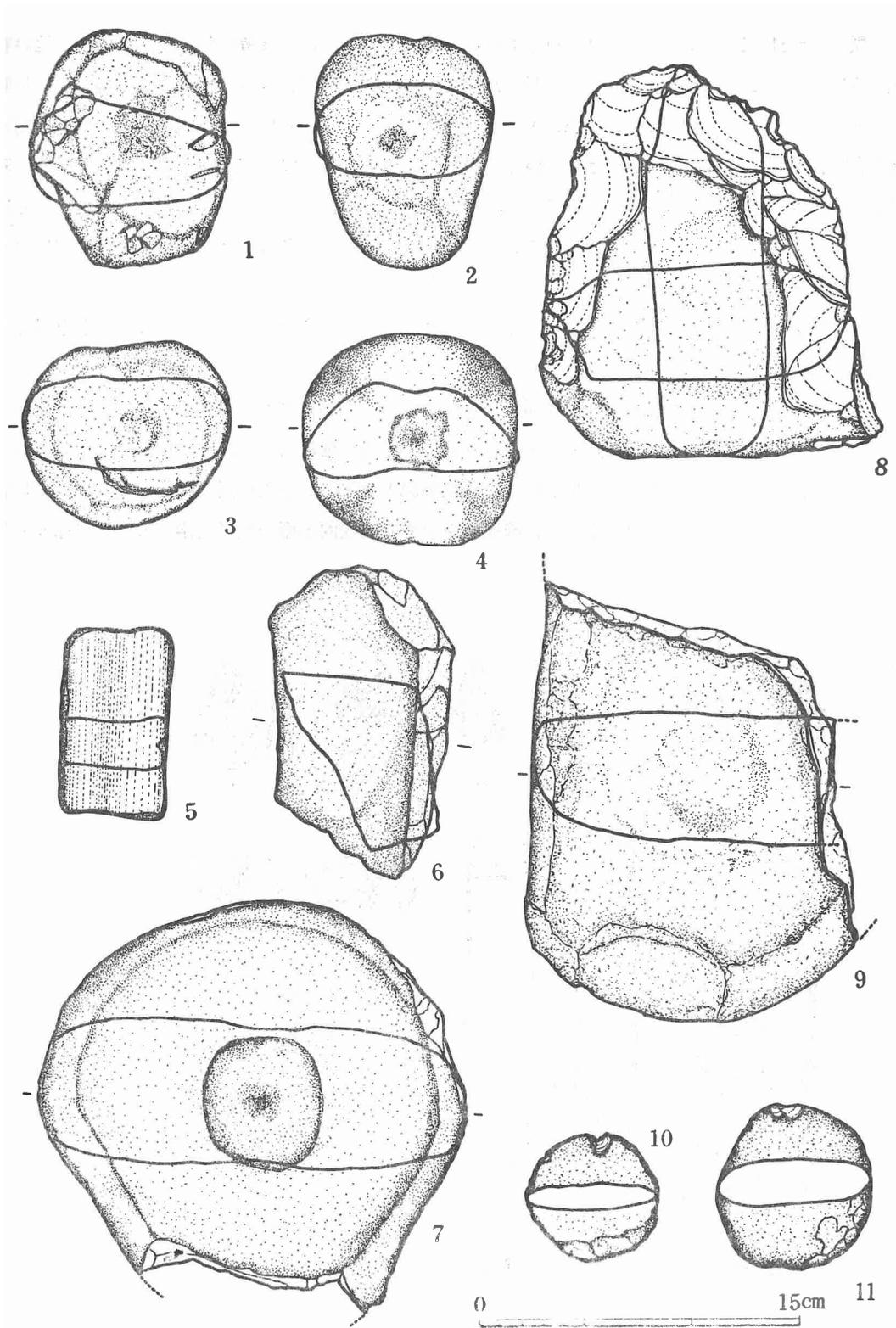
Ⅱ類（14、15）は東九州において、いわゆる下城式土器と称されている土器である。14、15ともに暗褐色を呈し、焼成・胎土は良好である。口縁部は丸味をおびた形で整形され、その直下には刻み目突帯をめぐらしている。器面は口縁部から突帯にかけてはナデ、胴部は刷毛により調整されている。15は14に比較しやや下位に刻み目突帯がつく。



第15図 A地区第Ⅲ調査区出土土器実測図(1)



第16图 A地区第Ⅲ调查区出土土器实测图(2)



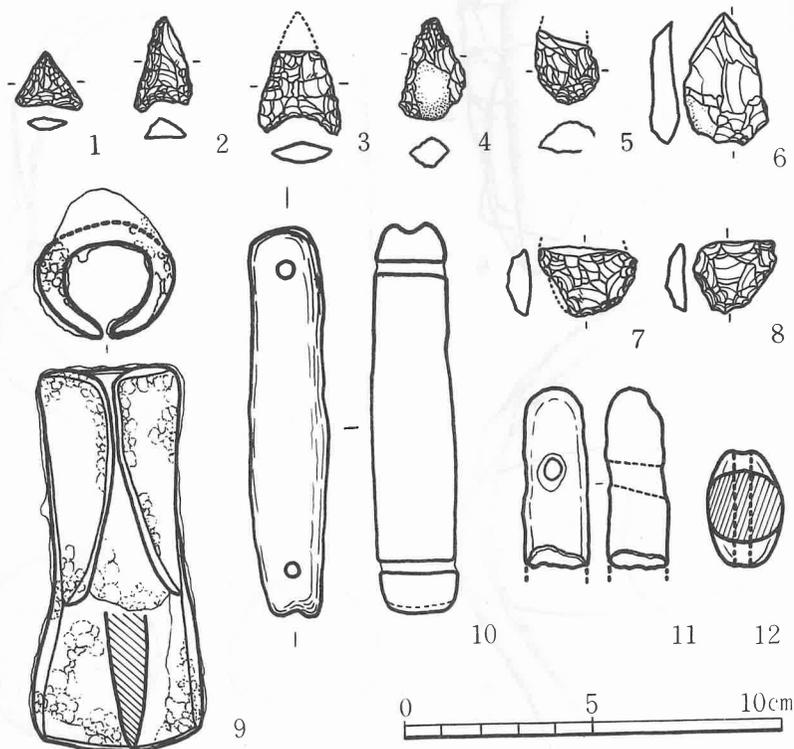
第17图 A地区出土石器实测图 凹石(1~4)砥石(5·6)石皿(7·9)礮器(8)用途不明石器(10·11)

Ⅲ類（8～11、17）は口縁部が反転気味に外反する土器である。8は黄褐色を呈し、胴部は他の甕形土器に比較すると大きく張る。器面は長くかいた刷毛目により調整されている。9は褐色を呈し胎土に砂粒を混入する。口縁部は短く急に外反するため、屈折部の内側に稜が生じる。口縁端には刻み目を有し、器面は刷毛により調整されている。10は黄褐色を呈し、口縁部はゆるやかに外反する。器面は口縁部はナデ、胴部は斜めに刷毛により調整されている。11は灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好な土器である。口縁部は先端で丸味をおびる。口縁部下には二条の細い沈線があり、胴部は張らない。

器面は口縁部はナデ、胴部は刷毛により調整されている。17は黒褐色を呈する浅い甕形土器である。

口縁部のカーブはゆるやかである。器面は荒い刷毛目により調整されている。

Ⅳ類（7、12、13、16、18～20）は口縁部が外反し、先端で跳ね上り状、もしくはそれに近い形態を示す土器である。7は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。口縁部は直角に近い角度で外反し胴部は張る。12は反はそれほど大きくなく、暗褐色を呈する比較的小型の甕形土器である。口縁部の外



第18図 A地区出土遺物実測図

13は黄褐色を呈し、胴部に沈線を有する。16は暗褐色を呈する薄手の甕形土器である。口縁部はわずかに跳ね上り状になる。18は灰褐色を呈する小型の手づくね土器であるが、口縁部の形態より甕形土器として分類する。口縁部と胴部との境に粘土の接合痕がみられる。19は黒褐色を呈し胎土に砂粒を混入する。口縁部は急角度で外反するため稜が生じる。口縁直下には突帯を有する。20は暗褐色を呈する19と類似した土器である。口縁部先端で厚みをもつ。12、13、16は胴部に刷毛目調整痕がみられる。

(22、23)は底部である。22は淡黄色の上げ底気味である。器面は刷毛目がみられる。23は黄褐色を呈する。内壁の底には炭化物が付着している。器面調整は不明である。

脚付鉢形土器21は黄褐色を呈する。脚部は未発達であり器面はナデ調整されている。器面の一部、脚部内側の奥には製作時の指圧痕がみられる。

以上第Ⅲ調査区より出土した土器は、その全てが弥生時代中期初頭より中葉までに位置すると考えらる。

石器 (第17図2・3・7、第18図4)

石皿(第17図7)は長さ20cm、幅19cm、厚さ7cmの両面使用のものと、長さ20cm、幅10cm、厚さ4cmの両面使用のもの2点で、いずれも安山岩製である。

凹石は長さ9cm、幅8.5cm、厚さ5cmの片面使用、長さ9.5cm、幅10cm、厚さ5cmの片面使用、長さ9.5cm、幅8cm、厚さ4.5cmの片面使用、長さ9.5cm、幅8cm、厚さ4.5cmの片面使用(第17図3)、長さ11cm、幅8cm、厚さ4.5cmの両面使用(第17図2)、長さ11cm、幅9cm、厚さ5cmの片面使用(第17図1)の5点が出土、いずれも安山岩製である。砥石は砂岩で長さ15cm、幅10cm、厚さ4.5cmの断面長方形をなすが、片面のみが摩滅している。

小 結

A地区は第Ⅰ調査区が古墳時代、第Ⅱ調査区が弥生時代、第Ⅲ調査区が弥生時代というように、16m×80mの調査対象地のうち、北方よりに古墳時代、南方よりに弥生時代の生活の中心があり、一部重複しながら遺存していたことが確認された。

弥生時代の遺構は、家屋の可能性のある第2号竪穴遺構、第3号住居跡、第1号甕棺、第2号土壇、溝の可能性のある第3号、第4号土壇が、第Ⅱ、第Ⅲ調査区において検出されたほか、遺物もそれぞれの遺構にともなった状態で検出された。それによると、第2号竪穴遺構は中期前半、第3号住居跡は中期初頭、第1号甕棺は中期後半、第2号、第3号、第4号土壇は中期前半の時期というように、第1号甕棺を除いて全て弥生時代中期前半の時期に集中するものであった。第3号住居跡と重複し発見された第1号甕棺は中期後半の時期のものであり、同地区の他の遺構に比べ一時期新しい。この甕棺は後節で述べるようにD地区の調査で出土した甕形土器と共通点をもっており、D地区付近に生活を営んだ人々の分散的な墓の1つとみることもできよう。

つぎに古墳時代の遺構としては、第Ⅰ、第Ⅱ調査区においてそれぞれ第1号住居跡、第4号住居跡を発掘した。このうち第1号住居跡は壁ぎわに竈を付設していた。住居跡内における遺物の出土状態は第1号住居跡内より坏3点が出土したのみで必ずしも豊富ではなく、第4号住居跡内ではまったく発見されなかった。しかし第4号住居跡周辺より須恵器を初めとする遺物が多数出土したため、これを一応この住居のものと考えた。それによると、第1号住居跡は6世紀末、第4号住居跡は6世紀末から7世紀前半の時期が考えられ、1号→4号という順序が判明した。

この二つの竪穴は第1号住居跡において竈を有するほか、形態上の若干の差異はあるが、方形で四隅に柱穴を持つという家屋建築の構造上の差異はほとんど認められない。しかし、一方のみ竈を有するということは、それぞれの家屋の機能になんらかの区別があったことを考える必要がある。須恵器を伴う住居跡の発見は県下ではじめてのものであるが、土師器が極めて少ないことも注意すべきである。

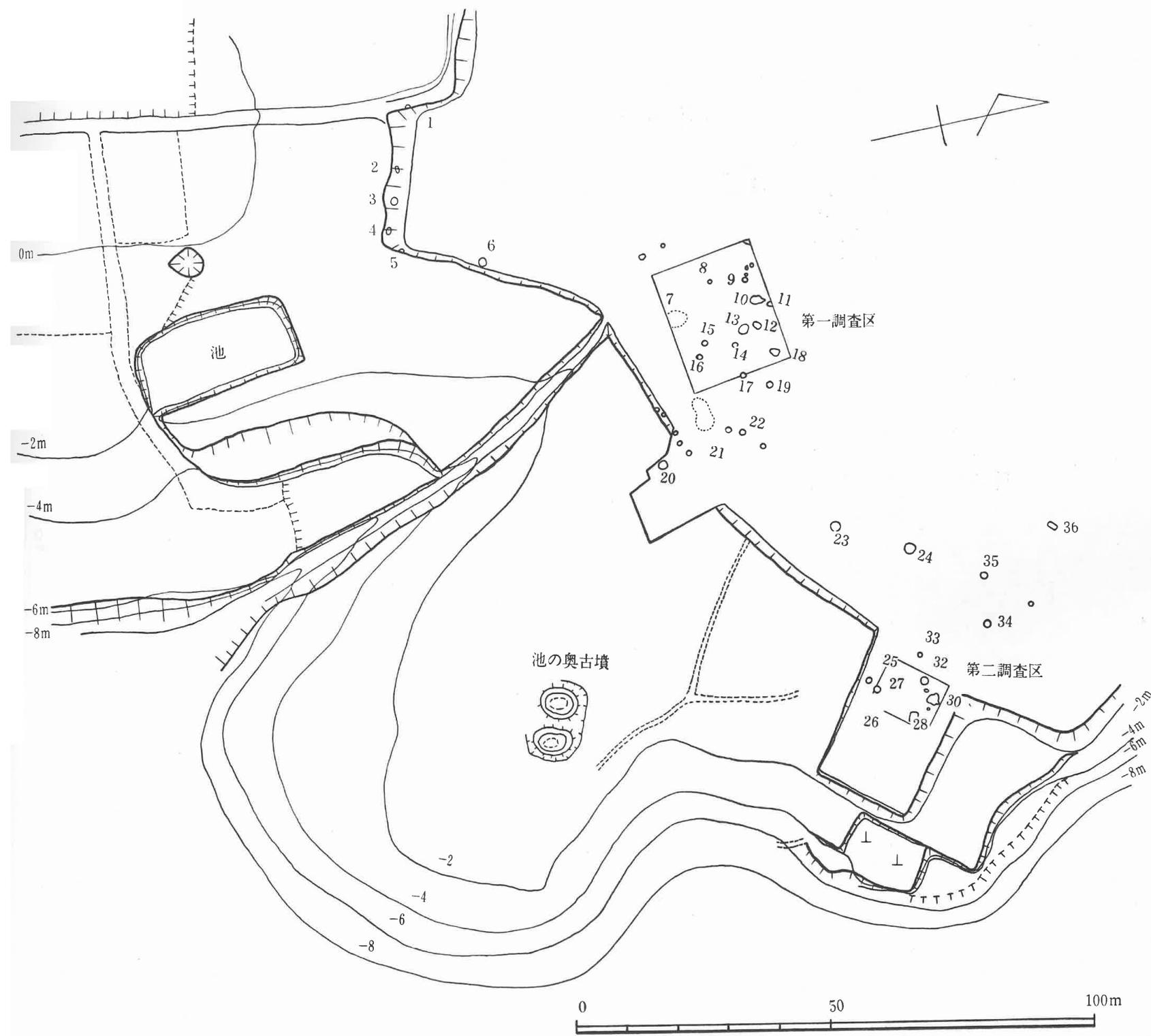
(坂本嘉弘 牧尾義則)

Ⅱ B地区の調査

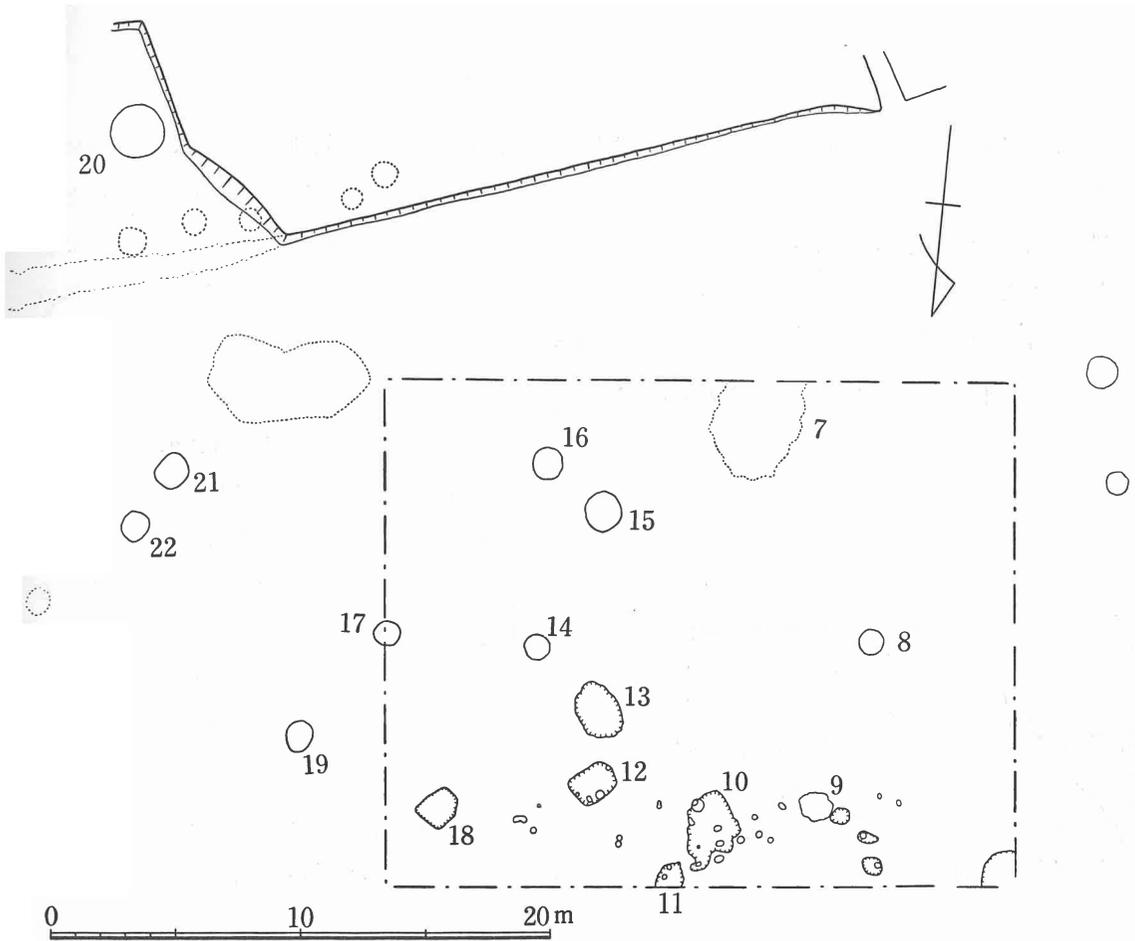
B地区の調査は昭和46年10月の第2次調査、昭和47年5月の第5次調査として実施された。この地区の調査は第1章で述べたとおり校地造成工事の施工後に実施されたものである。造成工事はこの地区中心部では旧地形の鞍部を削平する形で0.5～1 m削りとられ、北部の小谷にむけては盛土になっている。このため削平の行われた地点に点々と竪穴の土壌プランが露出する結果となった。2次調査における予備的試掘によって、この地区の土壌が殆んど袋状竪穴であり、削平により露出し、校地造成の進展によっては消滅をまぬかれないものが30基をこえることが確認され、本調査が実施されたものである。

調査は第1調査区(25m×20m)および第2調査区(11m×10m)は遺構が集中するため全面発掘することとし、その他の地区は校地造成面に露出したものを調査した。ただこれらについても0.5～1 mの削平が行われた地点であるから、削平の行われた地区では残存している遺構はほとんど完掘したと思われる。もちろんすでに造成時に消滅したものも考えられるし、またB地区北縁の旧地形の谷部へ傾斜する部分にかかる遺構が所在するかどうかは不明である。従って第19図の平面図にみえる竪穴群の分布状態をそのまま本来のそれとして論ずることはできない。しかし第1調査区と第2調査区の間には明らかに疎白な部分があり、また1～5号のある地区も第1調査区と別個の支群をなしているといえる。従って1～6号竪穴の1群、7～22号竪穴の1群、24～36号竪穴の1群はそれぞれB地区の支群として考えられよう。

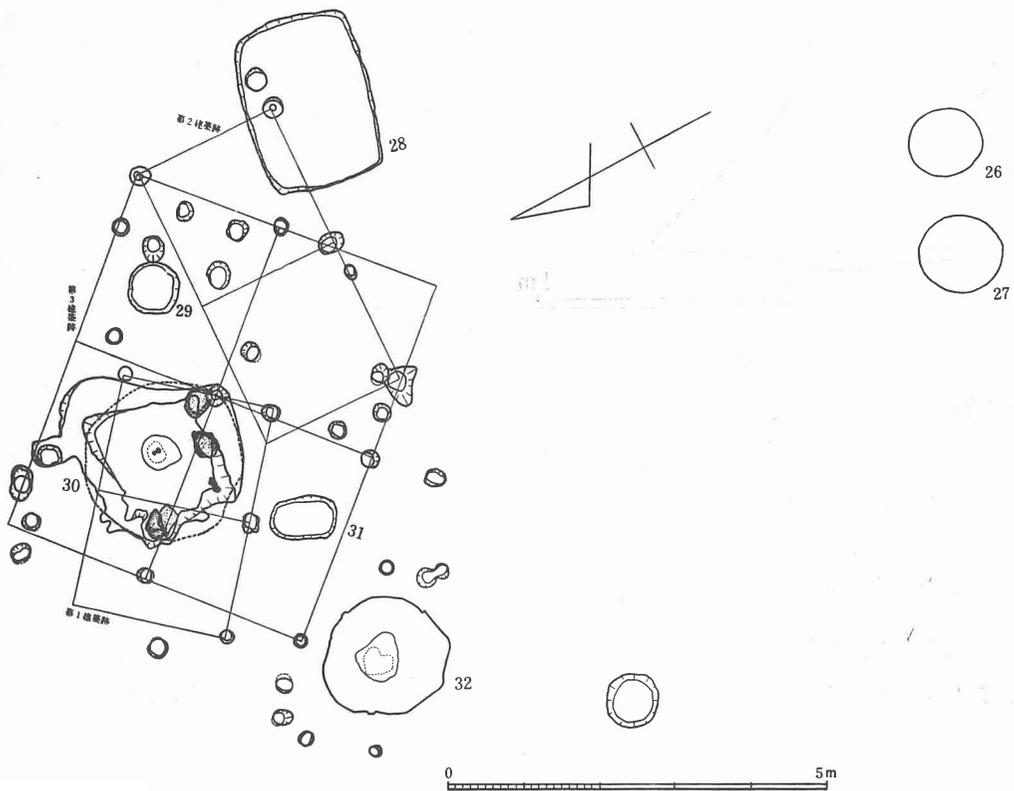
なお第1調査区の南側にひろがる未造成区には、袋状竪穴と思われる円形土壌と、住居跡らしい切りこみが土取り断面にみえる。この地区にはなお相当数の袋状竪穴と住居跡群が遺存していると思わ



第19図 B地区遺構配置図



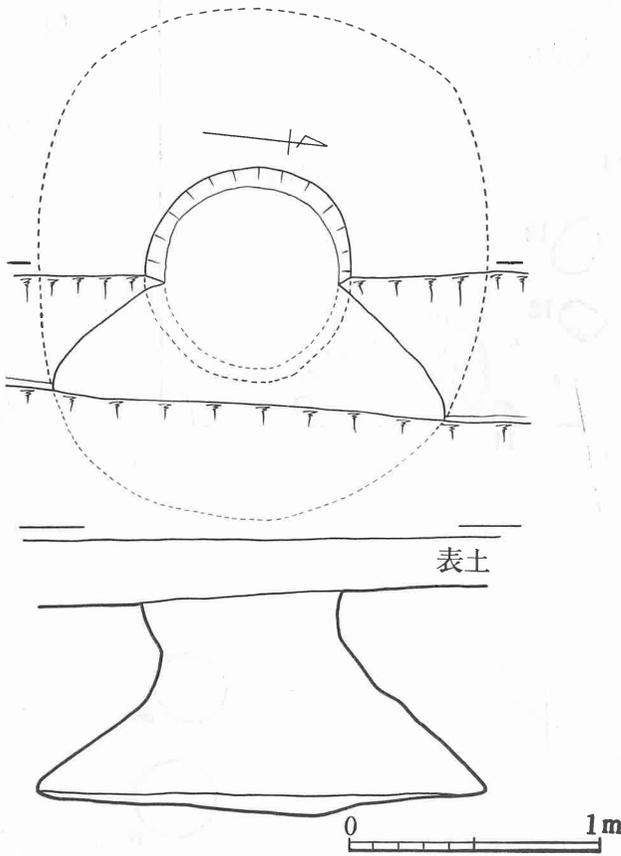
第20図 B地区第一調査区平面図



第21図 B地区第二調査区平面図

れる。B地区の調査が削平された地区のみを対象としたため、住居跡を殆ど検出できず、わずかに第1調査区でその痕跡らしいものをみたにすぎなかったため、この地区における袋状堅穴と住居跡との関係は今後の未削平部分の調査を待たねばならない。さて本調査では40基の堅穴を確認し、うち35基を発掘した。以下はまずこのうち遺構遺物について注目されるもの16基について詳述し、その他については末尾の一覧表によって概容を記すにとどめたい。

(1) 第1号堅穴 (図版第七, 第22・23図)



第22図 B地区第1号堅穴実測図

い。表面はよく研磨される。

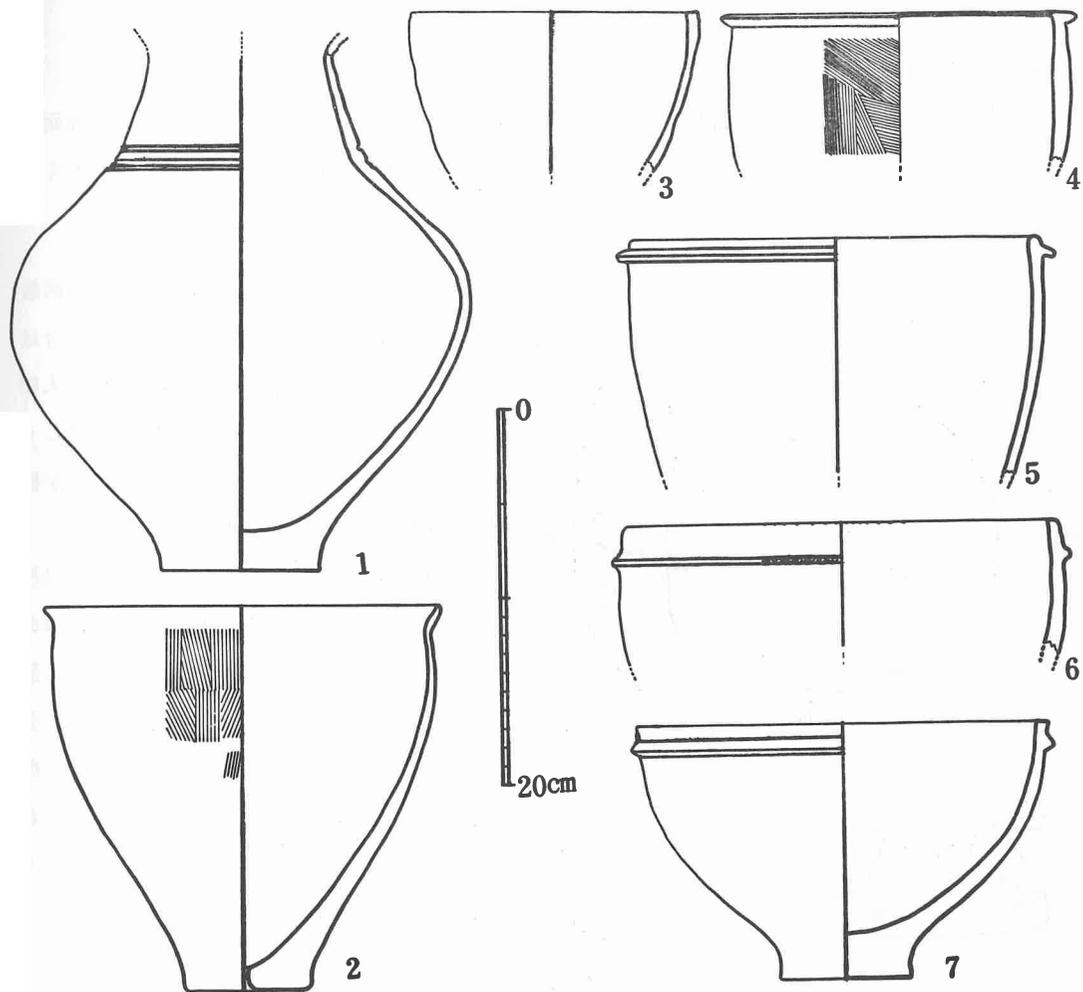
甕形土器のうち(2)は胴部ややふくらみ、口縁部はくの字に外反させる。器表面にやや粗い刷毛目を残す。赤褐色を呈しややもろい焼成である。(3)~(6)は胴部をわずかにふくらませるが、口縁部にかけて殆ど直立させた類である。このうち(5)(6)はいわゆる下城式土器の類に入ることが明らかだが(3)も突帯をもたぬことを除けば下城式土器の手法で仕上げられている。(3)は器面表裏とも研磨され、黄褐色を呈し焼成もよい。(4)は口縁端に突帯を施し内側にもわずかに肥厚させて断面に平坦面をつくっている。器表面は細い刷毛目を施している。赤褐色を呈し焼成はよい。この他鉢形土器(7)があるがこれ

床面はほぼ円形をなし径1.8m~2mを測るが入口に向けて急速にすぼまる。入口は径70cm~80cm。入口部の失われている例の多い中で当堅穴は断面を知るには好資料であるが、校地造成工事のため堅穴のプラン半分を失っている。床面に灰層がほぼ全面に厚く乗り壁面のくずれは小さい。流入した土砂はわりあい短期間に流入したと思われる。

土器類はほとんど床面にあり2個のほぼ完形の甕形土器は直立して床面の端に置かれていた。

出土遺物 (第23図)

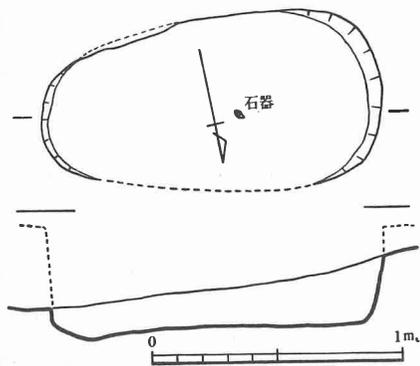
壺形土器、鉢形土器各1点のほか甕形土器数点がある。(1)は口縁部をを欠くがほぼ復原可能なものである。安定した底部、やや腰高の胴部をもつ。頸部から胴部にかけては直線的にすぼまり、わずかに外反する口縁部がつくものであろう。胴部、頸部の接合部の段はみられない。胴部最大径24.4cm、復原高29.3cm。黄褐色を呈し砂粒をまじえるが焼成はよ



第23図 B地区第1号竖穴出土土器実測図

も下城式土器の類に入ろう。器表面に刷毛目を一部残すが全体によく研磨されている。赤褐色を呈し焼成もよい。この他不定形小剥片の両面に加工をし、使用痕をみる石器が1点出土した。ガラス質角閃安山岩質である。(第51図1)

(2) 第2号竖穴(図版第七、第24図)



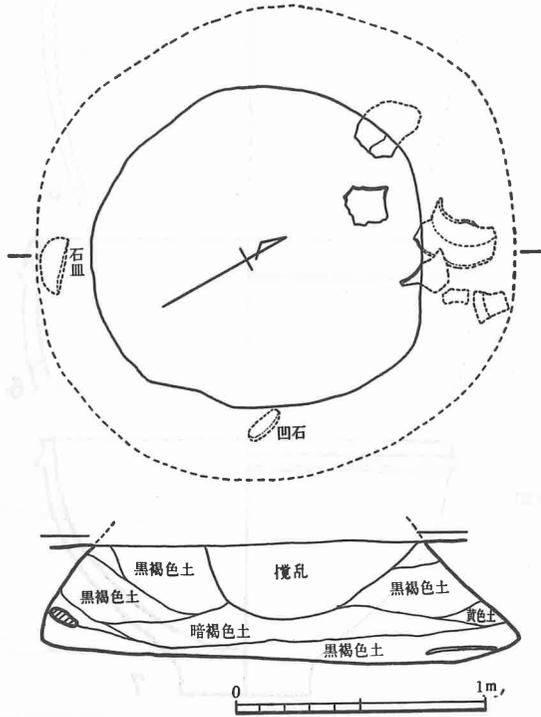
第24図 B地区第2号土坑実測図

1号竖穴の東約10m、削り取り斜面に検出された幅広の土墳墓である。プランは東西に長い卵形を示し、長さ1.35m、最大巾0.70m、現存の最大深さ0.25m、床面は中央がやや盛り上がるがほぼ水平である。造成により上部がかなり削除されており、北側の壁面は痕跡しかとどめない。頭位は西を指す。床面中央より副葬品とみられる石器が発見された。時代の決め手となる土器その他の遺物は出土しなかったがB地区袋状竖穴の時期と大差ないとみられる。

出土遺物 (第51図2)

土壌内床面より検出された副葬品とみられる搔器である。姫島産黒曜石の剝片を素材とした両面加工によるもので、細部の調整も入念である。弥生時代の剝片石器としては良品であるが一端を欠く。

(3) 第6号竪穴 (第25・26図)



床面は円形をなし径1.9mを測る。床面最大径は中心部より10cmほど高い。現存部分は検出面より床面中心部まで45cmを残し、入口部を失っている。内壁は床面へ向けて著しく裾を開く形態をとる校地造成により遺構が検出されたあと乱掘されている。

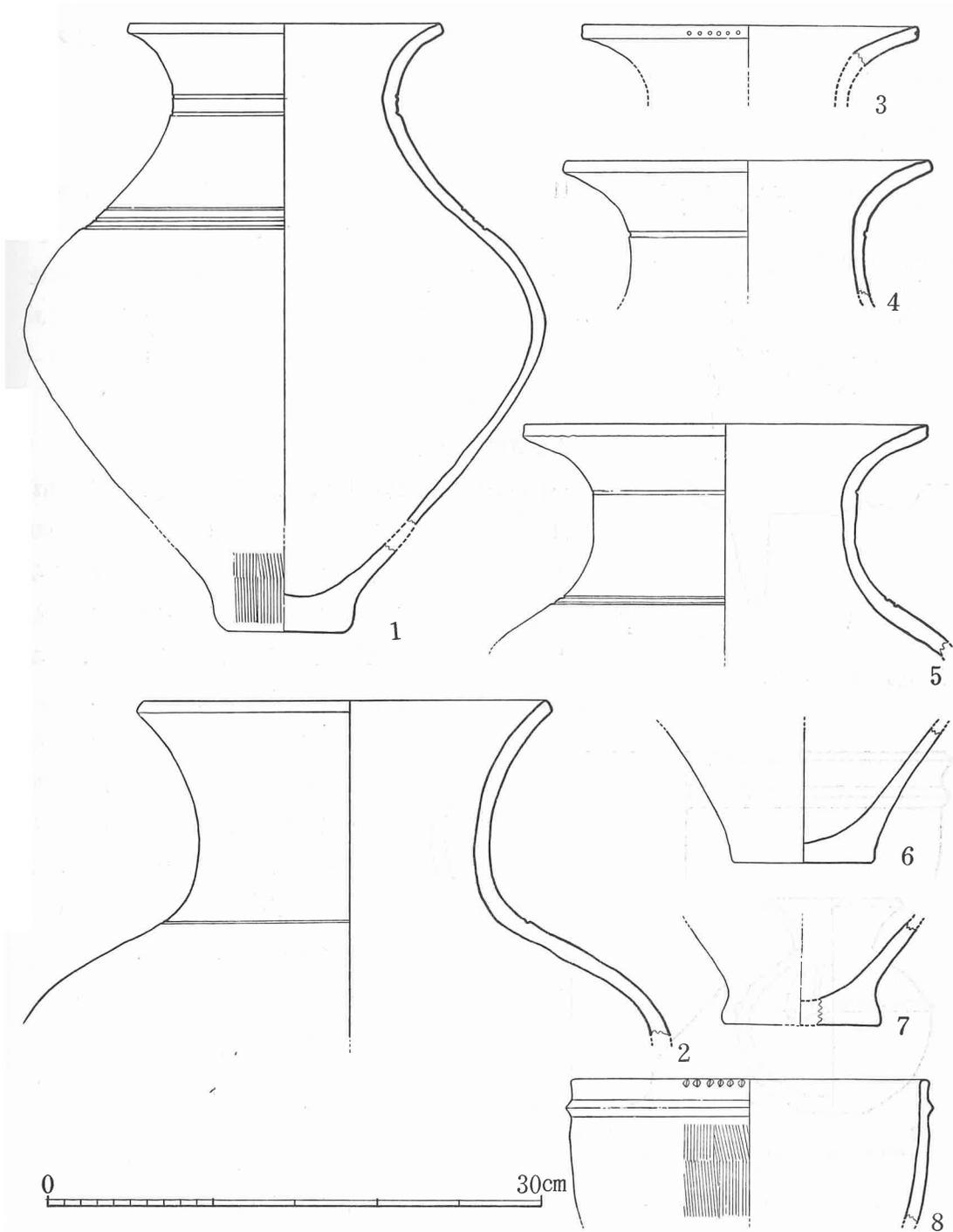
断面図の半円形の黒色土、赤色土層の陥没がそれである。遺物は床面に乗る5~10cmの黒褐色土層に出土し、竪穴利用時の土器の破片の残存したものかと思われる。この他の竪穴内の土砂は黒褐色ないし暗褐色土であり壁面に接して若干の崩落土の混入をみる。これらには遺物の混入はみられない。埋没はわりあい短期間になされたものであろう。

第25図 B地区第6号竪穴実測図

出土遺物 (第26図)

土器は(8)以外はすべて壺形土器である。このうち(1)はほぼ完形を復原できるもので、安定した底部をもち胴部最大径はほぼ中位にある。胴部から頸部へのしまり、口縁部への反転はなめらかな曲線をかき粘土のつなぎ目に段や陵はみられないが肩、頸部に3、2条の沈線を施している。口縁部は横ナデ、肩部はヘラで研磨され底部にわずかに刷毛目を残す。胎土に砂粒をふくむが赤褐色を呈し焼成はよい。復原される器高37cm、胴部最大径32cmをはかる。

(2)~(5)はそれぞれ頸部から口縁部への展開にやや差異がみられるものの、ほとんど(1)と同タイプのものである。いずれも器表面がもろく、調整痕を明瞭に残さないが、口縁部の横なで、頸部から肩部への篋磨き痕をみとめることができる。口縁端部に竹管文の刺突のあるものもある。赤褐色ないし黄褐色を呈し胎土に砂粒をふくむ。いずれも焼成はよい。底部(6)、(7)はこれらに対応するものであろう。(8)は本竪穴唯一の甕形土器片である。いわゆる下城式甕形土器に属するもので口縁部復原径22cmをはかる。赤褐色を呈し焼成はよくない。

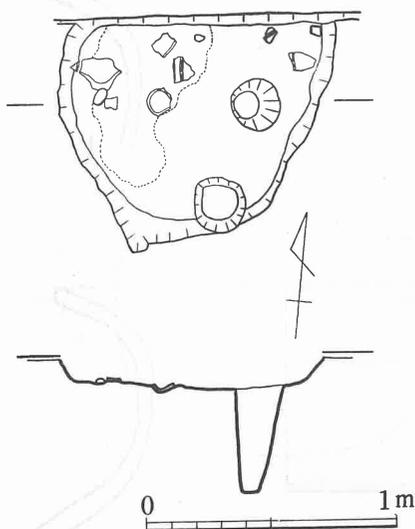


第26図 B地区第6号竪穴出土土器実測図

石器は凹石 3（第51図18、19、21）、石皿 1（第51図20）、石斧 1（第51図24）がある。凹石は楕円形から台形様のものであって、表面の状態も使用の程度によって深く凹んだもの、粗い敲き痕を残すものなどがある。⑧は火を受けた形跡がみられる石皿は中央で二部分に割れているが、扁平大形

のものである。表面は平滑になってとくに中央付近の摩滅は著しい。さらに中心部には敲き痕もみられる。安山岩製、長さ27cm。石斧(24)は安山岩製の太形蛤刃石斧の折損部である。

(4) 第11号竪穴 (第27・28図)

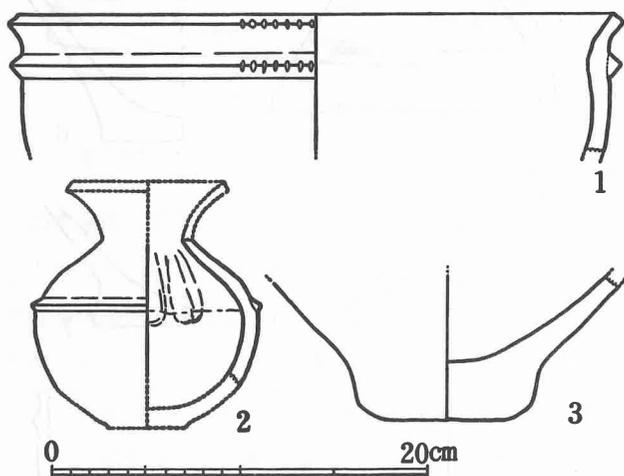


第27図 B地区第11号竪穴実測図

11号竪穴は第一調査区の北側に接した皿状断面の小形竪穴である。完掘していないが直径1m前後になるとみられる。残存部の深さ12cmで西側半分を焼土が覆っている。内部に柱穴2個があるが当竪穴に直接関連するものかどうか不明である。竪穴床面よりの深さは周縁部にある柱穴が12cm、他の一つが40cmであった。

出土遺物 (28図)

小形の壺形土器、鉢形土器、土器底部がある。壺形土器(2)は口頸部と底部を欠損している。胴部径12cmを測る黄褐色の土器で、最大径をとる胴部中央付近に一条の突帯をめぐらす。外面の調整は摩耗部分が多いが、凸帯はその上部とともに入念な撫でが施されている。土器内面の上半部は指による調整痕が著しい。(1)は口径32cmの鉢形土器の口縁部である。



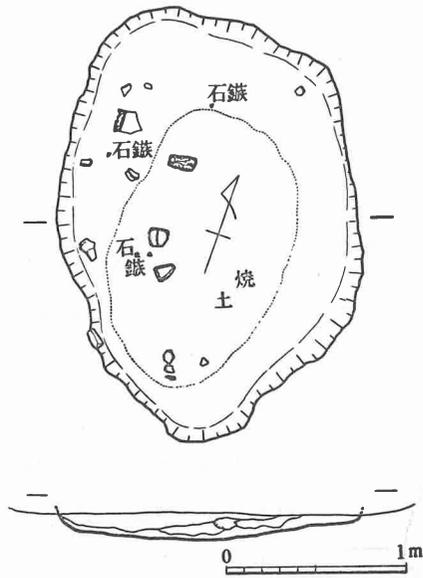
第28図 B地区第11号竪穴出土土器実測図

胴部のはる形態から口縁部のところでゆるやかに外彎させ、屈曲部に断面三角形の突帯を貼付している。突帯および口縁端部には同時につけた刻目が入る。内外面とも突帯より上部は横撫で仕上げ、器面は撫で調整である。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はよい。(3)は壺形土器底部である。このほかに炭化したドングリ数個を検出した。

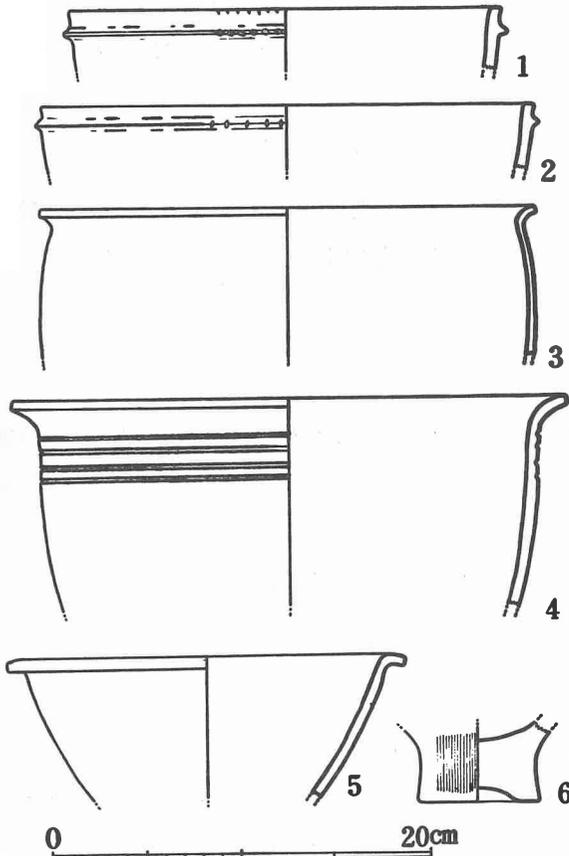
これらの土器から、当竪穴の時期は弥生中期前半のものとみられる。

(5) 第13号竪穴 (第29・30図)

長径2.4m、短径1.7mを測る断面皿状の竪穴である。残存部分の深さ約15cm。中央部に焼土が堆積しており、木炭片が検出された。付近には14号などの袋状竪穴も存在するが、北側には18、12、10号など楕円形に近い不整形あるいは方形プランの浅い竪穴が多く、また炉跡をもつ11号などもあってこ



第29図 B地区第13号竪穴実測図



第30図 B地区第13号竪穴出土土器実測図

この地点の特色である。おそらく住居に隣接して、それぞれ用途を異にしていた一群の竪穴であろう。

竪穴内から出土した遺物には、下城式甕形土器片や如意状口縁の甕形土器破片、石鏃3などがあるがいずれもまとまった出土状態を示すものではない。

出土遺物 (30図 1～6)

(1)・(2)は下城式甕形土器の口縁部である。口径22～26cmあってやや外傾ぎみに立ち上る。口縁部外側1cm前後のところに一条の突帯をめぐらして刻目を施す。(1)では口縁端にも細い刻目がみられ、突帯部に刻す際に同時に行ったものである。整形は口縁部付近が横撫でされるほかは平滑に磨かれる。黄褐色を呈し焼成は良好である。(3)は口径26cmの薄手の甕形土器である。ややふくらみのある胴部から短く外彎する口縁がつく。表面の剝落が著しく整形手法は明らかでない。胎土に砂粒を含み黄褐色のやや軟質の焼成である。(4)は如意状口縁の甕形土器で口径約29cm。外彎する口縁下部に4本の沈線をめぐらす。胴部のふくらみは少ない。内面は磨き仕上げで二次的に火を受けて剝落部が多い。胎土には砂粒を含み赤茶

色を呈する。(5)は口径21cmの鉢形土器である。口縁部は直角に近く折れ曲ってやや下降ぎみの短い平坦部をつくっている。内外面とも摩耗がはげしく整形手法はうかがえない。砂粒を若干含む胎土で茶色を呈する。(6)は甕形土器の底部である。底径7.5cm、上げ底である。外部は縦方向の刷毛目、内面は撫で整形が施される。砂粒を含む胎土で赤色を呈する。

(6) 第14号竪穴 (第31図)

検出面での直径90cm、深さが80cmの袋状竪穴で保存状態がよい。床面は中央部に向かってやや傾斜するが、ほぼ平坦につくられ直径160cm、中央部に深さ約10cmの凹み穴がある。壁面が水平面となす角度は約70°を測り、B地区におけるこの種の

袋状竪穴のうちでは緩傾斜の部類に属する。

竪穴内土砂の堆積状況は、大きく三層に分けられる。下層より暗褐色、黄褐色土、黄色混り暗褐色土の順ではほぼ水平に近い堆積であるが、中間層は上部の壁などの崩壊によって短期間に埋没したとみられる。

内部より発見された遺物は決して多いものではないが、この種の竪穴の機能を考える上で重要である。

遺物は底部および壺形土器の肩部など数点の土器片と凹石・磨石状の石が周縁に置かれた状態であった。

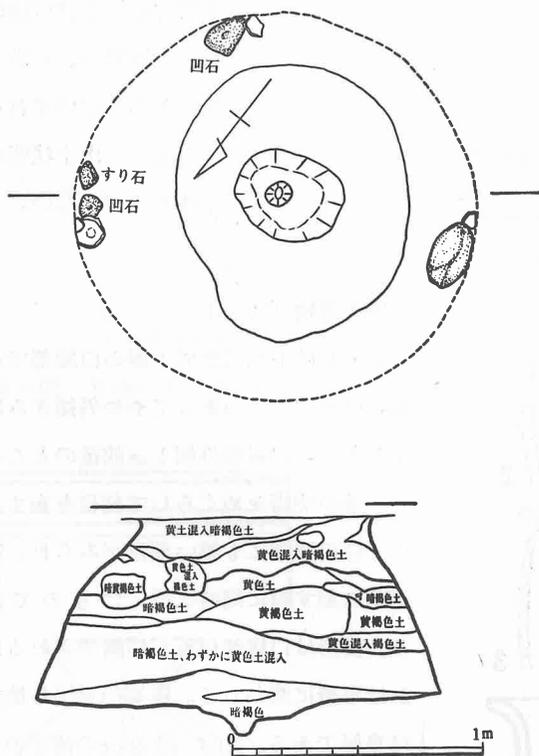
出土遺物

土器は図示しなかったが壺形土器の肩部破片と底部がある。壺形土器は胴部の最大径が約40cmほどになるとみられる大形のもので、

肩部から頸部への変換部に断面三角形の小突帯がめぐる。24号竪穴出土土器のうち(2)に類似するものであろう。黄褐色を呈し焼成はよい。

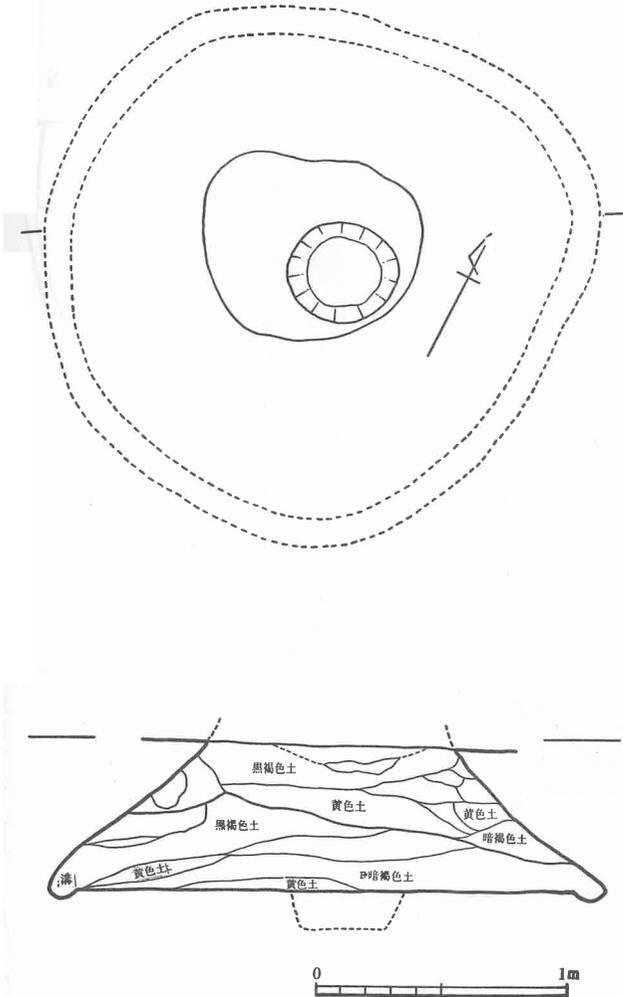
(7) 第17号竪穴 (第32・33図)

床面はほぼ円形をなし径2.2m、検出面より床面まで55cm。床面は水平につくられ、中央に40~45cm深さ15cm程のピットをもつ。壁面は入口へ向けて急速にすぼまり、検出面付近ではほぼ垂直に立上るものと思われるが、入口部は失われている。この竪穴の特色とするところは、床面の周縁にめぐらされた巾10cm、深さ4~5cmの側溝である。



第31図 B地区第14号竪穴実測図

竪穴内の土は黒褐色土と黄色土が互層をなすが黄色土はブロック状に入り壁面の崩落によるものであろう。出土した土器は床面にはみられず竪内中・上層に自然流入ないし投入された形で出土している。

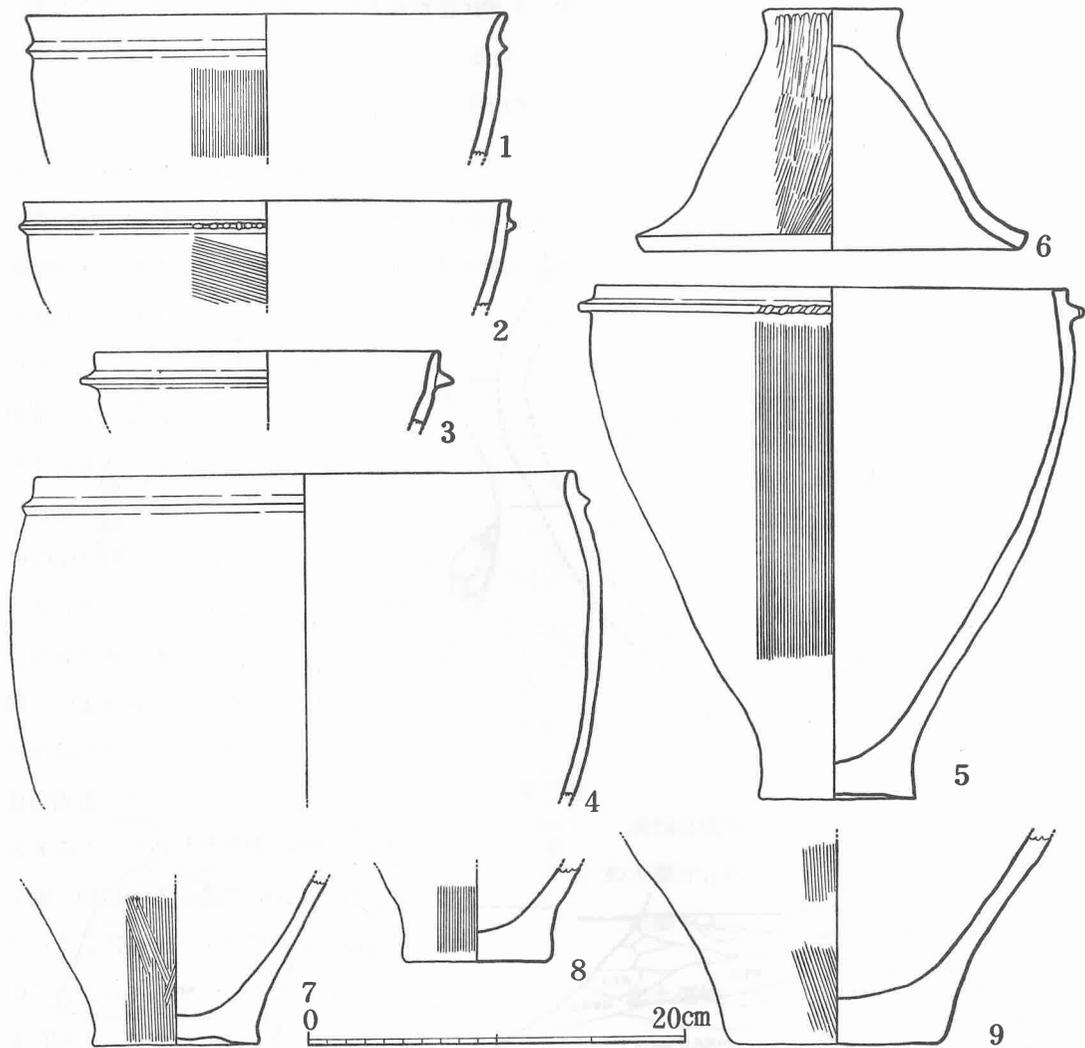


第32図 B地区第17号竪穴実測図

いる。スクレイパーは片面のみに調整をほどこし全体を円形に仕上げている。ラウンド・スクレイパーとよぶにふさわしい形態である。

出土遺物 (第33図)

土器は(6)の蓋をのぞきすべて、いわゆる下城式土器の類に属する甕形土器である。口縁部直下の凸帯は(2)(3)(5)が断面台形に近く、(1)(4)は断面三角形をなす。いずれも貼付のさいの指の使い方によるのは明らかである。口縁部の仕上げも横なでにより、口縁端に平坦面をつくっているものと、丸く処理しているのがみられる。器形は(2)(3)の他はわずかに胴張りをもちさせている。以上の(1)~(5)はいずれも赤褐色を呈し胎土に砂粒をふくむが焼成はよい。器表面の調整は凸帯周辺と口縁部は指によるナデによっている。また器表面は剥落して整形痕をとどめないものもあるが(2)が粗い刷毛目。(1)(5)に細かい刷毛目を残す、内壁は(1)(2)(4)(5)に、篋による磨きがみられる。底部(7)はこれらの類の甕形土器に対応しよう。赤褐色を呈し焼成はよい。また蓋(6)は篋と刷毛目によって調整している。口縁部は横ナデしておりその仕上げは(2)や(5)の甕の口縁部の仕上げに類している。赤褐色を呈し焼成はよい。この他はサヌカイトを用いた石鏃(第51図4)および姫島産黒曜石を用いた石鏃(第51図5)、スクレイパー(第51図6)が出土して

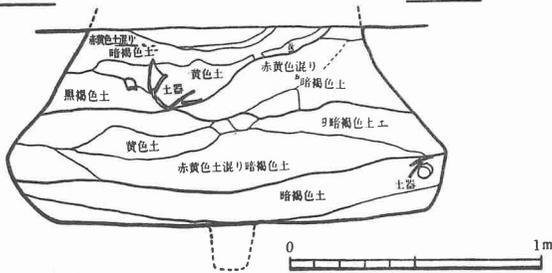
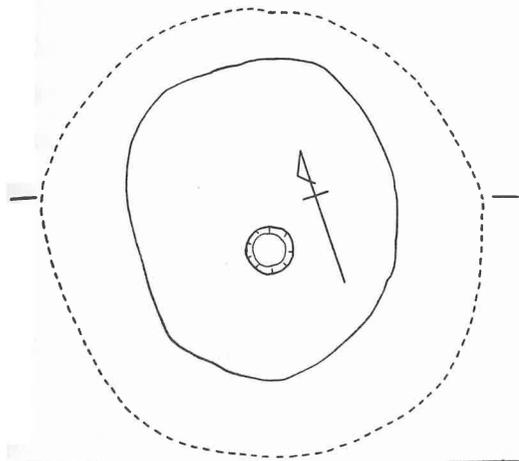


第33図 B地区第17号竪穴出土土器実測図

(8) 第19号竪穴 (第34・35図)

床面はほぼ円形をなし最大径は1.7mを測る。而して最大径は床面より30cmほど上位にあり、これより入口に向けて急にすぼまる類である。深さは検出面より80cmを残し、検出面近くでは壁面は直立する傾向を示す。床面中心部に径20cm、深さ18cmほどのピットをもつ。

壙内の土は黒色土の中にブロック状の黄色土をはさむ。とくに竪穴の上部では東側より傾斜して流れこんだ土層の傾きがみられ、この中の黄色土のブロックの下面に甕形土器のほぼ完形のものをふく



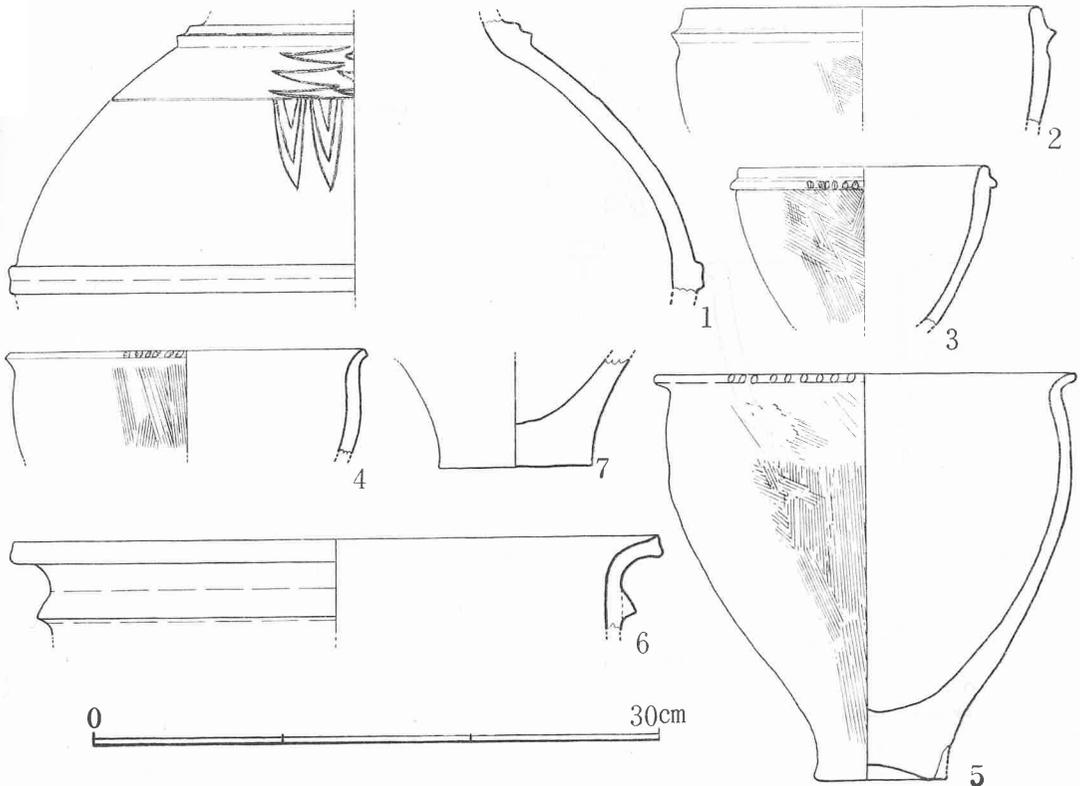
第34図 B地区第19号竖穴実測図

む数個体の土器片がみられた。土器はその他下層部壁面に倒立した底部をふくむ数点の破片があるが、床面にはみられなかった。

出土遺物 (第35図)

土器は(1)の他すべて甕形土器である。

(1)はこの竖穴唯一の壺で胴部と頸部に突帯を施す。突帯は扁平で断面は中凹みの台形なす。肩部には貝殻文が施される。上半部は羽状文を三層配し、下半分は同様のモチーフで三重の三角文を並べ、上半部と下半部の間にやはり貝殻による沈線を入れている。器面はよく研磨され、赤褐色を呈し焼成は



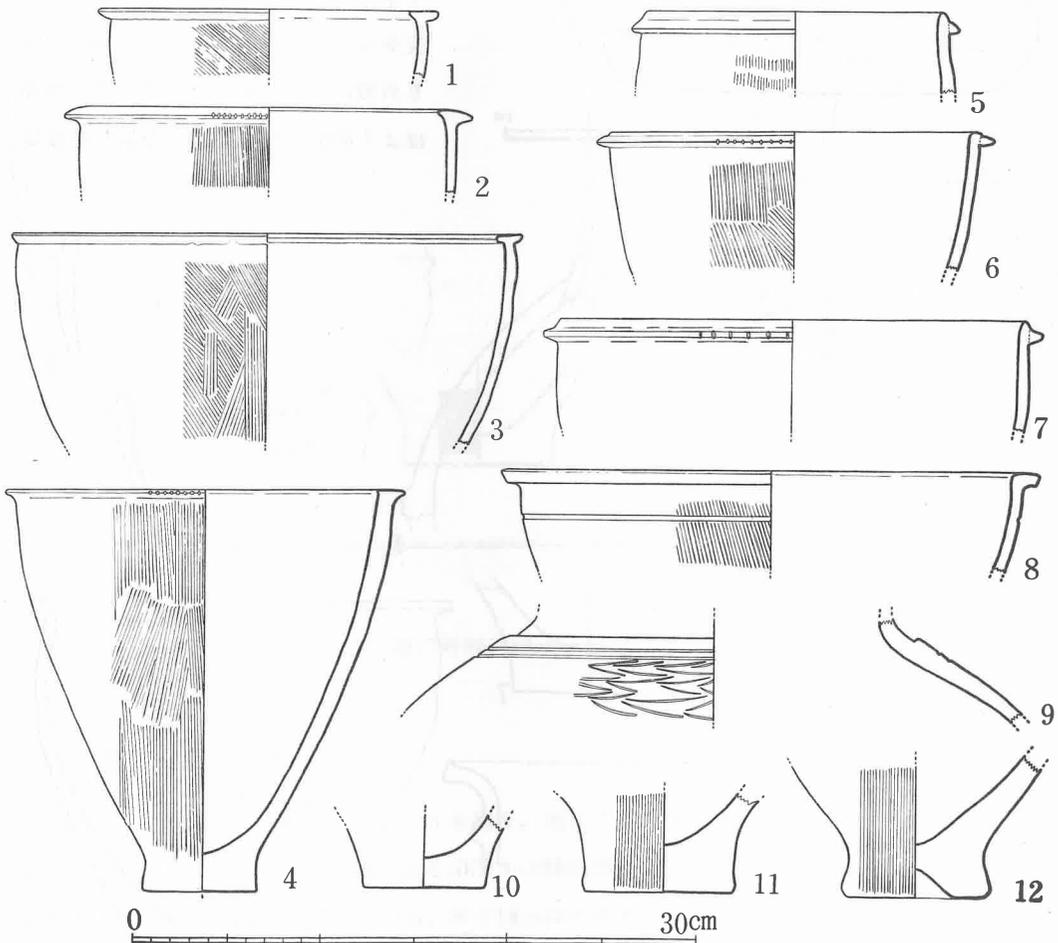
第35図 B地区第19号竖穴出土土器実測図

よい。胎土に砂をふくむ。

甕形土器はいわゆる下城式甕形土器に属するとみられるもの(2)(3)と、ゆるく外反する口縁部をもつもの(4)(5)(6)がある。後者のうち(6)は口縁端上面をわずかにつまみあげている。(6)のみは器表面の調整痕をとどめないが他は刷毛目を残し、口縁部、凸帯は横ナデつまみで処理している。黄褐色ないし赤褐色を呈し胎土に砂をふくむが焼成は総じてよい。

(9) 第20号竖穴 (図版第一一、第36図)

第一調査区の東南側にコ字状に土取りを行った場所がある。この部分の西側未削平部分には表面からの観察でも直径60cmほどの円形竖穴の上面プランが5基現われており、住居跡とみられる床面の平坦な広い切り込み部分なども存在した。20号竖穴はこれら一群の遺構の南にあたって、土取りによってはじめて発見された竖穴である。検出時にすでにもとの表土から高さ120cmほど削り取られた状態であったので、竖穴の底だけが残っているものとみられていたが、調査の結果袋状竖穴の下部深さ約



第36図 B地区第20号竖穴出土土器実測図

70cmが遺存していた。床部分での直径200cmを測る。遺存部分の土砂の堆積は二層に分かれる。下層黒色土がほぼ水平に堆積したもので約30cmの深さがある。下層には土器の出土はほとんどなく打製の石鍬・凹石（第52図28・26）が発見された。これに対して上層は礫、土器破片が多量に堆積しており、竪穴の廃棄後に捨て場となったことを物語っている。

出土遺物（第36・51図）土器は(9)に掲げた無軸羽状文が刻された壺形土器の肩部破片を除けば甕形土器および鉢形土器で、ほぼ同一時期の所産とみられるものである。甕形・鉢形という違いを無視するならば、これらの土器は口縁部の形態によって三類に分けることが可能である第一類は「T」字形に口縁部を突出させたもので、(1)～(3)の土器がこれに属する。(4)は内側への突出がごくわずかで口縁だけをとりと次期のタイプへの移行形態とみられないこともないが後述するような仕上げの稚拙さ、および胴のふくらみがほとんどないことなどの理由から同類とみてさしつかえなかろう。(2)と(4)は外側突出部に細かい刻目を施している。突出部のつくりは外側を貼り付けたあとを撫でつけるがきわめて未熟な手法であり、とくに突出部下端には著しい凹凸がみられる。これは口縁部の仕上げにごく一般にみられるところの水ひき手法を自由に駆使できる段階に至っていないことを示していると考えられる。この点において明らかにC地区1号竪穴から出土した第72図(4)の土器に先行するものである。外面の調整はすべて刷毛目であり、とくに(1)(2)は細かい。内側は(1)～(3)が撫で、(4)が篋研磨によっている。(2)～(4)の土器は二次的に火を受けた形跡があり、黒色あるいは淡赤色に変色するとともに剝落部がみられる。

第二類は直口あるいはやや内彎気味の甕形土器の口縁上端外面に断面三角形の粘土帯を貼付して、ほぼ水平あるいは若干外下りに突出させたもの。突出部に刻目を施した(6)・(7)もある。第一類同様突帯の貼り付け仕上げ調整の手法は未熟な点が多い。図示した土器は口縁端部に突帯がつく点に特徴があるが、この他に上端より1～1.5cmの位置に突帯がめぐり資料も二点出土しており、口径22cm前後を測る鉢形土器である。いずれも外面は刷毛目、内面は撫で仕上げを行う。この第二類土器はいわゆる下城式土器の範疇に入るものである。

第三類の土器は「く」字形に屈曲する短い口縁をもつ鉢形土器(8)である。口径およそ28cmあり、屈曲する口縁下に一条の沈線をめぐらしている。外面の調整は刷毛目、内面は撫で仕上げである。第一類・第二類にみられた稚拙さはすでになく水ひきによって洗練された形態をつくり出している。

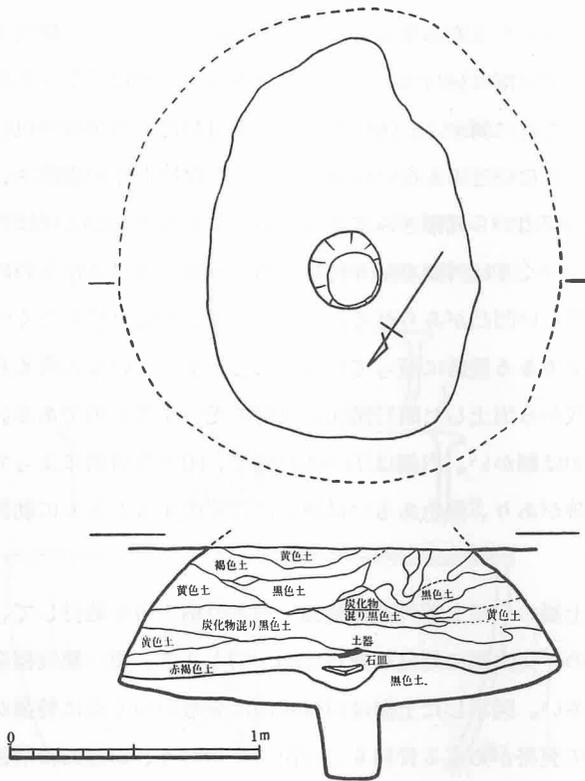
底部は平底(10)、(11)と高い上げ底(12)になるものがある。

以上の土器の年代は、弥生前期末の時期を主体（1～7、9～12）とし、一部中期初頭にかかるもので、主体となる土器は北九州地方のいわゆる亀ノ甲様式に酷似する。

石器は前述した打製石鍬、凹石、石斧状石製品のほか黒曜石製の石鍬（第51図7）がある。石鍬は安山岩の薄い大形剝片を利用したもので周縁部に両側から粗雑な調整を施している。一方を折損しており完形は知りえないが、刃部先端とみられる側にはわずかに損耗がみとめられる。残存部の長さ14.5cm、最大幅10cmを測る。凹石は安山岩の礫を利用した小形のもので両面に凹みがある。また、両

端には打痕がみられたたき石としても用いられたことがわかる。石斧状石製品は緑泥片岩の扁平礫を用いたやや縦長の矩形を呈している。主として三方の周縁部が調整加工されているが、摩耗が著しく剝離痕は明瞭ではない。あるいは未完成品のまま廃棄されたものかも知れない。長さ7.5cm。

(10) 第21号竪穴 (第37・38図)



第37図 B地区第21号竪穴実測図

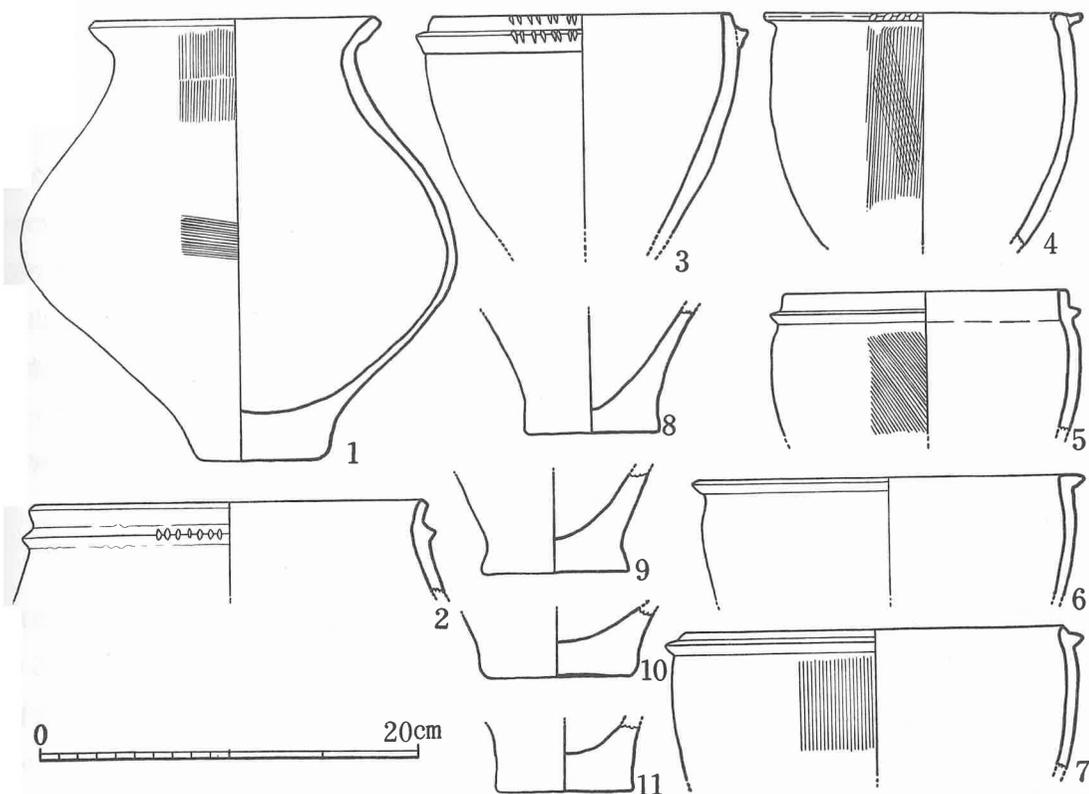
出土遺物 (第38図)

(1)の壺形土器1点のほかはすべて甕形土器である。壺形土器(1)は厚く安定した底部をもち胴部最大径はほぼ中位にある。短く外反する口縁部は横ナデして調整しわずかに刷毛目を残す。器表面は全体に剝落が著しく調整痕をほとんど残していない。器高23.5cm、胴部最大径23cm、胎土に砂粒をふくむが黄褐色を呈し焼成はよい。

(2)~(7)はいわゆる下城式甕形土器の範疇に入ると思われるがやや異形に属するものをふくむ。いずれも胴部にややふくらみをもたせ、口縁部またはその直下に貼付突帯をめぐらす。このうち(2)は凸帯の部分でしまり、口縁部はわずかに外反させている。(5)もこれに類しているが口縁部は直立させている。(4)および(6)は口縁端に突帯を付して横ナデ調整しL字状の口縁にみせている。(7)は口縁端を横ナデにより調整する際に平坦面をつくらずに処理している。(4)(5)(7)に刷毛目調整痕を残すが他は器表

床面はほぼ円形をなす。検出面で径1.2m~1.3m、最大径は床面で1.76m 検出面より床面中央までの深さ62cmを残し入口を失している。断面フラスコ状を呈するが壁面をややふくらませている。床面中央に径25cm、深さ29cmのピットをもつ。

遺物は床面に乗る10cm~15cmの黒色土層には検出されず、ほとんどがその直上の赤色土層に含まれている。また竪穴のほぼ中位に炭を混えた淡黒色土のブロックがあり、この中にも若干の土器片をみた。いずれも底部が逆転していたりして、自然の流入あるいは投入によるものであり、竪穴廃棄段階のものと思われる。



第38図 B地区第21号竪穴出土土器実測図

面剝落し調整痕を残していない。いずれも黄褐色ないし赤褐色を呈し胎土は砂粒をふくむ。底部(9)~(12)はいずれも甕形土器の底部であり、(2)~(7)に対応するものであろう。

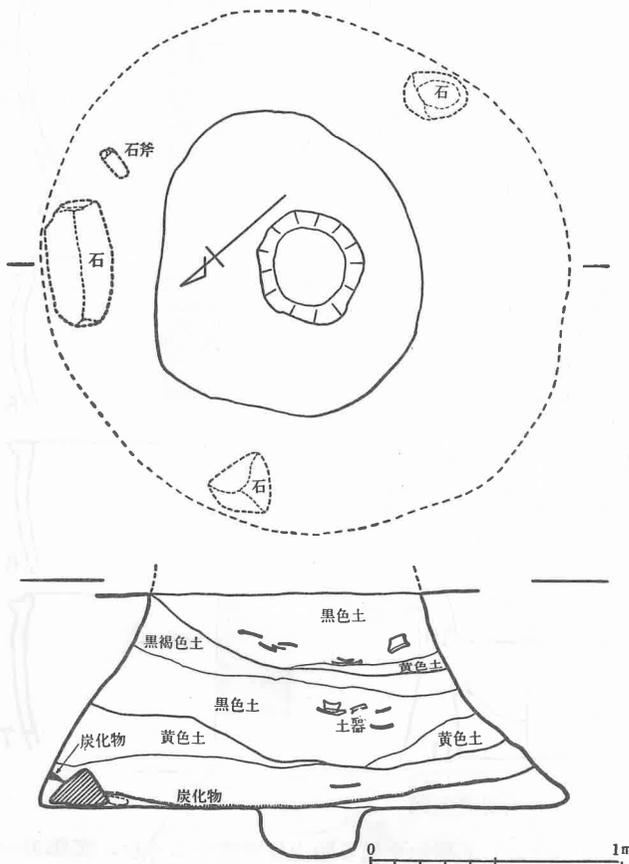
この他石器としては、石ノミ 1、石皿 2、凹石 1 が発見された。石ノミ (第51図 8) は頁岩質の素材による長さ 3.5cm、巾 1cm、厚さ 0.7cm の小形品で断面は台形となる。凹石 (第52図 30) は長径 12cm のほぼ楕円形の安山岩礫を利用したもので両面に浅い凹みをつくっている。石皿 (第52図 31) は粒子のこまかい砂岩製のもので片面のみ使用している。使用面は光沢をもつなめらかな面となっている。一方を破損しているがもと長方形の板状のものであったとみられ、現存長 19.5cm、幅 14cm ある。

石皿 (第52図 32) は安山岩の扁平な礫を利用したもので、周縁部を 1/2 ほど欠いている。両面ともよく使用されて平滑になっている。現存長 24cm、最大幅 15cm、厚さ 5cm を測る。

(11) 第22号竪穴 (第39・40図)

床面径 2.10m で円形をなす。床面はほとんど水平につくられ、その中心に床面で径 40cm、深さ 20cm のピットをもつ。校地造成のため入口部を失っているが検出面より床面まで 85cm を測る。現検出面より断面わずかに立上り入口部を形成するものであろう。

竪穴内の土は黒色土層も各層ともきわめて判別困難であり短期間の流入が考えられる。土層および遺物の埋没状況にも北側より南側への傾斜がみられ、あるいは土砂流入の経緯を示すかも知れない。



第39図 B地区第22号竖穴実測図

に属する。高い厚肉の底部、口縁部は「く」の字型に近く、口縁端と直下の突帯に刻目を残す。突帯の貼付は粗雑に指先で処理されている。器表面に篋磨き痕を残す。胎土に粗砂をふくむが、黄褐色を呈し焼成はよい。

(4)~(9)は明らかに下城式甕形土器の類に入るものである。このうち(4)は口縁部の成形、処理が(3)と酷似する。(5)(6)(7)(8)はいずれも胴部ややふくらみ、口縁直下に貼付突帯を施している。(7)は突帯に刻目を有しないが、他はすべて突帯に刻目を施す。口縁端の処理にわずかに異同がみられるが技術的には同一の手法によるとみられる。復原される径は(5)が最も小さく口縁端で17.6cm、最大径をもつ(7)で30cmである。(4)(5)(8)には細い刷毛目を残すが他は器表面剝落し調整痕を判じがたい。黄褐色ないし赤褐色を呈し焼成は総じてよい。

(9)はほぼ完形をなす。(5)~(8)に比して胴張りが無い。口縁直下の突帯は失われ一部を残すのみであるが刻目をもつかどうか不明である。器面は刷毛目調整のあと丹念に磨かれ、口縁部、突帯は横ナデして調整している。赤褐色を呈し胎土に砂粒を若干ふくむが焼成はよい。

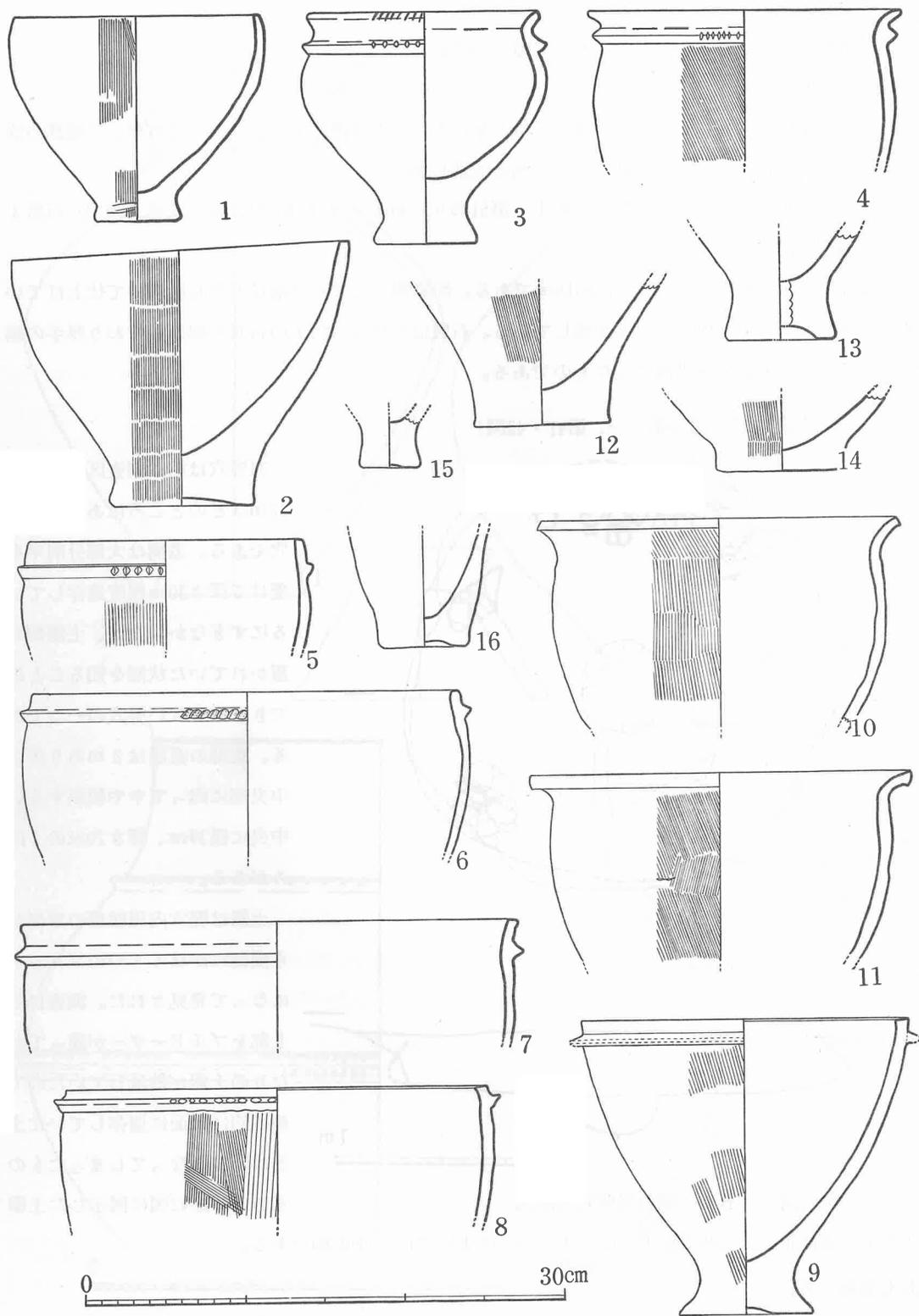
(10)(11)は胴部ややふくらみ、ゆるく外反する口縁部をもち口縁部は下へわずかに肥厚する。器表面は

なお床面近く繊維質の物質の炭化したと思われるうすい層があり壁面に向けてやや傾斜して残っている。

これは明らかに竖穴利用時の二次的床面を示すものであろう。またこの炭化層の下に床面にはりついた状態で栗石2個と石斧の出土があったが、出土遺物のほとんどは竖穴中・上位の地点に土砂とともに流入した状態で出土した。底部は壁面に向けて倒立し口縁部は土層の傾斜に平行して出土した。

出土遺物 (第40図)

出土した土器はほとんどすべて甕形土器である。ほぼ完形を復原しうるもの4点がある。まず(1)、(2)は厚手で器高もそれぞれ13cm、16cmと低い。(1)が口縁部でわずかに内彎するほか全く素縁の仕上げである。ともに赤褐色を呈し焼成はよい。器表面ほぼ全面に細い刷毛目を残す。(3)も甕形としては異形



第40图 B地区第22号竖穴出土土器实测图

刷毛目調整される。黄褐色を呈し焼成は豎織である。

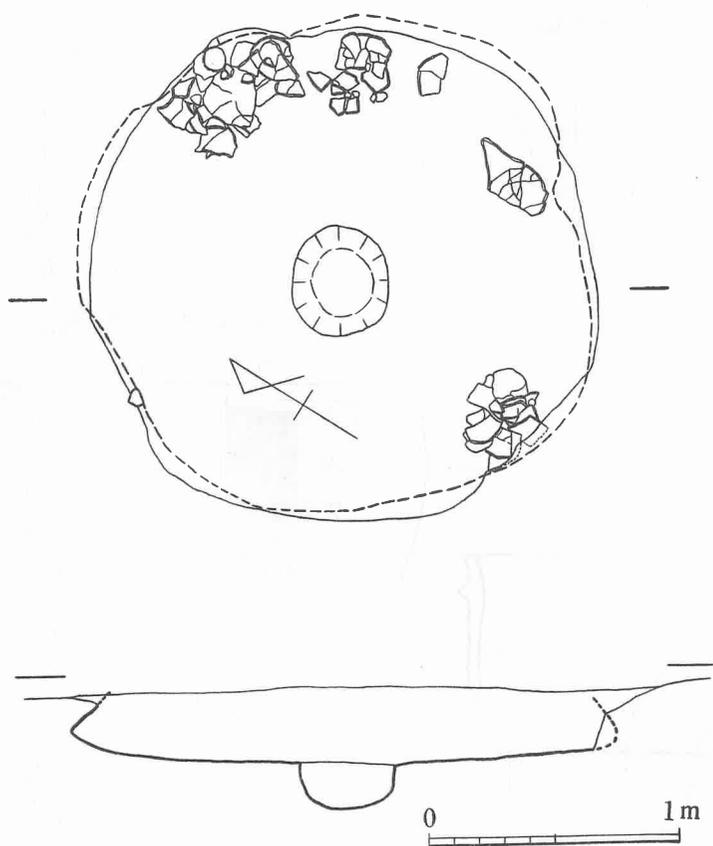
底部は(12)(13)(15)(16)が甕形のものであり、(14)のみが壺形のそれである。

以上のうち(1)~(3)は、いわゆる下城式土器の類に入れるのは躊躇するが、突帯の有無、口縁部の成形の細部をのぞけば、その手法は(5)~(9)の例と区別しがたい。

石器としては、姫島産黒曜石製の石鋸1（第51図9）および太形蛤刃石斧1（第52図29）石皿1（第52図33）がある。

石斧は刃部を欠損しており現存長約16cmである。玢岩製でこまかい敲打ののち研磨して仕上げている。基部付近には敲打痕をそのまま残している。石皿は21号豎穴出土の石皿と類似しており厚手の扁平円礫を利用して両面を平滑にしたものである。

(12) 第24号豎穴（図版第一一、第41・42図）



第41図 B地区第24号豎穴実測図

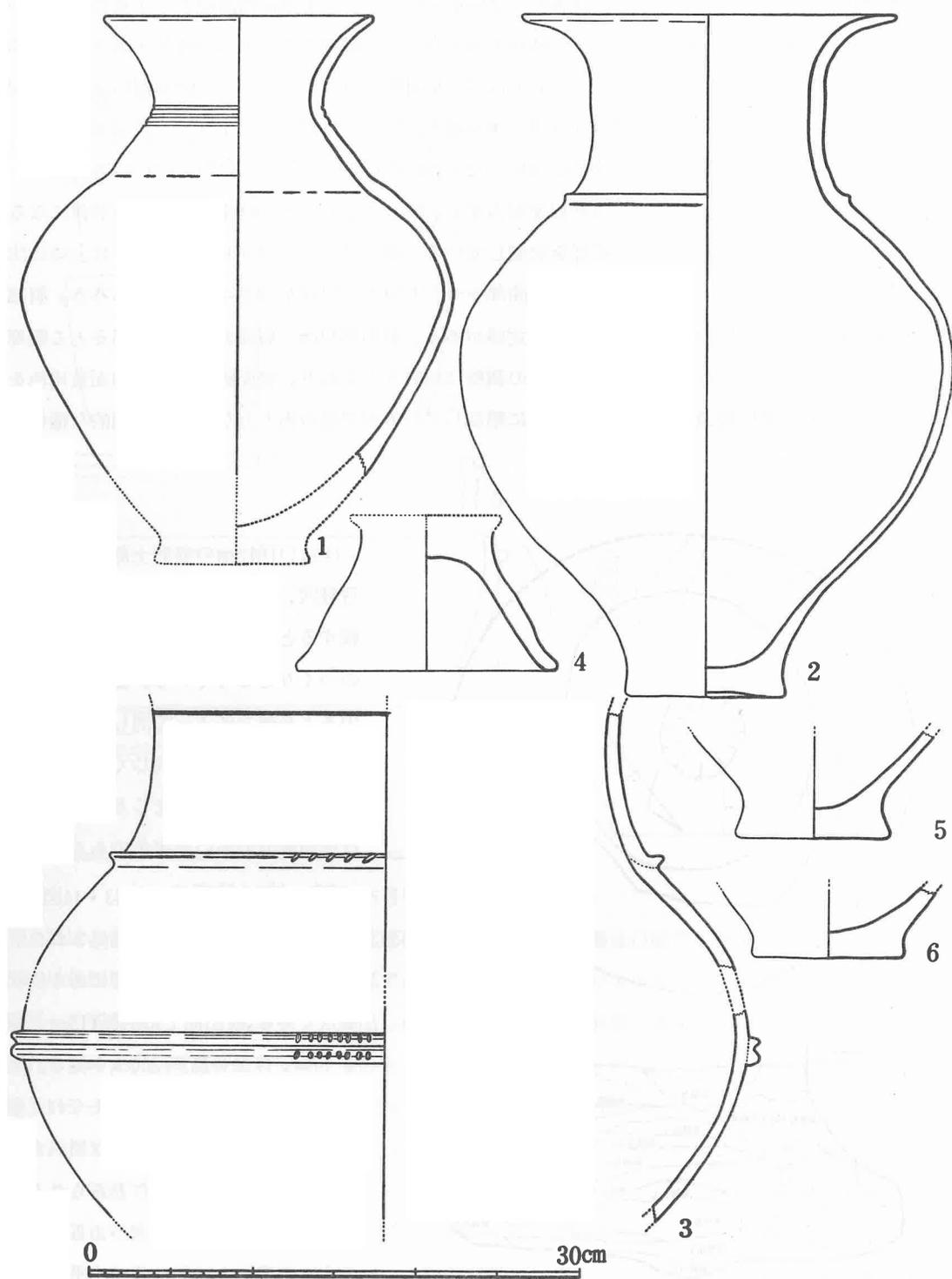
の出土位置は北側から時計回りに(2)、1ブロックおいて(3)、(1)の順である。

出土遺物（第42図）

壺形土器3、蓋1、底部2を図示した。(1)は底部を欠くが復原高およそ33cm、口径16.5cmの壺形土器である。頸部に3条の沈線をめぐらした肩部にくびれをもつなど、成形時のつき目を示す古式

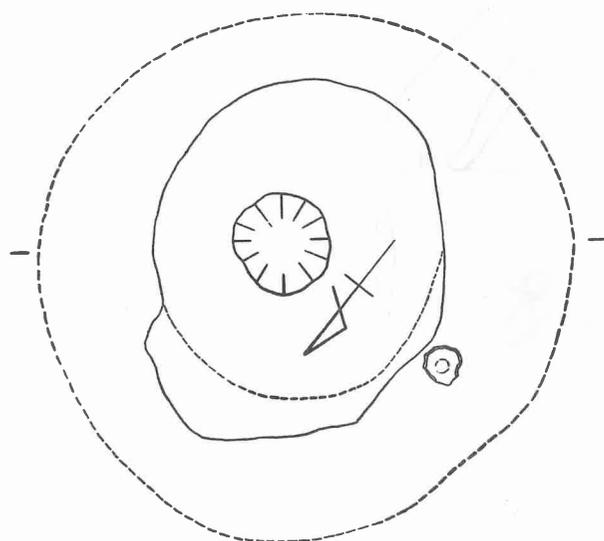
24豎穴は第二調査区の西側約22mほどのところにある袋状豎穴である。遺構は大部分削平を受けて深さ30cm程度遺存しているにすぎなかったが、土器類の置かれていた状態を知ることのできる数少ない豎穴の一つである。底部の直径は2mあり床は中央部に向ってやや傾斜する。中央に径37cm、深さ20cmのくぼみがある。

土器は豎穴内周縁部の東側から南側にかけて4つのブロックになって発見された。調査以前上部をブルドーザーが通ってかなりの土器が散乱していたので最終的に床面に遺存していた土器は断片となってしまったものもある。第42図に図示した土器



第42图 B地区第24号竖穴出土土器实测图

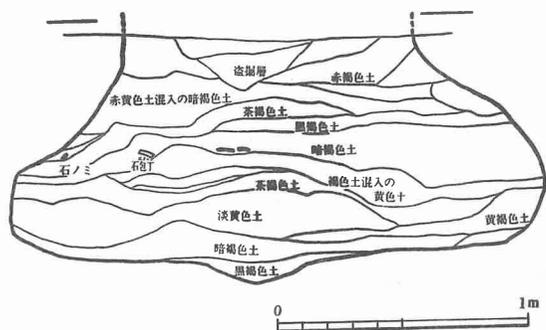
の特徴をみとめることができるが、口縁部および胴下半部がのびて全体に器高の高い土器になっている。この傾向は(2)ではとくに著しい。胎土に砂粒を混入し、色調は下半部に黒色部分があるほかは赤褐色である。器面の調整は摩耗のため明らかではないが研磨された部分がある。(2)は器高36.5cm、短い筒形の頸部から大きく広がった口縁部は径23cmを測る。頸部つけ根部分に小さい三角突帯を施す。胴部の器壁はうすく、ややくびれ気味に底部にいたる。底部は中央部が若干あげ底となる。外面研磨、赤褐色の良好な焼成である。胎土には砂粒を混入する。同じく壺形土器(3)は推定器高43cm前後になるとみられる大形のもので、口縁部と底部を欠損している。直立に近い形で立ち上る頸部には上端に沈線をめぐらしている。おそらくこの位置で屈曲部をつくり短い口縁がつくられるのであろう。胴部最大径は器高のおよそ $\frac{1}{2}$ のところにあって安定感がある。胴部径44cm。肩部および最大径をとる胴部に突帯をもつ。突帯には刻目が施される器面の調整は研磨されており、表面灰～黒色、内面黄褐色を呈する。形態上宮崎県檜遺跡出土の壺形土器に類似しているが突帯のあり方などには中期的な様相が強くみとめられる。



(4)は口径16cmの蓋形土器である。17号竪穴、35号竪穴発見の蓋形土器に比較すると口縁部の広がり小さく厚手のつくりとなっている。器面は刷毛目のあとを撫でによって消して平滑に仕上げている。内面も同じく撫でによる調整である。砂粒のまじる胎土で色調は黒色部分の多い赤褐色である。

(13) 第25号竪穴 (第43・44図)

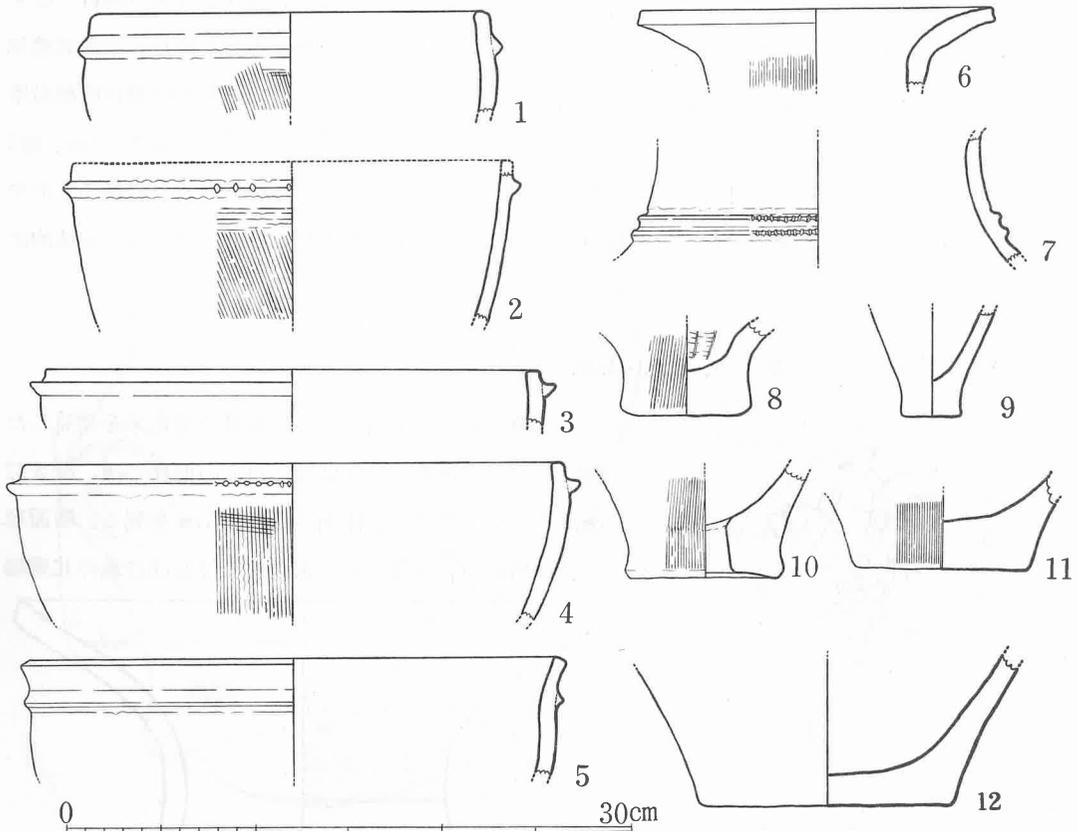
第二調査区の炭化米が発見された竪穴の西側2.5mほどの位置にある袋状竪穴である。検出面での直径115cm、深さ90cm、床面の直径200cmを測る。壁面は剝落が多いため大きくえぐれた形になっているが、もともとは傾斜の強い直線的な壁面であったとみられる。床の中央に浅いくぼみ穴がある。内部の土砂の堆積の状況はほぼ水平に土層線があらわれ、長期間に徐々に埋まっていたことを示している。出土遺物



第43図 B地区第25号竪穴実測図

は、床面付近で土器底部が発見されたほかは堆積土層中の流れ込みで床から約40cmの高さの堆積土層中に石庖丁および小型の扁平片刃石斧をはじめ下城式の鉢形土器破片、底部などが発見された。

出土遺物（第44図、第51図12）



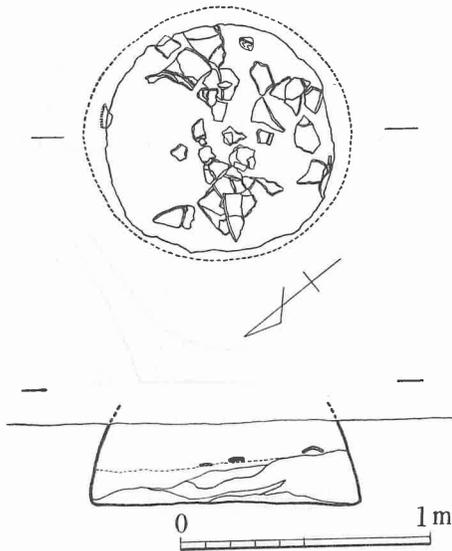
第44図 B地区第25号竪穴出土土器実測図

土器は、壺形土器、鉢形土器および底部破片がある。壺形土器は口縁部と頸部の二点がある。口縁部(6)は朝顔形に広がる壺形土器の口縁部であるが屈曲の度合いが大きく先端部の発達が著しい。(7)は胴部への変換部に二条の突帯をつくり出し刻目を施している。鉢形土器(1)~(4)はいわゆる下城式と称されるもので、内彎気味に直立するものと、斜行気味に開いたものとの二種類がある。いずれも、口縁下1.5~2cmのところを平坦あるいはやや下降させた断面三角の突帯を貼付し、(2)(4)では刻目を入れている。突帯上面および口縁付近を横撫でによって仕上げるほかは、外面刷毛目、内面は無でによる調整である。

(5)も同じく鉢形土器であるが、口縁付近で小さく外彎させその凹部に突帯を貼付している点で上記のものとはやや異っている。底部は径3cmの小形のものから13cmの大形のものまであり、(10)は焼成前の丁寧な穿孔があり甌としての使用が考えられる。調整のわかるものでは外面が刷毛目、内面が無であるが、(8)では内部をかき削った痕跡がみとめられる。

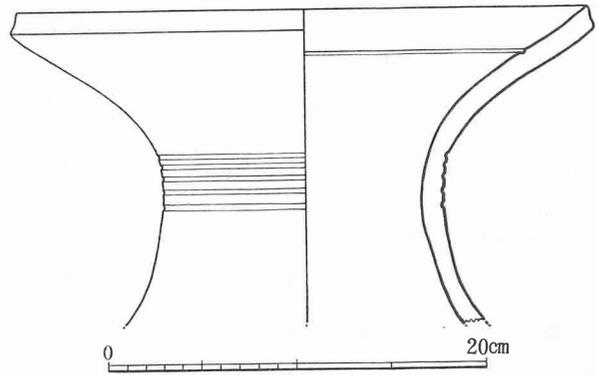
扁平片刃石斧（第51図10）は黄白色を呈する頁岩質の石材を利用したもので長さ4.7cm、幅2.7cmの小型品である。全体がなめらかによく研磨されており横断面形はレンズ状に近い。刃部は長軸に対して直角にならず片方がやや丸くなって一見破損による研ぎ減りを示すもののようにも観察されるが、この形態が直接この石器の使用法と結びつくものかどうか明らかではない。石庖丁（第51図11）はサヌカイトの剥片を利用した打製石庖丁で素材を割り取った際の大剝離面をほとんど残し刃部の調整加工を両面から行うとともに両短側に小さい割込みをもうけている。この形態の石庖丁は瀬戸内海沿岸の各遺跡に通有のもので、とくにサヌカイトの産地として名高い四国香川県に多い。長さ7.8cm、幅3.3cm。サイドスクレイパー（第51図12）は長さ5.2cmのほぼ三角形を呈する凝灰岩質頁岩製のものである。一辺のみ直線的な刃部調整を施して他の二辺は若干丸みのある形態に仕上げている。全体的に摩耗が著しい。

(14) 第26号竪穴（図版第一〇、第45・46図）



第45図 B地区第26号竪穴実測図

台ノ原遺跡の各遺構のなかで多量の炭化米を発見した唯一の竪穴である。形状は検出面での直径90cm、深さ32cmほどの円形竪穴で、床面の直径107cmを測る。断面形は袋状に近い。26号竪穴の位置する付近は台地の北東端



第46図 B地区第26号竪穴出土土器実測図

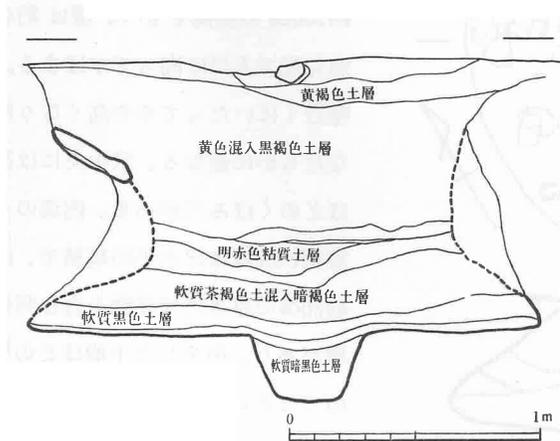
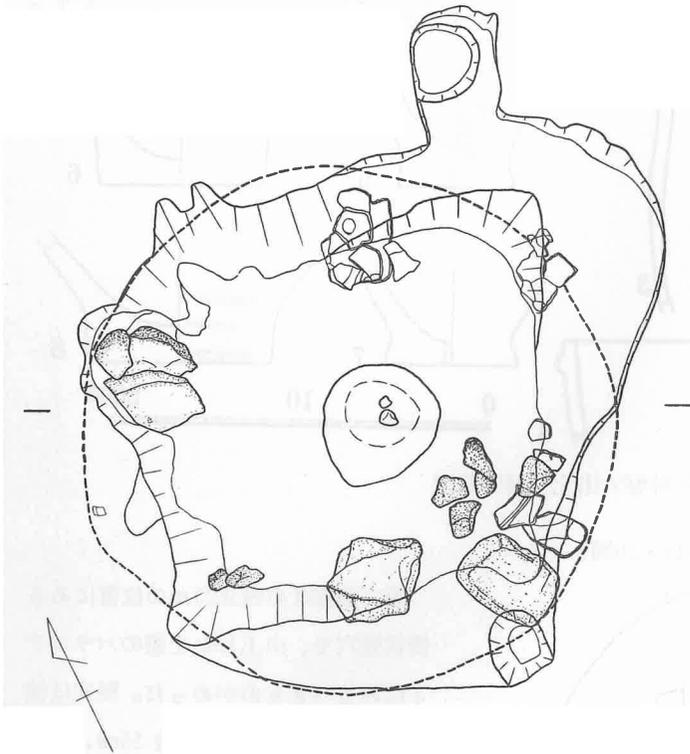
にあたり、隣接する25号・27号の袋状竪穴の深さもそれぞれ90cm、75cmと深いことからみて調査前の削平はごく浅かったものとみなされる。したがって、当竪穴も当初の深さから著しくカットされた状態とみることはできない。内部の堆積状況は中間付近を境として大きく二層にわけられる。

下部には黒褐色～暗茶褐色土の堆積があり、土器片や炭化物などの遺物を含んでいない。これに対して上部は焼土のまじる黒色土層で多量の炭化米を検出した。焼土はこの竪穴を炉として長期に使用したことを示すような堅く焼けた状態ではない。

上層中に発見された土器は、いわゆる下城式甕形土器の口縁部破片および壺形土器である。他に線刻の羽状文が描かれた壺形土器肩部小破片があった。これらの土器はほぼ同じ平面にあり、同一時期

のものとみとめられるが完全な形に復原することはできず、廃棄された状態とみられる。

第46図の土器は口径27.5cmを測る壺形土器の口縁部である。おそらく竪穴内にあった大部分の土器片はこの土器のものとみられるが復原することはできなかった。形態はラップ状に大きく発達した口縁部に五条の沈線をめぐらした頸部がつくもので、口縁内側にも一条の沈線が施される。胎土に砂粒を含み焼成は良好である。黄茶色を呈する。瀬戸内系の壺形土器の系統を引くとみられ、大分県大津遺跡出土の土器と類似している。



第47図 B地区第30号竪穴実測図

る。どちらも黄褐色の砂粒を含む胎土である。甕形土器(3)はややふくらみのある胴部からくびれて如

(15) 第30号竪穴

(図版第一二、第47・48図)

第二調査区の柱穴群にとり囲まれた中にある。袋状竪穴である。この付近は長期間利用されたとみられ、この竪穴の周縁も柱穴あるいは石が投げ込まれるなどして旧状を著しく変えている。

規模は現状で深さ106cm、底径202cmと台ノ原遺跡の調査された袋状竪穴では最も大きい部類に属する。底部中央に径45cm、深さ25cmのくぼみ穴がある。土砂の堆積状況は底から約40cmほどは徐々に水平堆積を行っており、それ以上の部分では急速に埋まったとみられる。

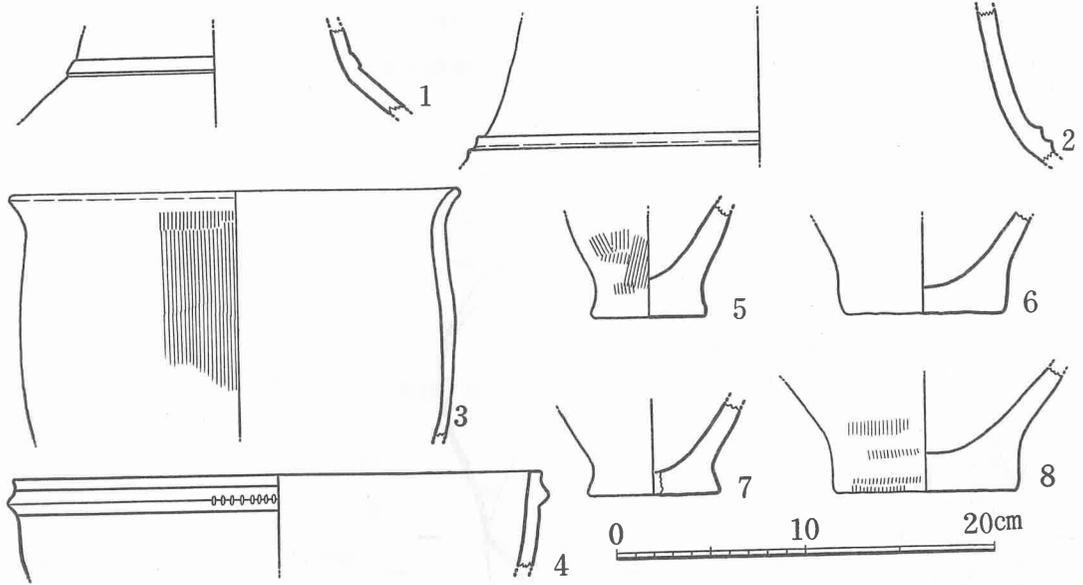
最上部の薄い層からは須恵器の破片も検出されている。土器は底部周縁から発見されたがいずれも断片的なものである。

出土遺物 (第48図)

出土した土器はすべて破片であるが、ほぼ同一時期のものとしてみとめることができる。

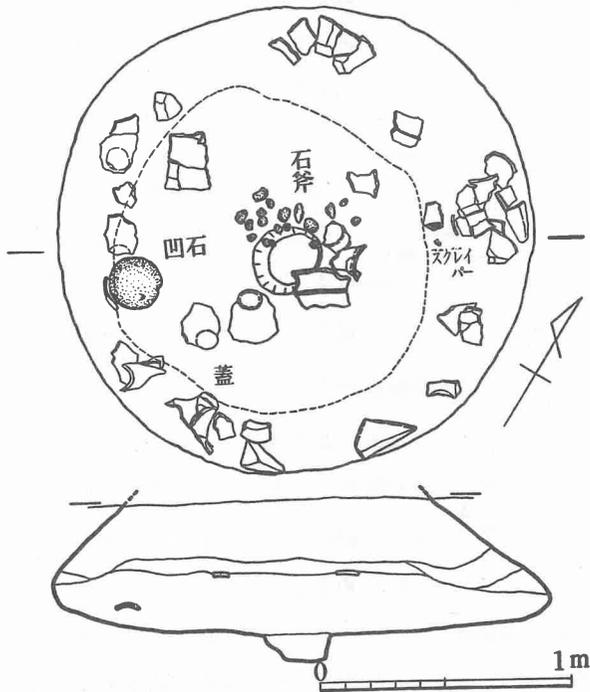
壺形土器(1)は、頸部から胴部への変換部へ二条の突帯をめぐらしてい

意状の口縁部を形成する。口径24cm外面は刷毛目調整である。(4)は下城式の鉢形土器口縁下に刻目がある、突帯をめぐらしている。このほか姫島産黒曜石製の石鏃が二本ある(第51図13、14)。



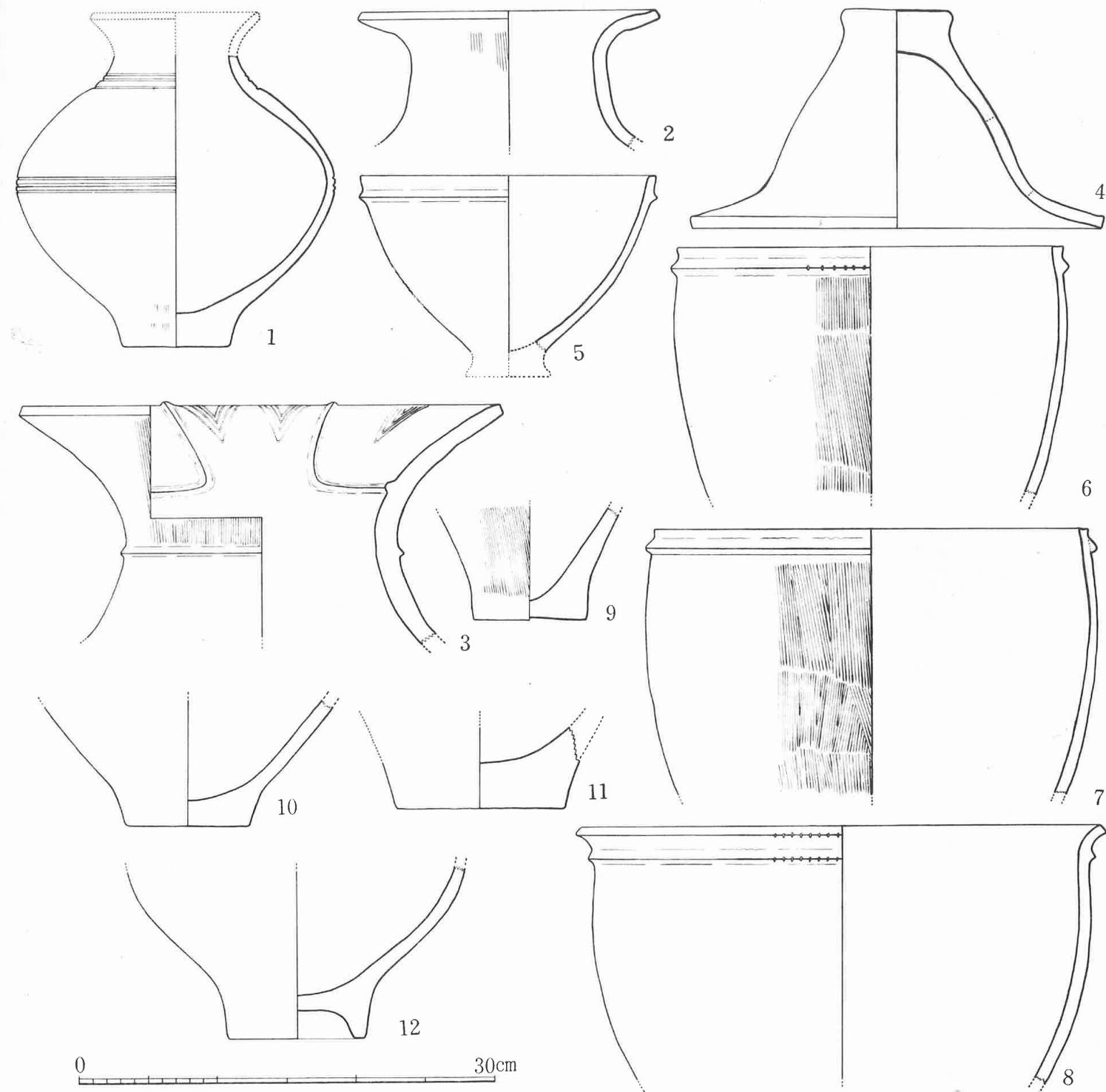
第48図 B地区第30号竖穴出土土器実測図

(16) 第35号竖穴(図版第一二、第49・50図)



第49図 B地区第35号竖穴実測図

第二調査区の西北22mの位置にある袋状竖穴で、出土した土器のバラエティにみるべきものがあった。竖穴は検出面での直径125cm、深さ55cm、底径約200cmの規模をもつ、壁は約45度の急勾配で入口に向かってすぼまる。床は壁近くにいたってやや高くなり壁面となだらかに連なる。床中央には径20cmほどのくぼみ穴がある。内部の土砂の堆積状況はほぼ水平の堆積で、床より約20cmの厚さに炭化物を含む暗褐色土層があり、出土した土器はこの層のものでほとんどが床面に接して発見された。この層と最上層をなす黄色土をブロック状に含む黒褐色土層との間には



第 50 图 B 地区第 35 号竖穴出土土器实测图

約5cmほどの黒褐色土層の間層がある。この間層の下部には挙大の多数の礫が中央部分にまとまってあり、この中には太形蛤刃石斧の折損した刃部も混入していた。おそらくこれらの礫は豎穴廃棄後のある時期に投げ込まれたものであろう。豎穴床面には全面に薄い繊維痕のみられる炭化物が遺存し、敷草されていた状態を想定させる資料であった。

内部で発見された遺物は、石器では上記の石斧頭のほか直径21cmの扁平円礫を利用した凹石、用途不明の角礫などが周縁に置かれていた。また土器は周縁部で発見された蓋形土器がほぼ完形に復原されたほかはいずれも断片的資料であり、豎穴の使用中にはなんらかの事情によって急に埋まったというような状態ではない。しかし、内部の土砂の堆積状況と遺物の出土状態、および土器の組合せからみて豎穴の廃棄後、それほど経過することなくこれらの土器が投入されたとみることは誤りではなからう。さらにこの豎穴から炭化したドングリが発見されている。

出土遺物（第50図）

出土した土器には壺形土器、蓋形土器、鉢形土器、底部などがある。

壺形土器は二種類ある。一類は小形の壺で(1)および(2)があげられる。(1)は口縁部を欠くが胴部最大径を器高の $\frac{1}{2}$ ほどにとりややなで肩の胴部をもち、頸部とのつき目に段を有する。段の上部と最大径をとる胴部に三条の沈線をめぐらす。底部は厚みのある平底で安定がある。外面底部近くに刷毛痕を残すが全体を研磨しており、色調は赤褐色、胎土に砂粒を含む。

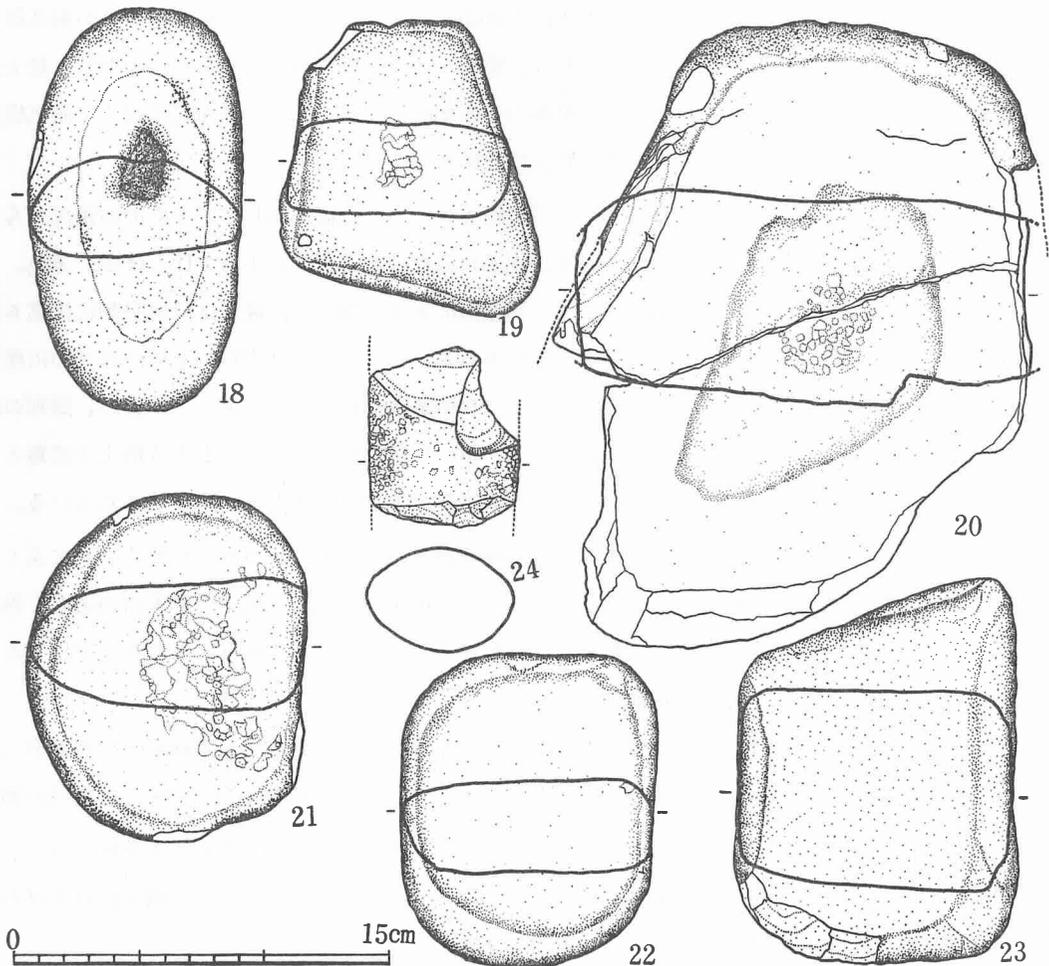
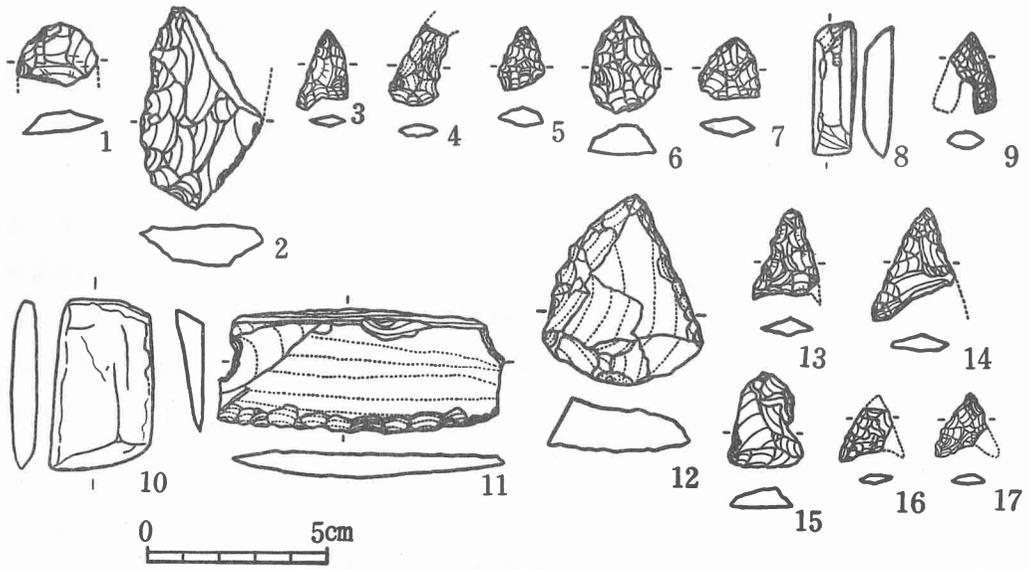
(2)は壺形土器の口頸部である。口縁下部を若干肥厚させて古い特徴を遺しているものの頸部から大きく屈曲させて開く口縁部は長く発達している。刷毛目調整のあと研磨によって仕上げる。赤色。

二類は口縁34cmを測る大形壺の口頸部である。朝顔形に大きく開いた口縁部は口唇内側に篋描きによる複線山形文が配され、やや下って小突帯が貼付される。この小突帯は内容物を他に注ぐのに便利なように口があげられている。おそらく対称の位置に二ヶ所あけられていたであろう。また、頸部の最も細くなった部分にも断面三角の小突帯がめぐっている。褐色の細砂粒を主体とする胎土で表裏とも剝落が進んでいるが、表面は研磨されている。外面突帯の上部は刷毛仕上げのまま残されている。

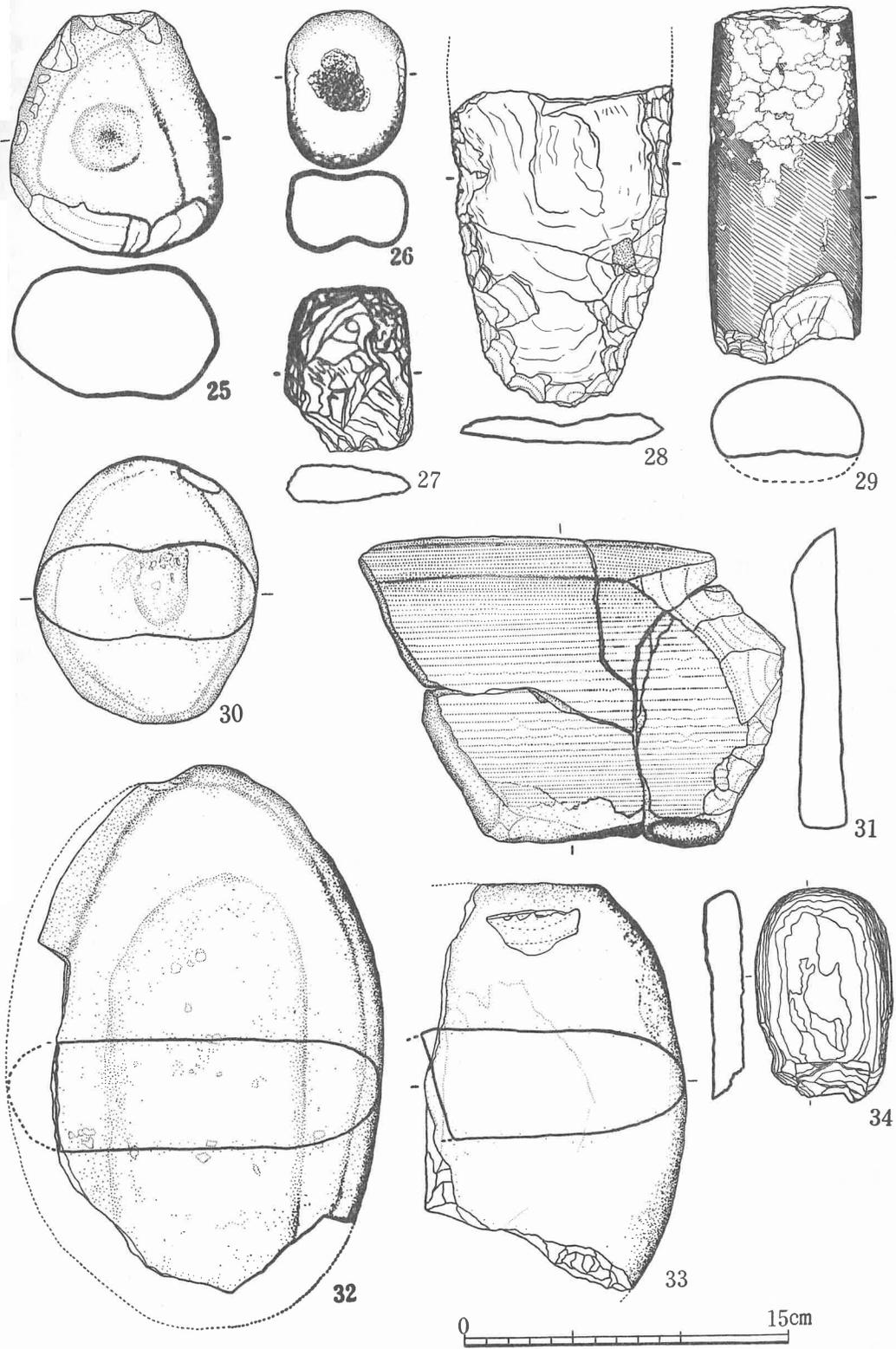
(4)は蓋形土器で完形品である。口縁29cm高さ15.7cmを測る。平底風の頂部からややくびれてふくらみのある体部、屈曲して大きく開く口縁とつながる。体部中央と屈曲部に粘土の継ぎ目がある。外面赤茶色を呈し内側には黒色部分がある。胎土には砂粒を多く混入するが丁寧な磨きによってほとんど表面には現われていない。口唇部は横撫仕上げである。

鉢形土器は大きく二種類ある。一類はいわゆる下城式土器と呼ばれたもので浅鉢形(5)と深鉢形(6・7)の二種に細分される。いずれも口縁下1.5cmほどのところに貼付突帯をもち(6)では刻目が施される。(5)は口径21cmで体部はふくらみをもって斜行する。二次的に火を受けており赤茶色を呈し、表面の摩耗が著しい。(6)、(7)は内彎ぎみに立ち上る深い体部をもつ。外面はやや粗い刷毛目仕上げが施される。茶褐色ないしは黄褐色の砂粒を含む胎土である。

二類は同じく深鉢の形態であるが、外彎する口縁部をもつ点で相違する。さらに口縁の屈曲部には



第51图 B地区出土石器实测图(1)



第52图 B地区出土石器实测图(2)

断面三角の小突帯をめぐらし、口唇部下縁とともに刻目を施す。刻目は上下同時に押捺したものでごく小さい。外面は摩耗のため調整法は明らかでない。内面は研磨を行う。赤色砂質の胎土である。

底部は(9)~(12)がある。(11)は赤褐色の厚手大形の平底をなす底部で壺形土器(3)のものとみられる。(12)は一見高台風の上げ底となる壺形土器の底部である。

高床建築跡 (第21図)

第二調査区の柱穴群の中から柱穴の太さ、レベル等に留意して高床建築物を想定するならば、一応次の三戸の構造物が可能である。

第1建築跡 30号竪立穴の上部に位置する構造部で、一般に高床の倉庫と考えられている建築物に類似する。305×205cmのプランをなす。主軸の方位を西北にとる。

第2建築跡 第1建築跡の東南にあって、同じく高床倉庫状の建築物を想定する。主軸の方位はほぼ東西で391×194cmのプランである。

第3建築跡 495×417cmの長方形プランの建築物である。

表面採集の石器

調査中に採集した石器として、姫島産黒曜石を利用した二次加工のある石器1 (第51図15)、石鏃3 (第51図16・17) および縁泥片岩製の礫器 (第52図34) がある。礫器は長さ10cmほどの扁平な楕円形礫を利用したもので一端が強い打撃によって剝離している。剝離の状態は刃部形成のための調整によってつけられたとするよりむしろ打撃による結果ついたもので、もともと丸みのある自然面のままであったとみられる。特記すべきは剝離痕のある先端に近い両サイドに粗雑な調整による浅い割り込みがあることである。割り込みが柄につける際の緊縛部としてつくられたものならば、やや打撃部に近すぎることが指摘され石質がわりあいもろいということとあわせて用途が問題となろう。

小 結

B地区は地形的にみれば東西に走る鞍部によって台地主要部と切り離されてその東南辺に位置し、また遺構も弥生前期後半に比定される袋状竪穴を主体とするもので、A地区などのある台地とは著しく様相を異にしている。この地区は、調査以前の造成によって鞍部は盛り土され、また南側の造成地周辺部では高さ2m近くも削り取られた部分もあって、調査が実施されたものは削平と盛り土からまぬがれたごく限られた遺構であるということをまず忘れてはならない。

このような条件下の調査ではあるが住居跡等の遺構についてはついに明らかにすることができなかった。一方、A地区のある台地主要部についても同時期の遺構の存在は知られていない。したがって、残念ながらこれら袋状竪穴と住居との有機的な結合関係について言及することはできない。しかし、第一調査区においてみられた浅い楕円形あるいは長方形の竪穴の存在、そのうちとくに焼土にお

おわれたもののあることは、貯蔵を目的とした袋状竪穴のみを設置する特定の場所としてこの地域が選定されたものではなく、日常生活の舞台であったことを物語っている。

遺構は円形の袋状竪穴のほか、長辺150cm前後短辺100cm前後の長方形竪穴、小形の円形竪穴、断面皿状となる楕円形竪穴、土墳墓とみられるものおよび柱穴群があった。このうち前三者についてはいずれも食物あるいは凹石・石皿といった道具の貯蔵・収納の用に供されたほぼ同時期の所産と考えられるが、長方形竪穴は遺存部の深さ20～35cm程度であって土器等の出土状態は円形袋状竪穴ほど顕著ではない。地中深く掘り込んだ円形袋状竪穴が覆いをかぶせて密閉し長期の貯蔵を目的としたものであるならば、これらの方形の浅い竪穴は一時的な保管場所としての性格をもつものと考えることができよう。

この種の浅い竪穴には北九州市原遺跡等にものごとく工房的な性格をもつものが知られているが、当地区においては指摘することはできない。

円形袋状竪穴は次の二種類がある。

(A) 底径100～130cm、深さ30～50cmの小規模なもの。(B)に比べて浅いため、壁面の傾斜度はあまり大きくなく垂直に近い。3号・8号およびコメを検出した26号竪穴がこれに属し、床面は平坦である。

(B) 底径150～210cmを測る大形のもので入口部が小さくすぼまり、したがって壁面傾斜の大きい竪穴である。比較的原状を遺存しているとみられる1号竪穴では、底径180cm、深さ90cm、入口部分の径70cmである。

(B)は床面の形態に次の三つがある。

- (1) 床面平坦でなんらの施設ももたないもの(1、4、5、6)。B地区西南部に限られている。
- (2) 床面に周溝をもつもの(17)。
- (3) 床面中央部に径30cm深さ15cm前後のくぼみ穴を有するもの(9、14～15、19～25、27、30、32～35)。

(B)類(2)および(3)の床面施設はいずれも水抜きを目的で作られたものと考えられる。内部の施設としてはこのほか22号および35号竪穴で検出した敷草を行ったとき状態も特筆すべきものであった。

なお、8つの竪穴でアラカシの実が、4つの竪穴で小豆らしい炭化物が発見されたが、数粒程度のものでまとまった出土ではなく必ずしも貯蔵されていたとする確証はない。

つぎにB地区で検出した袋状竪穴をはじめとする各遺構一覧表を掲げておく。

(真野和夫 後藤宗俊)

| No. | 形 状 | 現 存 規 模 (cm) | | 出 土 遺 物 | | | 備 考 |
|-----|-----------------|--------------|----|------------------|------------------|---------|-------------|
| | | 底 径 | 深 | 土 器 | 石 器 | 炭化物、その他 | |
| 1 | 円形袋状 | 180 | 90 | 壺1、甕3、 下城2、鉢1 | 二次加工石器 | | 床面に灰層 |
| 2 | 長楕円形 | 135×70 | 25 | | 搔器 | | 土墳墓 |
| 3 | 円形袋状 | 127 | 50 | 甕1 | | | |
| 4 | 円形袋状 | — | — | | | | |
| 5 | 円形袋状 | — | — | | 凹石3 石皿 | | |
| 6 | 円形袋状 | 190 | 45 | 壺6、下城1 | | 豆 | |
| 7 | 遺構不明 | — | — | | | | |
| 8 | 円形袋状 | 125 | 30 | 壺2、甕1 | 石鏃 磨石2 | | |
| 9 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 140 | 45 | | 石鏃 | | |
| 10 | 皿 状 | — | — | 下城2 | 凹石 | | |
| 11 | 皿 状 | 110 | 12 | 壺1、下城1 | | ドングリ | 炉跡 |
| 12 | 方 形 | 180×130 | — | | 石斧 | | |
| 13 | 皿 状 | 230×165 | 20 | 甕3、下城4 | | ドングリ | 炉跡 |
| 14 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 160 | 75 | 壺1 | 石皿 凹石2 | | |
| 15 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 150 | 25 | 壺1、下城1 | | | |
| 16 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 165 | 50 | 壺1、下城2 | 凹石 | ドングリ | |
| 17 | 円形袋状 (周 溝) | 220 | 55 | 下城5、蓋1 | 石鏃2 搔器、凹石 | 豆 | 周溝 |
| 18 | 方 形 | 150×120 | — | | | | |
| 19 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 170 | 80 | 壺1、甕3、 下城2 | | 豆 | |
| 20 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 210 | 70 | 壺1、甕1、 下城5 | 石鏃、凹石 打製石斧、石鏃 | ドングリ | |
| 21 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 176 | 62 | 壺1、甕1、 下城5 | 石ノミ、凹石 石皿2 | | |
| 22 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 210 | 85 | 甕2、下城6、 鉢3 | 石鏃、石斧 石皿 | | 炭化した 敷草? |

| No. | 形 状 | 現 存 規 模 (cm) | | 出 土 遺 物 | | | 備 考 |
|-----|-----------------|--------------|-----|---------------|------------------------|------------|-------------|
| | | 底 径 | 深 | 土 器 | 石 器 | 炭化物、その他 | |
| 23 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 185 | 28 | 壺2、下城3 | | | |
| 24 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 200 | 25 | 壺3、蓋1 | | | |
| 25 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 213 | 90 | 壺2、下城7 | 搔器、扁平 片刃石斧、 打製石釘 | ドングリ | |
| 26 | 円形袋状 | 100 | 32 | 壺1 | | コメ ドングリ | |
| 27 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 162 | 75 | | | | |
| 28 | 方 形 | 112×83 | 19 | 甕1、下城1 | | | |
| 29 | 円 形 | 65 | 17 | | | | (不明) |
| 30 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 203 | 107 | 壺2、甕1、 下城1 | 石鏃2 | | 上部は二 次使用 |
| 31 | 楕 円 | 85×55 | 8 | | | 豆? | 黒曜石 石屑 |
| 32 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 170 | 32 | | | | |
| 33 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 200 | 80 | 甕1、下城2 | 石皿 | ドングリ | |
| 34 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 180 | 75 | | | | |
| 35 | 円形袋状 (中央くぼみ) | 190 | 50 | 壺4、下城4、 蓋1 | 石斧、凹石 | ドングリ | 炭化した 敷草? |
| 36 | 方 形 | 133×88 | 35 | | | | |

(出土遺物土器のうち「下城」としたのは下城式甕形土器のこと)

Ⅲ C地区の調査 (第53図)

C地区の調査は四日市高校取付道路工事に伴う緊急発掘調査として昭和46年12月に実施された。

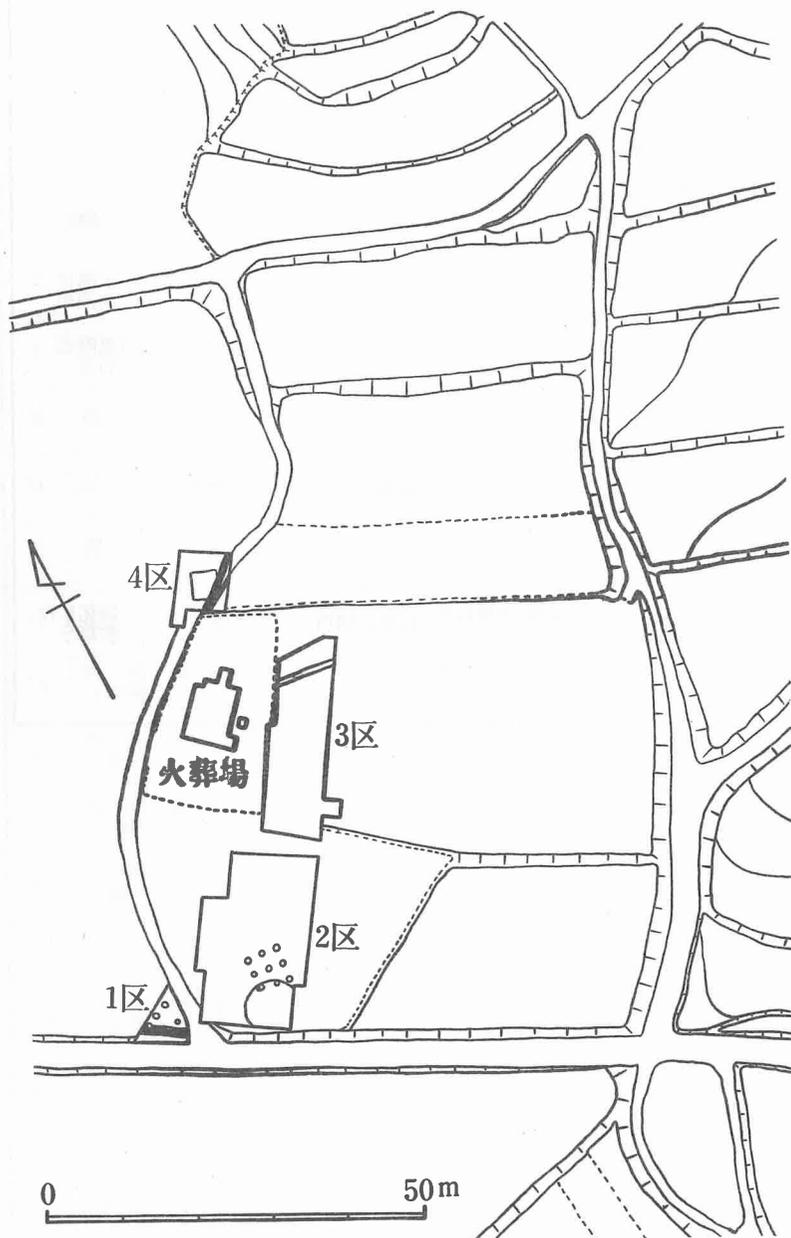
調査区は台ノ原台地の北東部にあたり、四日市地区の沖積地に向かう東および北方向の支谷に挟まれた、標高50mの平坦部を占める。調査地点は道路予定地の中では階段耕作がなされていない、旧火葬場を囲む畑地および道路敷に限った。調査区は道路および畑地界によって四ヶ所に分け、南側道路

取付部より第1～4調査区とした。第1、2調査区は東側、第4調査区は北側の支谷に面する緩傾斜地、第3調査区は両地点に挟まれる平坦地に立地し、いずれも予定地の中では比較的原地形を保っている地域である。

発掘は第1→第3→第4→第2調査区の順序で実施し、表土の除去は第2調査区に限りブルドーザーを使用し他は人力によった。

第1調査区は古墳時代の溝状遺構と大型の柱穴がみられ弥生時代磨製石器が出土している。

第2調査区は調査面積も最も広く、弥生時代中期の円形竪穴住居跡、方形袋状竪穴のほか掘立の建物遺構を含



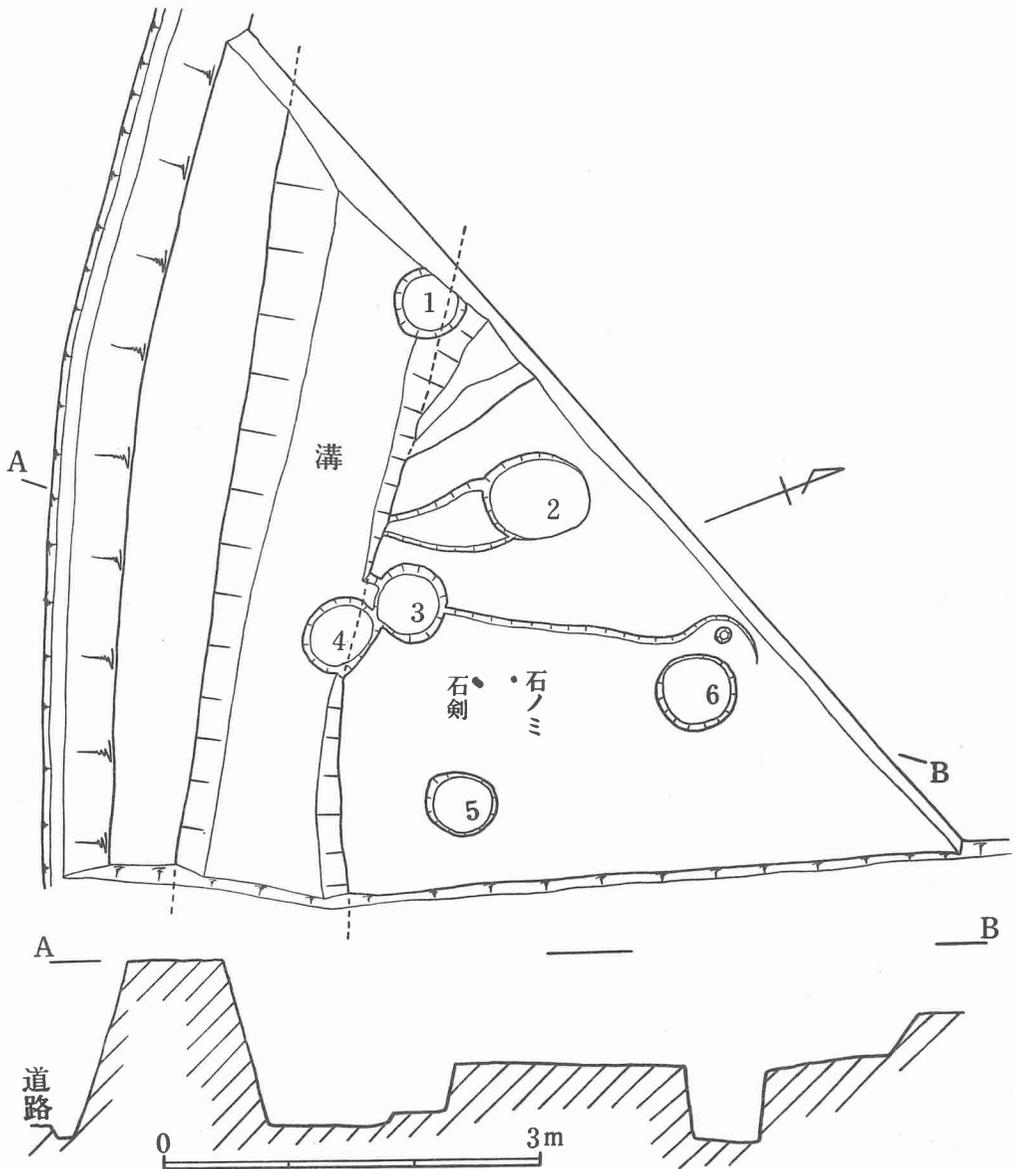
第53図 C地区調査区位置図

む柱穴群が検出された。

第3調査はほとんど埋葬遺構に限られ、弥生時代中期に属する石棺、壺棺、土壙が同調査区北部の溝状遺構の南側に集中して発見された。

第4調査区では溝状遺構に切られた古墳時代後期の方形竖穴住居跡が検出された。

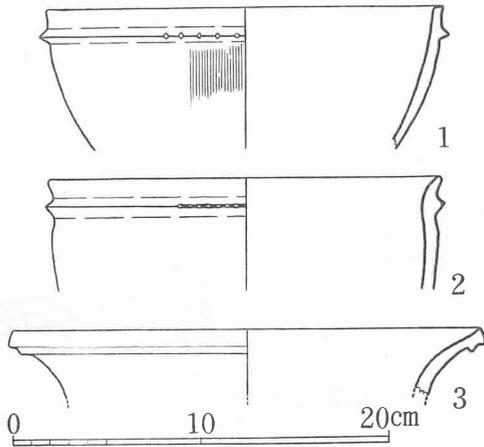
(1) 第1調査区 (第54図)



第54図 C地区第1調査区遺構実測図

溝 状 遺 構

調査区の南端に沿って台地北縁を横断する市道に平行して掘込まれている。最大幅1.4m、深さ1.3m、断面は台形を示す。床面の中軸線は東側にゆるく傾斜する。溝内からは弥生土器片および須恵器のほかは検出されていないところから、時期は古墳時代後期に比定できるであろう。



第55図 C地区第1調査区出土土器実測図

柱 穴

ほぼ形態を同一にする比較的大きな円形柱穴が6コ確認された。No. 1、3、5、6はほとんど円形プランで断面はやや上方に開くがほぼ直口する。径50~60cm、地山面よりの深さ50~60cmを示す。No. 2は楕円形プランでやや大きく断面は西に傾く。No. 1、2、6は2mの間隔をおいてほぼ直線に並び、No. 5は同じく2mおいてNo. 6の南側に位置する。

柱穴内出土遺物（第55図1~3）

(1)は直口の口縁部で、口径21cmを測る。口縁直下に刻み目を有し、断面三角形の突帯をめぐらす甕形土器である。胎土は砂粒混入、焼成は良好、色調は黄褐色、調整は外面刷毛目、内面ナデによる。

(2)は口縁部が短かく外反し、口径20cmを測る。口縁直下に刻み目を有し、断面三角形の突帯をめぐらしている、甕形土器である。胎土、焼成共に良好、色調は赤褐色、調整は器面剝落のため不明である。(1)と同じ弥生時代中期に属する。

(3)は甕形の須恵器口縁部破片で、口径25cmを測る。胎土、焼成共に良好で灰色を呈し、口縁端部に断三角形の突帯を貼りつけている。溝にかかる柱穴のため、溝内か柱穴内出土が判別しがたい。

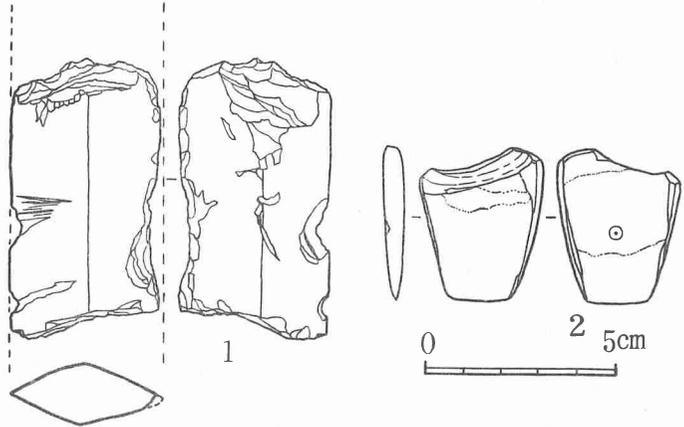
その他の遺構

No. 3とNo. 6柱穴を結ぶように直線状の浅い掘込がみられる。南側は溝によって切られ北はNo. 6柱穴を囲うようにして消える。カーブする部とNo. 6柱穴との間に径10cmの小柱穴がみられる。遺構はおそらく住居跡の一边とみられるが確証はない。遺構内から磨製石剣、磨製石ノミが発見されている。

出土石器(図版第二三、第56図)

磨製石剣

剣身のみで残存する長さ7.4cm、幅4.0cm、厚さ1.6cmを測る。石材はやや軟質の粘板岩が使用されており、刃部の損傷が著しい。研磨は中軸平行と左上→右下の二方向が観察される。鑄は丸味をおび明瞭でない。断面は身幅に比して厚く菱形に近い。



第56図

C地区第1調査区出土磨製石器実測図

磨製石ノミ

扁平両刃の形態で、長さ4.0cm、幅3.2cm、厚さ0.5cmを測る。石材はやや硬質の頁岩を使用している。ほぼ全面が研磨されており、片面のほぼ中央に径3mmほどの穿孔途中で止めた凹みがみられる。一辺は擦切り痕が認められ、断面の形状からして石庖丁を再利用したものとみられる。

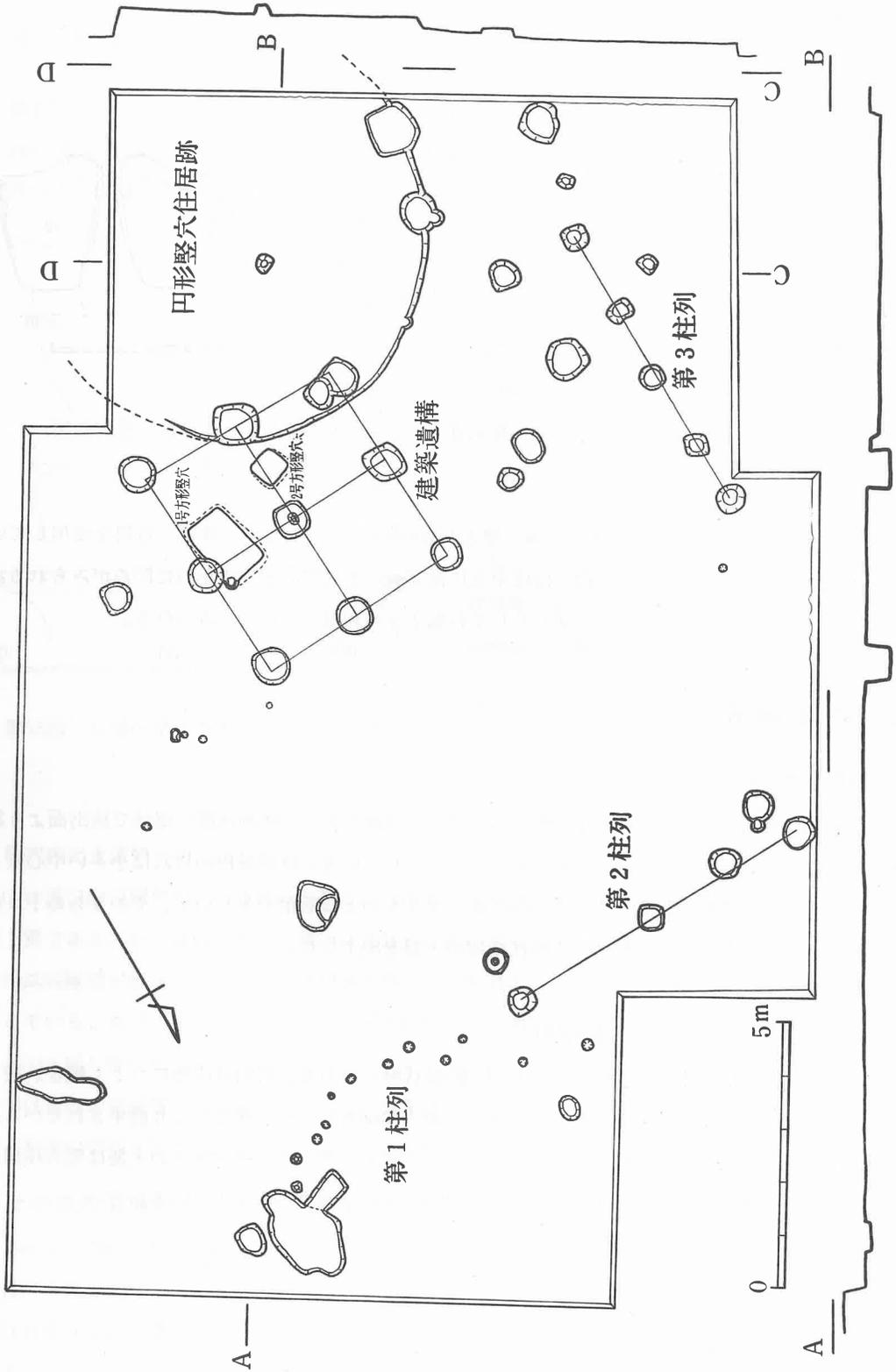
(2) 第2調査区

竪穴住居跡(第57図)

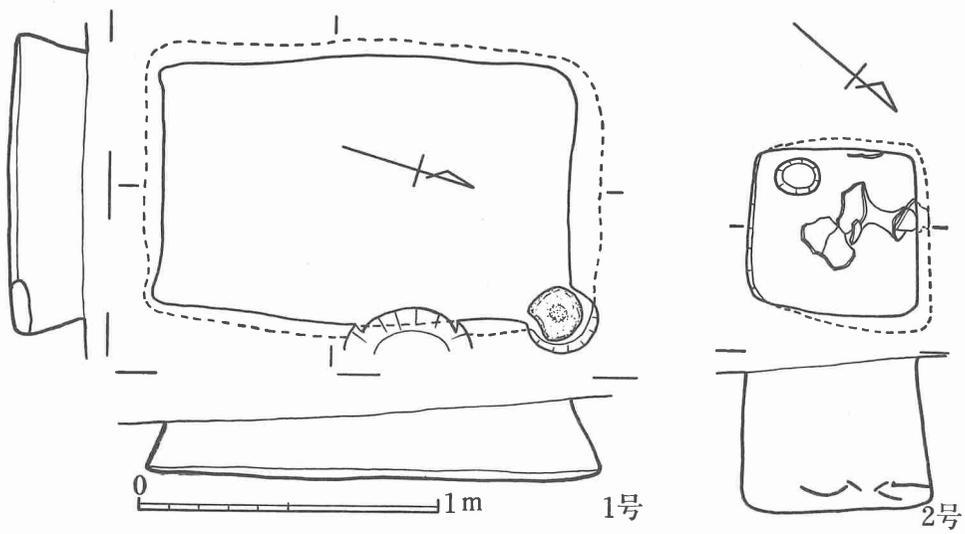
第2調査区の南端に立地する径約7.5mの円形竪穴住居跡である。床面は深い部分で検出面より約15cmで周溝はない。南半分は壁面、床面ともにカットされている。住居跡内の柱穴は小さい中心穴と北側壁に沿う5コが認められる。すべてが住居跡に伴うものとは断定できないが、そのうちの1コは確実に住居跡に伴うものとみられ、弥生時代中期の土器を出土した。

1号方形竪穴(図版第一六、第58図)

円形竪穴住居跡の北東1.5mに位置する長方形袋状竪穴である。断面は内側につよく傾き、長さ1.5m、幅1.0mと共に床面で最大値を示す。深さは最大30cmを計るが上面はかなり削平されている。北東隅に径20cmの柱穴状の張出しがみられ底面に石皿が置かれていた。竪穴出土の土器は竪穴住居内土器と時期が符合する。そのほか床面のほぼ中央付近で土製紡錘車が出土している。



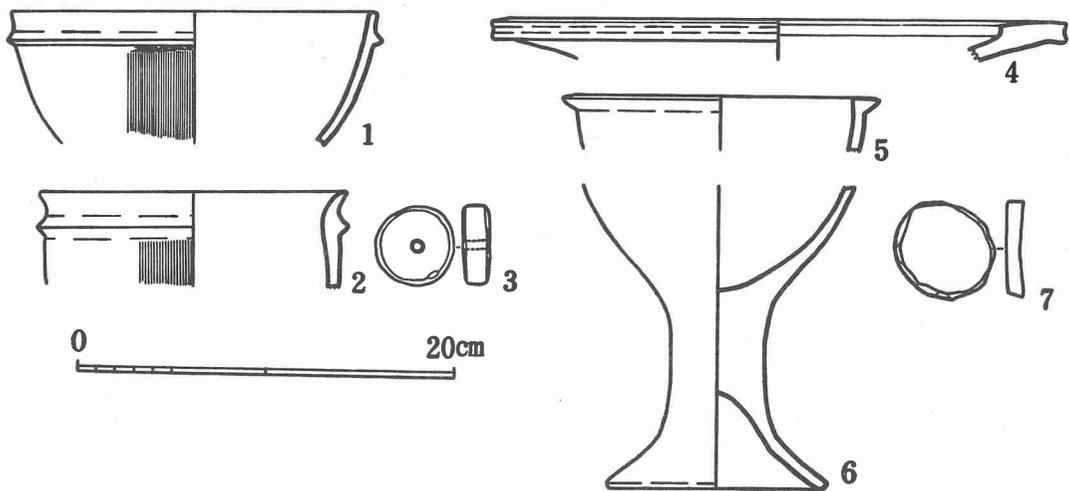
第57図 C地区第2調査区遺構実測図



第58图 C地区第2調査区方形竖穴实测图

出土遺物

土器 (第59图 1・2)



第59图 C地区第2調査区方形竖穴出土土器实测图

(1)は口縁部直口で、口径19.4cmを計り、口縁直下に断面三角突帯をめぐらした鉢形土器である。色調は赤褐色、調整は刷毛目を施している。

(2)は口縁部が小さく外反し、口径16.4cmを計る甕形土器である。色調は暗茶褐色、調整は刷毛目を施す。(1)・(2)共に胎土は砂粒混入、焼成良好である。

土製紡錘車(図版第二三、第59図3)

竪穴中央部の床面より出土したもので、直径4.2cm、断面厚1.4cm、中央部が少くふくらみ孔径0.5cmを測る。色調は赤褐色、胎土、焼成ともに良好である。全面ナデ仕上げによる。

石 皿

北東隅部の柱穴状張り出し部より出土した安山岩製厚手の石皿である。磨面である凹みは両面にみられる。側面は一端に自然面を残すのみで他は欠けている。長径20cm、短径18cm、厚さ6cm。

2号方形竪穴(第58図)

円形竪穴住居跡と1号方形竪穴の中間に位置するほぼ正方形の袋状竪穴である。断面は一方の壁面を残して袋状をなし、床面で最大幅60cmを示す。深さは50cmと1号に比べて深く、床面にさらに径15cmの柱穴状の小ピットをもつ。竪穴内より弥生時代中期の土器を円盤状土製品が出土しており、位置と時期をみて1号とともに円形竪穴住居跡との関連が考えられる。

出土遺物

土 器(第59図4~6)

(4)は外反する口縁部の内面に巾3.5cmの粘土を貼り付けて肥厚させ、ほぼ上面を平坦にした壺形土器の口縁とみられる。口径外側30.6cm、内側22.6cmを測る。色調は暗黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。

(5)は断面三角形の突帯を貼り付けた口縁部で、口径17cmを測る。胴部は内彎気味になっている。色調は、暗茶褐色、調整は外面剝落のため不明、内面はナデによる。

(6)は高杯形の脚部と胴部の一部のみである。色調は茶褐色、調整は器面剝落のため不明、脚柱は長く、脚端で広がりを見せる。(5)と焼成、胎土ともに共通するため同一個体の可能性がある。

円盤状土製品(図版第二三、第59図7)

7は長径5cm、断面厚0.9cmを測る、土器片再利用の円盤状土製品である。円端は、研磨してないため土器片を欠いているのが良くわかる。色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。

柱 穴 群(図版第一六、第57図)

調査区のほぼ全面に柱穴がみられるが、大きく北側の東西方向に並ぶものと円形竪穴住居跡に接して配列する南側のグループとに分けることができる。

北側の径10~15cmの12コの小柱穴は大きさからみて杭列とみられ、南へ張り出す弧状の配列を示す(第1柱列)。その西側の径50~60cmの4コの柱穴は不等間隔ながら東西方向に配列する(第2柱列)。

これは南側の建物遺構と考えられる柱穴群の北側列に平行し8.0mの距離をもつ。

南側は方形竪穴と重複する部分において径60~85cmの9コの柱穴による4m四方の配列をみる(建物遺構)。柱心間は北側の二列において2.0mと整然としており、南側の一列は若干北に振り、東で2.2m、西で1.9mを計る。中央の柱穴は二段の掘込がみられる。この中で、北側の二列のみをとった場合、3コ2列の掘立柱穴による建物遺構が想定される。柱穴内からは弥生時代中期の土器底部のほかは出土していない。西側の5コの柱列は径40~50cm、柱心間1.3~1.5mをとり、南北方向ほぼ直線上に配列する(第3柱列)。方向は建物遺構の南北軸に5.0mの距離をおいて平行し、北側の第2柱列に直交する。

建物遺構柱穴内出土遺物

4点の甕形とみられる土器底部が出土している。平底3、上げ底1でいずれも黄褐色~赤褐色を呈し、焼成良好である。平底の1つには器壁に径1.5cmの穿孔がみられる。時期は弥生時代中期に属するとみられる。

(3) 第3調査区(図版第一七、第60図)

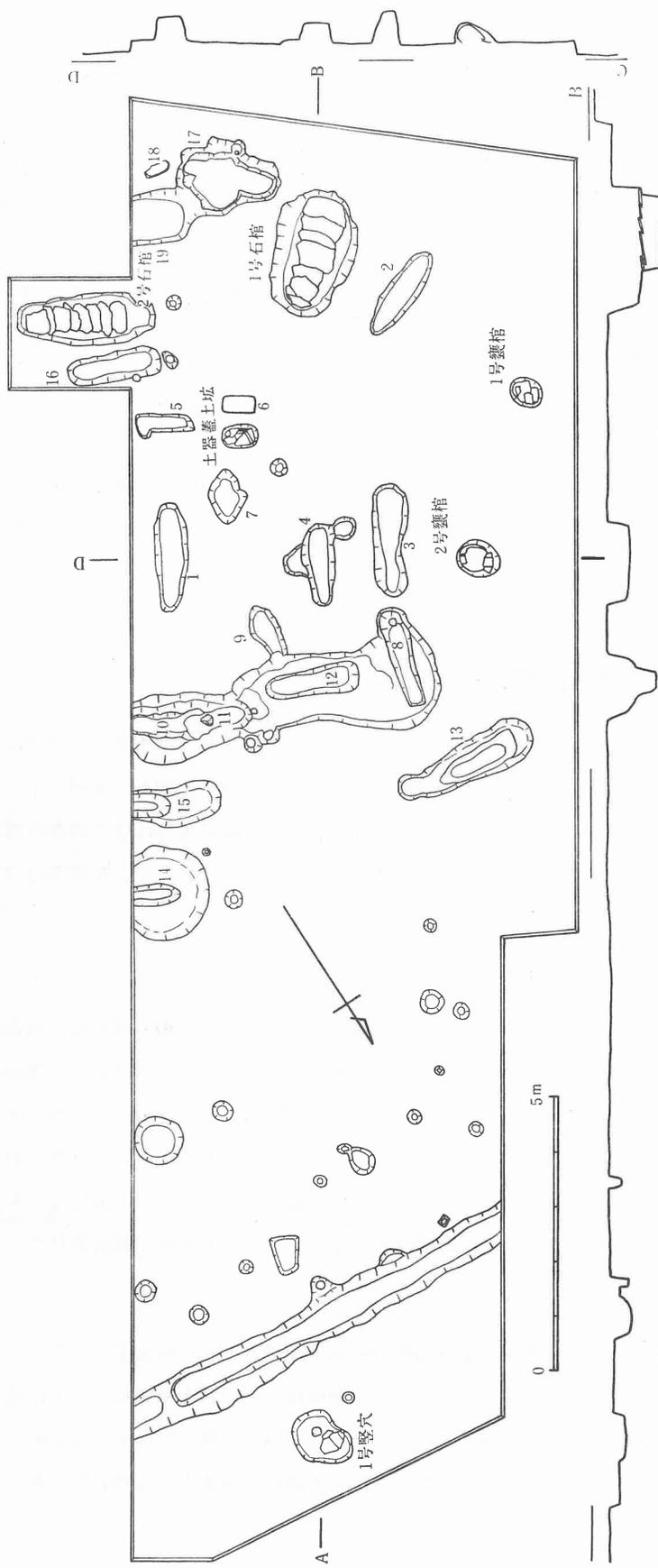
第3調査区は弥生時代中期の埋葬遺構が集中する。それは主として調査区の南半部に密集し、石棺2、壺棺2、土器蓋土壙1、土壙19を数える。遺構の分布からみて、調査区東側の平坦地にも相当数の遺構の埋蔵が推定されるが検出は道路予定の範囲に限った。遺構番号はほぼ調査の順序にしたがった。各遺構の記述については頭位の判断できるものはつとめて記し、方位、数値等はできるだけ一覧表に一括し、簡略を期すようにした。

1号石棺(図版第一八、第61図)

墓壙は幅広の不規則な楕円形である。壁面は上部に狭い段をつけたのちほとんど石蓋面まで垂直に落ちる。蓋石は幅広の安山岩板状石7枚を使用し、頭位の方から先に並べたよろい重ねである。蓋石は頭位のものが最大で次いで中央のもの、あとは足位に向かって長さにおいて順次小さくなる。石蓋間および石蓋と壁面の間にも入念に粘土がつめられている。内部は頭位と頭位の側面および足位にのみ側石が使用され、中央部から足位にかけての側壁は手抜きがみられる。床面はほとんど水平で石蓋上面より40cm、掘込面より90cmと深い。墓壙内上部より小型の打製石鏃が検出された。

2号石棺(図版第一九、第62図)

調査区南東の張出し部にあり頭位を1号石棺の足位に向けるように位置する。墓壙のプランは人形を呈し、頭位は北西を指す。蓋石は1号より小さいがほぼ均一の安山岩板状石を8枚使用し、1号と同じく頭位より先に並べたよろい重ねである。さらに石蓋間と壁面の間にも入念に粘土がつめられている。側石は頭位の三方のみで他ははぶかれている。床面は石蓋面より30cm、掘込面より50cmと1号

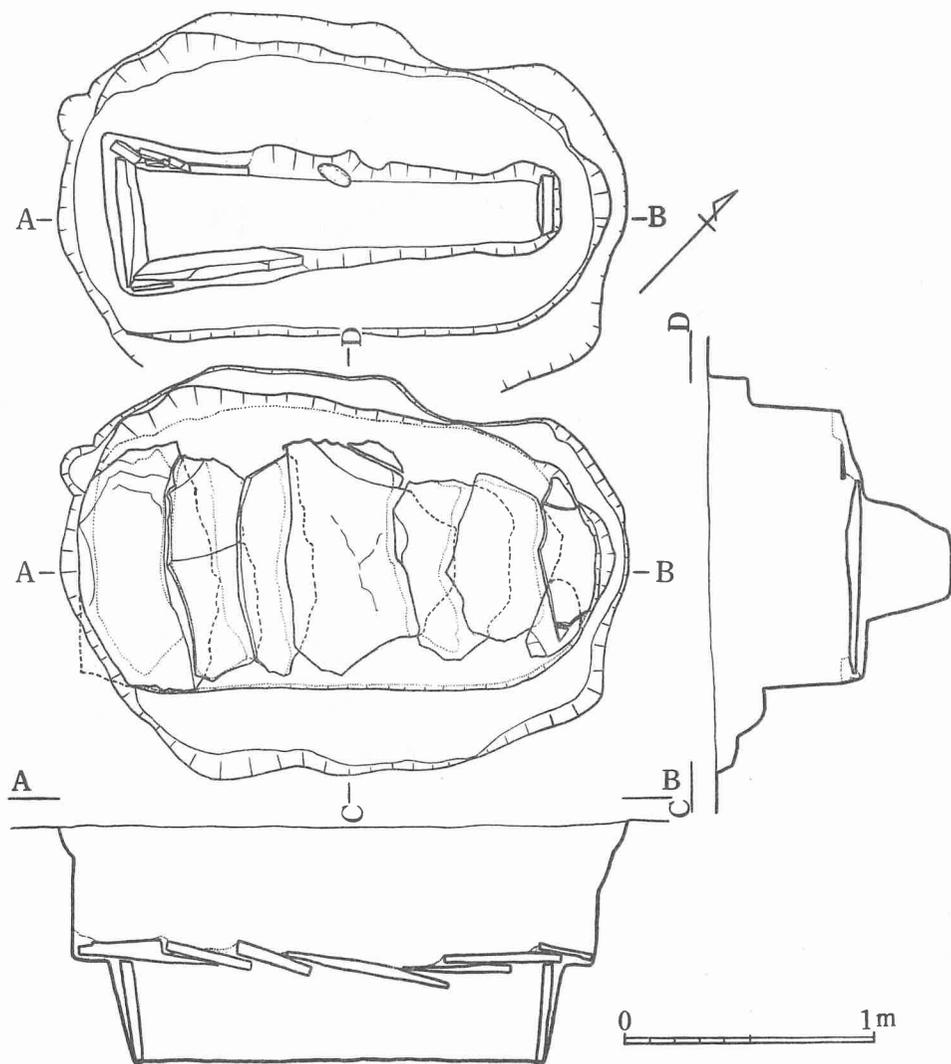


第60图 C地区第3調査区遺構配置图

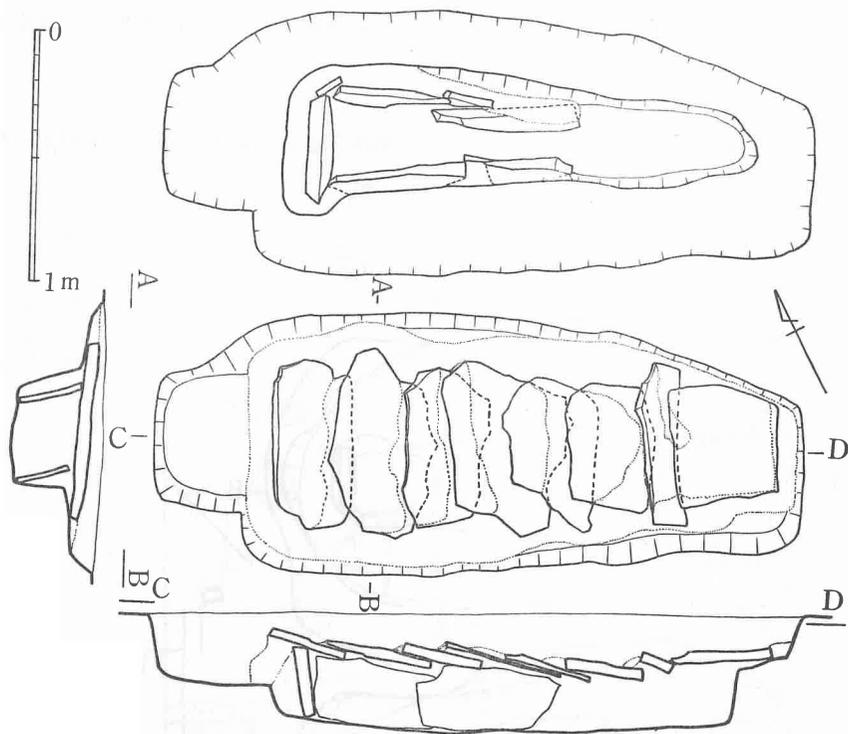
に比べて著しく浅い。石棺内法の長さは1号より大きく、規模よりみて成人男性用と推定される。

1号石棺墓壙内出土石鏃(図版第二三、第70図1)

漆黒色黒曜石製の小型の三角形鏃である。底辺の一端を欠き、裏面に一部主要剝離面を残すほかは二次加工は入念である。長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。



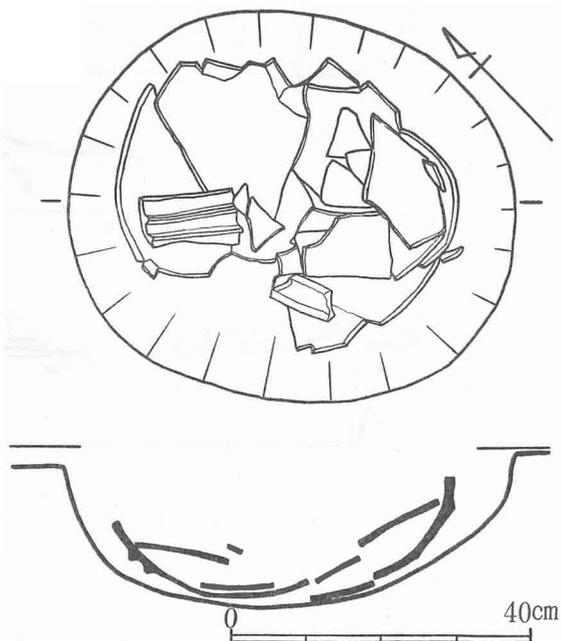
第61図 C地区第3調査区1号石棺実測図



第62図 C地区第3調査区2号石棺実測図

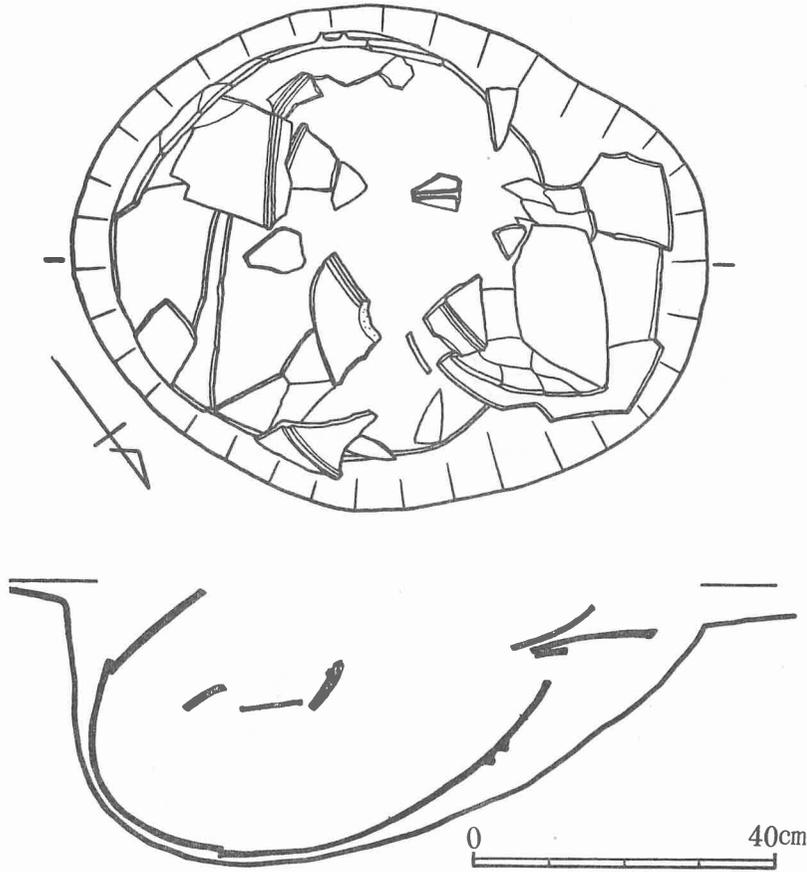
1号壺棺 (第63・65図)

口縁部を欠いた、幼児用とみられる単棺である。胴部に断面三角形突帯を2条めぐらす壺形土器である。胴部径42cm、底部径9.6cm、現存器高31cmを測る。棺の器壁は0.5cmほどで極めて薄く仕上げられ、胎土は砂粒を混入する。焼成は良好、色調は黄褐色。調整は器面剝落のため不明である。墓壇は楕円形プランで、最大長約60cm。



第63図 C地区第3調査区1号壺棺出土状態実測図

2号壺棺（図版第二〇、第64・65図）



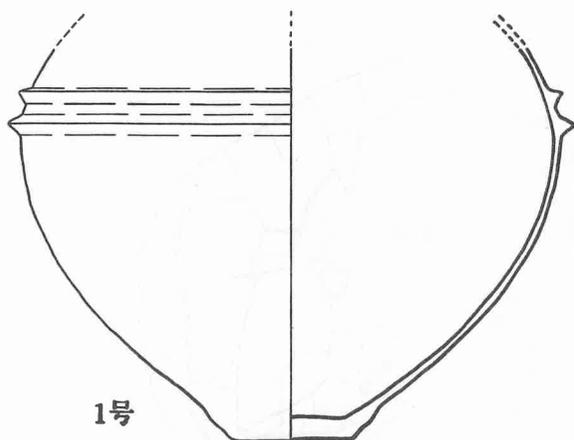
第64図 C地区第3調査区2号壺棺出土状態実測図

小児用とみられる単棺で、1号壺棺墓の北東2.6mの地点にある。墓壙は楕円形プラン。最大長約80cm、最大幅約66cm、現存の深さ約35cmを測り、北西側の壁面が傾斜をしている。棺は主軸をN35°Eの方向にとり、約30度の傾斜をもって埋置されている。棺は口縁部が朝顔状にひらき、頸部に断面三角形突帯を一条、胴部に断面コ字形突帯を2条めぐらす壺形土器である。

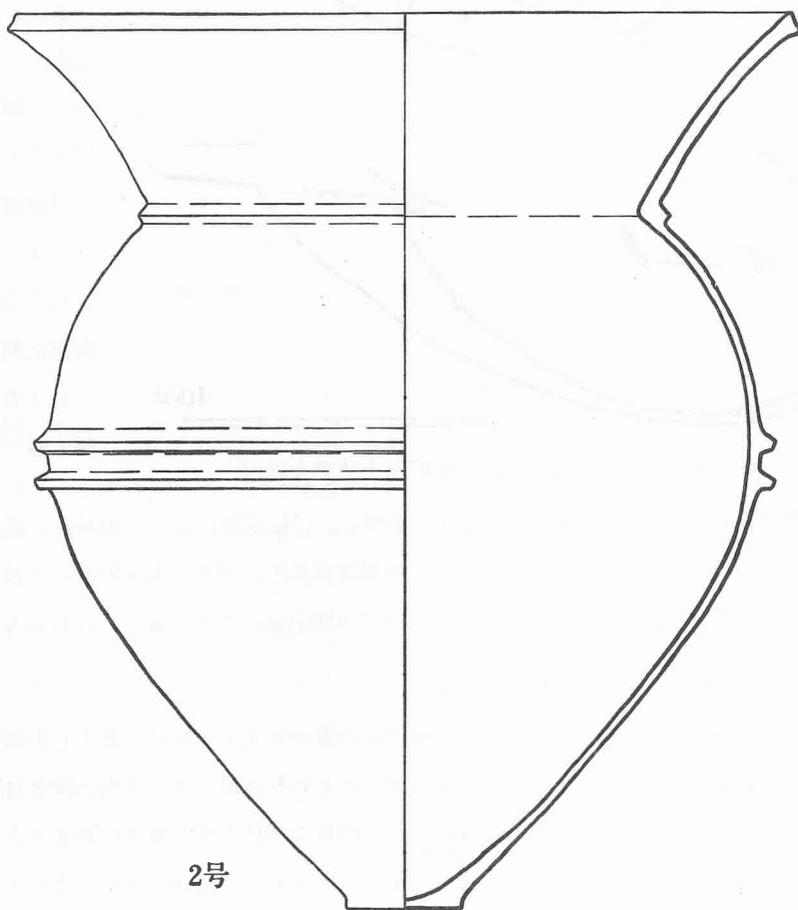
口径62cm、器高71cm、胴部径56.8cm、底部径9cmを測る。口縁部厚に比べ、頸部から底部までの器壁が薄く仕上げられている。胎土、焼成共に良好、色調は茶褐色、調整は器面剝落のため不明である。棺の時期は土器型式からみて1号と同様に弥生時代中期中頃に属するものとみられる。

土器蓋土壙（図版第二〇、第66・67図）

1号石棺の北東、2号石棺の北それぞれ3mの地点に位置する大形土器片を蓋とした楕円形プランの土壙である。墓壙の壁面は北東側にくらべて南西側はゆるやかに落ちる。床面の深さは蓋上面より25cmと浅い。土器蓋は土器の胴部を大きく3枚に分け、内側を下にして土壙内に納まるように重ねている。使用された土器は胴部に断面台形の突帯を二条めぐらす最大径61cmの大形の壺形土器とみられる。胎土は砂粒を含み黄褐色を呈す。また南西に隣接する袋状の竪穴（6号土壙）を伴う可能性が大きい。調整は器面剝落のため不明である。規模からみて幼児の土壙墓とみられる。



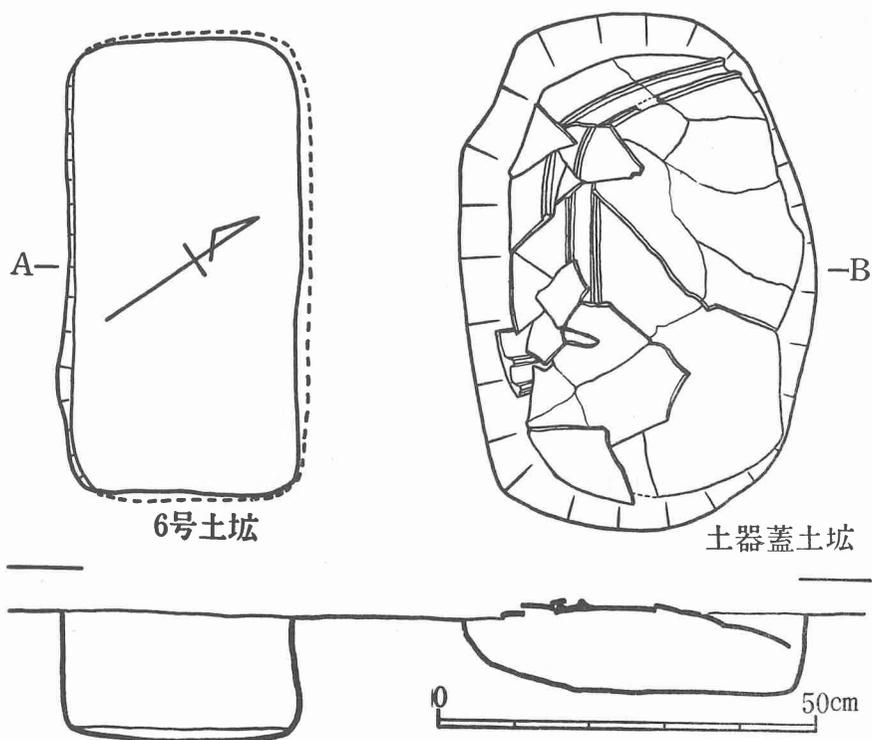
1号



2号



第65图 C地区第3调查区壺棺实测图

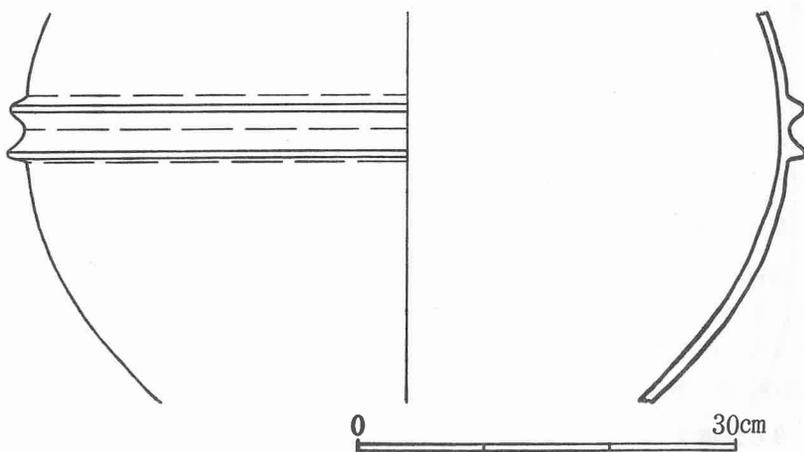


第66図 C地区第3調査区土器蓋土坑および6号土坑実測図

土 坑

1号土坑（図版第一九、第68図）

調査区の東縁に接し
 平行する大形の土坑で
 ある。上面は長円形の
 プランをもち、弧状に
 ふくらむ南西が頭位と
 みられ、足位近くです
 ぼまる。床面は中央部
 で浅く凹むがほぼ水平
 に近い。壁面は上方に
 やや開く。掘込上面で
 の長さ196cm、最大幅
 65cm、床面での長さ180
 cm、幅48cm、深さ40cm。



第67図 C地区第3調査区土器蓋実測図

2号土壙（第68図）

1号石棺の北側に平行し隣接する。プランは長円形を呈し頭位は判断しがたい。床面は東側でやや深くなるがほとんど水平に近い。壁面はほとんど垂直に落ちる。床面の長さは153cmで中型に属する。掘込上面での長さ163cm、最大幅47cm、床面での幅34cm、深さ40cm。1号と同様端正なプランである。

3号土壙（第68図）

調査区の中央やや南寄りに位置し、2号壺棺のすぐ東、1号土壙と平行する。プランは中央ですぼまる長円形で、頭位は南西を指す。床面は頭位において深く、中央部でやや高くなる。壁面は足位では直に落ちるが他は不規則である。掘込上面での長さ206cm、最大幅92cm、床面での長さ155cm、幅32cm、深さ35cm。

4号土壙（第68図）

1号土壙と3号土壙の間に平行して位置する。プランは幅広の長円形で頭位は1・3号土壙と同じく南西を指す。床面は肩部から足部にかけては水平であるが頭部は上方に傾斜する。頭部の左右に浅いピットが土壙と切り合う。西側のピットは円形でやや深く、土壙に関連があるとみられる。掘込上面での長さ156cm、最大幅55cm、床面での長さ147cm、幅40cmとやや寸づまり、深さ40cm。

5号土壙（第69図）

調査区の東縁に接し1号土壙に直交して位置する小型の土壙である。プランは寸づまりのカギ形を呈す。頭位とみられるカギ部は南東を指す。床面は頭位がやや高く足位に向かってゆるく下向する。壁面はほとんど垂直に落としている。床面の長さは1mに満たないため小児の埋葬用とみられる。頭位のカギ形突出部は副葬に関連するものとみられる。掘込上面での長さ103cm、中央部幅30cm、床面での長さ96cm、幅21cm、深さ27cm。

6号土壙（図版第二〇、第66図）

土器蓋土壙の南西に平行し隣接する長方形を呈す土壙である。床面は土器蓋土壙より深く、水平であるが壁面は袋状で、方形の貯蔵穴に共通する形態である。規模、位置ともに土器蓋土壙と密接な関係にあるとみられ、形態からして副葬用の竪穴と考えられなくもない。掘込上面での長さ60cm、幅31cm、床面での長さ62cm、幅32cm、深さ34cm。

7号土壙（第68図）

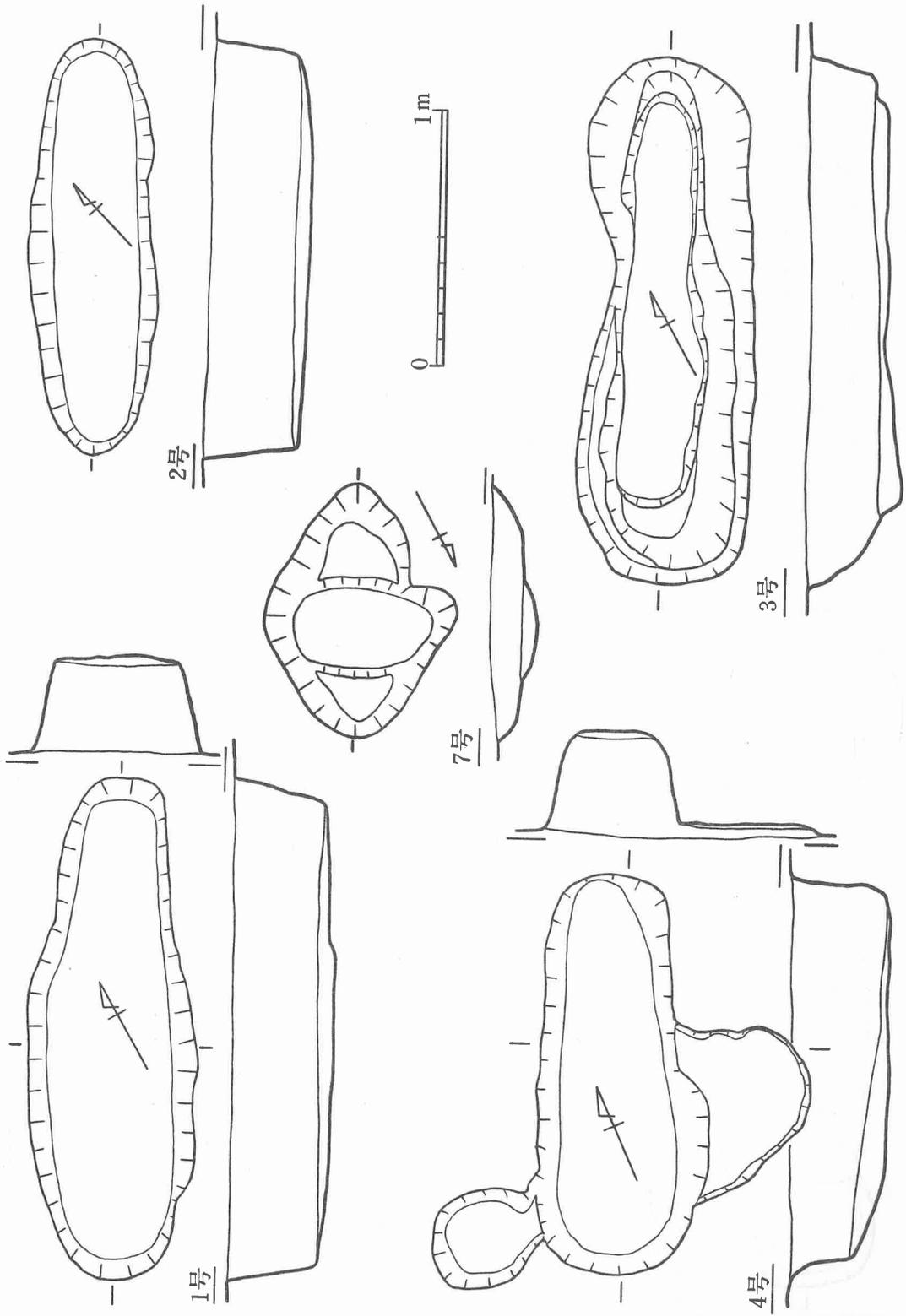
1号土壙・4号土壙と土器蓋土壙の間に位置する。プランは菱形に近い楕円形で西側にやや突出する。壁面は段をもって盆状に凹み、床面は浅い。形態から土壙墓とするには疑問が残る。掘込上面での長さ99cm、最大幅75cm、床面での長さ75cm、幅54cm、深さ18cm。

8号土壙

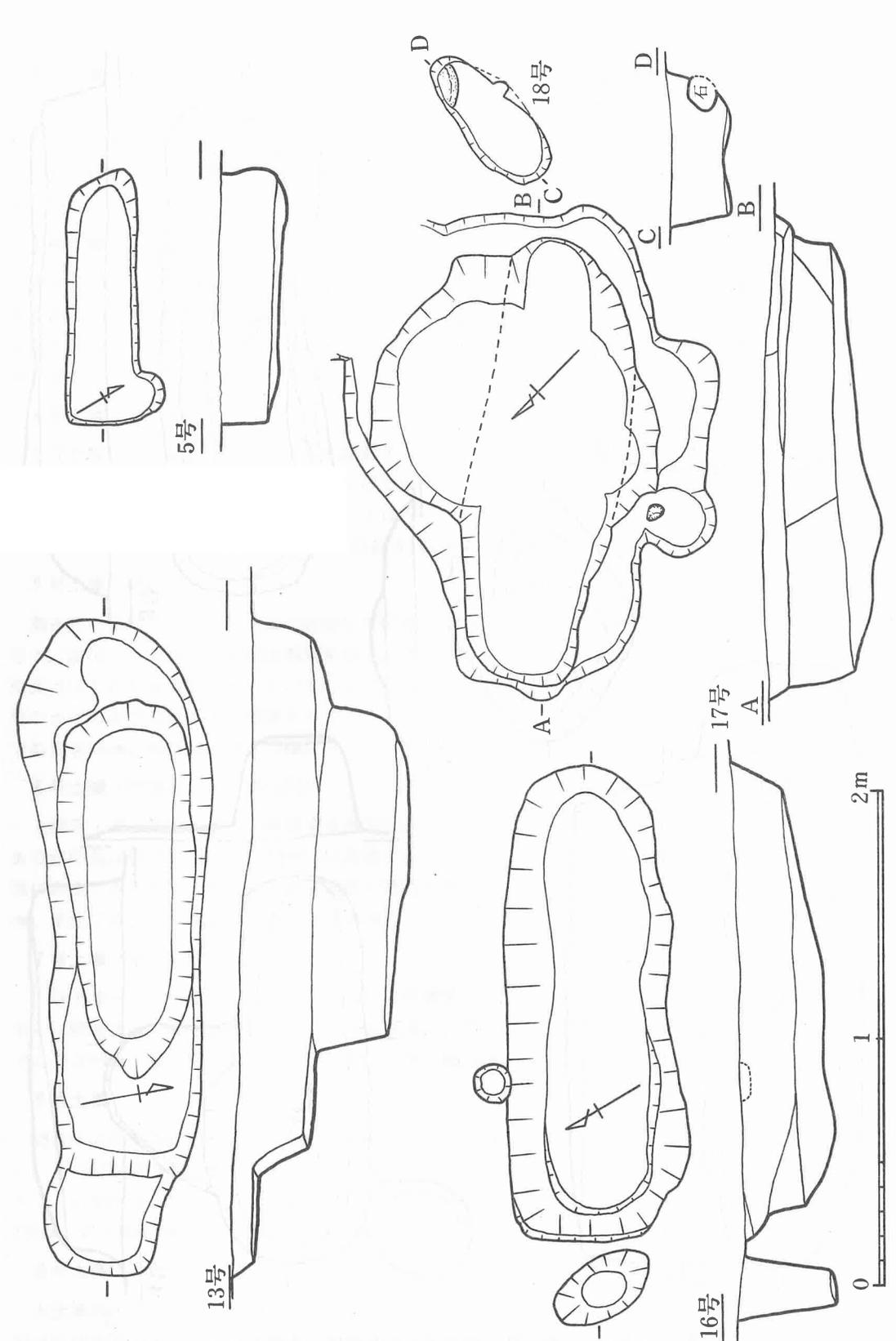
調査区の中央部に直交する大土壙の北西端に位置する。頭位は南を指し、床面に枕石状の礫を置く。小口部が彎曲し、長辺が直線状を示す端正なプランである。明らかに大土壙の埋土を掘込んだのちさらに地山まで切込んでいる。壁面はやや上方に開き、床面はほぼ水平である。掘込上面での長さ220cm、最大幅40cm、床面での長さ153cm、幅30cm、深さ52cm。

9号土壙

大土壙の中央部南側に位置し北側を切られる。プランは不定形な長円形で頭位は南とみられる。床面はほぼ水平であるが足位にゆるく傾斜する。北側大土壙に近い床面より副葬品とみられる石器が検



第 68 図 C 地区第 3 調査区土坑実測図 (その 1)



第 69 図 C地区第3調査区土坑実測図(その2)

出された。最大幅50cm、深さ27cm。

10・11号土壙（図版第二一）

大土壙南西部の主体をなし重複する。上面の掘込は両者に共通するほぼ東西方向の楕円形のプランで、断面は北側でゆるく南側は急に落ち込む。11号の床面のほぼ中央と西端に安山岩の礫が置かれている。床面は両者ともほぼ水平で、レベル差はほとんどない。頭位ははっきりしない。深さ42～49cm。

12号土壙（図版第二一）

大土壙のほぼ中央に位置する。主体は大土壙の南側壁に偏し、頭位は北西を指す。床面は10・11号土壙より35cmほど低い。上面掘込の壁面は垂直に近く途中段をもって主体を設けている。床面での長さ160cm、幅30cm、深さ90cmと大型で土壙中最も深い。

13号土壙（第69図）

大土壙の北側に主軸をほぼ平行して位置する。頭位は西を指し、掘込の壁面は東側で三段、西側で二段をなし、掘込面に比して床面の規模は小さい。掘込上面での長さ265cm、最大幅70cm、床面での長さ125cm、幅35cm、深さ75cm。

14号土壙（第69図）

大土壙東側の北、調査区の東南縁にかかり未掘部を残す。上面は円形に近く大まかな掘込で主体は10号土壙に平行する。頭位は不明である。発掘部最大幅120cm、床面での幅40cm。

15号土壙

14号土壙と10・11号土壙の間にはさまれて位置し、南東に未掘部を残す。上面の掘込は主体の長軸方向に広がるものとみられる。頭位は不明である。既掘部最大幅70cm、床面での幅40cm。

16号土壙（第69図）

2号石棺の北に隣接し平行する。床面は頭位が低く足位に向かってゆるく上向する。頭位は北東を指し、副葬品とみられる土器を埋置した深いピットが近接する。さらに頭位の東側に浅い小ピットがみられるがこれは土壙に伴うかどうかは不明である。なお、北東ピット内の土器は保存状態が悪く計測不能であった。掘込上面での長さ192cm、最大幅66cm、床面での長さ171cm、幅50cm、深さ36cmと規模は大きい。

17号土壙

1号石棺の南側に直交して位置する。二次的な掘込のため上面・床面ともにプランが乱れている。頭位は北西を指し、床面は16号土壙と同様に頭位が深い。土壙内より姫島産黒曜石製の石器が検出された。掘込上面での長さ185cm、床面での長さ176cmと大型に属する。

18号土壙（第69図）

17号土壙の南側に主軸を東西にとる小型の土壙である。本調査区の中では規模において最小値を示す。壁面はほぼ直に落ちる。東側壁面の礫は土壙に伴うものでなく地山中のものである。幼児用の土

墳とみられる。掘込上面での長さ63cm、最大幅25cm、床面での長さ56cm、幅23cm。

19号土壌

17号土壌の東に掘込上面を切合う。西側は未掘で全体の形状は不明であるが、ほぼ長方形に近いとみられる。主軸は2号石棺に平行する。床面の幅は74cmと土壌中でも最も大きな値を示す。

土壌内出土遺物 (第70・72図)

2号土壌内出土土器 (第72図3)

(3)は口縁部が外反気味で、直下に刻み目のあるぼってりとした突帯をめぐらす下城式の甕形土器である。口径は約33cmを測り、色調は外面黒褐色、内面黄褐色を呈す。調整は器面剝落のため不明であるが、胎土に砂粒を混入し、焼成は良好である。

4号土壌内出土土器 (第72図1)

(1)は口縁部内側が少し彎曲気味に外反する甕形土器で、口縁端下部に刻み目を施している。色調は茶褐色、調整は器面剝落のため不明、胎土は砂粒混入し、焼成良好である。

17号土壌内出土土器 (第72図2)

(2)は壺形土器の口縁とみられ、鋤形口縁で上面は平坦をなす。口径約29cm、内側21cmを計る。色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明、胎土・焼成良好である。

9号土壌内出土石器 (第70図3)

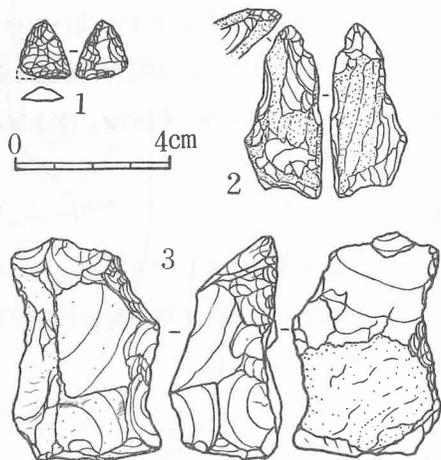
大土壌に近い床面より検出された硅化木質の搔器である。断面ほぼ三角形を呈し、刃部には使用痕とみられる摩耗と細かい剝離面がみとめられる。長さ5.8cm、幅3.6cm、厚さ2.5cm。出土状況からみて単なる混り込みとは考えられず、副葬品の可能性が強い。

17号土壌内出土石器 (第70図2)

姫島産黒曜石製の揉錐器とみられる石器である。素材は小角礫を利用し、二次加工はその一端を尖

鋭化した程度であり自然面を多く残す。

長さ4.0cm、幅2.0cm、9号と同様副葬品と考えてよい。



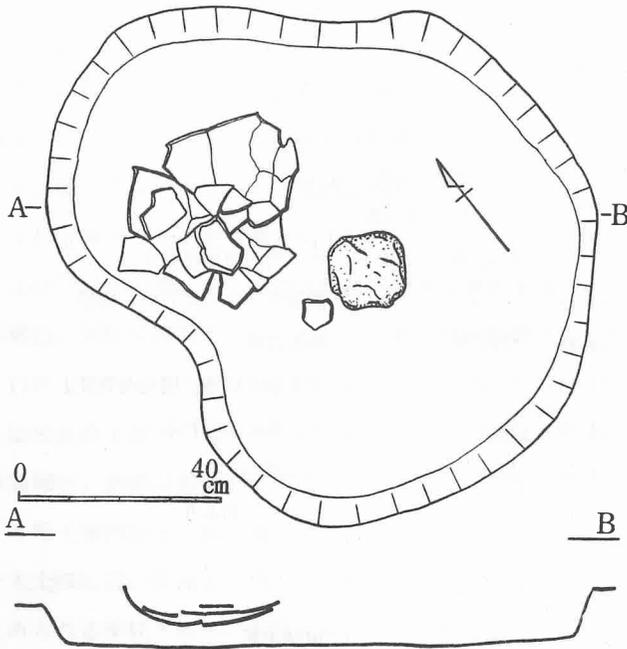
第70図 C地区第3調査区墓墳内出土石器実測図

台ノ原遺跡C区埋葬遺構一覧

| No. | 主体 ()内は 号数 | 掘込上面 | | 床面 | | 床面高(m) (仮B.M.30. 0のとき) | 方位 | 頭位 | 備考 |
|-----|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------------------|-------|------|---------------|
| | | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | | | | |
| 1 | 石棺(1) | 227 | 157 | 157 | 27 | 33.72 | N46°E | SW | 足部の側石は省略 |
| 2 | 〃(2) | 260 | 105 | 165 | 27 | 34.15 | N62°W | NE | 足部の側石と小口は省略 |
| 3 | 壺棺(1) | 60 | 45 | — | — | 34.55 | N45°E | | 単棺 |
| 4 | 〃(2) | 80 | 66 | — | — | — | N53°E | | 〃 |
| 5 | 土器蓋土壇 | 68 | 47 | — | — | 34.52 | | | |
| 6 | 土壇(1) | 196 | 65 | 180 | 48 | 34.20 | N29°E | SW | |
| 7 | 〃(2) | 163 | 47 | 153 | 34 | 34.25 | N42°E | E(?) | |
| 8 | 〃(3) | 206 | 92 | 155 | 32 | 34.23 | N31°E | SW | |
| 9 | 〃(4) | 156 | 55 | 147 | 40 | 34.20 | N20°E | S SW | |
| 10 | 〃(5) | 103 | 30 | 96 | 21 | 34.30 | N60°W | SE | カギ形の突出部をもつ |
| 11 | 〃(6) | 60 | 31 | 62 | 32 | 34.45 | — | — | 貯蔵穴(?)長方形、袋状 |
| 12 | 〃(7) | 99 | 75 | 75 | 54 | 34.42 | N29°E | | 断面盆状 |
| 13 | 〃(8) | 220 | 40 | 153 | 30 | 34.13 | N14°E | S | 大土壇を切る。枕石を有す。 |
| 14 | 〃(9) | — | — | — | — | 34.39 | N 8°E | | 大土壇に切られる |
| 15 | 〃(10) | — | — | 100 ~150 | — | 34.13 | N75°W | | 大土壇内 |
| 16 | 〃(11) | — | — | 100 ~150 | — | 34.19 | — | | 〃 石あり |
| 17 | 〃(12) | — | — | 160 | 30 | 33.80 | N74°W | | 〃 |
| 18 | 〃(13) | 265 | 70 | 125 | 35 | 33.98 | N80°W | | |
| 19 | 〃(14) | — | 120 | — | 40 | — | — | | 東側未掘 |
| 20 | 〃(15) | — | 70 | — | 40 | — | — | | 〃 |
| 21 | 〃(16) | 192 | 66 | 171 | 40 | 34.10 | N62°W | NW | 頭位に小ピットあり |
| 22 | 〃(17) | 185 | — | 176 | 50 | 34.14 | N39°W | NW | |
| 23 | 〃(18) | 63 | 25 | 56 | 23 | 34.34 | N86°W | E | |
| 24 | 〃(19) | — | 92 | — | 74 | | | | 東側未掘 |

溝状遺構

調査区の北側をほぼ東西方向に斜断する。幅 60~100 cm、深さ 30~40 cm、断面は浅い U 字を呈する。床面のレベルはほとんど差は認められない。先の埋葬遺構群との間に若干の空白があり、性格不明の柱穴、ピットが散在する。位置からみて埋葬遺構の北を面する遺構と推定されなくもない。溝内より遺物はほとんど検出されなかったが、時代は埋葬遺構に並行するとみられる。



第71図 C地区第3調査区1号竖穴実測図

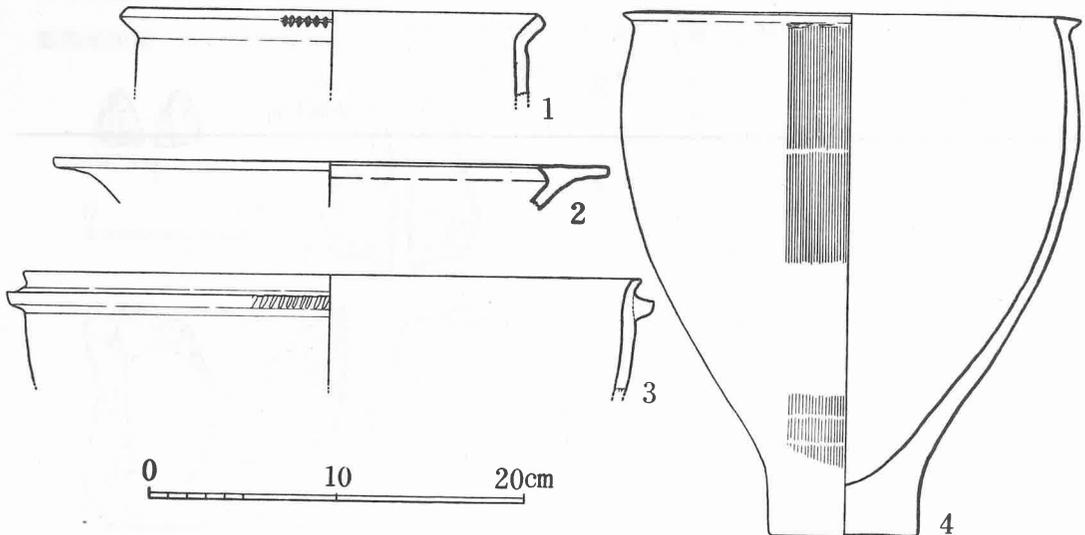
1号竖穴 (図版第二三、第71図)

溝状遺構のすぐ北側に接する不定形な円形プランの竖穴である。上面は長径 115 cm、短径 85 cm、深さは検出面より 25 cm と浅い。壁面は上方に開き、床面はほぼ水平である。床面より約 10 cm ほど浮いた状態で甕形土器一個体と床面に接して安山岩扁平礫が検出された。

1号竖穴出土土器

(図版第二三、第72図4)

(4)は口縁部に断面三角形の突帯を貼り付け、胴部は張り気味の甕形土器である。口径 24.4 cm、器高 27.6 cm

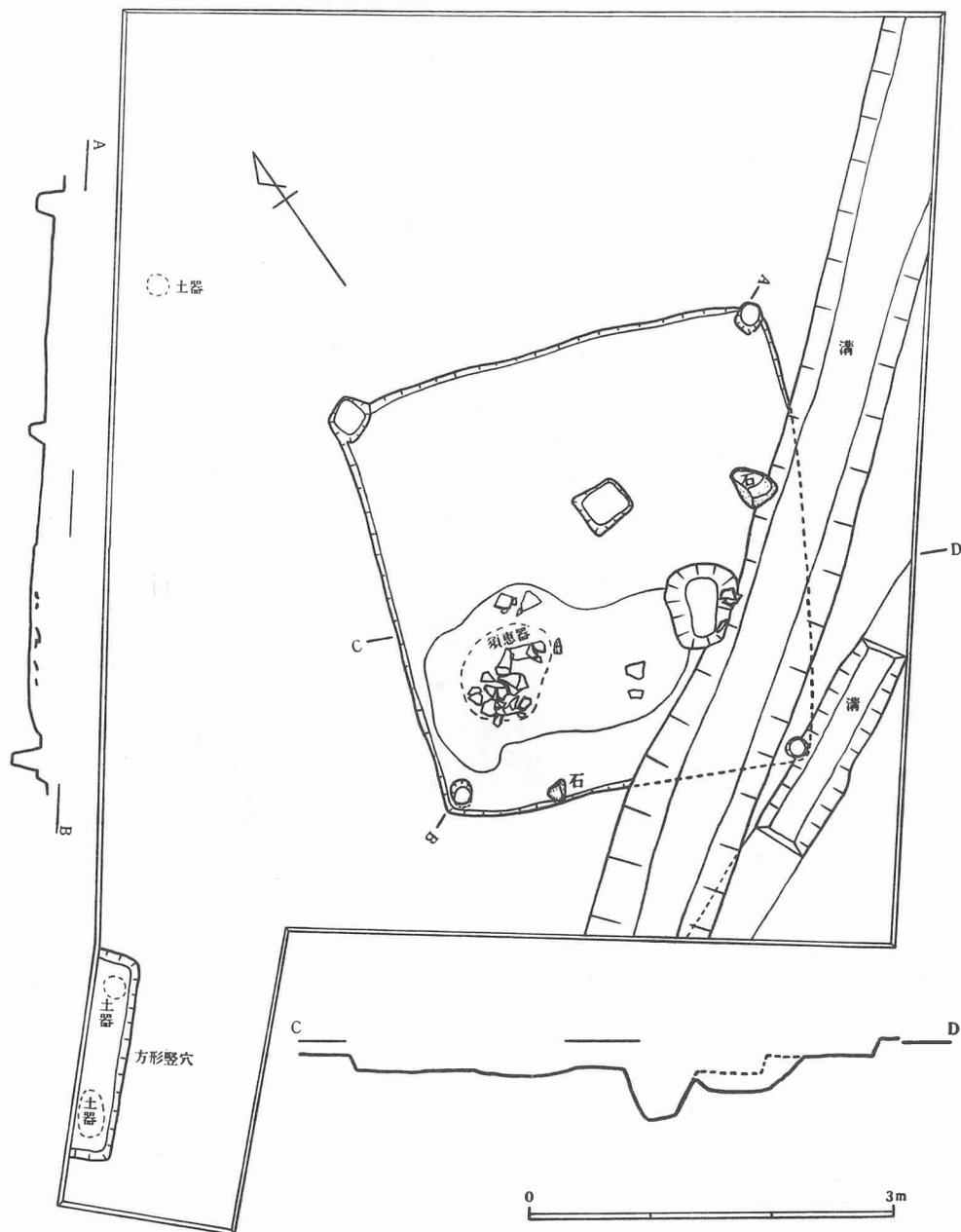


第72図 C地区第3調査区出土土器実測図

底部（平底）径 8 cm を測る。色調は黄褐色、下半部は赤褐色に変わる。調整は外面刷毛目、内面は横ナデによる。時期は弥生中期初頭の城ノ越式に相当するであろう。

(4) 第 4 調査区

竪穴住居跡（図版第二二、第73図）

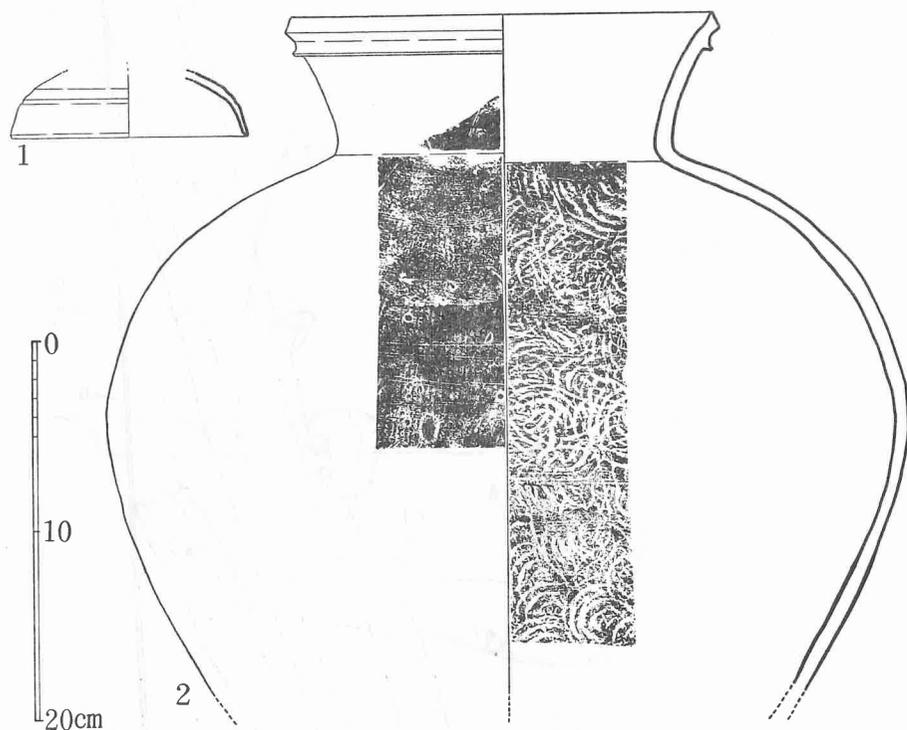


第 73 図 C 地区第 4 調査区実測図

調査区のほぼ中央部に位置する古墳時代の方形竪穴住居跡である。竪穴の南東部は溝によって切られているが全体の観察にそれほど支障はない。北辺3.6m、西辺3.5mのほぼ正方形をなす。弥生包含層下部の黄褐色土を掘込み、上面は地形にそって北側が約10cm南より低い。周溝はなく柱穴は四隅と中央やや北寄りに認められる。中心部の柱穴は方形プランで四隅のものに比べ大きく浅い。溝に切られる部分にも楕円形ピットがみられるが、須恵器を伴い形状からも柱穴とは認めがたい。

竪穴内南側は長径2.2m、短径1.4mの不定形な浅い掘込みがみられ、須恵器の壺と杯が検出された。南側壁と東側壁に接して安山岩礫が認められた。かまどの存在は確認できなかった。床面は南側掘込面より25cmと浅いが、これはすでに上面がカットされたためであろう。

住居跡内出土須恵器（図版第二三、第74図）



(1)は坏蓋、復原口径12.6cm、胎土は砂粒混入、焼成は良好で灰色を呈す。外面はへら削りの後、横ナデによって仕上げられている。肩部に段を付ける代りに、沈線状のものを施している。口縁端部は丸味をもっている。

第74図 C地区第4調査区住居跡出土須恵器実測図

(2)は甕、復原口径22.2cm、胴部径42.6cm、現存高36cm（復原高約46cm前後）、焼成は良好で青灰色を呈す。口縁端部外面に口唇状突帯を貼りつけ、口縁部外面に1ヶ所へらによる刻線がみられる。体部外面に浅い平行線叩目、内面に深い同心円叩目を残し、内、外面共に叩目の上から、カキ目調整を施している。胴部外面の一部に自然釉がみられる。

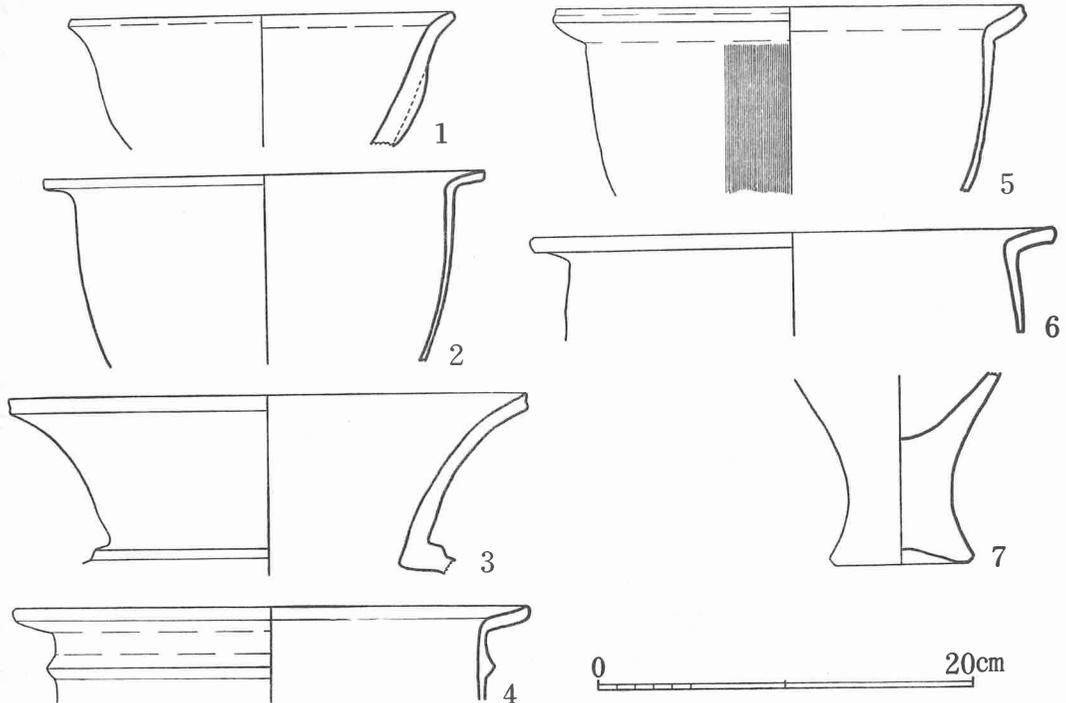
1、2共に6世期後半の時期であろう。

方形竪穴

竪穴住居跡の南西に位置する。方形竪穴とみられるが長さ1.7mの一辺の他は未掘であり遺構の性

格は不明である。内部よりまとめて弥生時代中期の土器が検出された。

方形竪穴内出土土器 (第75図 1~7)



第75図 C地区第4調査区方形竪穴出土土器実測図

(3) 壺形土器、口径37.6cmで、口縁部は朝顔状にひらき、口縁端が凹んでいる。頸部には緩やかな断面三角形の突帯をめぐらし、胎土、焼成共に良好、色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。

(2)、(4)~(6)は甕形土器、(2)、(6)は口縁がL字形に外反し、器壁は薄く、胎土は砂粒混入、焼成は良好。調整は器面剝落のため不明である。(2)は口径23.4cm、色調は黄褐色、(6)は口径28cm、色調は暗褐色を呈す。(4)は口径27.8cmで、口縁部が鋭角に外反して、口縁内面が彎曲気味である。口縁下に断面三角形の突帯をめぐらす。胎土、焼成、調整は(2)と同様である。(5)は口縁部が立ち気味に外反し、口縁内面が彎曲して、口縁端が凹んでいる。胎土、焼成共に良好、色調は黄褐色、調整は外面刷毛目、内面ナデ仕上げである。

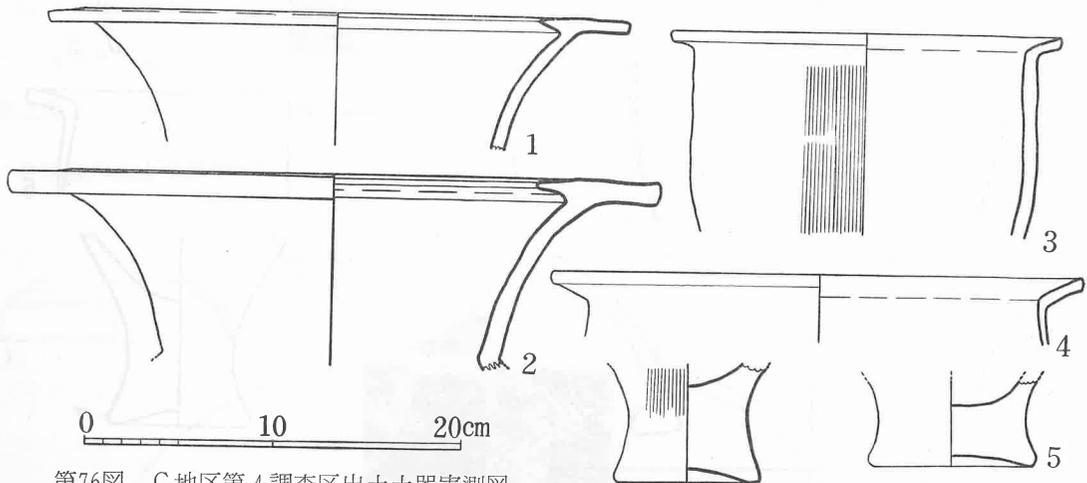
(1)は鉢形土器口縁部が短かく外反し、口径20.2cmを測る。胴部は粘土で肥厚させている。胎土は砂粒混入、焼成は良好、色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。

(7)は底部径7.6cmの上げ底で、胎土に砂粒混入、焼成良好。色調は外面赤褐色、内面黄褐色。調整は器面剝落のため不明である。

方形竪穴内出土の土器は、城ノ越タイプを中心とするもので、中期前半に属する。

包含層出土土器 (第76図 1~6)

第4調査区の表土下遺構検出面までに発見された土器で調査区北西にまとまって出土をみたものである。(8)、(9)は壺形土器、鋤形口縁で、口縁上面は平坦気味であるが、幾分脹らませている。胎土は砂粒混入、調整は器面剝落のため不明、(8)の口径は外側39cm、内側31.6cm、口縁断面厚1.1cm、色調は、外面赤褐色、内面黄褐色、(9)の口径外側35cm、内側31.6cm、色調は黄褐色、口縁断面厚は、(8)よりも薄くなる。



第76図 C地区第4調査区出土土器実測図

(10)~(12)は甕形土器、(10)の口縁部は跳ね上がり気味で、口径27cmを測る。器壁は薄手である。胎土は砂粒混入、焼成は良好、色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。(11)の口縁部は短かく外反し、口径20.6cmを測る。色調は赤褐色、調整は外面刷毛目、内面ナデによるもので、胎土、焼成は(10)と同様。(12)の口縁部L字形に外反する。色調は暗褐色、胎土、焼成、調整は(10)と同様である。

(13)、(14)共に上げ底の底部で、(13)は底部径7.8cm、色調は赤褐色、調整は外面刷毛目、内面ナデによる。(14)は底部径9cm、色調は黄褐色、調整は器面剝落のため不明である。包含層の土器も城ノ越タイプを中心とし、須玖式系のものを混じえるものである。

溝状遺構

方形竪穴住居跡の南東部を切って南西—北東方向に大小2本の溝が検出された。大きい方の溝は幅0.75~1.0m、深さ0.3mの幅広のU字形を呈す。小さい方は幅0.4m、深さ0.35mのU字形を呈する。互いに住居跡のすぐ南で交叉するが切合いの先後は不明である。いずれも谷筋とほぼ併行し北東に向けて傾斜する。溝内より遺物の出土をみないため時期不明である。

小 結

C地区は台ノ原遺跡の全体の中で北東部にあたり、周辺の地形からみて居住地に適する平坦地には恵まれていない地域である。それでも4つの調査区からは、弥生時代中期の竪穴住居跡、竪穴、柱穴群、埋葬遺構群、溝状遺構と古墳時代後期に属する竪穴住居跡、溝状遺構という大きく二つの時期の

多様な遺構を検出することができた。とくに第3調査区に集中した埋葬遺構群は弥生期における台ノ原遺跡の墳墓地帯の一部にあたりとみられ、同一時期の住居跡をふくむA地区と密接に関連する遺構と考えられる。第1調査区の大形の柱穴群はほぼ2mの柱間をもつものが抽出される。これは規模、形態からみて隣接第2調査区の掘立状柱穴に共通するものである。

また弥生中期の竪穴住居跡とみられる遺構からは当遺跡では数少ない磨製石剣、石ノミが発見されている。

第2調査区の円形竪穴住居跡は南半分を欠くが、北側に2つの方形袋状竪穴を伴うとみられ、弥生時代中期に属する。これらの遺構と重複する柱穴群は弥生時代後期の土器底部のほか時代の決め手はないが、柱心間2mの6コあるいは9コの掘立状の建物が想定される。この柱穴群の北8mおよび西5mに東西、南北の軌を同じくしたやや小型の柱列があたかも掘立状柱穴群を囲むように位置する。また北側の東西の柱列の東に並ぶ杭列もあわせて柱穴群と一連の遺構と推定される。柱心間2mをもつ3コ2列を単位とする掘立柱穴群の例が福岡県野黒坂遺跡で3基確認されており、時期もほぼ共通するとみられる。ともかく、第3調査区の埋葬遺構群と北側で接するところから弥生時代中期における台ノ原遺跡の住居地帯の北東の限界を示すものとみられる。

第3調査区は主として弥生時代中期の埋葬遺構に限られる。墓壙は土壙を主体とするもので、石棺、壺棺各2のほかは類例の少ない土器蓋土壙1が検出された。各墓壙の時期は副葬の土器を伴うものが少なく、その比定は主として壺棺と土器蓋に拠ったが土壙をのぞいては切合いがみられないため、弥生時代中期中葉の短期間に営まれたとみてよい。土壙は形態と切合いからみて若干の時期差が考えられる。墓壙の方位は北西～南東のもの10、北東～南西のもの5、北～南2、その他となり前二方向が主を占める。頭位の方向をみれば5号土壙以外は西～南に向くもので、北～東向きのもは皆無に等しい。顕著な副葬品はみられなかったが、2号、4号、17号土壙に土器片、1号石棺、9号、17号土壙より石器が検出されている。さらに2号石棺、14号、16号土壙の頭位に近接して小ピットが確認された。とくに16号土壙のものはほぼ1個体の土器を埋置したもので墓壙に伴うことは確実とみられる。また土器蓋土壙の西南に隣接する袋状土壙は明らかに副葬用の貯蔵穴と考えられる。また墓壙床面の長さが被葬者の身長をほぼ示すとみて、150cm以上9、100～150cm 4、100cm以下（壺棺を含む）5の大別はほぼ成人、小児、幼児の区別の目やすになると思われる。ともかく、方位の統一性と切合いの少ない点からして、短期間の整然とした墓地構成であることを示すものである。

第4調査区は弥生時代中期のまとまった土器を出土した方形竪穴と古墳時代後期に営まれた竪穴住居跡と溝が検出された。住居跡はA地区1号、2号住居跡に規模形態とも共通する。しかし住居の立地としてはやや不適当な地域にあり、同時期の住居跡としては最も端部のものとみられる。

(清水宗昭)

① 福岡県教育委員会編『野黒坂遺跡』「福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970

IV D地区の調査

D地区は台ノ原遺跡の調査範囲のうち、西北端にあたるが、地形的には台地の中央部に位置する。道路の拡幅工事に伴う調査であるため、東南に細長い調査区を設定した。その東端部は**C地区**（高校取付道路建設に伴う調査）と、中央部は**A地区**（高校建築に伴う基礎調査）にそれぞれ隣接している。宇佐市では、台地中央部東西に走る市道を拡幅、整備して市立西部中学校の通学路として充実させることとなった。このため宇佐市教育委員会では、大分県教育委員会の協力を得て、昭和47年1月7日より1月23日まで緊急調査を行った。調査範囲は、高校と中学の間の約300m間の道路沿いを対象とした。しかし西側の中学校寄りはずでに造成が進んでいた。また二校間には浅い鞍部がみられたが、すでに赤土の地山が露出しており、遺構が遺存する可能性は薄かった。したがって調査は鞍部より東側に限定された。解説にあたっては、東西に細長い調査区を中央平坦部と周辺傾斜部に区分した。

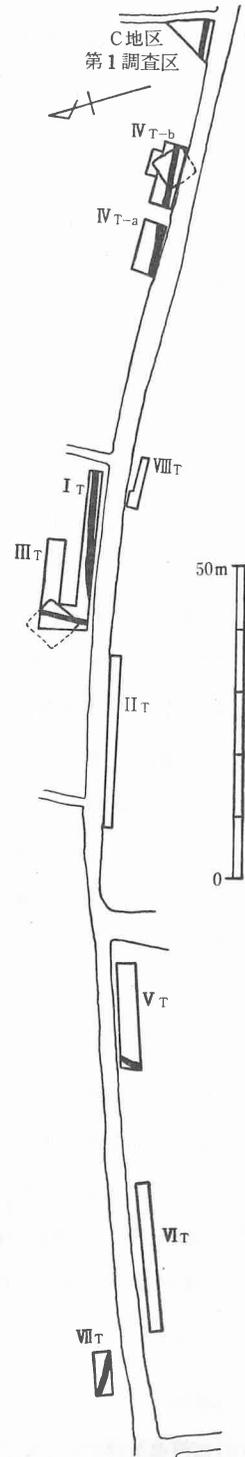
調査の概要

地形的に中央平坦部と周辺傾斜部に分けることができるが、遺跡の様相の上でとくに異なるところはない。遺構の密度は高く住居跡、断面U字状の溝、柱穴群などを主体とする。遺物は弥生中期中葉を中心とする土器が多く、わずかに七世紀の須恵器なども発見されている。石器も弥生時代のものが圧倒的に多いが、打製石器のなかにはわずかに先土器、縄文時代と認められるものも含まれていた。

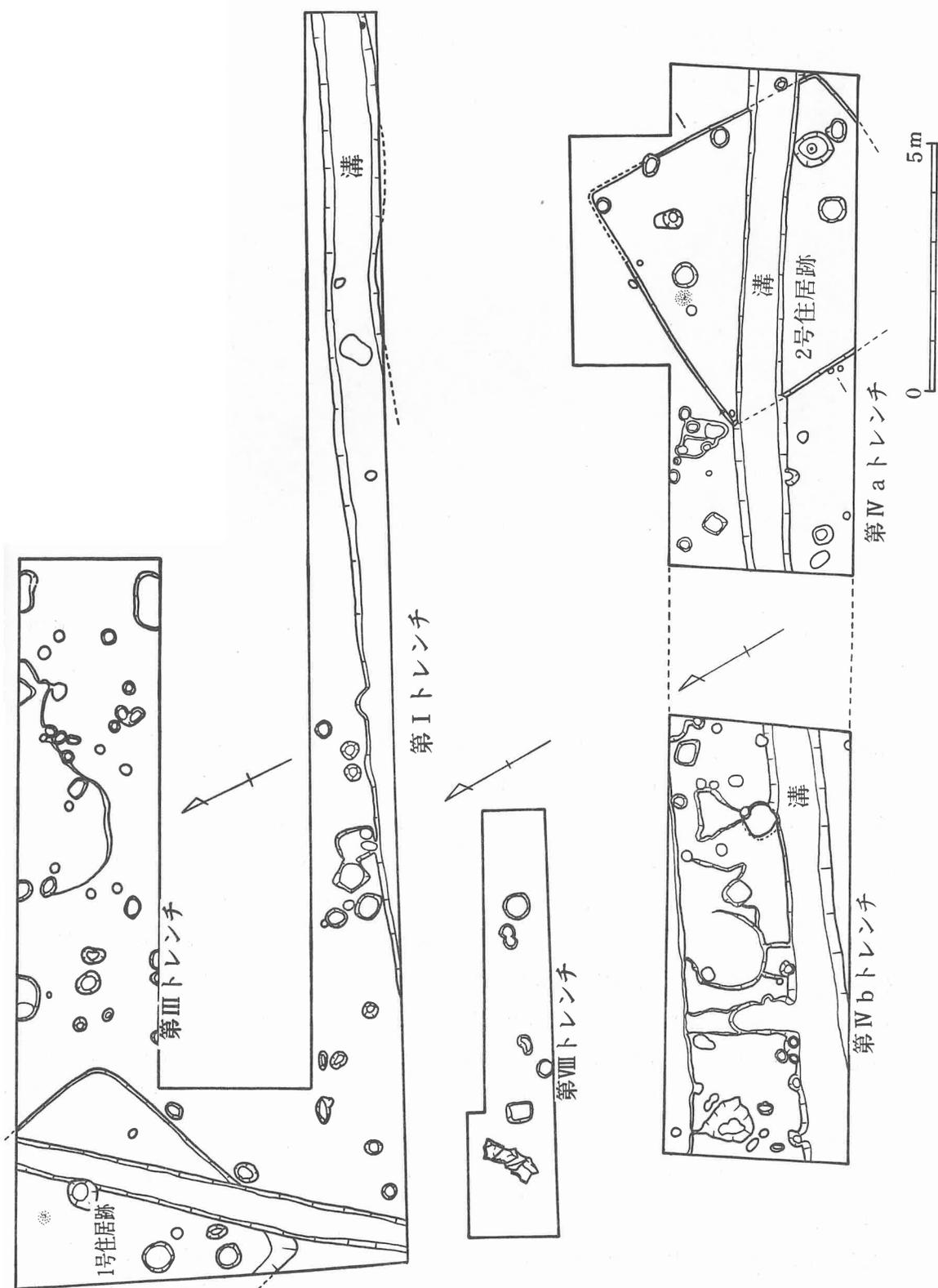
中央平坦部の調査（I・II・III・IV・VIIトレンチ）

高校用地としてすでに削平された地区の北側に接する部分である。道路を挟んで北と南の両面にI・II・III・IV・VIIの各トレンチを設定したが、とくに中心部には道路工事対象地外にもトレンチを加えて、面的把握も行った。A地区同様、土地利用度の高い台地中央部であるため、遺跡の保存状態は良いとはいえない。

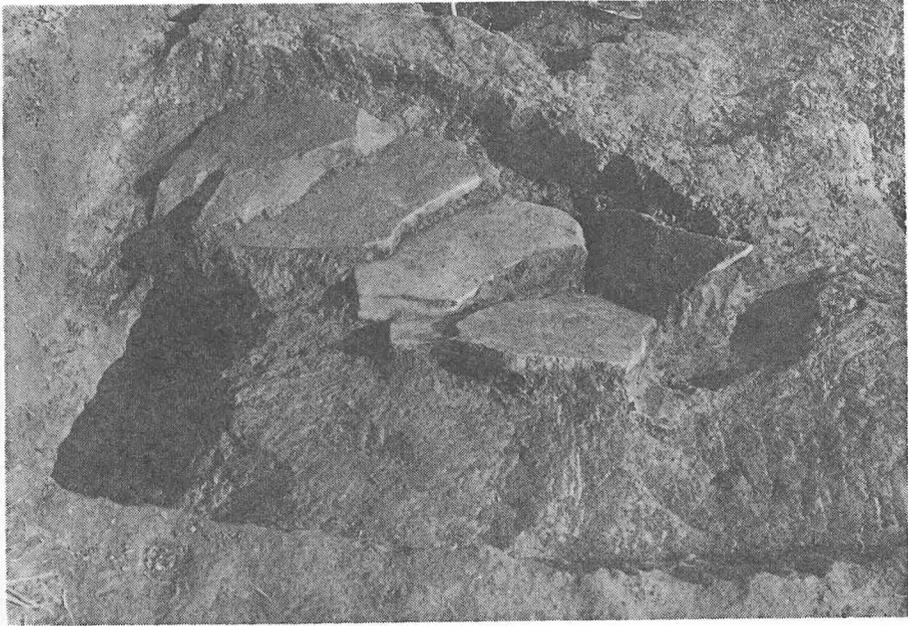
第IIIトレンチと第IVトレンチにおいて、それぞれ一基ずつ住居跡の一部を発見することができた。これら住居跡の現存する壁の高さは4cmと低く、当地域が開拓などによってかなり地表面を削平されていることが知られる。他に住居跡らしき遺構も3~4基確認されているが、



第77図 D地区調査区位置図



第78図 D地区調査区遺構実測図



第 79 図 D地区第Ⅷトレンチ石蓋土壌

いずれも明確なプランを遺していない。周辺部各トレンチを含めた柱穴群の存在から当地域が居住地域であったことが明らかになった。遺跡の複合関係や各時間内における詳細は不明であるが、弥生時代と古墳時代については明白である。

出土遺物から弥生時代遺跡が主体であるが第Ⅳトレンチにおいて発見された第2号住居跡はわずかであるが、須恵器を伴うものであった。この住居跡はまた、東西に延びる溝と切合っている。

第Ⅲトレンチにおいて発見されている第1号住居跡は弥生時代のものであるが、これは東西に延びる溝と複合している。溝は周辺傾斜部においても発見されており、さらにC地区にも存在していた。いずれも断面U字状をなす同類のものであった。このうち傾斜部の第Ⅶトレンチにおいて、溝の底部に近い部分から須恵器片が発見されており、これを参考にすることができる。遺構としてはこの他柱穴よりやや大形の径30cm~50cm程度の竪穴も多数発見されている。これは円形が多いがなかには方形のものもあり、断面が袋状となって小形の貯蔵竪穴と推定させるものも含まれている。

第Ⅷトレンチにおいて、石蓋土壌と思われるもの一基も確認されている。かつてA地区の調査後、この周辺で石棺3基が発見されたと伝えられるが、この石蓋土壌はそうした墓地の一端をなしていた可能性もある。

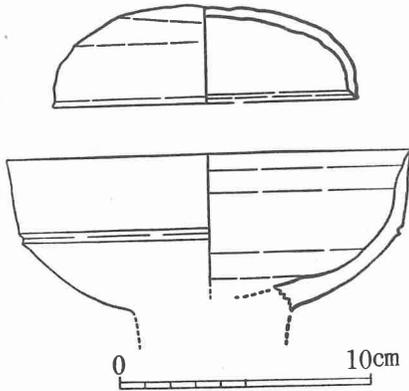
第Ⅴトレンチの西側においては土器の小片が一ヶ所に溜められた状態で発見された。

1号住居跡（第Ⅲトレンチ）

第Ⅲトレンチの西端において住居跡の一角を発見することができたために南側の第Ⅰトレンチとの間を拡張して、方形住居跡の一辺長を明らかにした。計測できたのは南辺で、約5.6mを測った。隅

丸方形プランで中央南寄りと思われる位置に径40cmの柱穴を配している。遺物としては弥生式土器片が多く出土したが、住居跡に伴うとみなし得るのは床面に接していたカメの口縁部のみであった。住居跡の西壁と南壁を交叉する方向には巾80cm現状の深さ30cm程度の断面U字状の溝が延びており、これは第Ⅲトレンチにおいても確認されている。中央東寄りの床面には径20cm程度の柱穴がみられる。出土土器からみてこの住居跡は弥生中期のものである。

2号住居跡（第Ⅵaトレンチ）



第80図 D地区第2号住居跡出土遺物

本調査区のうち最東端にⅣa・bトレンチを設けた。このうちⅣaトレンチにおいて方形竪穴住居跡の二隅を検出することができた。一辺5.6mの正方形プランで主軸をほぼ真北に向けるもので1号住居跡に比べて壁の高さは20～25cmと遺存状態は良好であったが、遺物は多くみられなかった。しかし須恵器片が比較的多く出土しており、なかでも坏蓋の完形品は床面に付着していた（第80図）。坏蓋・高坏の特徴からして6世紀後半の住居跡と考えるのが妥当であろう。なおこのトレンチの中央線上、住居跡の北西角と南東角を交叉する

部分には巾90cm、床面からの深さ20cmのU字状断面をなす溝が確認された。これは道路に沿って西方に伸びており、Ⅳbトレンチの延長に当たる第Ⅰトレンチにおいても確認されている。なおⅣbトレンチではこの溝のさらに北側にももう一本の溝の存在が確認された。

周辺傾斜部（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶトレンチ）の調査

第Ⅴトレンチから第Ⅶトレンチにかけて傾斜している。中央平坦部にみられた住居跡は存在せず、柱穴群が中心である。第Ⅵ、Ⅶトレンチにおいて溝が発見されたが第Ⅵトレンチの溝は深い巾広のもので本遺跡にみられる他の溝とやや異なるものであった。

第Ⅶトレンチにおいて確認されたものはC区より続くと考えられる一連の溝状遺構のうち最西端にあたるが、この溝の底に近い部分から須恵器の壺の胴部破片が発見された。これは弥生中期に比定される1号住居跡と複合し、さらに6世紀後半に比定される2号住居跡とも複合するものであったが前後関係を明らかにすることはできず、結局広範囲にわたる溝の性格を明らかにすることはできなかった。ここではこうした資料の提示にとどめておく。

遺物（図版第二六、第82図）

土器

前述したように、遺跡面の削平、開墾作業が著しいため、遺構単位にまとまった良好な共伴資料は得られなかった。このため遺物の説明にあたっては、本調査区より出土した土器のうち特徴的なもの

についてのみ行うこととする。

甕

第1類（1、2、3、4）

口縁縁部が「く」字形に外反するものであるが、口唇部には特徴はみられない。口縁部のやや下に細い沈線を有するもの(1)、そうでないもの(2)、直下に一条の三角突帯を有すもの(3)(4)に分けることができる。器面には突帯ないし口縁部以下にハケ目調整が施され、他の部分は横ナデ仕上げがなされている。

第2類（5、6、7）

第1類とともに最も多く出土している。口縁部の特徴は、Ⅰ類と大きな違いはない。しかし口唇部がわずかに立上がる、いわゆる跳ね上がり口縁といわれるものである。(4)から(6)にかけて跳ね上がりの度合が著しくなる。Ⅰ類同様、口縁部直下に三角突帯を有すもの(5)(7)とそうでないものに分けられる。(6)(5)は口唇部の跳ね上がりは顕著でなく、逆に口縁部が内側に伸びる鋤先状口縁の特徴を有している。Ⅰ類同様、ハケ目と横ナデがみられる。

第3類（8、9、10、11）

口縁部断面の接合部が厚く三角形をなすもの（8、9、10）と、口縁部が内と外側にはり出していわゆる鋤先状を呈するもの(11)である。このうち(10)は「く」字形をなし、口唇部にも立上がりの前段とも考えられる凹線がみられるので、Ⅰ類、Ⅱ類とも共通するが、口縁部の厚み、及び外に向っての伸びがないところからⅢ類に加えた。(8)の内面にヘラ調整が施されている以外は、ハケ目調整である。(11)は薄く端正なつくりである。

第4類（12）

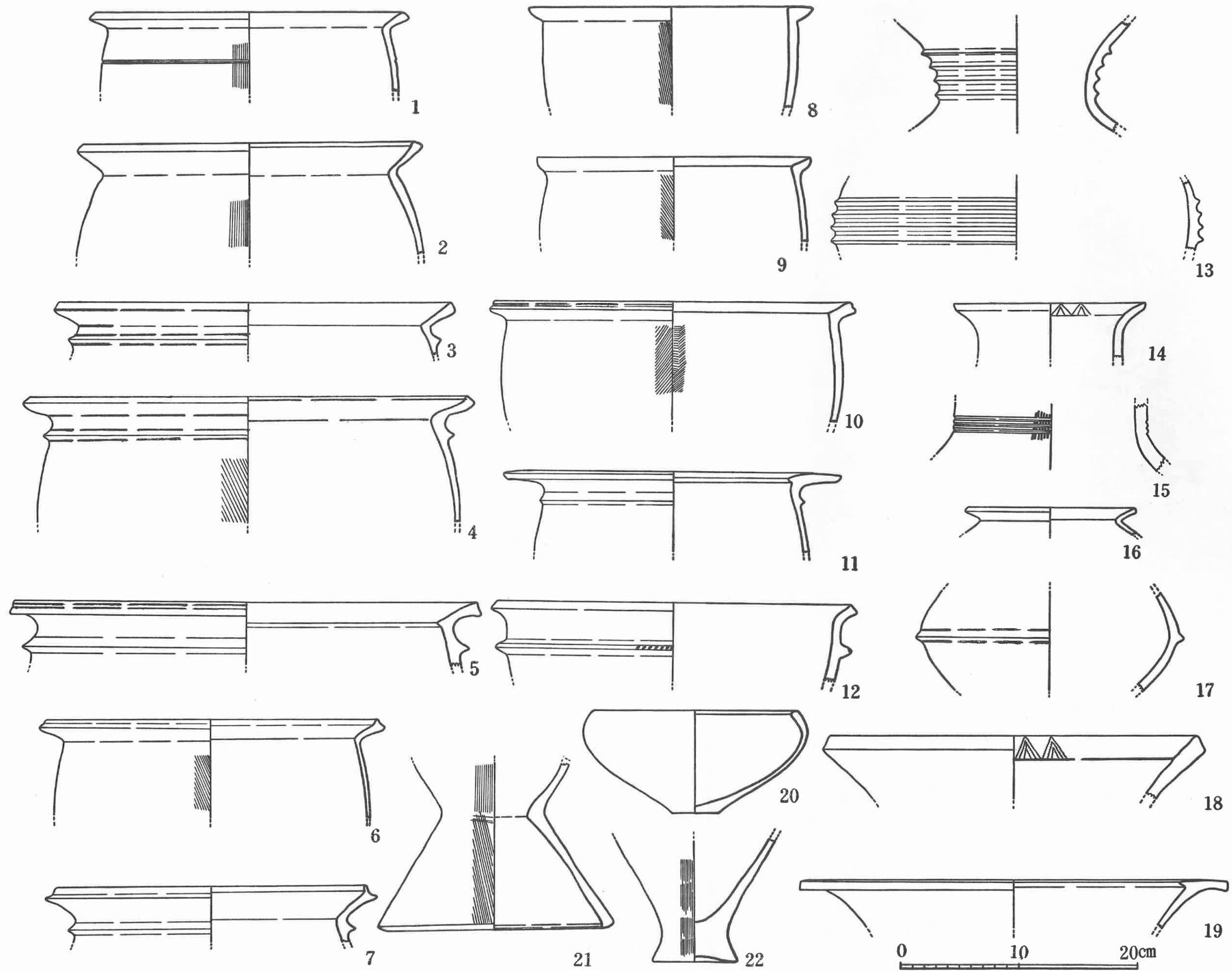
やや外反する口縁部に、刻目の三角突帯が付く。いわゆる下城式甕型土器といわれるものである。この外に口縁部と突帯の両方に刻目がつくもの、刻目がみられないものなども出土している。器面外側は横ナデ、内側はヘラ調整されている。

壺（13、14、15、16、17、18、19）

口縁部の特徴から、外反してのち頸部に向って立つもの(14)(15)、「く」字形に短く外反するもの(16)、朝顔形に開くもの(18)、上縁部が平坦な鋤先状のもの(19)に分かれる。胴部の特徴では、もつともはり出した中央部に一本の三角突帯が付くもの(17)、胴部頸部にそれぞれ四条からなる三角突帯が施されたもの(1)がある。さらに器面に施された文様では、ヘラによる連続山形文(14)と貝殻によるもの(19)があり、また頸部に粗いハケ目調整を行ったのち、その上に三本からなる沈線を入れるものもある(15)。

鉢（20）

本調査区のうち数少い完形品である。丸く内側にそった口縁部から直線的に平底の底部へつづく。器高は8.5cm、口縁部径は16.2cmを測る。

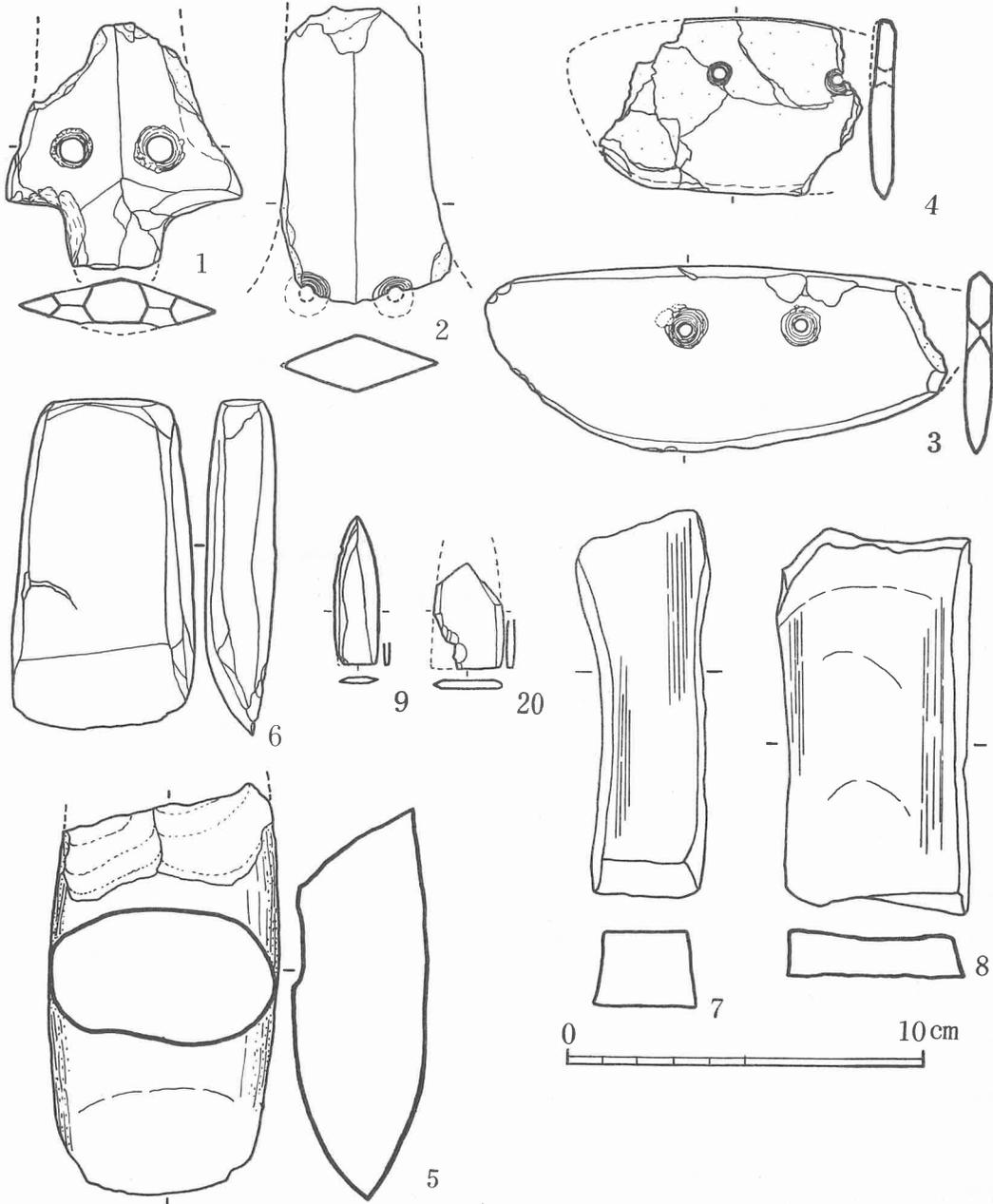


第81图 D地区出土土器实测图

器台 (21、23)

⑳は大形にしては薄く仕上げられている。一部を欠損しているが、くびれ部附近の形状から上端部を欠いたものと思われる。くびれ部より上部にかけてわずかに丸味をもち、下端にかけて直線的に伸びる。器面は内、外ともにハゲ目調整がみられる。㉓は一般的にみられるものでくびれ部を中央より

石器 (図版第二六、第82図)



第82図 D地区出土石器実測図

下においている。手づくね状につくられている。

底 部 (22)

多くの底部が出土しているが、厚手でやや上げ底状をなすこの種のものが多い。

便宜上幾種類かに分類して説明を行ったが、甕形土器(5)、(7)、器台(21)などに弥生中期の末期的特徴がみられるが、ほとんどが中期前半～中葉に比定されるものである。また甕型土器には(13)、(14)、(15)、(18)など瀬戸内の要素の強いものをみることができる。

石 戈 (1、2)

第Ⅳトレンチより出土したもの(1)と、第Ⅰ次調査の後その周辺で採集されていたもの(2)の二点がある。いずれも淡緑色の砂岩を素材に用いておりほぼ同形をしている。(1)が基部を欠損して剣身部を主としているのに対し(2)は末端をわずかに欠く程度で基部を主にのこしている。中央に鑄がはしり断面は均整のとれたひし形をなす。

石 庖 丁 (3、4、12、13、14)

外彎刃半月形をなす3は本調査区附近の表採品である。2は破損したものを再利用するため、穿孔しようとした痕跡がみられる。1、2は普通の大きさであるが、中央部に穿孔を有す小形のものも発見されている(13、14)。いずれもアズキ色の輝緑凝灰岩を石材としている。

磨製石斧 (5、6)

(5)は第Ⅲトレンチ、(6)は第Ⅷトレンチより出土した。(5)は安山岩の粗成なものを素材とした太形蛤刃石斧である。これに対し(6)は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。

砥 石 (7、8)

(7)は第Ⅱトレンチ、(8)は第Ⅴトレンチより出土した。粘板岩と砂岩をそれぞれ用いているが(7)はとくによく使用されており各研磨面の中央部が凹んでいる。(7)は三面が使用されているが、(8)は半折しているので不明である。両側面に研磨のあとがみられるが(7)のように断面正方形にはならず板状のものと考えられる。

磨製石鏃 (9、20)

第Ⅳトレンチより2点出土している。(9)は細身小形の完形品である。(10)はやや大形で先端部を欠く。基部は横すりによって平坦に仕上げられている。

すり 石 (11)

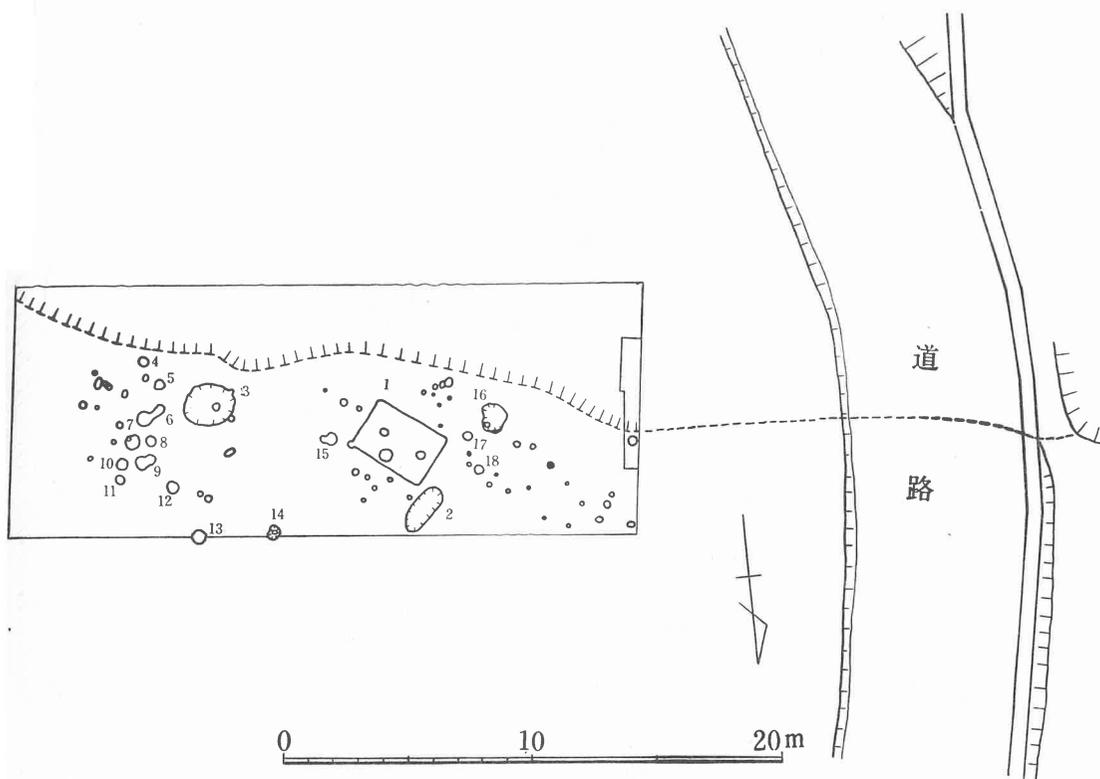
第Ⅳトレンチより出土したものである。安山岩の扁平礫の片面を使用している。

凹 石 (12)

第Ⅲトレンチより出土したものである。安山岩の扁平礫の両面に凹みを有している。

(小倉正五)

V E 地区の調査



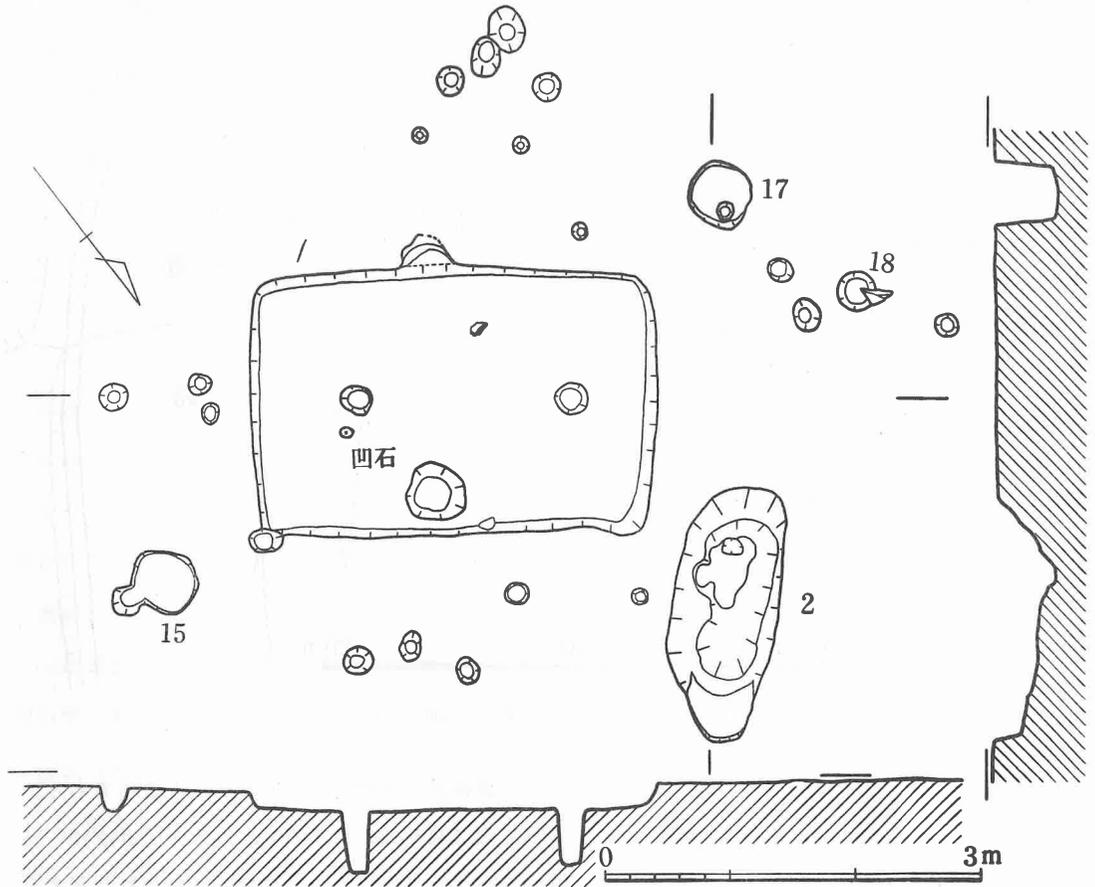
第 83 図 E 地区 平面図

E地区は四日市高校敷地内の西側に位置し、旧地形が調査区の南側で谷地形となる場所である。校舎からの距離約30m、西側を画する道路から8mの位置に調査区の西北隅があたる。広さは10×25mである。調査以前から土器片、炉跡状の部分などが観察されていたが、造成後におおわれた表土を除去すると南側約 $\frac{1}{3}$ は徐々に深くなって崖となることがわかった。検出された遺構は、住居跡とみられる長方形の小形竪穴(1)、長径2m、短径1.7m、深さ13.5cmの皿状竪穴(3)、径1m深さ26cmの円形竪穴(10)、長さ2m深さ30cmの土壇(2)などのほか多数のピット群が存在した。ピット群ではとくに直径50cm前後の大きさのものが十数個あって、これらは必ずしも柱穴とは考え難く、むしろ一種の貯蔵施設とみるべき性格のものであろう(4~15、17、18)。

小型竪穴

(1)は主軸長3.25m、幅2.1mを測り壁は高さ約20cmほど遺存する。主軸の方位N53°W。竪穴内部では主軸上に二本の棟持ち柱があり、東南側の外部にもみとめられる。また、外部の南西側中央部にあたる二本の細い柱穴は出入口用のものと考えられる。内部には東北側の壁寄り中央付近に直径50cmほどの浅い凹み穴があって屋内の貯蔵施設とみとめられる。とくに炉跡状に焼けた場所は見当らない。竪

穴内部で発見された遺物は石鏃および凹石が各1個であり、土器は床面ではないが(7)(8)(9)がある。これらは必ずしも適確に住居跡の時期を示しているとはいえないが、住居跡の周辺あるいは小形ピットからの遺物はすべて弥生時代中期の所産であり、この住居跡もほぼ同一の時期のものと考えられる。



第84図 E地区住居跡付近実測図

出土遺物 (図版第二八、第85・86図)

(3~5)はピット9から出土した土器である。口縁部でゆるく外彎して屈曲部に断面三角形の突帯をつける鉢形土器、透孔ある脚台部およびわずかにあげ底になりしかも厚底の特徴をもつ底部がある。

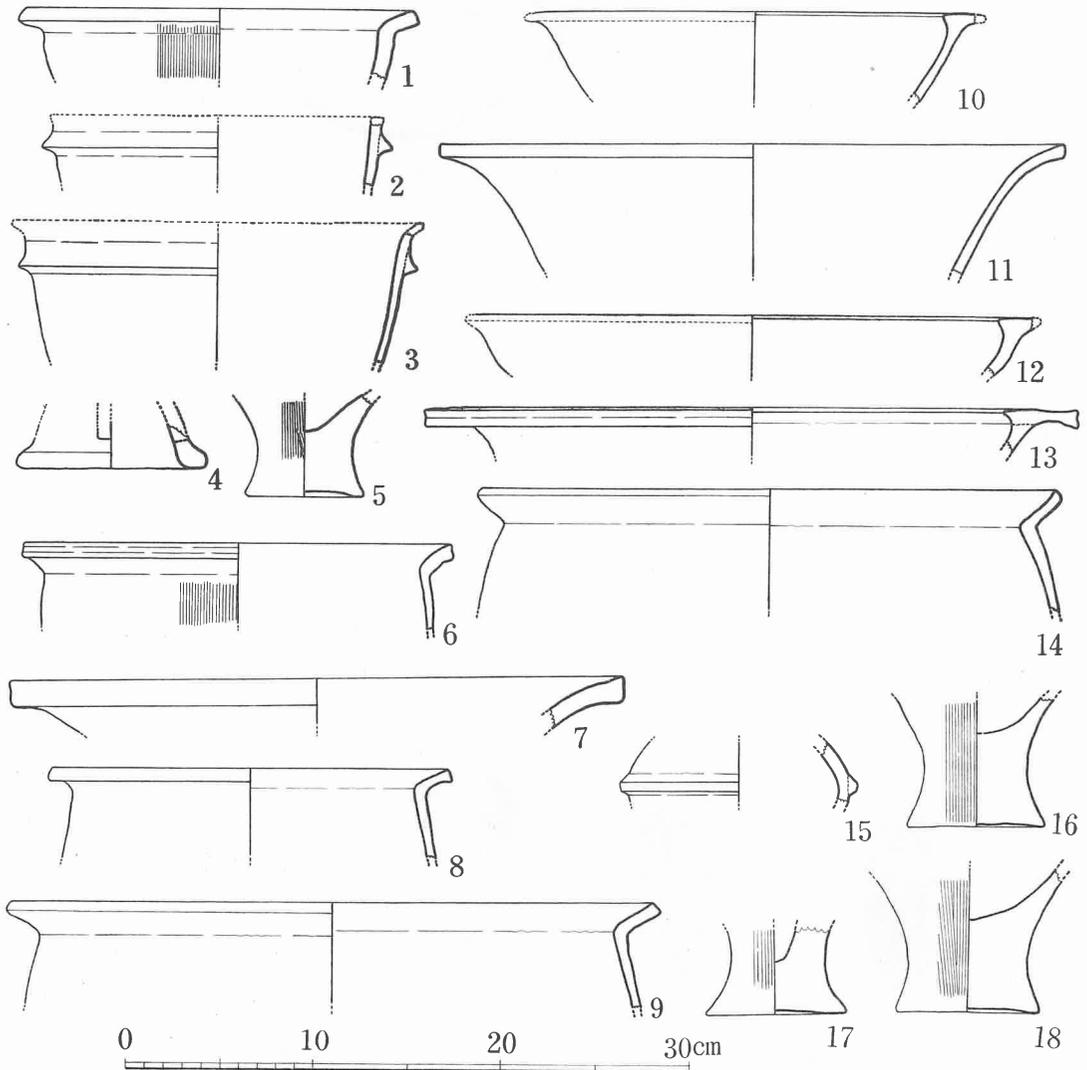
住居跡内上部から出土した(7)(8)(9)は、大きく開いた壺形土器の口縁部と、「く」字状に屈曲する口縁部をもつ甕形土器である。口径21cmと34cmを測り、胴部はふくらむ形態となる。

ピット16から出土した(10)(11)は高坏および朝顔形に大きく開いた口頸部の壺形土器である。高坏の口縁部はいわゆる鋤形口縁に近い形態となる。

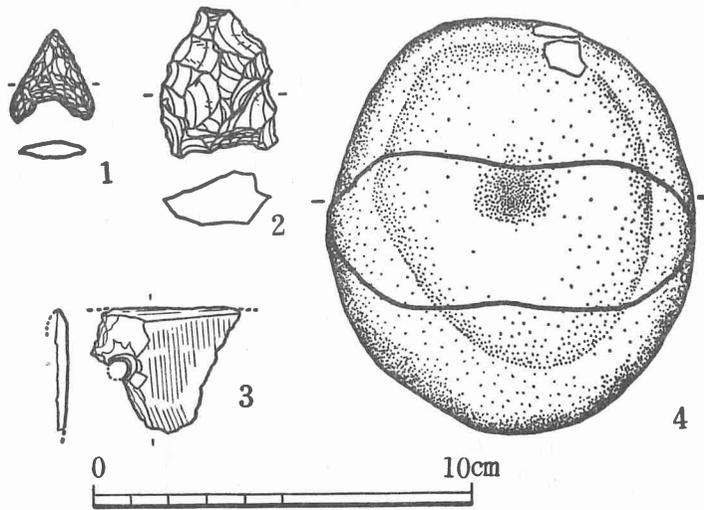
このほか住居跡の周辺から出土した土器には(15)がある。最大径をとる胴部に三角突帯を貼付した小

形の壺形土器で、同種のものがB地区11号竪穴からも発見されている。底部(10)・(18)はいずれも特徴的な厚底の形態となり中期前半の甕形土器のものである。

石器は住居跡(1)内より石鏃(第86図1)と凹石(同図4)があり、ピット(10)より石庖丁破片(同図3)が発見された。石鏃(同図2)は表採資料である。石鏃(1)(2)は姫島産黒曜石を利用したもので(1)は入念な調整がほどこされている。凹石は安山岩の円形礫で両面に凹みをつくっている。長径11cm、短径9.6cmをはかる。石庖丁片は頁岩質の素材を用いたもので表面はよく研磨されている。紐通しの孔がある。
(真野和夫)



第 85 図 E 地区 出土 土器 実測 図

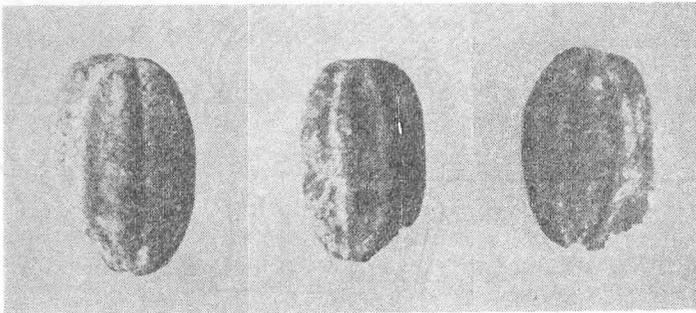


第86図 E地区出土石器実測図

VI 出土炭化米について

B地区第26号竪穴から多量の炭化米が発見されたが、県下ではすでに荻町恵良原遺跡、大分市雄城台遺跡で出土が知られている。資料のうち一部を水洗して九州大学農学部片山平教授の同定を受けた。

コメは外穎および内穎につつまれたいわゆる粃の状態で炭化したもので、大部分のものが胚を欠損している。短粒が多く非常に小さいものもある。できるだけ完全な粒形のもの40粒について測定した



第87図 B地区第26号竪穴出土炭化米拡大写真

結果を下に掲げた。粒長、粒幅、粒厚の平均値はそれぞれ 0.442、0.308、0.212 で、長幅比の平均は1.45である。長幅比2.0以下は日本型のイネに属するといわれており、これらの出土炭化粃も明らかに日本型稲短粒種に属するものである。

出土炭化米計測表

| 長 <i>cm</i> | 幅 <i>cm</i> | 厚 <i>cm</i> | 長幅比 | 長 <i>cm</i> | 幅 <i>cm</i> | 厚 <i>cm</i> | 長幅比 |
|----------------|----------------|----------------|------|----------------|----------------|----------------|------|
| 0.490 | 0.335 | 0.225 | 1.46 | 0.405 | 0.300 | 0.215 | 1.35 |
| 0.465 | 0.310 | 0.200 | 1.5 | 0.465 | 0.305 | 0.240 | 1.52 |
| 0.500 | 0.325 | 0.180 | 1.54 | 0.405 | 0.310 | 0.205 | 1.31 |
| 0.430 | 0.275 | 0.185 | 1.56 | 0.375 | 0.285 | 0.220 | 1.32 |
| 0.460 | 0.310 | 0.215 | 1.48 | 0.465 | 0.310 | 0.200 | 1.5 |
| 0.435 | 0.295 | 0.200 | 1.47 | 0.410 | 0.380 | 0.235 | 1.08 |
| 0.420 | 0.340 | 0.185 | 1.24 | 0.420 | 0.285 | 0.205 | 1.47 |
| 0.515 | 0.315 | 0.220 | 1.63 | 0.405 | 0.325 | 0.225 | 1.25 |
| 0.460 | 0.295 | 0.230 | 1.56 | 0.420 | 0.310 | 0.190 | 1.35 |
| 0.510 | 0.320 | 0.205 | 1.59 | 0.420 | 0.340 | 0.240 | 1.24 |
| 0.470 | 0.275 | 0.205 | 1.71 | 0.395 | 0.280 | 0.220 | 1.41 |
| 0.475 | 0.310 | 0.265 | 1.53 | 0.390 | 0.315 | 0.205 | 1.24 |
| 0.475 | 0.330 | 0.215 | 1.44 | 0.410 | 0.300 | 0.210 | 1.37 |
| 0.435 | 0.265 | 0.175 | 1.64 | 0.430 | 0.335 | 0.205 | 1.28 |
| 0.475 | 0.285 | 0.205 | 1.67 | 0.445 | 0.295 | 0.195 | 1.51 |
| 0.475 | 0.325 | 0.210 | 1.46 | 0.450 | 0.280 | 0.195 | 1.61 |
| 0.450 | 0.325 | 0.240 | 1.38 | 0.375 | 0.290 | 0.225 | 1.29 |
| 0.470 | 0.320 | 0.200 | 1.47 | 0.405 | 0.295 | 0.230 | 1.37 |
| 0.465 | 0.300 | 0.220 | 1.55 | 0.445 | 0.290 | 0.180 | 1.53 |
| 0.450 | 0.300 | 0.215 | 1.5 | 0.420 | 0.310 | 0.235 | 1.35 |

第3章 考察

I 台ノ原遺跡出土弥生式土器の編年

台ノ原遺跡出土の土器は、須恵器等をのぞき、大半は弥生時代前期末から中期におよぶものであった。特にB地区において前期末の良好なセットが多量に得られ、またA、C、D、E各地区には中期初頭を中心として中葉から中期末におよぶと思われる各形式の土器を得た。

台ノ原遺跡の所在する豊前宇佐地方から豊後、日向に至る東九州地域では、終末期に比定される安国寺遺跡、前期末～中期の白瀉遺跡等のほかは組織的な発掘調査にもとづく資料は、弥生式土器に関してはほとんどない。従って従来の東九州地方の弥生式土器の編年は、後述する下城式土器をめぐる論考を別とすれば、北九州、畿内、瀬戸内等の編年の成果をもとにして、これとの対比の中で形式論的方法によってなされてきたものであった^①。これらの成果が東九州における弥生式土器編年の基本をなすものであることは勿論であるが、今後さらに体系的に編年を確立するためには、地域の遺跡の本格的発掘調査による共伴関係の明らかな資料をもってする他はない。台ノ原遺跡の資料、とくにB地区の資料はそうした点でこの地域におけるはじめてのセットとしてその意義は大きい。

以下、主としてB地区袋状竪穴の出土土器により弥生時代前期末の様式として台ノ原I式を、また第1丘陵の資料によりII式を設定し、II式はさらに中期前半(A)と中葉以降(B)として編年的考察をこころみたい。

(1) 台ノ原I式

ほとんどすべてがB地区の袋状竪穴出土のものである。これらについてはB地区の調査の項で明らかのように、きわめて短い期間の良好なセットをなすものがみられた。これらはすべて第2章II B地区の調査の項で竪穴毎に一括遺物としてあげた。従ってこれら竪穴毎の一括遺物がそれぞれ前期末の限られた時期のセットの好例という意味をもっている。

以上の一括遺物をもとに竪穴毎の前後関係を考えてみた。しかしながら各竪穴相互間のセットの比較から、これら竪穴群毎の編年をこころみた結果、これらを細分することは不可能であった。従って形式論的には若干の時期差を考慮するものはあっても、セット関係としての前後関係は細分できないとして、これらを一括して台ノ原I式とした。またこの場合台ノ原I式をセットとして設定するにあたっては、個々の竪穴のうち特に出土状況で同時性が判然とし、かつ形式も多様なものについて限定的にあげることが適当であるかも知れないが、上述のように袋状竪穴群全体を前期末の短い時期に限定せざるをえないことに鑑み、様式の設定にあたっては、これら竪穴群にふくまれるすべての土器のうち、形式や器種のうえて代表的とみられるものを網羅し、あえて台ノ原I式のセットとして抽出することとした。

従って編年図のⅠ式内での上下関係は器種別に必ずしも上段のものが古いという解釈はしていない。

さてかくて設定された台ノ原第Ⅰ式は、壺、甕、鉢で構成される。

壺は器高30cm程度のものと、40cmをこえるものをふくむ。主体をなすものは図1～3の類である。これらは胴の最大径は中位にあり、胴部、頸部、口縁部の各接合部の段は消え、これに沈線ないし三角突帯を施す。底部は平底である。総じて北九州板付Ⅱ式の流れをくむが、口縁部はよく伸びて外反著るしく、胴部径に比して器高が高い。こうした特色にこの期における関門、瀬戸内地方の影響を認めることができるが、その様相は必ずしも単相ではない。例えば1は器高、口縁部を除けば板付Ⅱ式の前中期の特色を残している。2は胴部から口縁部の整形は広島県中山遺跡^②など山陽地方のそれに類する。3は北九州市原遺跡第37号竪穴^④の例を介して、山口県梶栗遺跡^⑤の例等につらなるものである。4は北九州・関門地区において高槻式土器として抽出されている類^⑥に属するとみられるが、頸、胴部は突帯をめぐらす。5は口縁内面の施文、突帯などやはり綾羅木遺跡等関門地方との関連でみるべきであろうが、頸部から口縁部への展開はむしろ2の例に酷似する。総じて黄褐色～赤褐色を呈し焼成はよい。

B地区第6号、第24号竪穴がこの種壺形土器を主体とするものであった。

以上1～6の壺形土器は、北九州、関門、瀬戸内地方の要素を多様にふくみながら台ノ原Ⅰ式壺形土器の標式的なものとして抽出できるものである。

なおⅠ式の壺として7がある。形態としては板付Ⅱ式の大壺の特色をよく残しているが、突帯をめぐらす新しい様相をふくみ、中期への過途的要素を示している。1～6に比べ類例は少ない。

次にⅠ式甕形土器についてみよう。これには板付Ⅱ式の系統に属するもの、福岡県亀ノ甲遺跡^⑧のいわゆる亀の甲式との関連で考えるべきもの、そして東九州において下城式土器とされている類^⑨のもの、あるいは下城式土器と北九州板付Ⅱ式、あるいは亀ノ甲式との折衷的なものなど多彩なタイプをもっている。

7・8が板付Ⅱ式の類とみられるもので、7でわずかに外反する口縁は8でさらに屈曲する。胴部はややふくらみ底部は平底または上げ底をなす。口縁部に刻目をもつものもたぬものがある。9は口縁部をゆるく外反させ、胴張り少なく、口縁下に4条の篋描沈線をめぐらす。あきらかに関門、瀬戸内^⑩の系統に属するものである。

11、12は口縁部を内外にわずかに肥厚させ口縁端に平坦面を形成している。即ち中期の甕形の祖形的特色を示すが、口縁部の仕上げは粗放かつ稚拙であり、むしろ亀ノ甲式の例に近い。胴部の張りは殆んどみられない。

これらにたいし16～18は従来より下城式甕形土器と称されてきたものに属する。東九州地方において前期後半より中期にかけて出土するこの種甕形土器は、北九州の亀ノ甲式と対比される、きわめて

保守的停滞的要素の強いものであるが、この形式自体の編年は未だ確立していない。

従ってここでは、豊前東部における下城式甕形土器の、前期末のセットとして抽出しておきたい。全体に胴部わずかにふくらみ器高30cm前後、口縁部は指先による横ナゲで処理したあとを明瞭に残す三角突帯を口縁直下にめぐらす。口縁端の処理はやや内傾させるもの、外反させるもの、直立させるものと変化をみせる。器面は細い刷毛目調整し内面は研磨している。このうち18の如きは11、12の類の影響によって口縁直下の突帯を口縁端近くに上げており、20号竪穴などに共伴して出土した。

このように下城式土器の中には、明らかに同期の他の系統の土器の影響により、変異をみせた例があり13、14、15の如きもこうした例とみられる。ただ14の類については山口県梶栗浜に類例^⑫があり、壺形土器1～5や甕形9とともに、関門地方との関連も注意すべきかも知れない。なお深鉢19は突帯や刻目を欠きこそすれ、やはり下城式甕形の類として考えてよからう。

以上通観したとおり、台ノ原Ⅰ式は、基本的に北九州板付Ⅱ式後半の様相を入れながら、これに高槻式など関門、北九州東部あるいは西瀬戸内の影響をうけ、さらに甕形土器においては東九州の下城式土器文化の様相をも内包するなど、その立地条件の緩衝地的性格を反映し複雑な構成をもっている。その中で壺形1～3に各文化圏の影響を消化しつつひとつの形式をなしている例をみることができるが、全体としてはむしろ形式的なオリジナリティの欠除は否めない。

(2) 台ノ原Ⅱ式

台ノ原Ⅰ式がB地区の袋状竪穴出土土器によっており、明瞭な共伴関係を持ち、かつ前期末のきわめて短い時期の一群として提出しうるのに対し、Ⅱ式はA、C、D、E地区の広範囲にわたり、また共伴関係の明瞭な例に乏しい。土器も完形をなすものが少なく、標式的な様式として設定するには資料不足といわねばならないが、少なくともこれらの地区には中期前半期を中心とし、わずかに中期中葉ないし後半期に属するものをふくむ限られた時期の土器が出土しているので、包含層等の検出になるものをあわせ一応台ノ原Ⅱ式として設定しておきたい。

台ノ原Ⅱ式A

北九州地方のいわゆる城ノ越式を主体とする中期初頭のものである。壺、甕、高坏で構成されるが、この遺跡では壺形の好例に乏しい。逆に甕形土器が量的にも多くこの期の標式的位置をしめている。

この甕形土器は少なくとも3類の形式のものをふくんでいる。それぞれⅠ式甕形土器からその系譜をたどることができる。即ちそのひとつは25～27の類でありⅠ式の7、8の発展としてとらえられ、いわゆる城ノ越式土器の類に入る。口縁部は内側に稜をつくって「く」の字ないし「L」字状に外反し、口縁端がやや厚味をもつものから、さらにこれをつまみあげたものをふくむ。口縁下に篋描沈線または低く、細い三角突帯を一条めぐらす。総じて器壁はうすく洗練された仕上りである。黄褐色ないし赤褐色を呈し胎土に砂をふくむが焼成はよい。Ⅱ式Aの甕形の中ではこの類がもっとも多い。^⑬

これに対し台ノ原Ⅰ式の11～12の系統につらなるものとして28を、また下城式甕形のうち中期に属するものの標式として29をあげておく。28は当遺跡では他に類例に乏しいが、25～27の城ノ越式の範疇^⑭に属し、北九州市原、福岡市西新等に類例は多い^⑮。底部は安定した平底、胴部はわずかにふくらむ。器表面は刷毛目調整により、内側は研磨している。

Ⅱ式甕形の中で下城式の系類に入る29はⅠ式のそれに比し、突帯がやや下部へさがり、胴部のふくらみがなく直口をなす。口縁断面はまるく仕上げⅠ式のそれにみられた横ナデとつまみによる仕上げ跡は明瞭でない。量的にもⅠ式がこの類を主とするに比してⅡ式では少ない。台ノ原遺跡においては下城式土器の盛行はあきらかにⅠ式の前期末であり、Ⅱ式Aにおいてわずかに残る程度である。

なおⅡ式Aの甕形土器に伴う壺形土器は好資料に乏しい。ここでは22～24をあげた。このうち23、24は外反する口縁内側をやや肥厚させ、ここに篋あるいは貝殻により山形文などを施文するもので、これは明らかにⅠ式の4、5の系列に属し、関門、西瀬戸内の系統を引くものであろう^⑯。この類は東九州を南下し大分県日出町大津、大分市一木・小原などから佐伯市白瀉遺跡^⑰にまで及んでいる^⑱。

22は福岡県城ノ越遺跡に類例があり、ほぼ平行するものとみたい。

このほかⅡ式Aに属するものとして高坏30をあげておく。鉢部に比して台脚は短い。全体に板付Ⅱ式の特徴をとどめるが口縁部の仕上げは28と共通し城ノ越式の要素をもっている。

なおこの期の様式設定上の問題点として残る壺形土器の量的な不足は、今後他遺跡の好資料を待つこととしたい。

台ノ原Ⅱ式B

いわゆる須玖式土器を主体とするものであるが、壺形では須玖Ⅰ式に入れられるとみられる31、および37、38と、須玖Ⅱ式として抽出しうる32、36がある。33は袋状口縁の小形長頸壺として須玖Ⅱの典形をなすものに類しているが口縁部は直口をなす。大分県下でも日出町大津、佐伯市白瀉に例がある。また37、38はC地区第3調査区で出土した壺棺であるが、須玖Ⅰ式相当とし、38に胴部から底部から底部への伸びに須玖Ⅱ式的要素をふくんでいる。

以上いずれも内外ともよく研磨され洗練された仕上がりである。なおここに中期後半からさらに後期的要素をふくむ35、および39、40の変形土器をあげておく、「く」の字形に外反する口縁部、頸部くびれ部分の三角突帯、安定した底部をもつ。Ⅱ式Aの25～27の甕形の次に29をおけばその展開としてとらえるものであるが、口縁端のはねあがり著しく、胴張りも強く後期的要素をもつ。但し40の例では胴部から底部にかけては38と判別しがたく、一応須玖Ⅱ式をさかのぼらぬものとしたい。

以上の如くみると、台ノ原Ⅱ式はⅡ式Aにおいて壺形土器の資料不足は否めず、またⅡ式BにおいてはⅡ式Aの主体をなしたL字、はねあがり口縁をもつ甕形土器(25～27)の展開がつかみがたい。台ノ原Ⅱ式においてはいわゆる須玖式土器のT字形ないし鋤先形口縁をなすものは必ずしも量的に多くない。また下城式土器の類も量的には少ない。従って量的に主体をなし、Ⅱ式Aに比定した城ノ越

式系統のL字、はねあがり口縁をもつ類(25~27)が29の如くⅡ式Bの須玖式平行の時期に共存した可能性はつよい。

従って25~27の類が35、40にまで展開する過程が今後この地域の中期の編年のひとつの課題であろう。

これらの点については、すでに大分県東国東郡武蔵町熊尾²⁰、大分市雄城台遺跡等の相つぐ発掘調査によって豊富な共伴資料をもって検出されつつあるので、こうした調査結果が資料化される段階で検討されるであろう。

(3) いわゆる下城式土器について

台ノ原遺跡においては、特にB地区において、いわゆる下城式甕形土器に属するものを多く出土し、台ノ原Ⅰ式甕形の主体をなすことをみた。これらの類について、東九州における下城式土器編年の研究史の成果に対応させつつ若干の所見を付記しておきたい。

東九州の弥生式前期の土器形式として設定された下城式土器は大分県佐伯市下城遺跡を標準としたものであり、当初甕形土器に限定されたものであったが²¹、その後佐藤暁氏によって東九州における中期土器としての大津式との共伴関係が指摘されるとともに、はじめてその甕形土器の五様式の設定がなされた²²。その後小田富士雄氏は白瀉遺跡の発掘調査の結果をふまえ、考察を広く南九州、西九州におよぼし、体系的かつ詳細な形態分類をもとにしてあらたな編年をこころみた²³。しかしながらこの段階では、下城遺跡、白瀉遺跡等の資料以外は、組織的な発掘調査によるものが少なく、セット関係の不確かな資料によらざるを得なかった事情があり、その編年が下城式土器全般をカバーしうものかどうかについては、その後の課題とされたのであった。

台ノ原Ⅰ式の下城式土器は本格的発掘調査による成果として資料化されたものでは、実に白瀉遺跡以来初めての資料となる。これを小田氏が下城式甕形の編年作業の過程で用いられた4式10類の各形式にあてはめてみた場合、口縁部の肥厚の有無、口縁部の屈曲等の特色によって2式~3式の各類に及ぶにもかかわらず、これらをB地区のきわめて短い時期に限られた台ノ原Ⅰ式の他の系類の土器との対応で編年的に細分することはできなかった。むしろ、やゝふくらむ胴部、口縁直下に近い一条の三角突帯、横ナデ、指圧による口縁部の仕上げという共通点をもつ一形式とみるべきであり、口縁部の外側への肥厚の有無、および口縁部の内彎、外反、直口等の変化は、横ナデ、指圧による調整の過程できわめて恣意的になされていることが伺われた。

また上述の台ノ原Ⅰ式下城系甕形土器の特色が白瀉遺跡において前期末の古式のものとしてされた2式5類や2式2類と必ずしも同一の形式的特色をもつといたいことをみても、こうした特色が、前期末の下城式甕形土器に一般的に適用しうると考えるよりも、現段階では豊前東部、即ち東九州北部の例として提出するにとどめておくのが妥当と思う。形態的にきわめて保守性がつよく変化に乏しい下城式甕形土器の編年にあたっては、その分布範囲全体をカバーする形式論的編年論は、それぞれの

地域での前後関係を明瞭なセット関係において把握し、このつみあげを各地区において重ねた上でなされる必要があろう。その意味では大分県下の近年の発掘調査の成果の早急な資料化がのぞまれる。

なお当遺跡においては従来下城式壺形土器として設定されていた二本の篋状原体による施文された壺形土器を一例もみなかった。従って台ノ原Ⅰ式においては下城式土器なる様式は甕形と壺型のセットとして展開していない。また下城式甕形土器が北九州における亀ノ甲式甕形とともに縄文晩期の伝統を残した形式の東九州的展開という視点に立つとき、特に両者の接触する豊前地方における、下城式甕形土器の形式的な規定の根拠にもやや曖昧さが残る。この点東九州における前期～中期における様式としての下城式の設定の可否そのものをふくめて検討する必要がある。(後藤宗俊)

(註)

① 1963年「日本農耕文化の生成」の中で杉原荘介氏は、前期を櫛、中期を下城、後期を安国寺式として設定した。その後森貞次郎氏によって資料的な拡充がはかられるとともに系統論的な視点から検討が加えられた。すなわち、前期を立屋敷式→下伊田式の二小期に区分し、中期を北九州地方の城ノ越式および須玖式に対応する二時期に分類した。中期前半における東九州地方の土器はいわゆる下城式甕形土器と呼ばれる器形変化の少ない特殊な土器を除けば、周辺地域土器のもつ要素が指摘され、系統的に四国、香川県の阿方・片山遺跡出土の土器によって代表される西瀬戸内系(A)、遠賀川式土器の発展形として関門地方で流行をみた高槻系のもの(B)、北九州城ノ越系のもの(C)、さらに畿内地方の唐古Ⅱ式の系統を引くもの(D)など多彩な内容をもっている。やがて中期の中頃以後になると北九州須玖系(A)の土器が主体を占めるが、これに近畿・東瀬戸内地方の第Ⅲ様式系(B)が加わり、さらに南九州に近づくと山ノ口式の祖型とみられるもの(C)が含まれる。後期は第Ⅳ・Ⅴ様式の二期に分ける。前者としては資料は少ないが袋状口縁の壺形土器など北九州第Ⅲ様式からの変化過程を示すものあげられている。第Ⅴ様式は戸次式→安国寺式への流れをたどることができ、とくに後半の時期における安国寺式の広範な広がり量的にも他を圧するものがある。この時期になると土器様式は北九州的要素がしだいに薄れて汎瀬戸内の様相を帯びることが指摘された。その後は発掘調査による新資料の増加もないまま今日にいたっているが、下城式甕形土器について小田富士雄氏の注目すべき指摘がある。

すなわち、下城式甕形土器の発生を北九州地方前期末の様式として知られる亀ノ甲式の発生と軌を一にするものとの見地に立って、「前期後半に流行した亀ノ甲式と下城式の甕は九州を東西に分かつような分布圏を示しているが、ともに板付Ⅰ式に共伴する縄文系(夜臼式)の甕に祖型を求めることができる」と述べている。東九州地方とりわけ豊後地方において、前期前半の時期が土器様式として空隙となっている現在、前期後半～中期というきわめて長期間にわたって保守的であった下城式甕形土器の占める位置を考えるうえで示唆的である。

〔以上、杉原荘介「日本農耕文化の生成」(昭和38年)、森貞次郎「東九州」弥生式土器集成本編1所収(昭和39年)、小田富士雄「入門講座弥生式土器—九州1～6」考古学ジャーナル第76号～84号(昭和47年、48年)参照〕

② 小田富士雄前掲①論文参照。なお本稿では弥生式土器編年の形式の呼称については、特に注記しないものはすべてこの小田氏の編年によった。

- ③ 弥生式土器集成 本編1 (山陽1)
- ④ 小田富士雄他「原遺跡」北九州市香月地区埋蔵文化財調査会 (昭和48年)
- ⑤ 弥生式土器集成 本編1 (山陰)
- 小田富士雄「長門下関周辺の弥生式土器—長府博物館蔵品整理報告」 (昭和32年)
- ⑥ 小田富士雄前掲①論文参照
- ⑦ 小田富士雄前掲⑤論文参照
- ⑧ 小田富士雄「亀ノ甲遺跡」八女市教育委員会 (昭和39年)
- ⑨ 下城式土器については⑱～㉑の項参照
- ⑩ 鏡山猛 乙益重隆「九州」新版考古学講座4 (昭和44年) および前掲⑧参照
- ⑪ 潮見浩 藤田等「中国、四国」『日本の考古学Ⅲ』弥生時代 (昭和41年) 他
- ⑫ 弥生式土器集成 本編1 (山陰1)
- ⑬ この類は宇佐平野より南へ豊後国の瀬戸内沿岸部では、中期中葉におよんで盛行しているようである。大分市玉沢の雄城台遺跡 (昭和46年より49年にかけて大分県教育委員会で調査) ではこの類が須玖Ⅱ式の時期までおよび相当量出土している。
- ⑭ 前掲④書参照
- ⑮ 弥生式土器集成 本編1 (北九州)
- ⑯ 小田富士雄前掲
弥生式土器集成 本編1 (山陰1)
- ⑰⑱ 賀川光夫 佐藤暁「東九州弥生式中期土器の一形式」別府大学紀要第4輯・5輯 (昭和29年) 参照
- ⑲ 賀川光夫 小田富士雄「白瀉遺跡」 (昭和33年)
- ⑳ 大分県東国東郡武蔵町所在の弥生式集落遺跡、昭和49年4月武蔵町教育委員会により発掘調査が行われ洪積台地上の遺跡から弥生式中期および終末期の遺構遺物が多く得られ現在整理中である。
- ㉑ 昭和23年鏡山猛・賀川光夫の両氏により調査された大分県佐伯市下城遺跡を標準とした「刻目突帯を施す甕形土器」をいう。昭和24年「豊後国佐伯市下城弥生式遺跡発掘報告」一謄写印刷、および賀川光夫「東九州における押型文土器と弥生式土器」考古学雑誌37-1 (昭和26年)
- ㉒㉓ 前掲⑰、⑲参照。

II 集落としての台ノ原遺跡について

台ノ原遺跡は東西1.5kmに及ぶ四日市台地の北端を占め、それ自体低い鞍部で区分される2つの丘陵にわたっている。それぞれの丘陵はまたその先端に開析されて生じたいくつかの小支丘をもっている。かかる立地は弥生時代前期末ないし中期より各地に展開する弥生集落の典型的な条件をもっている。

従って集落立地論あるいは構成論の見地から様々な問題を提起する可能性を有しているといえる。

しかしながら調査は少なくとも4ヘクタールをこえると思われる遺跡の一部分を検出したにすぎず、遺跡の全容を把握するにはほど遠いものであった。

また周辺の丘陵とその小支丘群についても未だ学術的調査はなされておらず、広く宇佐平野全域を展望しても弥生時代の集落についての本格的調査は、ようやくその端緒についたという状況である。従って今回の資料によって集落としての台ノ原遺跡について総括的に言及することには自ずと限界がある。ただ今回の調査報告が東九州の弥生集落のそれとしては最初のものであるということもあり、一応現段階で可能な範囲の集落論的小考を以下に付し、今後のこの地域における調査・研究の一資料としたい。

(1) 弥生時代

前述したとおり台ノ原遺跡は少なくとも2つの丘陵をふくんでいる。今回の各調査区をこれに対応させるとA、C、D、E地区が1つの丘陵上にまとまる。この丘陵はいわゆる四日市台地の東端部を占め、方200m程度の面積をもち、西に浅い鞍部をおいて四日市台地中心部に接し北部には3～4個所の小支丘をもっている。A地区はD地区とともにこの丘陵(以下台ノ原第1丘陵とよぶ)の中心部にあたり、E地区は南縁、C地区は東北部を占め北に連なる小支谷に接する。丘陵頂部で標高52m、周辺の四日市地区の平野部とほぼ30mの比高をもっている。

一方今ひとつの丘陵は第1丘陵と浅い鞍部をもって東南に接し、西南方向へ小支丘をつらねている(以下これを第2丘陵とよぶ)。B地区はこの丘陵の東北部を占めている。

ここでまず注意すべきは第1丘陵に位置するA、C、D、Eの各地区は中期初頭を主体としわずかに中期中葉(須玖I式相当)に及ぶが、前期の遺物をほとんどふくまないのに対し、B地区の袋状竪穴群は前期末の短い期間に集中している点である。B地区の11号竪穴の如き袋状竪穴以外の遺構にわずかに中期初頭に及ぶものが見られるが、この地区の遺構の主体をなす袋状竪穴群は前期末の短い時期に集中し、この類の遺構はA、C、D、E地区には全く検出されていない。従って台ノ原遺跡は弥生時代前期末と中期初頭において立地上の転移が考えられる。

以下まず前期末と中期初頭の2つの時期の集落を一応区別して考えてみたい。

弥生時代前期の台ノ原遺跡(主としてB地区について)

弥生時代前期の遺構は前述のようにB地区に限られている。検出された遺構はほとんどすべて袋状

竪穴であり、住居跡の明瞭な例は皆無である。

袋状竪穴群は東南方向に200m、巾50~60mの丘陵頂部沿いにつくられ、とくに第1調査区、および第2調査区に集中的に分布し、この間に疎白な地区をもっている。また第1調査区の西南土取り境界線近くに1~6号の袋状竪穴群がみられるのでこの地区にさらに1群が想定される。従ってB地区の袋状竪穴群は少くとも3支群以上の比較的まとまったグループをなしつつ、ほぼ2haに及ぶ丘陵頂部に分布しているといえる。それぞれの支群の竪穴の基数は各群とも未掘地区を残し、また造成工事により未明のまま失われたものが考えられるので正確には示し難い。ただ第1調査区のグループの基をそれほど越えるものではあるまいと思われる。

これらの袋状竪穴は出土遺物にみられるとおり、弥生時代前期末に集中して造られ短い期間をもって廃棄されている。袋状竪穴内の土の埋没状況に2次的な床面の形成されているものの少ないこと、また竪穴相互の切りあいが全くなく、各竪穴の掘鑿については隣接した竪穴が十分意識されているらしいこともこれを裏づけるといえよう。

さて、袋状竪穴とこれに対応する住居跡の関係は先にみたとおり本調査では判断しがたい。ただB地区は一部鞍部をのぞいて0.5~1mの削平がなされたあと発掘調査がなされたので竪穴群と重複して同時期の住居跡が営まれた可能性なしとし^①ない。もしそうでなければ、これらの袋状竪穴群に対応する住居跡は、B地区の位置する第2丘陵の西南部、あるいは東南部の小支丘が考えられよう。いずれにせよこの段階でこれら前期末の住居地域が鞍部をまたいで第1丘陵に営まれたものでなかったことが重要である。このことは前期末の台ノ原遺跡は、四日市台地のうち集落の立地に適した小丘陵ないしその支丘に普遍的に分布したものでなく、むしろその一部を選定し、限られた地域に居住した可能性を示す。少なくとも第2丘陵に依拠した集落が第1丘陵にそれを拡大せざるを得ないような内的条件をなお十分に成熟させていなかったといえるはずである。このことはこの地域における前期末の集落の規模を示唆しているといえよう。

集落の構成、あるいはこれを支えた生産関係等については今回の調査結果では言及する段階ではない。ただこの時期の集落の構成についていえばさきにみた袋状竪穴群の1~3群の存在は、この地区の集落がその内部にさらに3群以上の、何らかの単位的集団にわけられる構成をもっていたことを示すかも知れない。しかしこの3群は、集落・共同体の単位にかかる如何なる概念に対応させうるかは不明とせざるをえ^②ない。

また袋状竪穴は、集落の中ではその消費生活に直結するものであり、その分布状況や住居跡との関係からこれの管理についての様々な考察が可能だとしても直接に集落の生産関係にかかわる資料たりえない本質をもっている。

今回の調査の結果第26号竪穴において炭化米の出土をみたので、このB地区の集落が稲作農耕を何らかの形で継持したことは確かであろうが、その生産拠点の占地がどこになされたかは全く不明である。ただこの場合第1丘陵への進出がなされていないこと、台地に接する支丘にはさまれる谷水田につ

いては顕著な例のみられないことは指摘できよう。この丘陵は30mの比高をもって四日市の沖積平野を東にのぞむが、これとの関連は今後の問題であろう。ただいずれにせよ隣接する第1丘陵に同時期の集落がみられない以上、B地区の集落は日常的生産あるいはその再生産活動の位相ではある程度完結したまとまりをもつ、比較的小規模な集落として想定できよう。

弥生時代中期の台ノ原遺跡

前述したように当遺跡の主要部をなす第1丘陵は、ほぼ全域にわたって弥生時代中期初頭から一部中葉に及ぶ集落が展開する。A、C、D、E地区はその要所を選択調査した結果になっている。従って部分的調査とはいえ第1丘陵の全体についてのある程度の考察は可能である。

この地区で古墳時代の遺構を捨象して考えれば、A、D、E地区が住居跡を主体とする居住区の様相を示している。D地区の北側の畑地には現在なおこの時期の土器片の散布がみられるから、これをふくめると少くとも南北200m、東西は南部で100m、北部で200mにおよぶ集落跡を想定することができる。

この第1丘陵に連なる北方の小支丘については遺跡の存否は明らかでない。而してC地区の位置する東北部の部分については、調査地点からさらに東北へ埋葬遺構がのびていることが確実であるから、この地区を第1丘陵の集落の墓域と考えて矛盾はない。

まずこの地区の集落について考えるにあたり溝状遺構（D地区、C地区第1・第3調査区）が問題となるが、これは巾0.7～1mの小規模なU字溝であり、D地区においては底部に須恵器の混入をみたので、弥生時代と断定しうるものではない。第1丘陵のほぼ全域におよぶ校地造成工事の結果によっても、丘陵を再区分する如き溝は発見されていないから、第1丘陵そのものがこうした施設によって区分された可能性は少ないとしてよいだろう。^③

この第1丘陵における確実に弥生時代に属する住居跡はA区第3調査区、D区Ⅲトレンチ、C区第2調査区の円形住居跡計4基のみであるが、A、D地区で検出された無数のピット群から、この地区にすでに古くから畑作等によって削平された相当密度の住居跡群を考えることは容易である。

これらの住居群が少なくとも3～4haの広がりをもつ丘陵上に、特に区分さるべき溝等を設けずに営まれたとすれば、この規模の集落のひとまとまりを^④広義の単位集団であるとしてさしつかえないであろう。従来いわれている^⑤竪穴数基をひとまとまりとする最小限の単位集団なるものが、家族論的にはいわゆる世帯共同体に該当することはほぼ明らかであろうが、そうした場合台ノ原第1丘陵の集団は少なくとも2つ以上の世帯共同体を内包していたといえよう。

さて第1丘陵の全域を占めた中期初頭の集落は、四日市台地というさらに広義の地域的まとまりの中でどう位置づけられるであろうか。この点では同台地の他地区の調査がほとんどなされていないから不用意な考察はさしつかえなければならない。ただ注意すべきはさきに見たB地区の前期集落が第1丘陵に全く及ばなかったのに対し、中期の第1丘陵の集落はB地区の第2丘陵にも及んでいたらしいことである。

即ちB地区第11号、第19号等の竪穴の流れ込み遺物には中期初頭におよぶものがみられた。

このことは第1丘陵を未開のままとしつつ第2丘陵に自足しえた前期集落と、その双方に集落を設定した中期のそれとの明らかな差異を物語っているといえよう。従って第1丘陵、および第2丘陵以外の四日市台地周辺の丘陵群にある程度普遍的に集落群の所在する条件は、一応中期の段階でより成熟していた可能性はある。第1丘陵西方の現四日市中学校予定地周辺はじめ台地の各地にみられる散布地はその可能性を示唆している。ただ台地北方に伸びる小支丘群では今だ顕著な散布地は確認されない。また前述した周辺の散布地も第1丘陵に匹敵する密度を有しているものはないので、台ノ原遺跡の状況を不用意に台地全域に及ぼすことはさげたいと考える。

なお第1丘陵の各区の調査の中で確認された径50～80cmのピット群について付言しておこう。これらのうちC、D、E区等においては袋状竪穴の一退化形態とみられるものもあるが、C区第1調査区や第2調査区のもはあきらかに柱穴であろう。特にC区第3調査区の例では高床住居の可能性が指摘された。柱穴の規模からみて歴史時代の遺構である可能性も残るが、弥生時代以外の遺物をふくまないのでこの期の住居または倉庫に係る可能性はつよい^⑥。もし後者であるとすれば、B地区における袋状竪穴が、第1丘陵の中期集落中に皆無であることと関係し、いわばこれに代るものであるかも知れない。この点については特に年代の決定にきめ手を欠くので今後の他遺跡の資料の例に待ちたい。

墳墓からみた台ノ原集落の性格

次に第1丘陵の集落と墓地の関係についてみよう。第1丘陵のA、C、D、E区で、明らかに墓域として考えられるのはC地区第3調査区である。この墳墓群は土壙墓を主体に石棺、壺棺をふくむ。その年代は各墓壙が比較的整然と配置され、一部の土壙をのぞいて切り合いも少ないことからみて、1、2号壺棺の時期（弥生時代中期前半）を下らぬ比較的短期間のものであろう。従ってA、D、E地区の集落の墓地であったとしてよいと思われる。これらの墳墓のうち頭位の判明するものが、すべて集落の方向をさしていることも偶然でないであろう。

この墓域はさらに東部に延び、丘陵末端におよんでいるらしいから、なおその過半の地域が未掘であり、墓地全体の構成については言及しがたい。しかしながら今回の調査結果に限っても墳墓の性格について注意すべき点は少なくない。

まず調査された墳墓は形態的には石棺2、壺棺2の他はすべて土壙墓であることが注目される。ここでは箱式石棺と壺棺はむしろきわめて選択的に用いられている。その内石棺については、1号石棺の如く十分な労力をつくして墓壙を造りながら、納められた石棺は側壁の一部が省略されている。また壺棺は北九州地方の須玖1式壺形そのものであるが、石棺と同様一部に限って利用しており、甕棺の群集墓を形成するものではない。利用された土器も、筑前、筑後地方を中心に中期に盛行する大型甕棺ではない。

なおこの墳墓群は副葬品の類はほとんどもたず、わずかに第9号土壙の打製石器をあげうるにすぎない。

以上の特色は総じて北九州遠賀川以東に普遍的な、土壙墓を主体とする墓制の特色を反映しており、これを無条件に北九州西部の大型甕棺を主体とする墓地と対比するのは問題があるが、少なくともこの地区の墓制からは、台ノ原第1丘陵の地域集団が周辺のそれに比して卓越した位相の集団であった確証をとりだすことはできない。

なおA地区第2調査区第3号住居跡に重複して甕棺一基が出土しているが、これは弥生時代中期後半とすべきであり、第1丘陵の集落の年代からは孤立的に時間がずれている。また墓地として抽出しうるものではないので、中期後半の集落が隣接する丘陵に存すかどうかは今後の調査に待ちたい。

周辺の遺跡との関係

次に台ノ原遺跡を宇佐平野周辺の同期の遺跡との関係でみておこう。

まず問題となるのは弥生時代前期末にはじまる台ノ原遺跡にあきらかに先行する前期前半期の遺跡についてである。この点では宇佐平野は勿論、西は中津平野（山国川以東）から国東半島西北部をふくめて考えても板付Ⅰ式相当の遺跡は所在しない。弥生前期末にあらわれ、中期に盛行する洪積台地上の集落が、しばしば言われているように沖積平野の砂丘後背地、あるいは自然堤防の後背湿地の湿田にとりついた集落を母体とする発展一分村の過程としてとらえられる^⑧見方からすれば、台ノ原遺跡はその出現の母体とすべき前期前半の遺跡を未だもたないことになる。この前期前半の集落については今後の発見、調査を待たねばならないが、広く大分県全体をみわたしても板付Ⅰ式土器をもつ遺跡は東国東郡武蔵町内田遺跡^⑨以外例をみない。宇佐平野においても近年の沖積地全域におよぶ大規模圃場整備事業、およびこれに伴う緊急発掘調査^⑩によっても発見されていない。このようにみると宇佐平野から広く東九州におよぶ地域における前期末の洪積台地上の集落の出現過程、あるいはその前史についての考察は、北九州地方等のそれと異った位相で考える必要があるかも知れない。

次に前期末～中期前半の台ノ原遺跡と平行して所在した遺跡として確実なものは、宇佐平野においては東上田遺跡^⑪があるが、この他には顕著な例をみない。この点も将来の発見を待つべきだとしても、弥生時代中期においてなお、台ノ原遺跡が東上田遺跡とともに傑出した規模をもち、必ずしもこの種遺跡がこの地方に無数に所在する洪積台地になかば普遍的に所在したものでなかったことは確かである。この点は隣接する中津平野における福島遺跡^⑫、豊後高田市桂川上流戸原台遺跡^⑬などのあり方とも共通しており、この地方における弥生時代中期段階の発展過程を示すといえるかも知れない。

このように台ノ原遺跡が宇佐平野の弥生時代前期末～中期の代表的な遺跡として、いわば限定的に所在しながら、先にみたように台ノ原遺跡それ自体の構造には弥生時代中期における傑出した集団であるとすべき確証がなく、むしろ停滞的な一般的集落としての特色がみられることはこの時期の地域の後進的状况を示唆するものとして注意しておきたい。

(2) 古墳時代

以上台ノ原遺跡は主として弥生時代の集落を主体とするが、A地区およびC、D地区で須恵器を伴

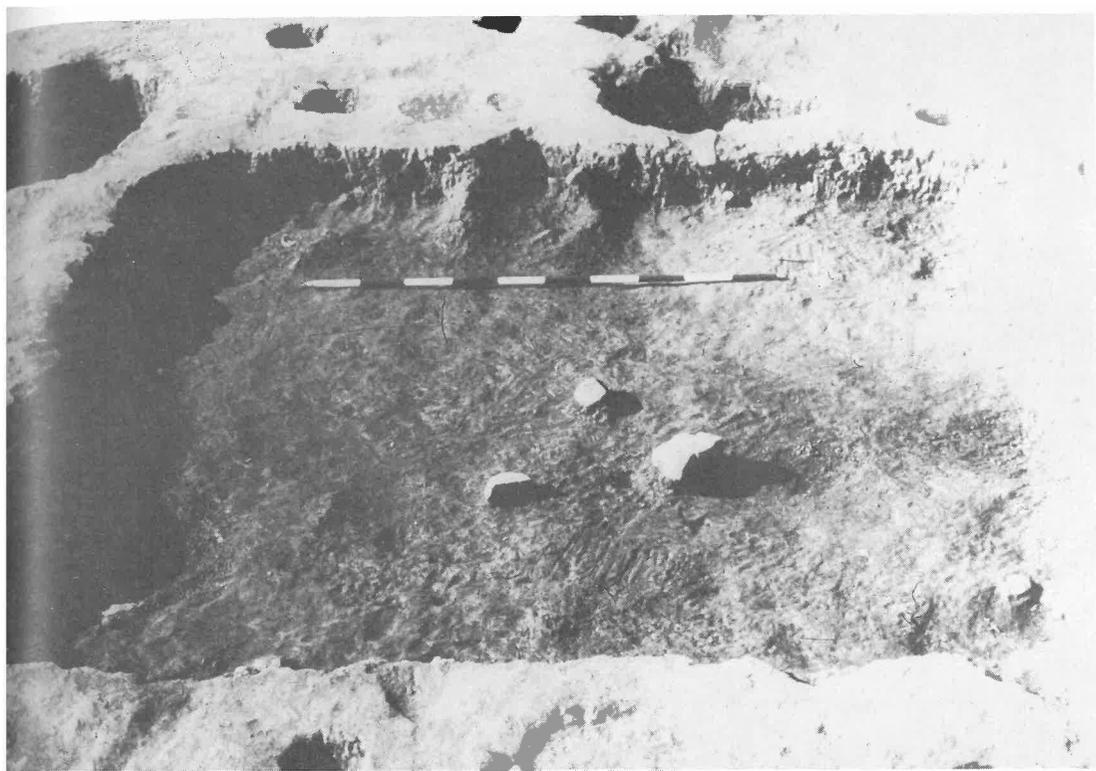
う住居跡が確認されている。即ちA地区第1調査区第1号住居跡、および第3調査区第4号住居跡、C区第4調査区の住居跡、D地区第4トレチa区の第2号住居跡がそれである。いずれも方形住居跡であり、うち3基は四隅に柱穴をもつ。

これらの住居跡について注目されるのは、すべて須恵器を伴っており土師器をほとんどふくまない点であろう。現在までのところ四日市台地周縁では須恵器の窯跡は確認されていないので、須恵器製作等と直接むすびつけて考える段階ではないが、ひとつの特色として注目しておきたい。

(後藤宗俊)

(註)

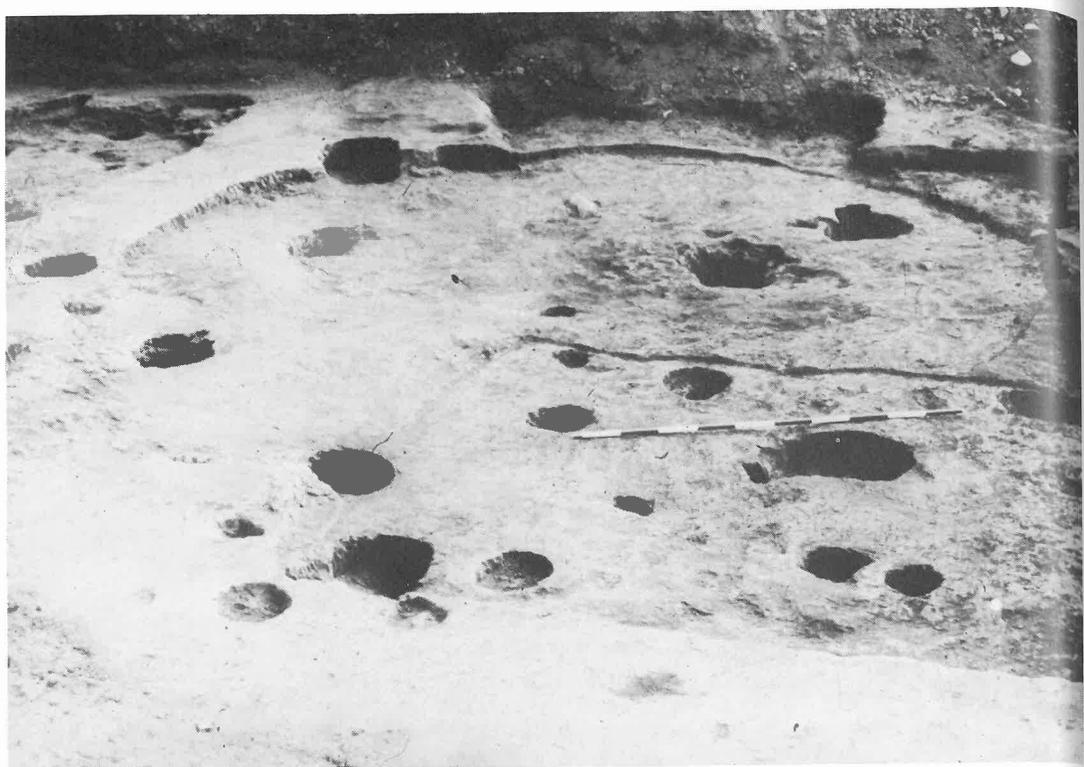
- ① B地区東南部の校地造成工事の土取り断面、およびその南部に残る草地に竪穴住居と思われる遺構がみえる。時期は判然としない。
- ② このような竪穴の分布は福岡市西区浄泉寺遺跡等に類例がある。
三島格他「浄泉寺遺跡」東洋開発株式会社刊(昭和49年)
- ③ 溝の検出はなかったが、地上施設、あるいは住居跡の配置と方位等にこの丘陵の集落をさらに区分する要素があった可能性は残る。
- ④ 近藤義郎「弥生文化論」岩波講座「日本歴史1」(昭和37年)
同「共同体と単位集団」考古学研究6-1(昭和34年)
- ⑤ 門脇禎二「日本古代共同体の研究」(昭和46年)
都出比呂志「農業共同体と首長権」講座日本史(昭和45年)
- ⑥ この種高床住居と目される1間×2間の柱列が福岡県筑紫野市野黒坂遺跡において3基検出されているが年代は明らかにしていない。松岡史 前川威洋 副島邦弘『野黒坂遺跡』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集(福岡県教育委員会)(昭和45年)
- ⑦ いわゆる須玖式大型甕棺は遠賀川以東において群集的にはとり入れられていない。宇佐市周辺では個体としても未だ出土していない。
- ⑧ 小野忠漁「集落跡」『日本考古学の現状と課題』(昭和49年)
和島誠一 田中義昭「住居と集落」『日本の考古学Ⅲ』弥生時代(昭和41年)
津島遺跡発掘調査団「岡山県津島遺跡発掘調査概報」等
- ⑨ 賀川光夫「大分県の考古学」参照、内田遺跡は国東半島東部に連なる狭い海岸砂丘の埋葬遺跡であり内側にいわゆるラグーン的な後背湿地をはさみ洪積台地をのぞんでいる。
- ⑩ 昭和45年度にはじまった駅館川大規模圃場整備に伴う緊急調査のうち弥生時代の遺跡としては別府遺跡(宇佐市法鏡寺、弥生後期)、高居遺跡(同上田、弥生中期～後期)が駅館川流域の例としてある。その他宇佐市西部の五十石川流域で弥生時代末期の石蓋土壙群を検出した京徳遺跡(同市下敷田)がある。これは工事中に発見され昭和48年県教育委員会によって調査され県指定史跡となった。
- ⑪ 賀川光夫「大分県の考古学」(昭和46年)
- ⑫ 大分県教育委員会編「中津市埋蔵文化財分布一覧」(昭和47年)参照、福島遺跡は中津市東部を流れる犬丸川上流に位置し比高5～10mの独立丘陵で方200mほどの広さに濃密な弥生式土器中期を主体とする土器の分布をみる。
- ⑬ 大分県教育委員会編「豊後高田市埋蔵文化財分布一覧」(昭和48年)および賀川光夫前掲⑩参照



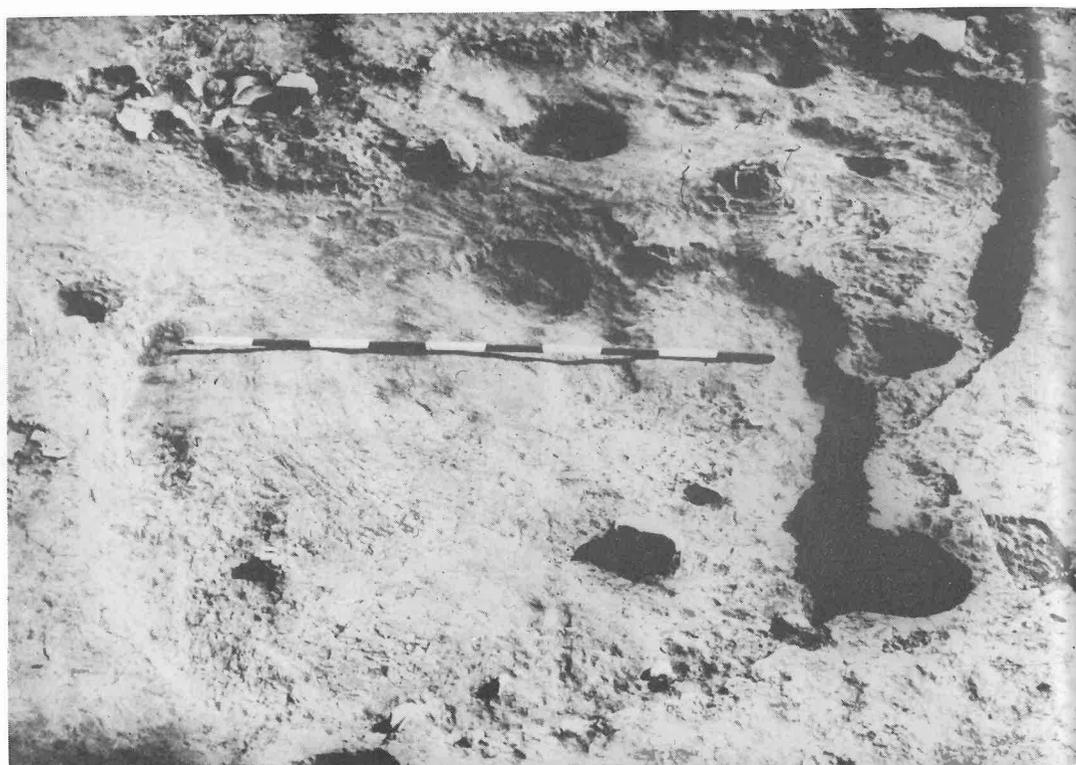
(1号住居跡全景)



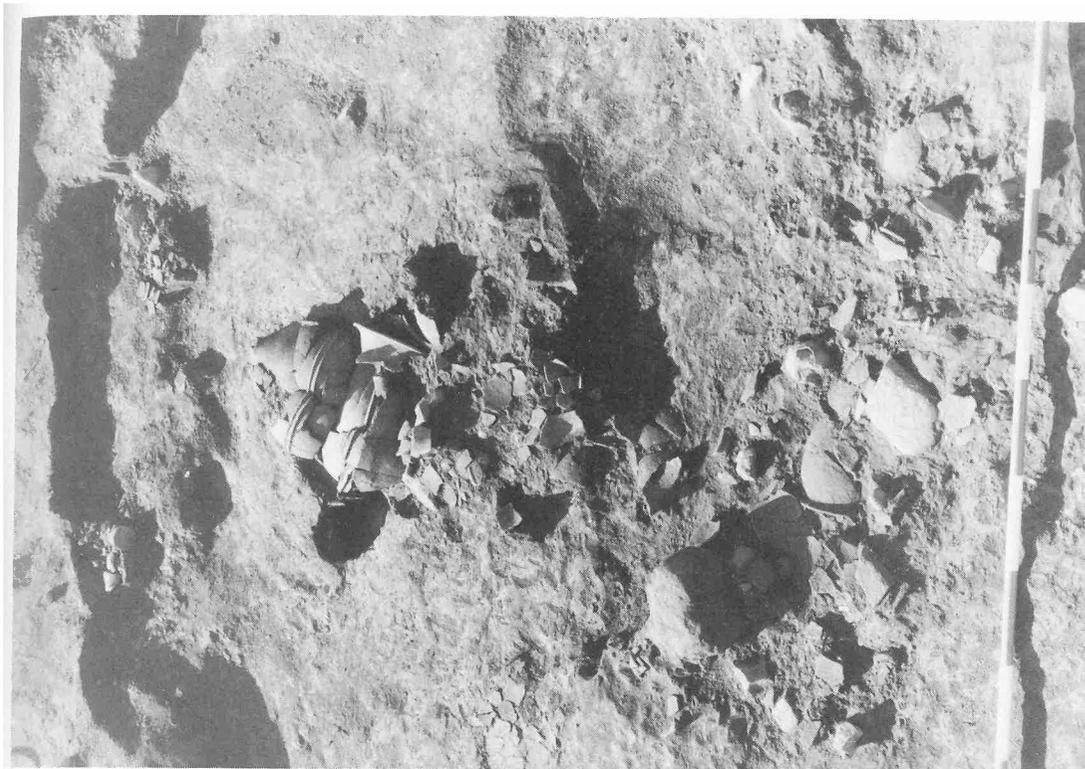
(1号住居跡、西側のピット群)



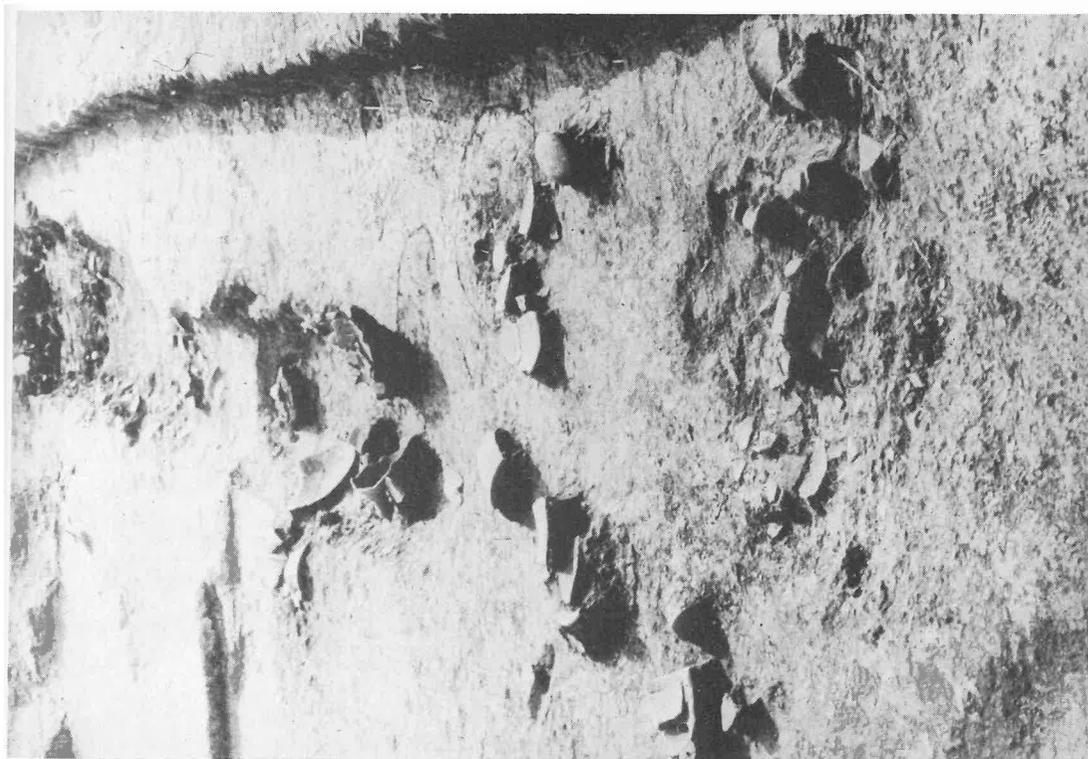
(3・4住居跡全景)



(2号豎穴全景)

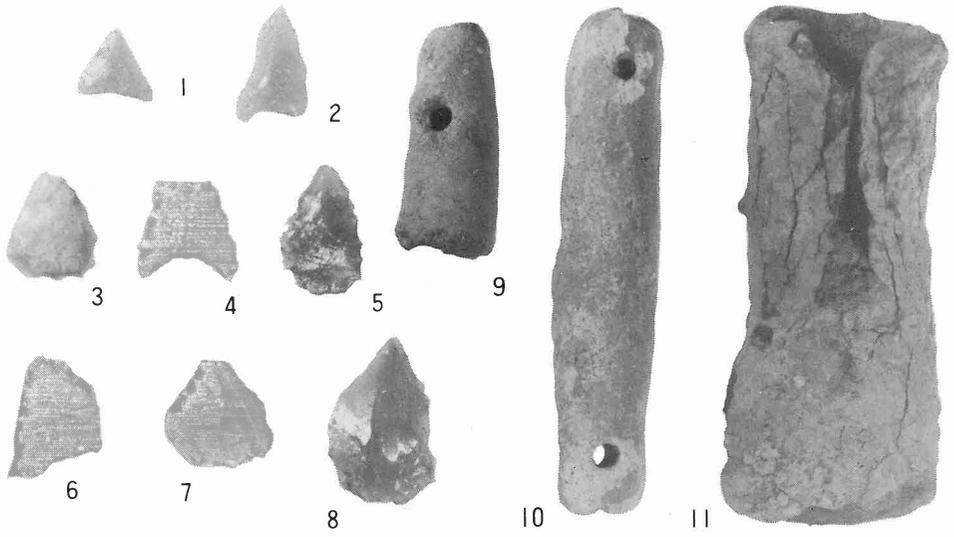


(第II調査区・1号竊棺付近遺物出土状態)

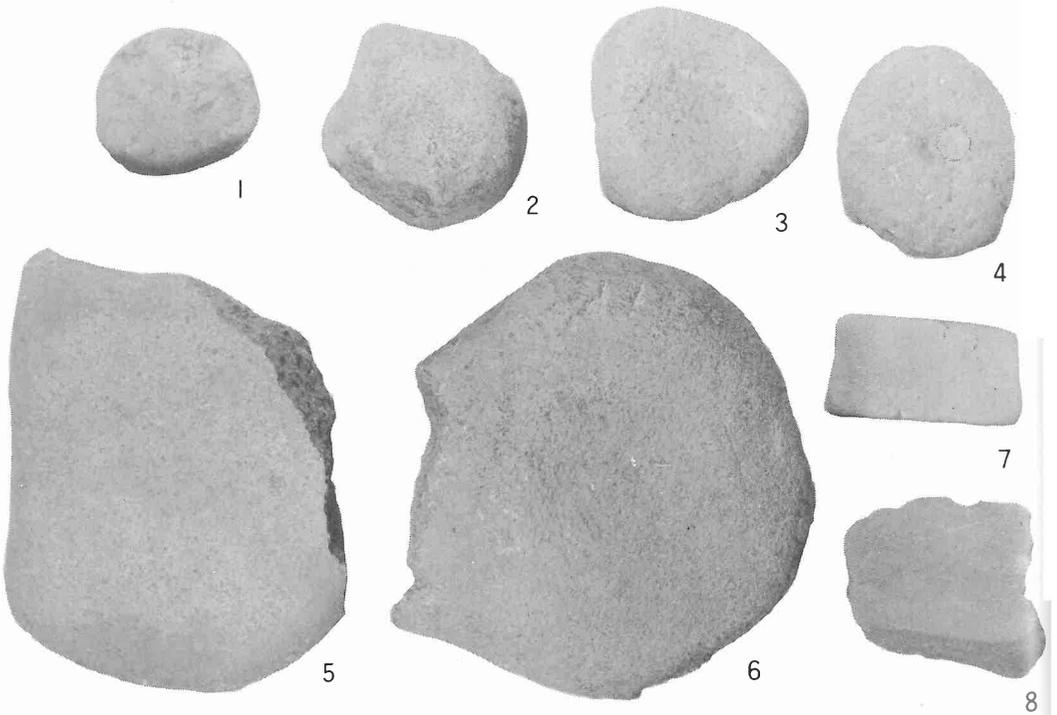


(第III調査区・4号土坑付近遺物出土状態)

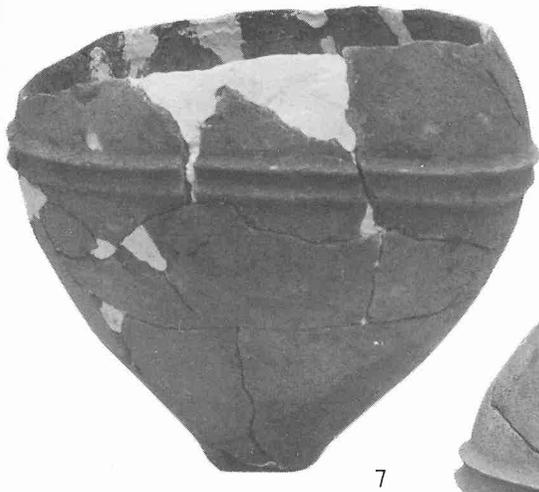
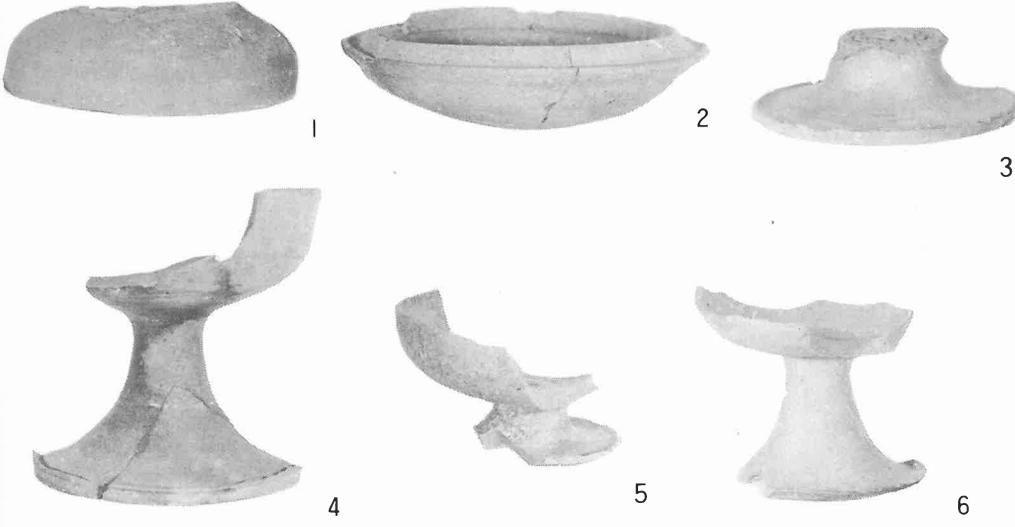
図版第四 A地区(四) 遺物



石器 1~8 土錘 9.10 鉄斧 10



凹石 1~4 石皿 5.6 砥石 7.8

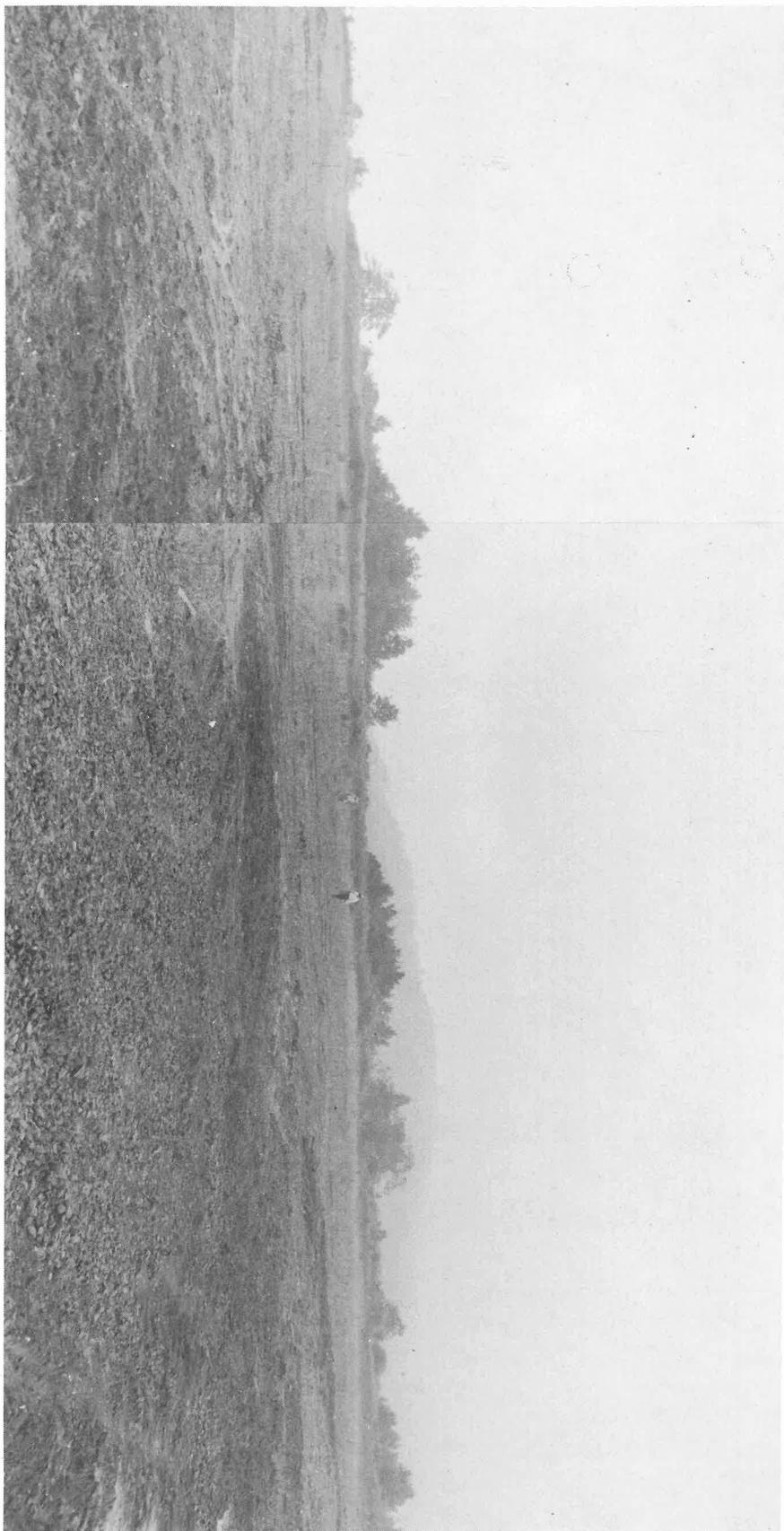


第1号甕棺



1~6の須恵器は第4号住居跡外一括遺物

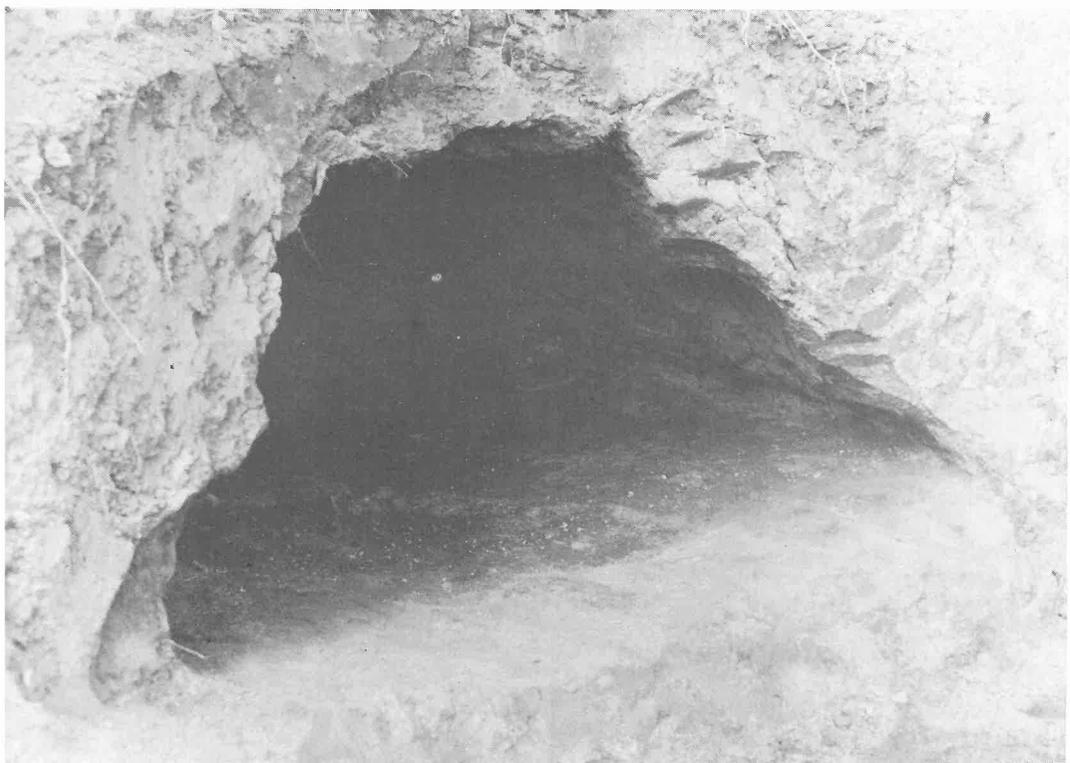
图版第六 B地区(一) 远景



図版第七 B地区(二) 第1、3号竖穴付近全景および第1号竖穴



(右から第1号～3号竖穴)



(第1号竖穴発掘状態)

図版第八 B地区(三) 第2号土壇および第3号竖穴



(第2号土壇)



(第3号竖穴)

図版第九 B地区(四) 第一調査区全景および部分



(東方より)

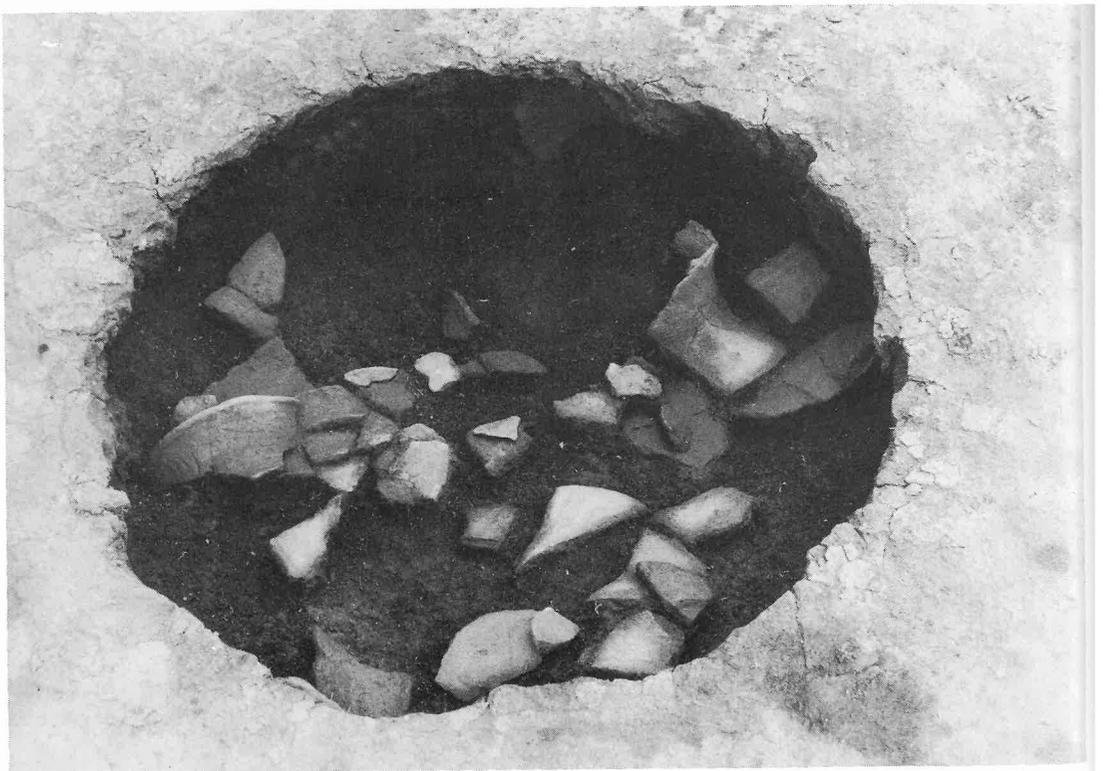


(第一調査区北側部分)

図版第一〇 B地区(五) 第二調査区全景および第26号竖穴(炭化米出土竖穴)



(西北方より)



(第26号竖穴)

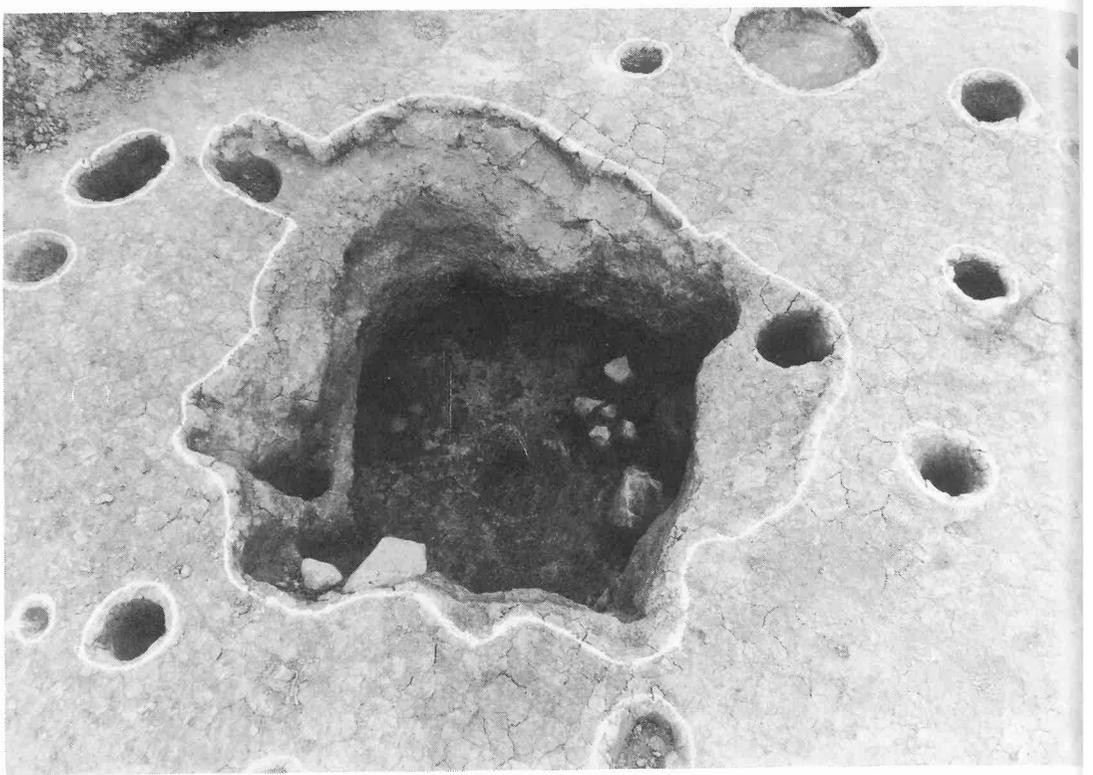


(第20号竖穴上層遺物出土状態)



(第24号竖穴床面遺物出土状態)

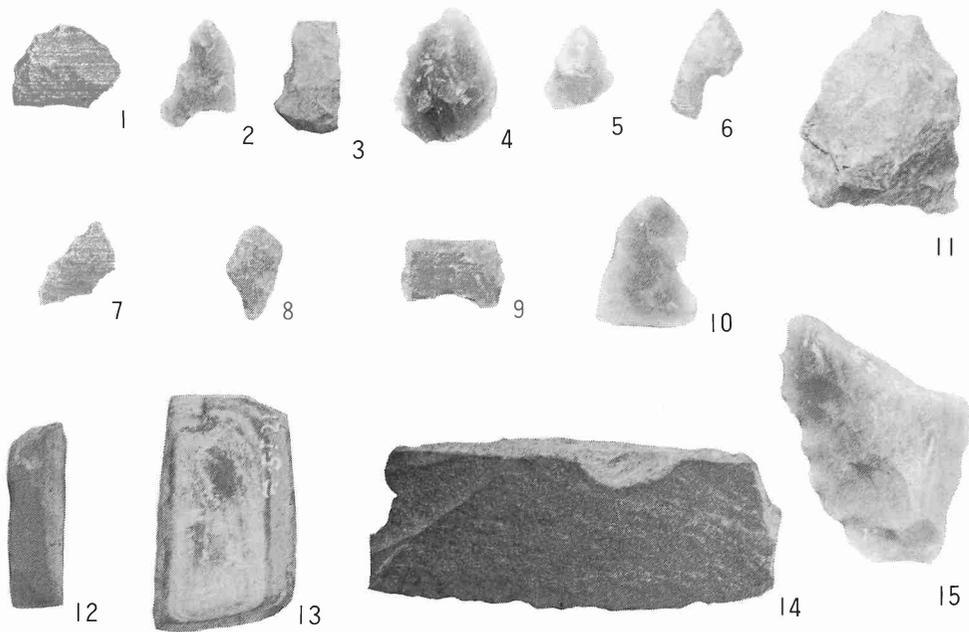
図版 第一二 B地区(七) 第30号竖穴および第35号竖穴



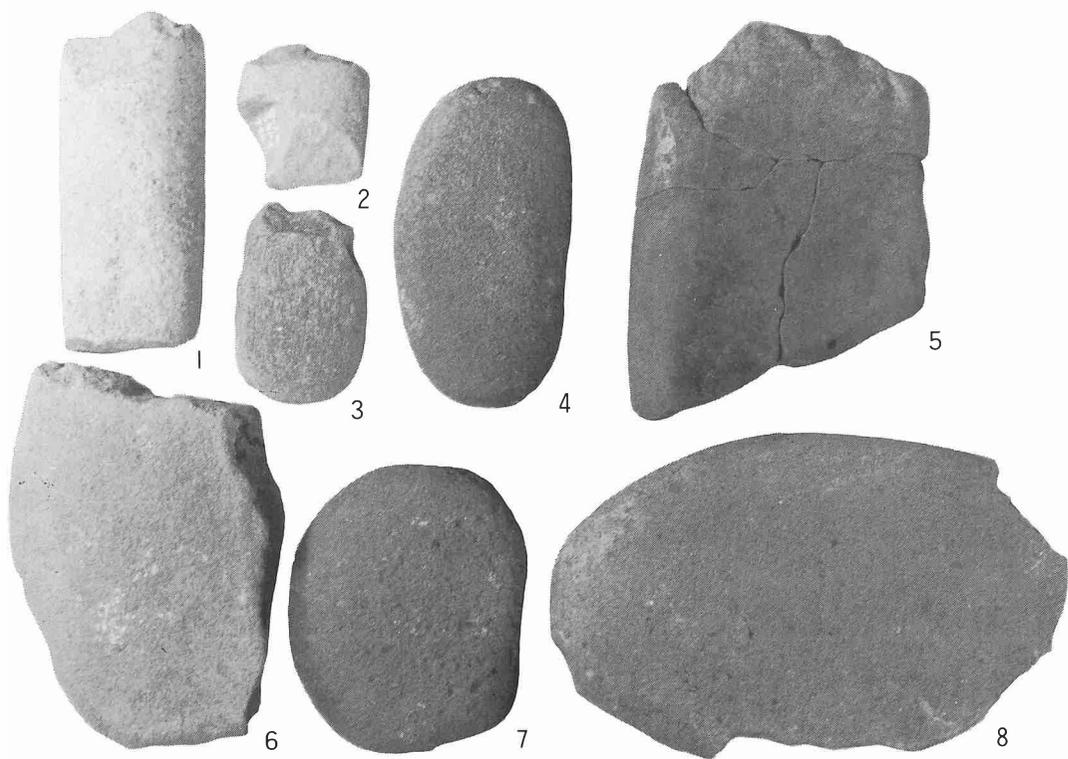
(第30号竖穴)



(第35号竖穴遺物出土状態)



石鋸1~11 石ノミ12. 13 石庖丁14 搔器15



石斧1.2 礫器3 敲石4.7 石皿5.6.8



第1号竖穴 1



第17号竖穴 6



第1号竖穴 2



第17号竖穴 5



第6号竖穴 1



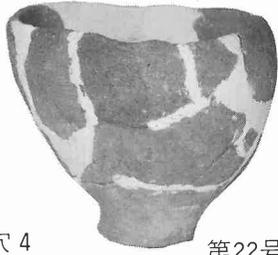
第19号竖穴 5



第21号竖穴 1



第20号竖穴 4



第22号竖穴 1



第22号竖穴 2



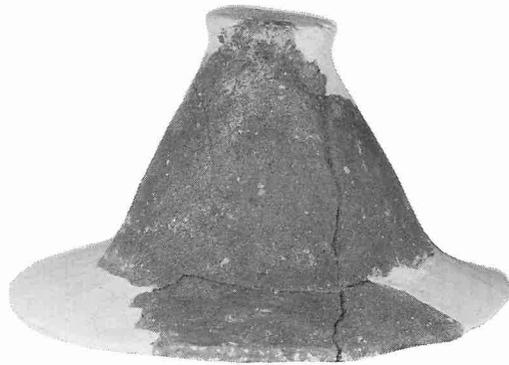
第22号竖穴 3



第22号竖穴 9



第24号竖穴 2



第35号竖穴 4



(円形竪穴住居跡、方形竪穴、柱列群)



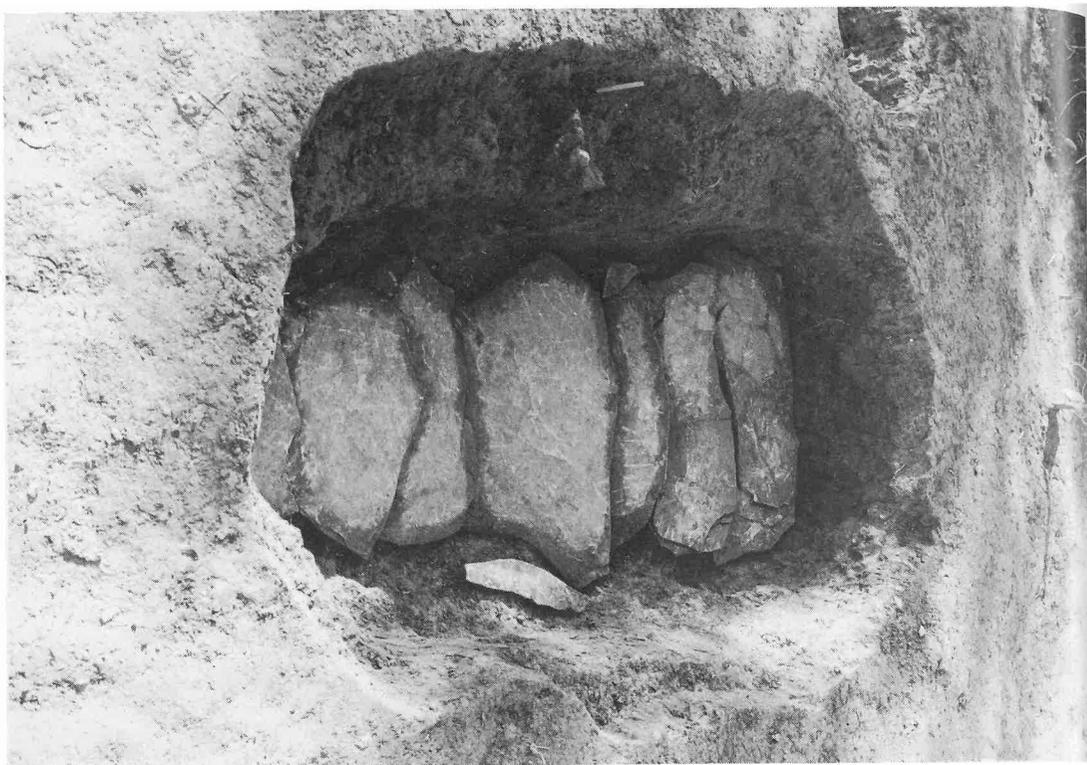
(1号方形竪穴)



(第三調査区全景・土坑発掘後)



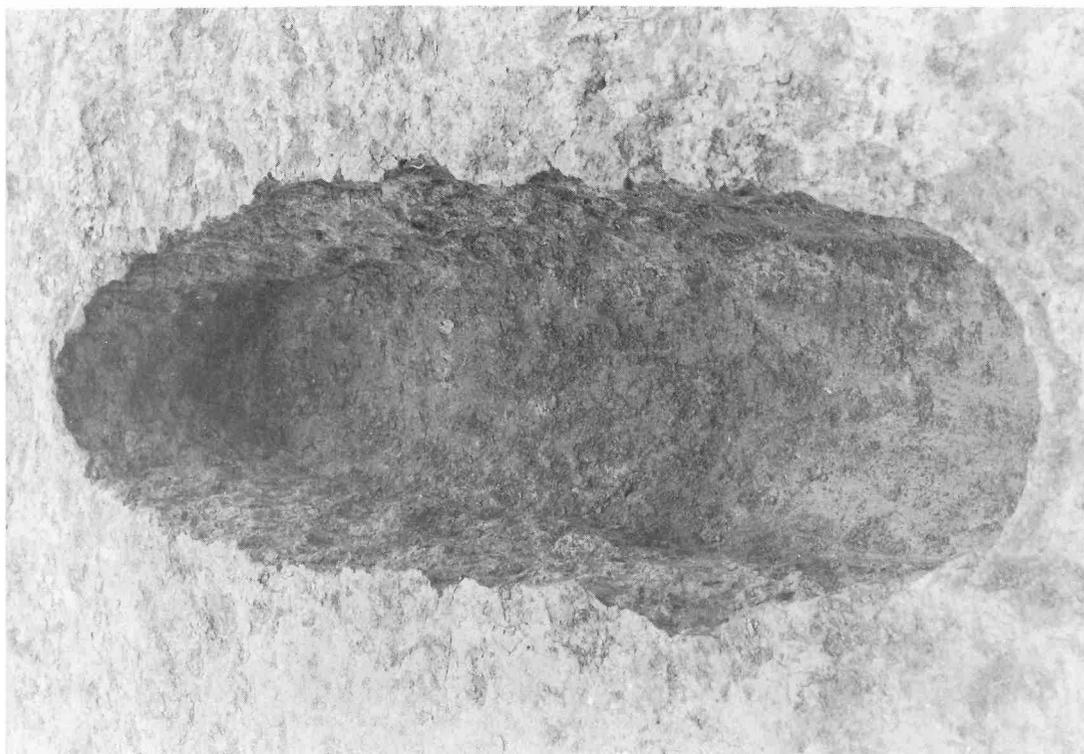
(第三調査区・土坑発掘前)



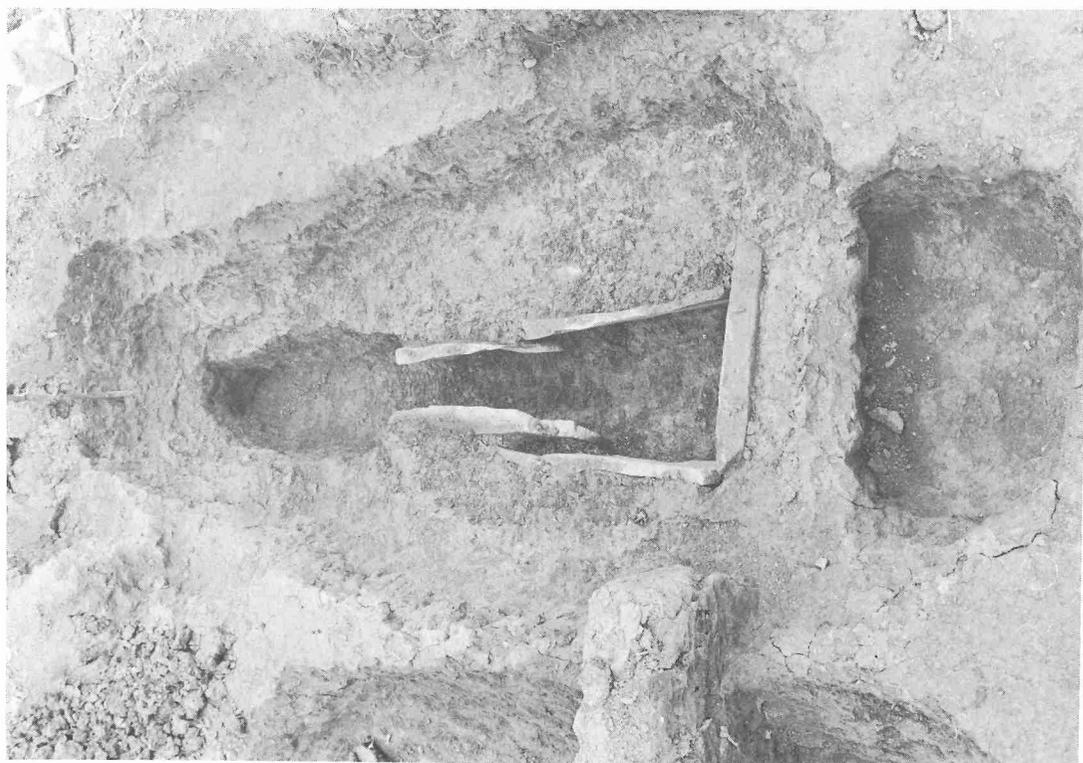
(一) 石棺・開棺前



(二) 石棺・開棺直後



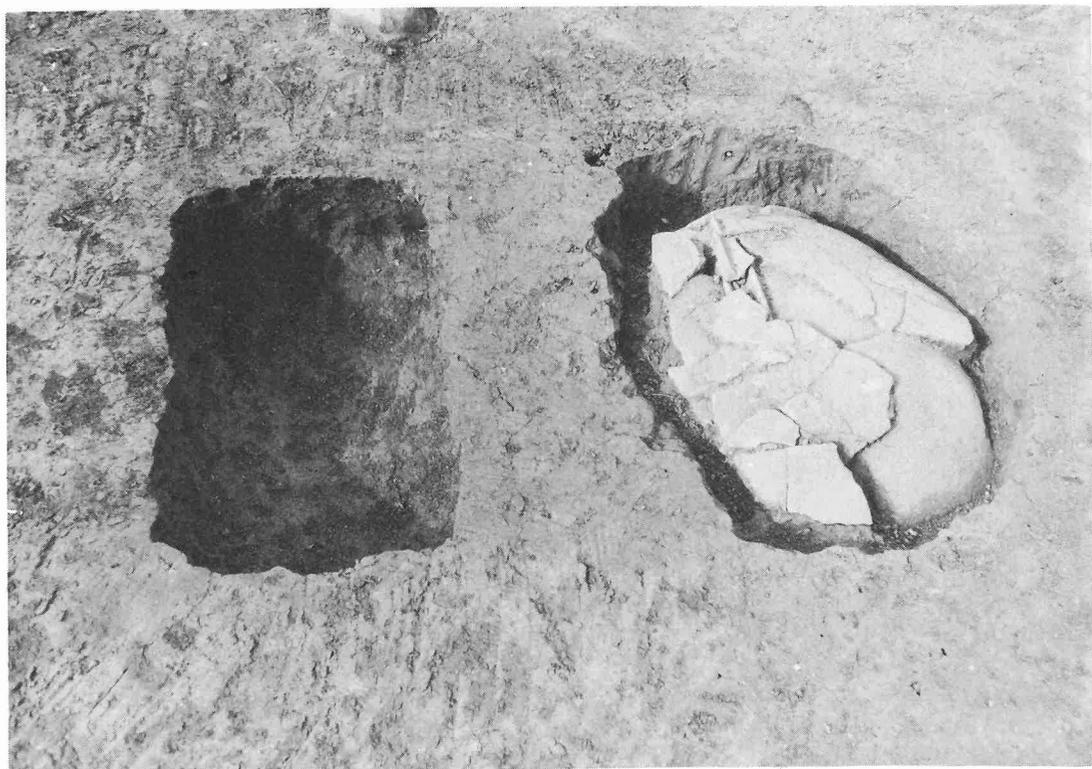
(一号石槨)



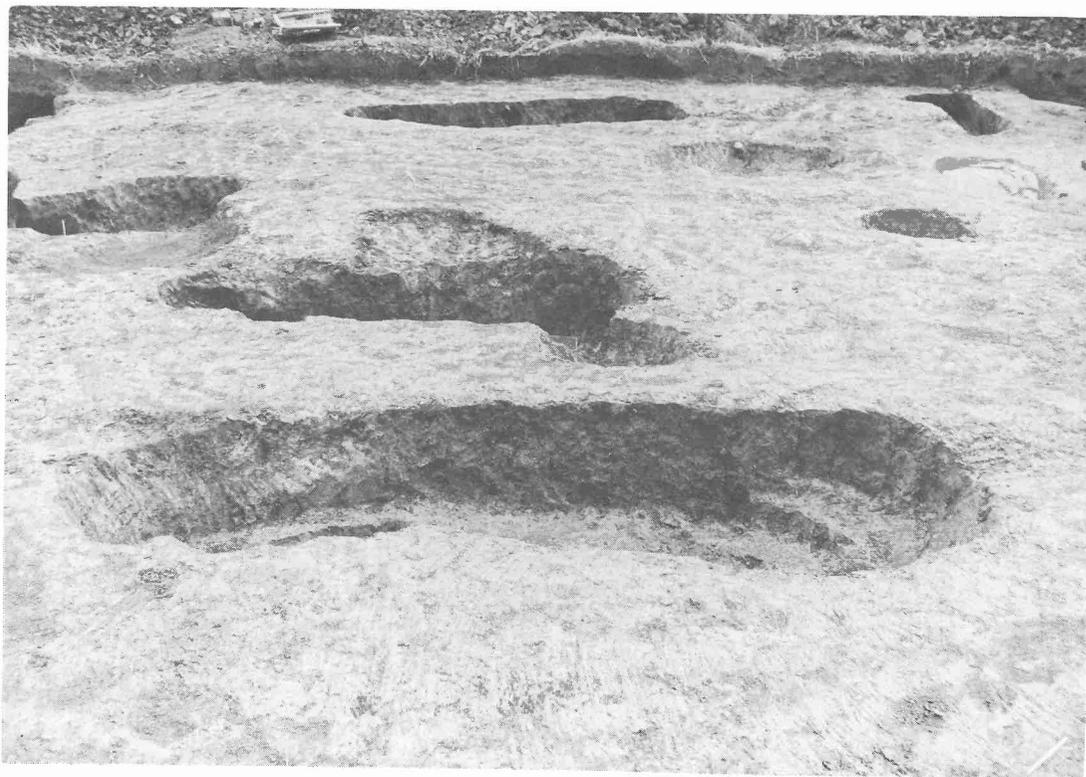
(2号石槨・開棺後)



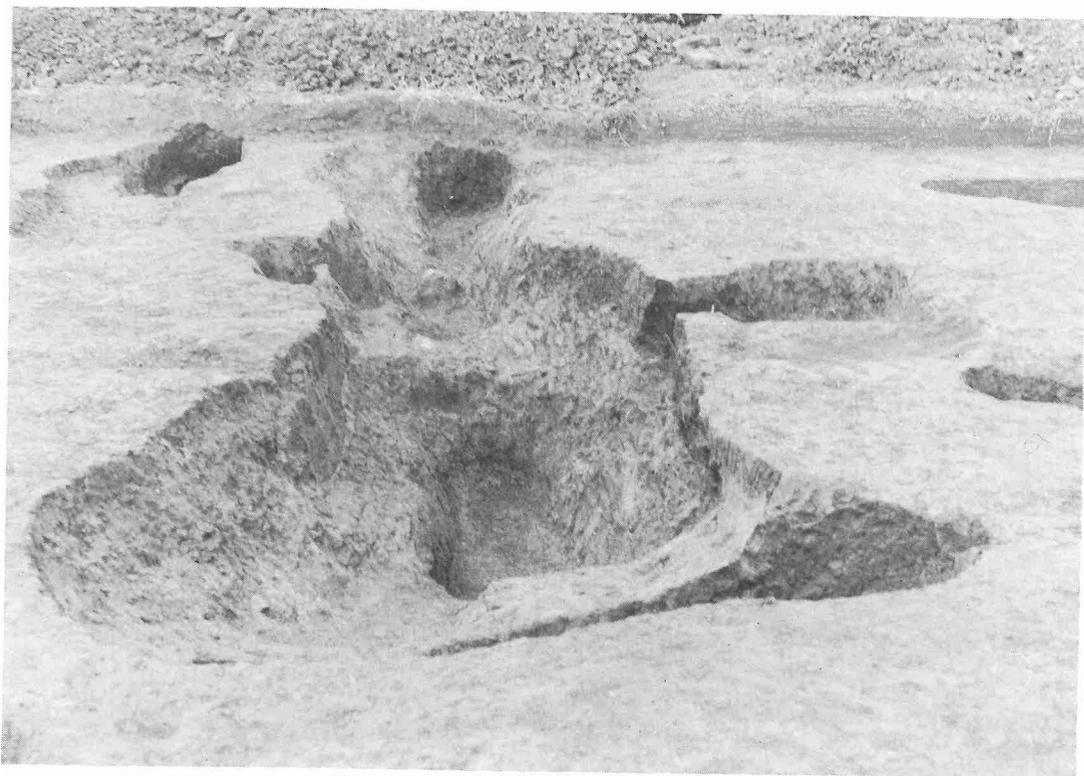
(2号甕棺)



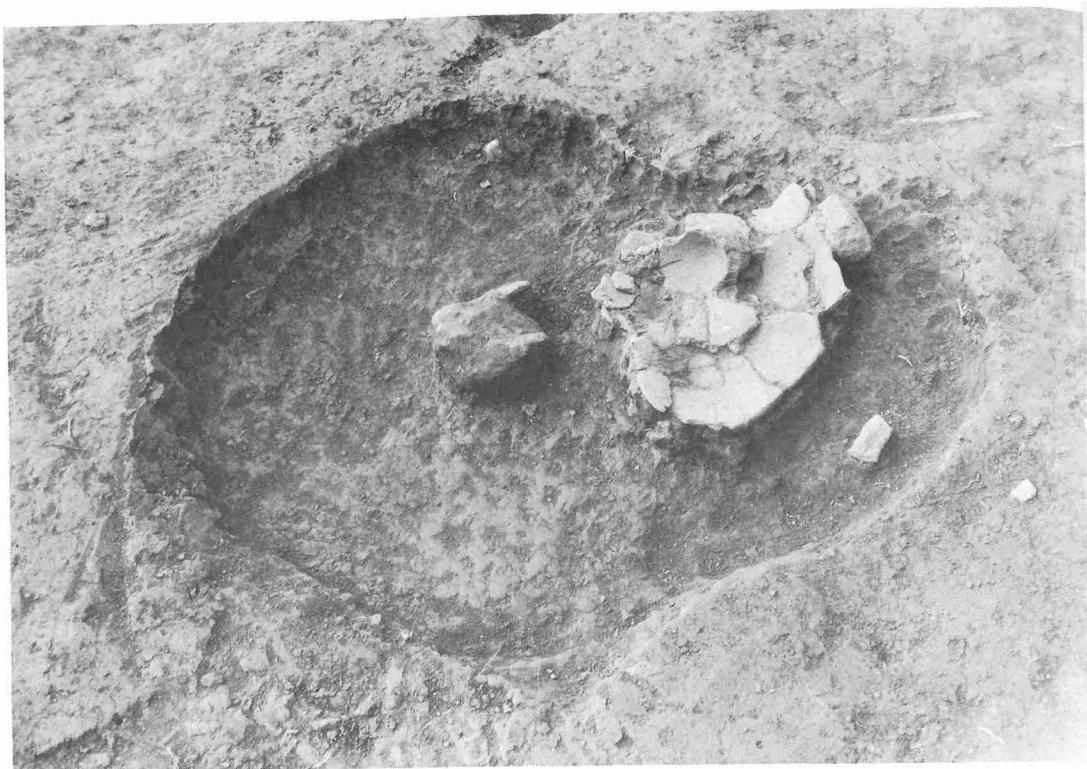
(土器蓋土坑および6号土坑)



(土坑群)



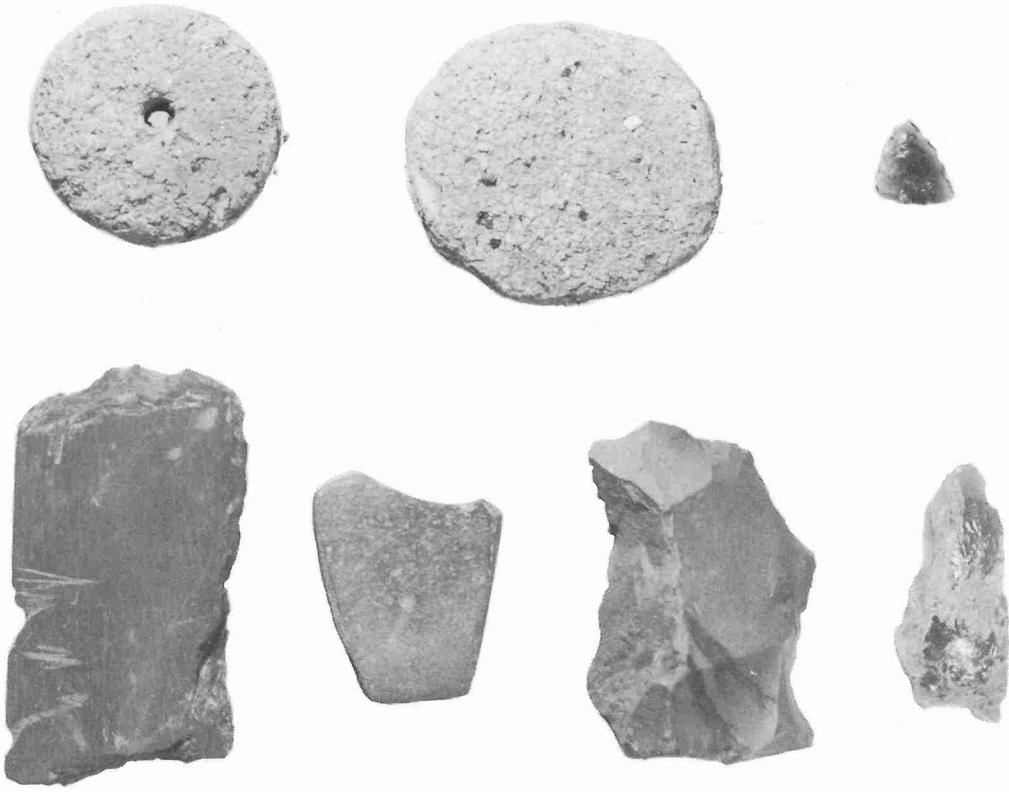
(大土坑)



(第3調査区 1号竖穴)



(第4調査区 方形竖穴住居跡)



第1・2・3調査区出土遺物



第3・4調査区出土遺物



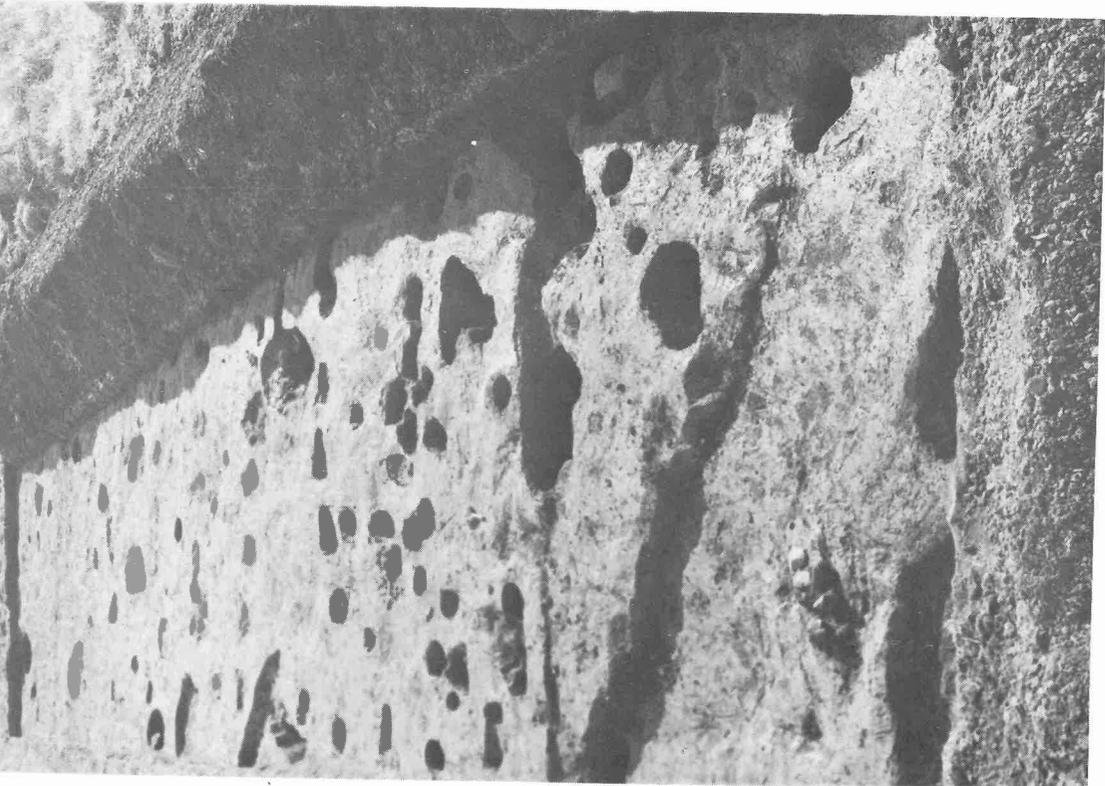
(第2号住居跡)



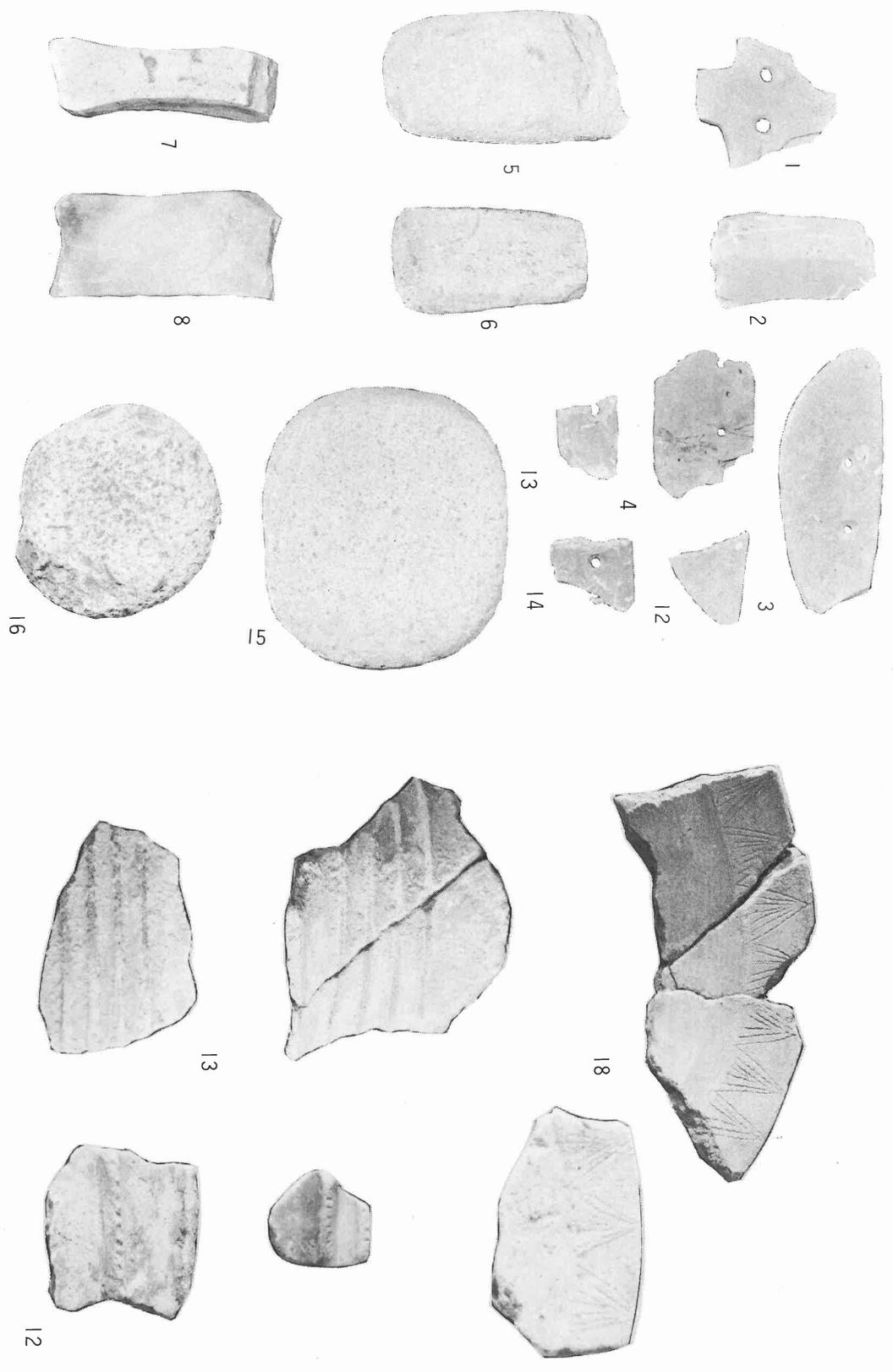
(第1号住居跡)

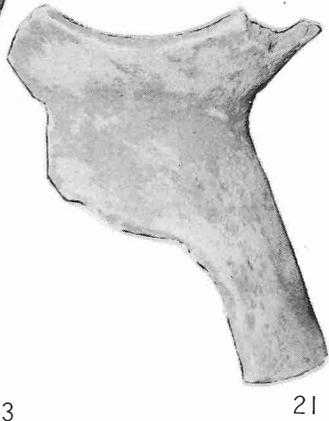
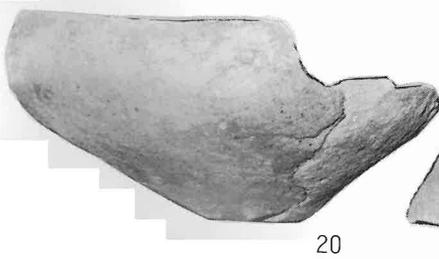
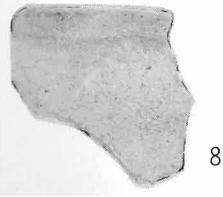
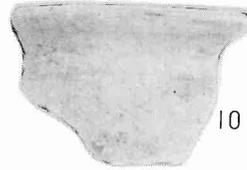
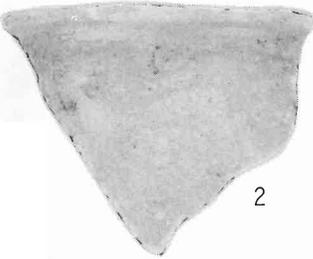
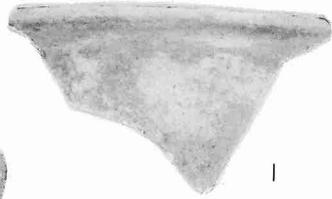
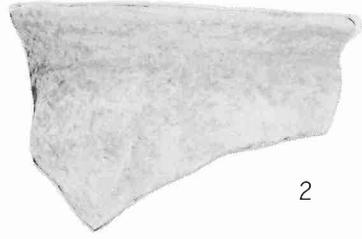
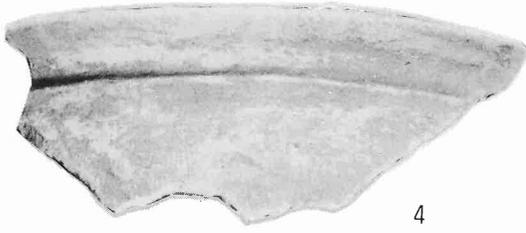


(板Vトレンチ)



(板VIトレンチ)







(東方より)



(東南方より)

台ノ原遺跡

大分県文化財調査報告 第33輯

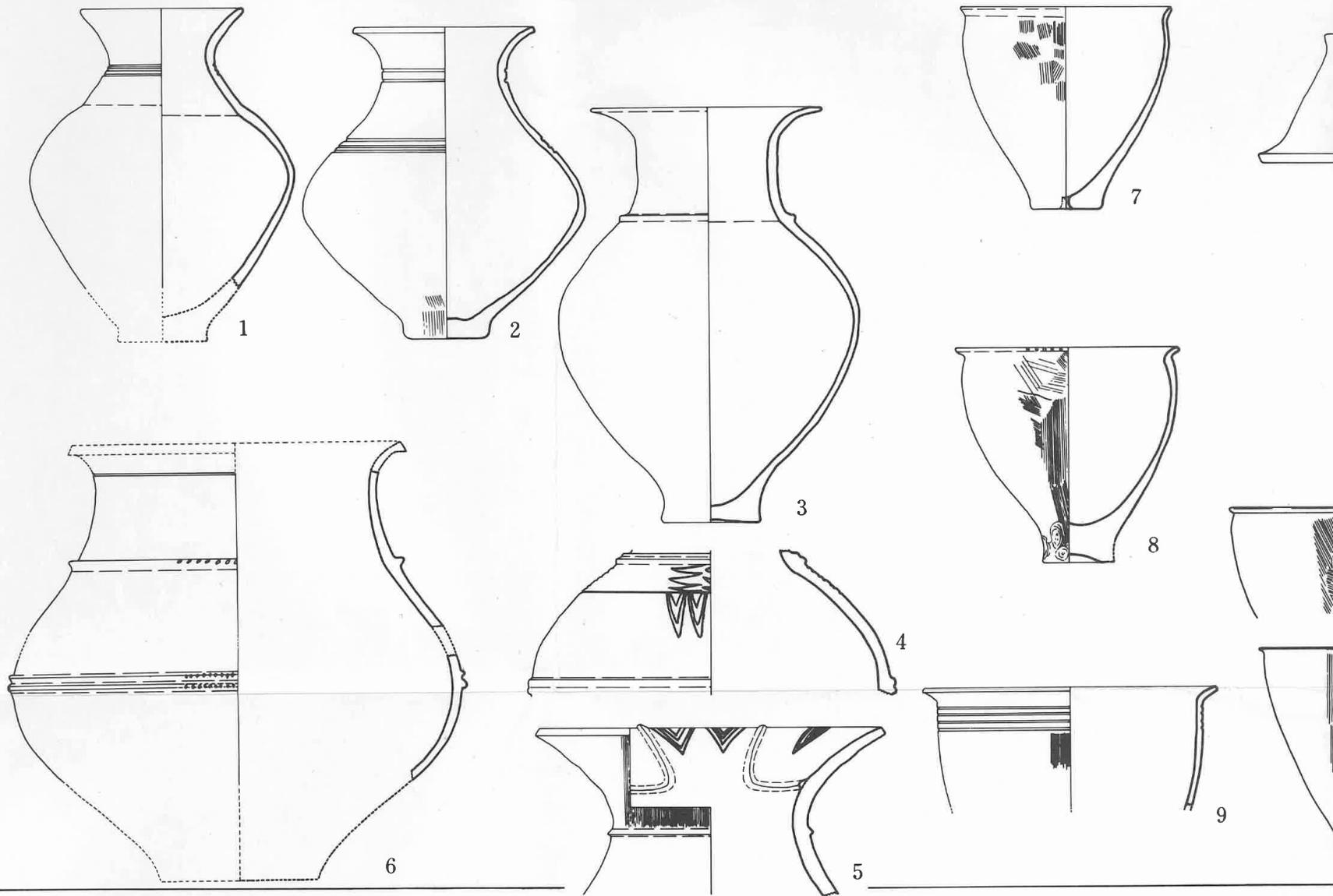
昭和50年3月31日

発行 大分県教育委員会
大分市府内町3丁目10-1

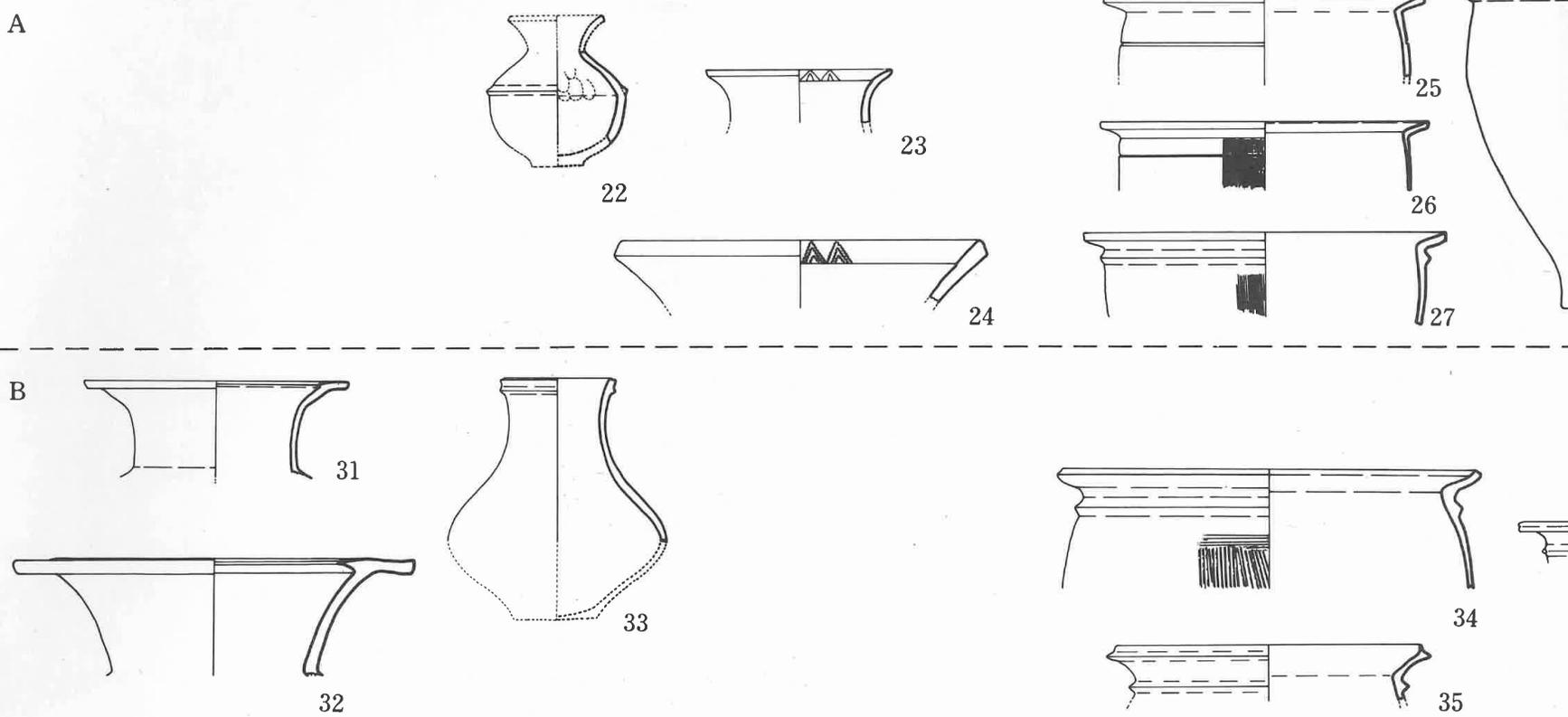
印刷 大分県印刷センター
大分市羽田下津留

土 土 出 跡 遺 原 ノ 台

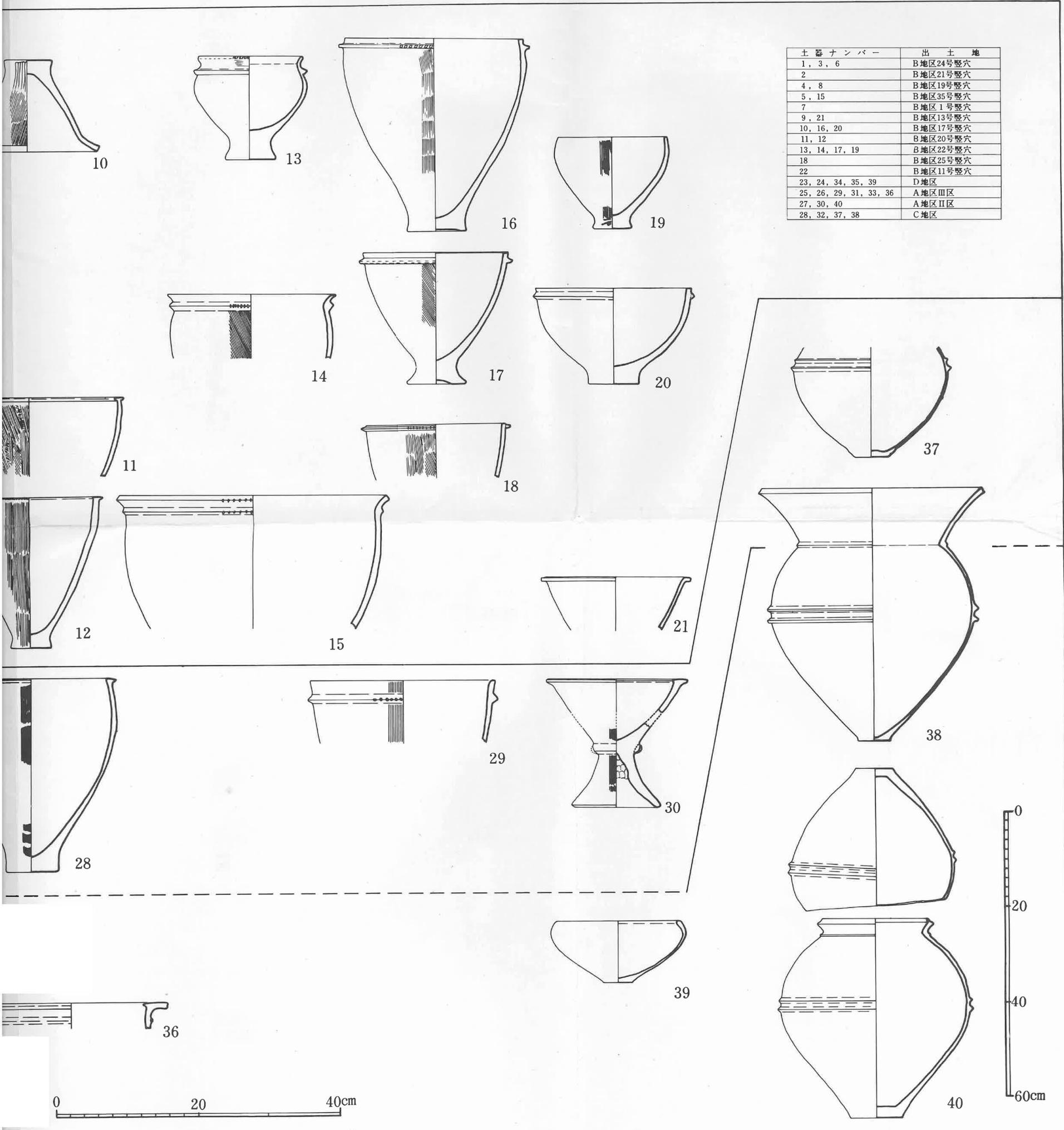
台ノ原I式



台ノ原II式



器編年図



(「台の原遺跡」別付図)